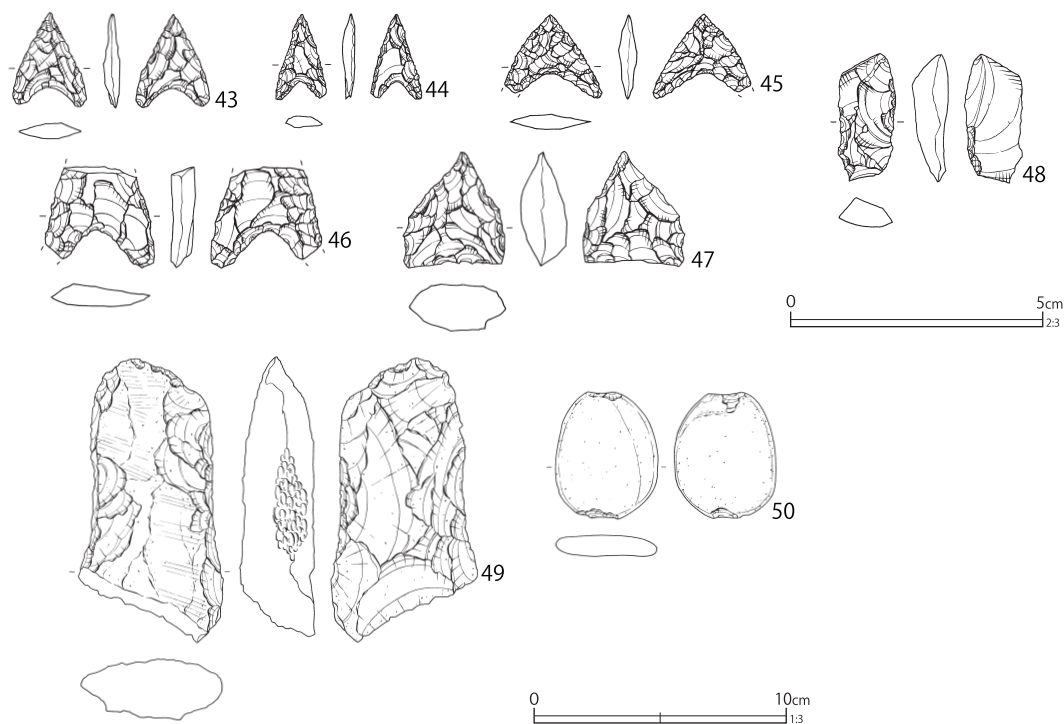




第 191 图 第 23 号住居跡出土遺物 (2)



第 192 図 第 23 号住居跡出土遺物（3）

46は凹基の石鏃である。先端部と左脚を折損するが、本来は全長3cmを越える比較的大型の石鏃であったと考えられる。長さ2.05cm、幅1.2cm、厚さ0.5cm、重さ1.75gである。石材は黒曜石である。

47は平基の石鏃である。両側縁が丸く張り出し、先端部が短いびつな5角形のプロポーションである。肉厚で、一種のスクレイパーの可能性もある。長さ2.35cm、幅2cm、厚さ0.9cm、重さ3.48gである。石材はチャートである。

48はスクレイパーである。横長の剥片を素材とし、長軸方向の両側縁に部分的に調整剥離を施して刃部としている。長さ2cm、幅1.1cm、厚さ0.75cm、重さ1.63gである。石材は黒曜石である。

49は短冊形の打製石斧で、刃部を折損する。背面に自然面を残し、この部分に擦痕がみられることから、磨石を再加工した可能性がある。長さ11.4cm、幅5.7cm、厚さ2.9cm、重さ216.14gである。石材はホルンフェルスである。

50は石錘である。楕円形の自然石の長軸側両端

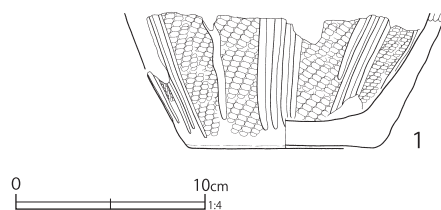
に、それぞれ数回の加撃による抉りを設けている。長さ5.1cm、幅4cm、厚さ0.8cm、重さ26.2gである。石材は砂岩である。

第24号住居跡（第185～187・189図）

L-14グリッドに位置する。第146・147号土壇・第1号溝跡に壊されており、第23号住居跡を壊している。北壁のごく一部が調査区域外に存在する。

第23号住居跡との切り合いにより南西壁が不明瞭だが、長径4.88m、短径約4.3mの楕円形の住居跡と考えられる。主軸方向はN-54°-Wを指す。壁高は最も深い部分で0.16mである。壁溝は検出されなかった。

床面は平坦で南東方向へ緩やかに傾斜し、かつ中央がわずかに低くなっている。主軸線上やや奥



第 193 図 第 24 号住居跡出土遺物（1）



第 194 图 第 24 号住居跡出土遺物 (2)

壁寄りに炉跡を検出した。不整楕円形の地床炉で、上下二段の掘り込みを持つ。長径79cm、短径70cm、深さ13cmである。

床面上から7本のピットが検出された。これらのうちP 1～4・7が支柱穴で、4本柱の上屋を構成するものと考えられる。P 1とP 7は切り合い関係にあり、上屋の建て替えがあった可能性もある。主軸線上で南東壁から約60cm中央寄りにP 5が存在し、これが出入り口施設と考えられる。二段の掘り込み底面から、さらに深く小ピットが穿たれている。

覆土は上下2層からなり、遺物は上下層の境界面付近を中心に出土している。勝坂式と加曾利E I式の土器片が出土しているが、所属時期は後者と考えられる。

第24号住居跡出土遺物

土器（第193・194図）

1はキャリパー系の深鉢土器底部である。底面は軽微な上げ底状となっている。平行沈線による懸垂文が垂下し、沈線間の地文を磨り消しているほか、単沈線の蛇行懸垂文も描いている。地文はR L単節縦位回転の縄文である。

復元最大径は約16.8cm、現存高は約7.1cmである。胎土は砂質である。器壁は外面暗橙色、内面灰黄褐色である。焼成はやや不良である。

2～36は破片資料である。

10は勝坂I式で、波状口縁波頂部に渦巻文を配し、左右に三角押し文列が展開する。2は勝坂II式である。鰭状の隆帯によって口縁下に楕円形の区画を形成し、内側に沿って爪型文と角押し文が巡る。

3～8は勝坂III式である。3は波状口縁から垂下する刻み隆帯が眼鏡状突起に接続し、縦位の集合沈線文を描く。8は底部直上の破片だが、L R単節縦位回転の縄文を施文する。

9は2本の刻み隆帯が巡る頸部で、中峠系の土器と考えられる。11はR L単節横位回転の縄文と

綾繰り文を施文する胴部である。

12～30は加曾利E式のキャリパー類深鉢で、E I式後半の土器である。

12は2本隆帯の大柄な渦巻文で、E I式であろう。13～15は2本隆帯による弧状モチーフの接点に小渦巻文の突起を配する繋ぎ弧文の土器である。13は口縁部文様帯下端を水平な隆帯で区画するが、14・15は区画を持たない。14では主文様の下にも縄文帯を持つが、15では頸部の無文帯に直に接続している。

17は扁平に圧縮された文様帯で、頸部無文帯を持たない。18は文様帯内部を隆帯が横走して、上下に楕円形区画を作り出している。

23・24は口縁部文様帯の下端を区画する隆帯である。25・26は胴部文様帯上端の区画であろう。27は頸部の文様帯で、半裁竹管状工具による平行沈線が上下を区画し、内部に同一工具の波状文が巡っている。

28・29は2本隆帯の懸垂文である。30は単沈線の波状懸垂文が垂下し、剣先状モチーフの末端がみられる。

31～34は深鉢底部である。32が無文である外は撚糸文を施文する。33は粗雑ながら平行沈線による懸垂文を見ることができる。

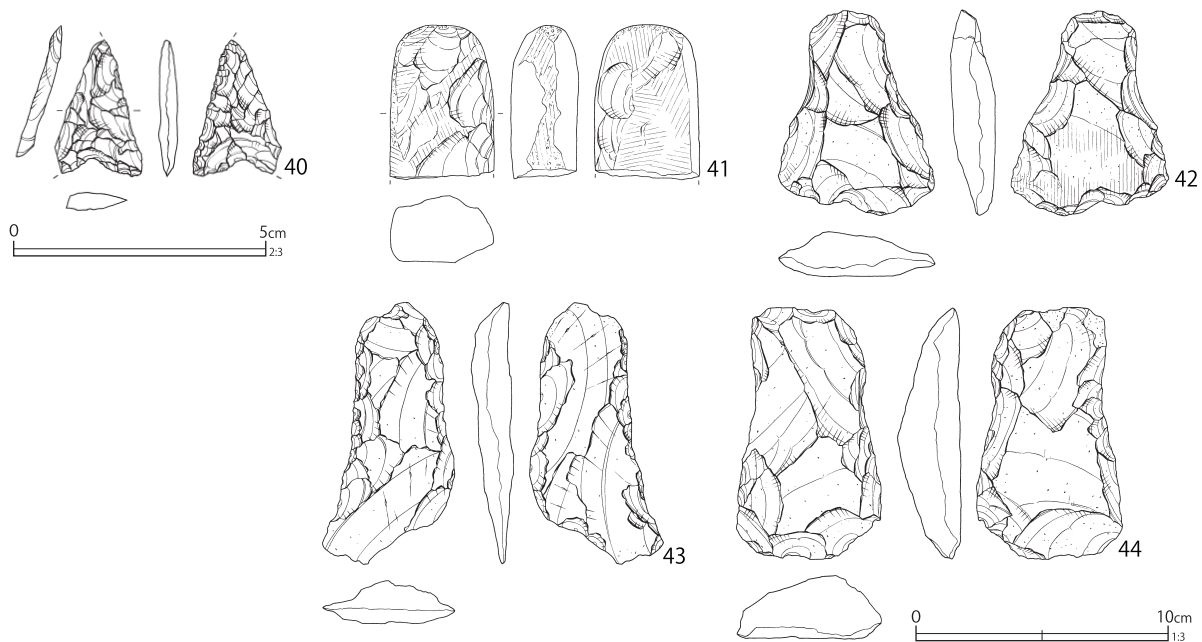
35・36は無文の浅鉢である。胴張りで頸部屈曲し、口縁は軽微に外反する。折り返し口縁で、口端上を平坦に整形している。

37～39は土製円盤である。

石器（第195図）

40は凹基の石鏃である。左側縁部に沿って、先端部への衝撃に伴う剥離が生じている。長さ2.7cm、幅1.75cm、厚さ0.35cm、重さ1.18gである。石材はチャートである。

41は磨製石斧と考えたが、磨石の可能性もある。断面長方形で、胴部中段から刃部寄りを折損している。成形に伴う剥離が磨り消されずに残っている。長さ6.1cm、幅4.1cm、厚さ2.7cm、重さ113



第 195 図 第 24 号住居跡出土遺物（3）

gである。石材は砂岩である。

42～44は打製石斧である。

42は撥形の打製石斧である。刃部腹面がいちじろしく磨滅しており、磨石的な使われ方をした可能性がある。長さ8.1cm、幅6.15cm、厚さ1.8cm、重さ80.14 gである。石材はホルンフェルスである。

43も撥形の打製石斧である。刃部が左に大きく反る片刃状だが、これは折損した刃部を再生したものともみられる。長さ10.3cm、幅5.2cm、厚さ1.7cm、重さ62.26 gである。石材はホルンフェルスである。

44は短冊形で、両側縁に軽微な反りを持つ。長さ10cm、幅5.7cm、厚さ2.5cm、重さ128.22 gである。石材は砂岩である。

第25号住居跡（第196～198図）

M - 13グリッドに位置する。第27・31号住居跡に壊されている。長径4.24m、短径は計測不能で

ある。主軸方向はN - 70° - Wを指す。壁は緩やかに立ち上がり、壁高は最も深い部分で0.16mである。

床面は平坦で、中央がやや低くなっている。壁溝・柱穴・出入口施設等は検出されなかった。覆土は上下2層からなる。遺物はごく少量であった。所属時期は縄文時代中期と考えられる。

第25号住居跡出土遺物

土器（第202図）

掲載可能なものは土器片1点のみであった。

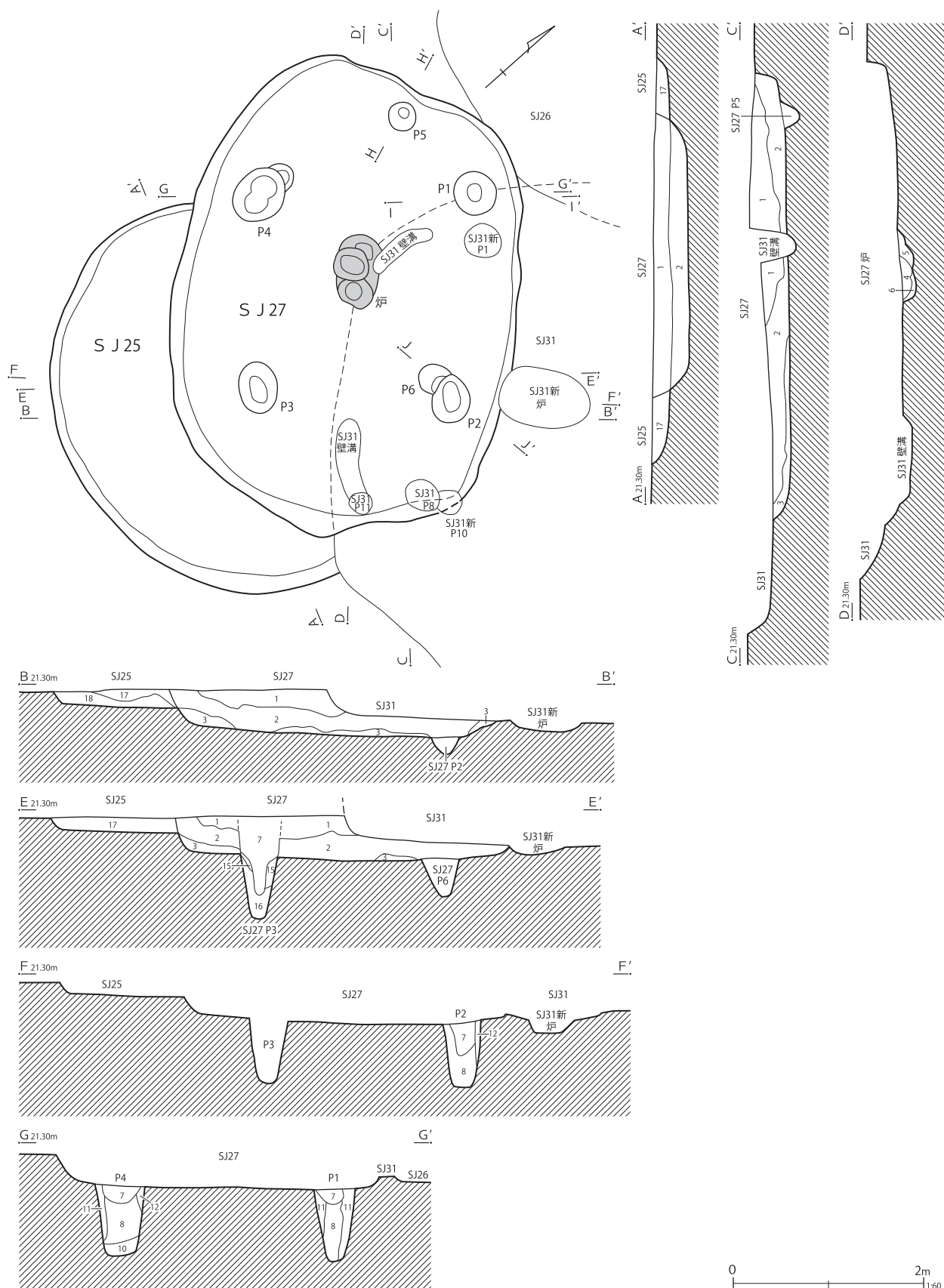
1は勝坂Ⅲ式の深鉢胴部である。刻みを伴う隆帯で曲線的なモチーフを描き、沈線の渦巻文や三叉文を描く。

石器（第204図）

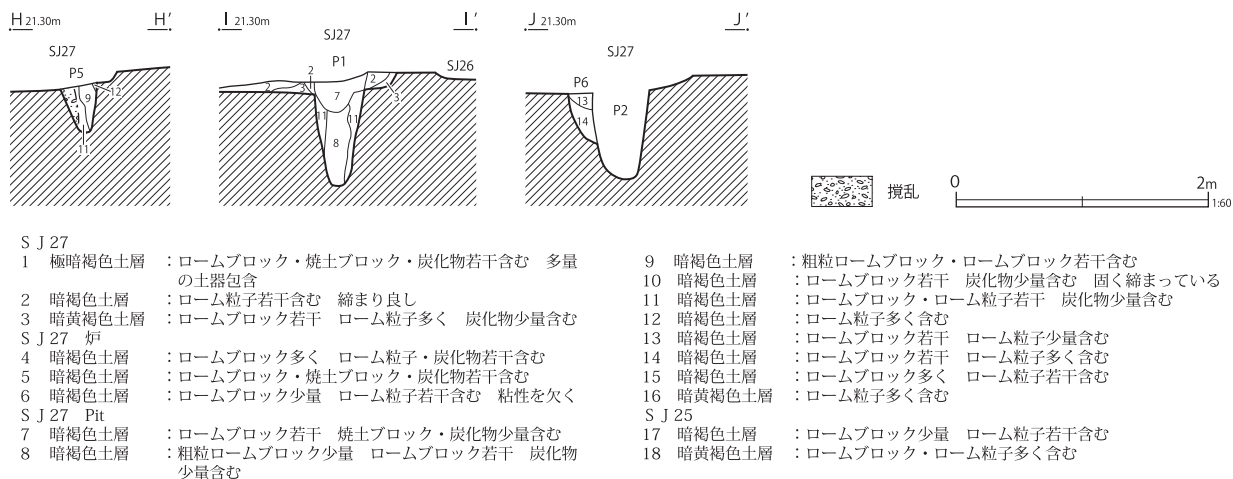
78は撥形の打製石斧で、基部を折損する。全体に肉厚で、刃部も鈍角である。長さ6.9cm、幅7.05cm、厚さ3.6cm、重さ174.63 gである。石材はホルンフェルスである。

第 22 表 第 27 号住居跡柱穴計測表

ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)
P 1	44.0	77.0	P 2	52.0	72.8	P 3	52.0	66.3	P 4	72.0	76.4	P 5	30.0	38.8
P 6	32.0	42.5												



第 196 图 第 25·27 号住居迹 (1)



第 197 図 第 25・27 号住居跡（2）

第27号住居跡（第196～199図）

L・M-13グリッドに位置する。第31号住居跡に壊されており、第25号住居跡を壊している。また、第26号住居跡とも重複関係にある。

長径5.04m、短径3.66mの隅丸長方形の住居跡で、主軸方向はN-46°-Wを指す。壁は比較的緩やかに立ち上がり、壁高は最も深い部分で0.23mである。床面は平坦で、南東方向に向かって緩やかに傾斜している。壁溝は検出されなかった。

主軸線上やや奥壁寄りで炉跡を検出した。楕円形の地床炉で、前後2か所の掘り込みを持ち、断面観察の結果、奥壁寄りのものが古いことが確認できた。

床面上から6本のピットが検出された。これらのうちP1～4・6が主柱穴で、4本柱の上屋を構成するものと考えられる。奥壁寄りのP5は他より小規模で、棟持柱であろう。出入り口施設らしきものは検出されなかった。

覆土は、壁際および床面直上の3層を別にすれば大きく上下2層からなり、遺物は上層を中心に出土している。

勝坂Ⅰ式から加曾利Ⅲ式に至る幅広い時期の土器が出土したが、復元個体の特徴から所属時期は勝坂式末～加曾利Ⅰ式期と考えられる。

第27号住居跡出土遺物

土器（第200～203図）

1は円筒形の深鉢である。口縁から胴下半部まで残存する。

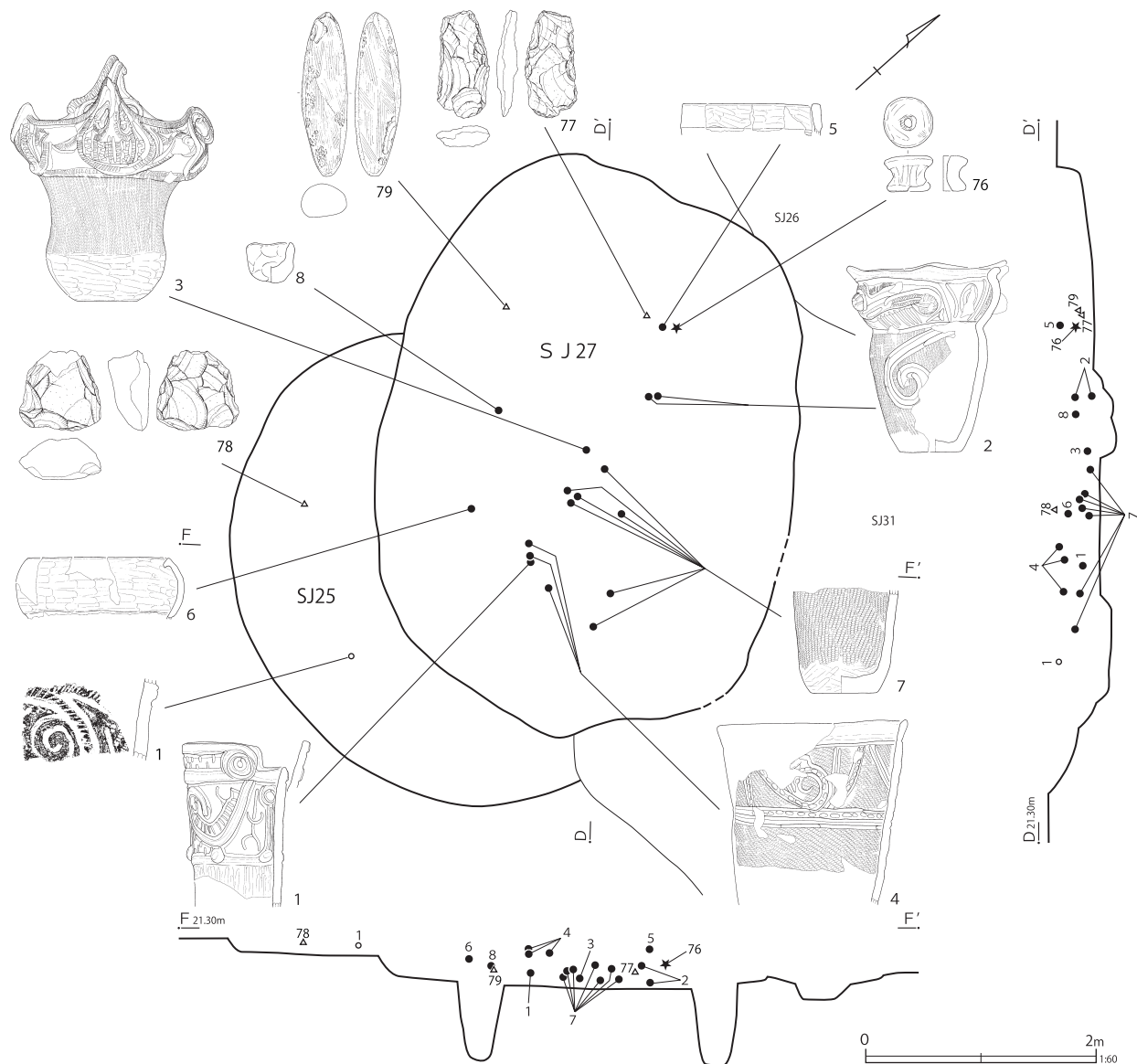
一部に段差を持った特異な水平口縁である。口縁部文様帯は両端に異なった意匠の円文を持つ長方形区画で、内部に交互刺突文を巡らせ、口縁を半周する。

胴部の文様帯は末端や接点に貼瘤を持つ隆帯で曲線的に分割しており、内部に沈線文を描く。文様帯の下端は1条の隆帯で区画され、胴下半部は無文である。

復元最大径は約12.1cm、現存高は約18cmである。胎土はややしルト質で、白色の砂粒を少量含む。器面は暗褐色である。焼成は良い。

2は波状口縁の深鉢で、口縁から底部まで残存する。胴上半部が球胴状に張る三原田式類似の器形である。4単位の山形波状口縁で、口縁部は無文である。胴上半部の文様帯は、刻みを持つ背割れ隆帯で横S字文を描き、余白に角押し文列や集合沈線文を描く。文様帯下端は沈線で区画する。胴下半部はR縦位回転の撚糸文の上に平行沈線の渦巻文を描き、沈線間の地文は磨り消している。

復元最大径は約18.7cm、現存高は約21.5cmで



第 198 図 第 25・27 号住居跡遺物出土状況

ある。胎土は若干の砂とシルトを含む。器壁は外面暗橙色、内面黒褐色である。焼成は良好である。

3はほぼ完形の深鉢である。キャリパー形で、胴部中段にくびれを持ち、胴下半部が「く」の字に張り出す。

貫通孔を持つ眼鏡状突起を一对配し、うち一つは上方に高く巻き上がる円盤状の突起を伴っている。眼鏡状突起の間にはひねりを持った一对の円盤状突起を配し、大小各2つの突起が対置される構成となっている。

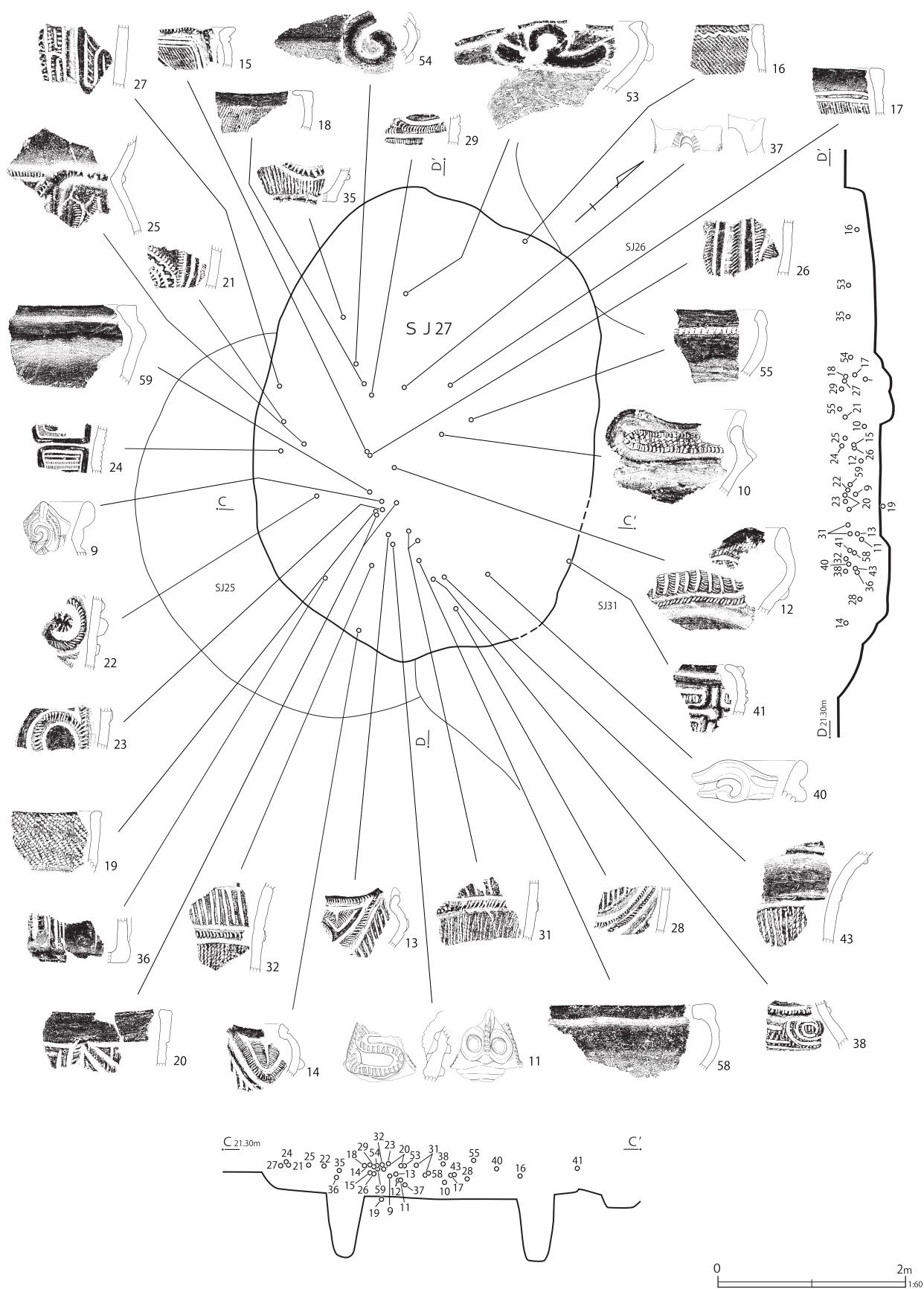
4つの突起の間には刻みを伴う隆帯による入り

組み文を配し、口縁との間の区画には三叉文を配して、余白を爪型文や交互刺突文で埋めている。

文様帯下端は刻み隆帯で区画し、胴部中段にはR縦位回転の撚糸文を施文する。胴下半部は無文帯となっている。

復元最大径は約22.9cm、現存高は約28.3cmである。胎土は金雲母の混じる砂粒とシルトを含む。器壁は外面灰橙色、内面暗褐色である。焼成は比較的良い。

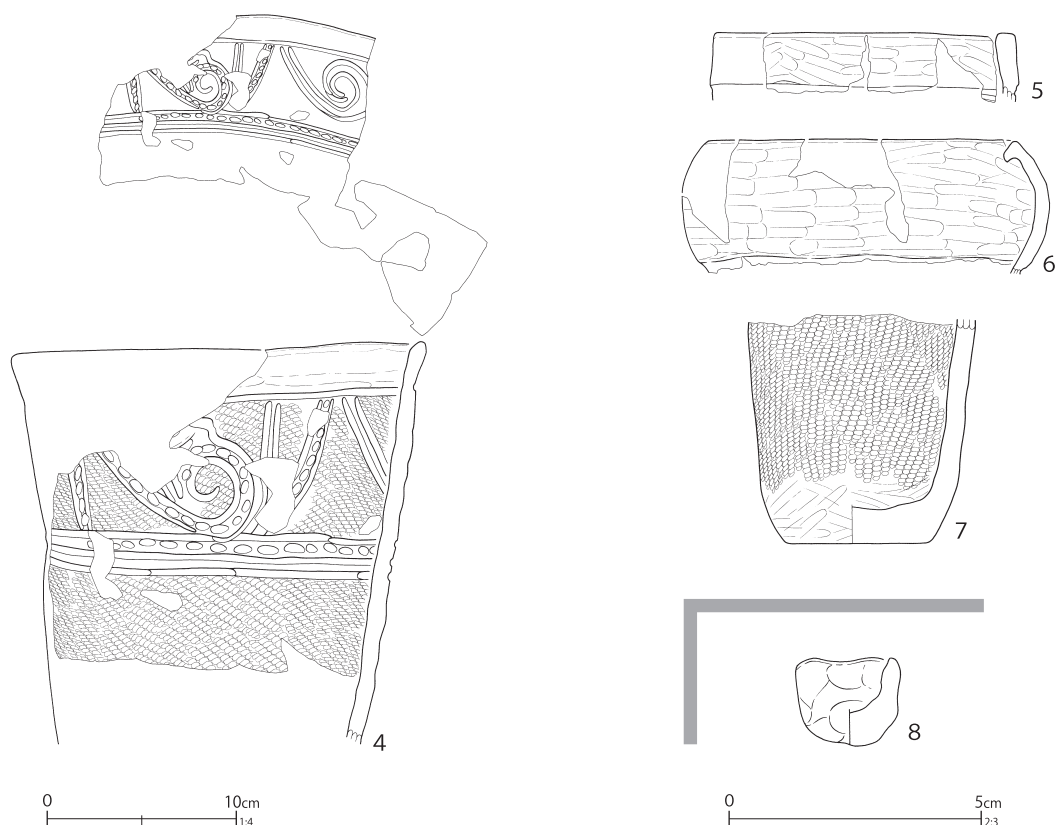
4は円筒形深鉢である。口縁部から胴下半部まで残存する。器形は胴部中段と頸部にごく軽微な



第 199 图 第 27 号住居跡遺物出土状況



第 200 図 第 25・27 号住居跡出土遺物 (1)



第 201 図 第 25・27 号住居跡出土遺物（2）

屈曲を持ちつつ、ほぼ直線的に開く。水平口縁で、口縁部に無文帯を持つ。

胴上半部には平行沈線による渦巻文を描き、余白を縦位の平行沈線でさらに分割する。文様帯下端は 3 本の平行沈線で区画する。

文様を構成する平行沈線間の地文を磨り消し、一部に列点文を充填する。口縁部無文帯以外の部分には L R 単節縦位回転の縄文を施文する。

復元最大径は約 21.9cm、現存高は約 21.3cm である。胎土はシルト質である。器面は黄橙色で、焼成は不良である。

5 は無文の口縁部で、円筒形の深鉢に伴うものとみられる。胴部との境には 1 条の沈線が巡って段を形成する。

復元最大径は約 16.2cm、現存高は約 3.6cm である。胎土は砂質である。器壁は外面暗黄橙色、内面橙色である。焼成は良い。

6 は内湾する無文口縁である。口唇内面に隆帯が巡って段をなす。胴部との境にも沈線が巡り、

段を形成する。

復元最大径は約 19.4cm、現存高は約 7cm である。胎土は砂質である。器面は黒褐色である。焼成は良い。

7 は深鉢胴部である。底部の直上が「く」の字に張り出し、胴部中段にかけてほぼ直立する。地文は R L 単節の縄文を縦位ないし右下がりに施文し、底部直上の屈曲から下は無文化する。

復元最大径は約 11.9cm、現存高は約 12cm である。胎土はシルト質である。器壁は外面暗黄褐色、内面暗灰黄褐色である。焼成は良い。

8 はミニチュア土器である。水平口縁で、内外面に指頭圧痕を残す。復元最大径は約 2.1cm、現存高は約 1.8cm である。胎土はシルト質である。器面は灰黄褐色で、黒斑がみられる。焼成は比較的良い。

9 ～ 61 は破片資料である。

9 は勝坂 I 式であろう。山形波状口縁で、波頂部に隆帯による渦巻文を配し、角押し文と三角押

し文を施文する。10は勝坂Ⅱ式とみられる。鰭状の隆帯により口縁直下に楕円形の区画を形成し、内部にキャタピラ文が巡って、角押し文列を充填する。

11～36は勝坂Ⅲ式である。11は口縁上に付される山形の突起である。外面には刻み隆帯によるS字文を描き、内面には一對の盲孔による眼鏡状のモチーフを配する。

12～15はキャリパー形の深鉢口縁部である。いずれも波状口縁で、刻みを持つ隆帯により区画文を描く。区画の内部には三叉文や爪型文を充填する。12は頸部に無文帯を持っている。

16～20は円筒形深鉢の口縁部である。17・20は口縁下に無文帯を持ち、18はRの撚糸文、16・19はL R単節縦位回転の縄文を施文する。16は口縁直下に小波状の沈線が巡る。18の口端は直角に内屈して、上面に広い平坦面を持つ。

21～34は深鉢胴部である。刻みを持つ隆帯による曲線文が器面を分割し、爪型文・三叉文・集合沈線文等を施文する。器形は概ね円筒形であるが、25は胴部中段にくびれを持つキャリパー形の深鉢で、胴上半部が無文となる。

33・34は刻み隆帯や爪型文を伴わない沈線表現で、1の個体に類似する。

30～32は文様帯下端を区画する隆帯である。31はLの撚糸文、30・32はRの撚糸文で、いずれも縦位回転で施文している。

35・36は底部である。35はR縦位回転の撚糸文を施文し、刻み隆帯による波状の区画が底部近くまで及んでいる。36は無文地に刻み隆帯の懸垂文が垂下し、左右に半裁竹管状工具による平行沈線文が伴っている。

37は台付き土器の脚台部である。四方に楕円形の透かしを持つものとみられ、透かしの周囲は刻みを伴う隆帯で縁どられている。

38・39は中峠系の土器である。38は胴上半部が「く」の字に張り出す三原田式類似の深鉢で、平

行沈線による渦巻文を描き、頸部との境を刻み隆帯で区画している。地文はL縦位回転の撚糸文である。39はキャリパー形深鉢の胴上半部で、半裁竹管状工具の平行沈線文を描く。

40～42は加曾利EⅠ式～Ⅱ式のキャリパー類深鉢口縁部である。40は口縁直下に小渦巻文を配する。41は横走する隆帯で文様帯が上下2段の長方形区画文へと分割し、R縦位回転の撚糸文を施文する。42は2本隆帯の末端が小渦巻文となっており、繋ぎ弧文の一部と考えられる。

43は頸部無文帯である。胴部との境は1条の隆帯で区画され、以下にRの撚糸文を施文する。44は文様帯下端に水平の区画を持たない繋ぎ弧文である。地文はR L単節縦位回転の縄文である。45は頸部無文帯と胴部を隔てる隆帯が胴部の懸垂文へと連続する。地文はR縦位回転の撚糸文である。

46は胴部中段が深くくびれ、胴下半部にR L単節縦位回転の縄文を施文して、半裁竹管の平行沈線文による曲線的なモチーフが展開する。47・48は地文のみの胴部で、地文はいずれもRの撚糸文である。

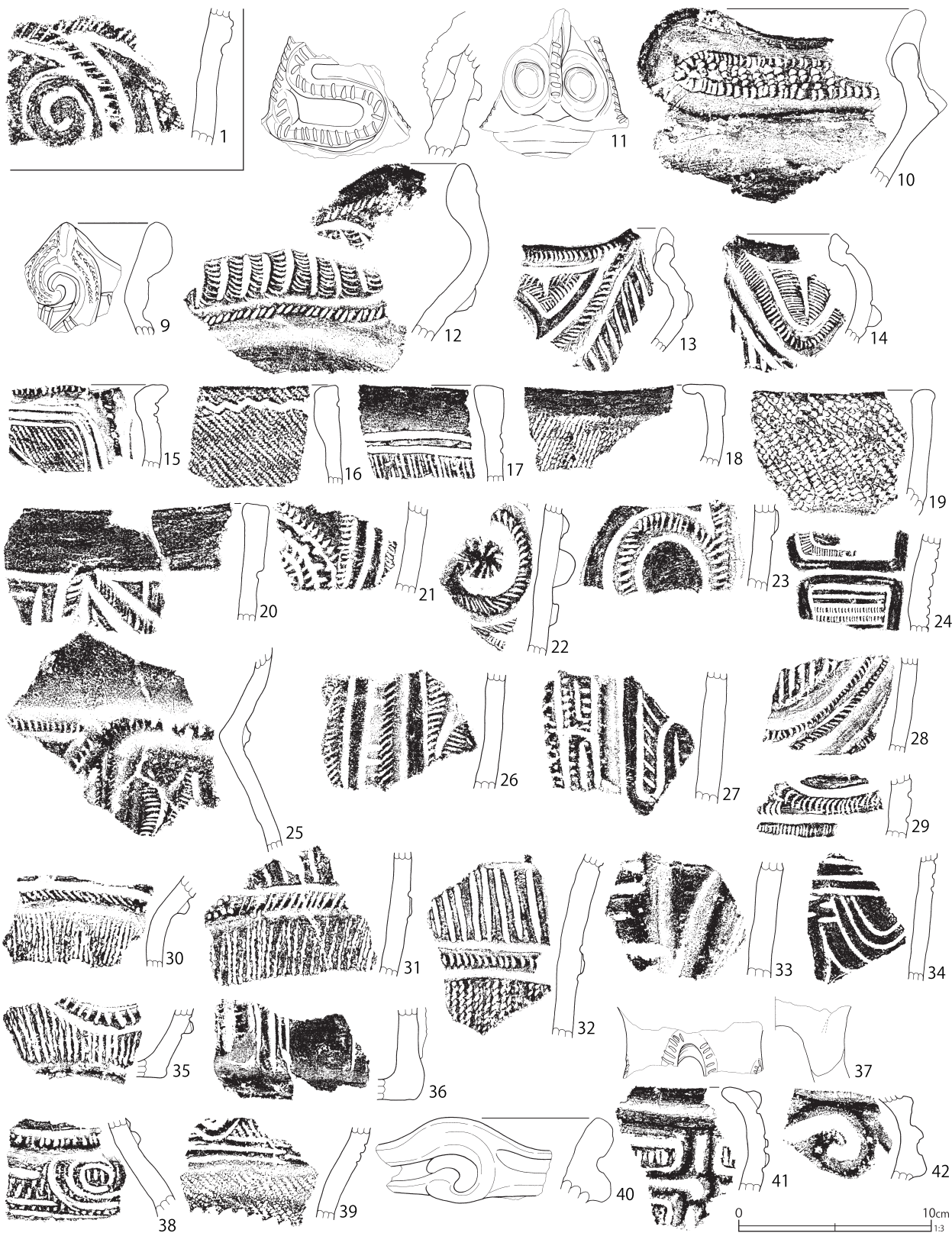
49～52は深鉢底部である。49はL縦位回転の撚糸文、50・51はR L単節の縄文を地文とする。50は磨り消し懸垂文が垂下し、加曾利EⅢ式期に下る可能性がある。52は無文の胴部である。

53～61は浅鉢である。大半が無文で、各種の器形が存在する。

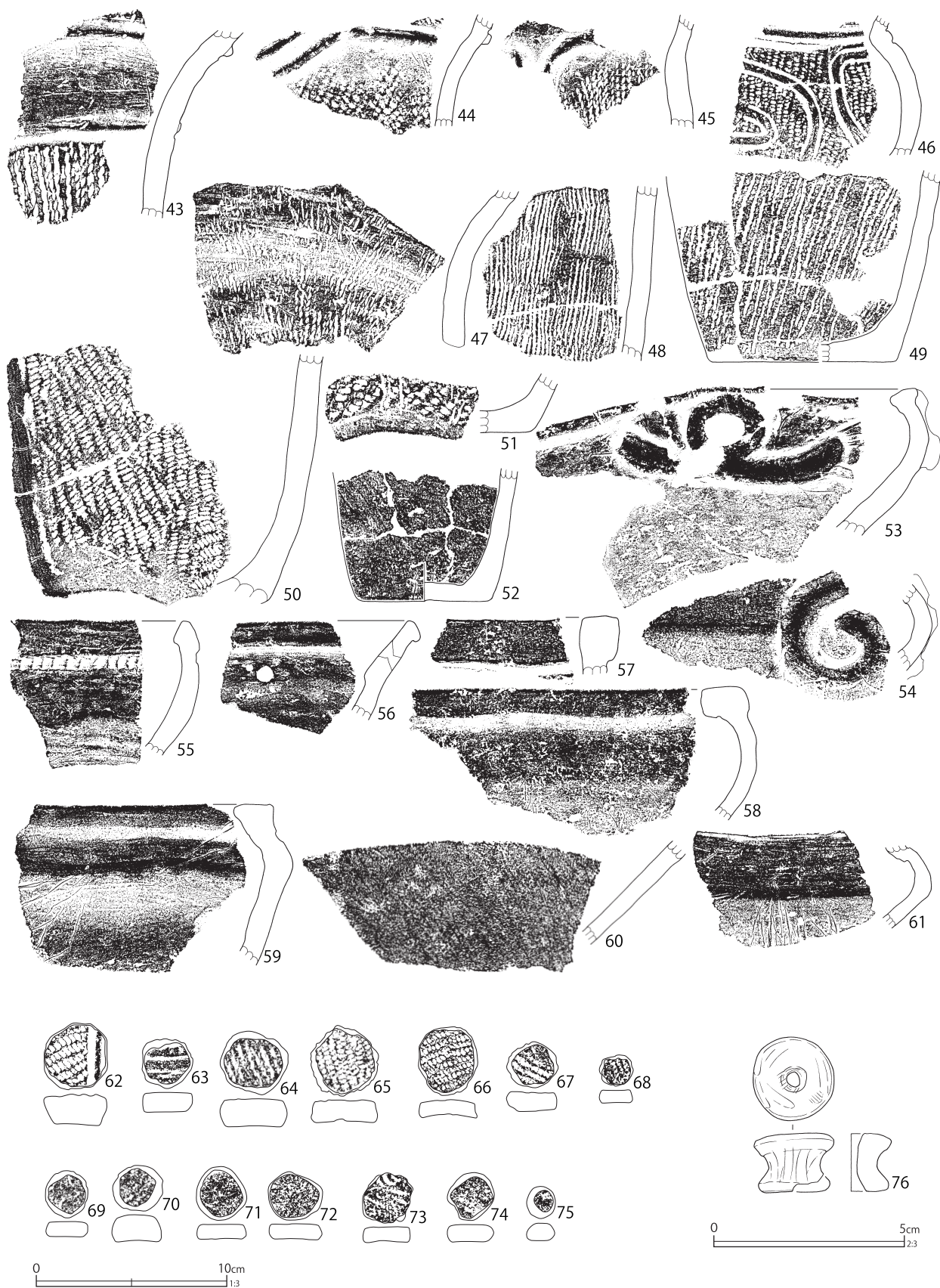
53・54は胴上半部に文様帯を持つもので、扁平かつ幅広の隆帯により渦巻文を描く。53は口縁直下に最大径を持ち、口端は内湾して口唇肥厚する。

55は口縁内湾して直立し、内面に稜を持つ。口縁直下に篋状工具先端による押し引き文が巡る。56は外反口縁で、口端外面に隆帯が巡るほか、内面にも段を持つ。57の口縁には内外面とも赤彩が残る。

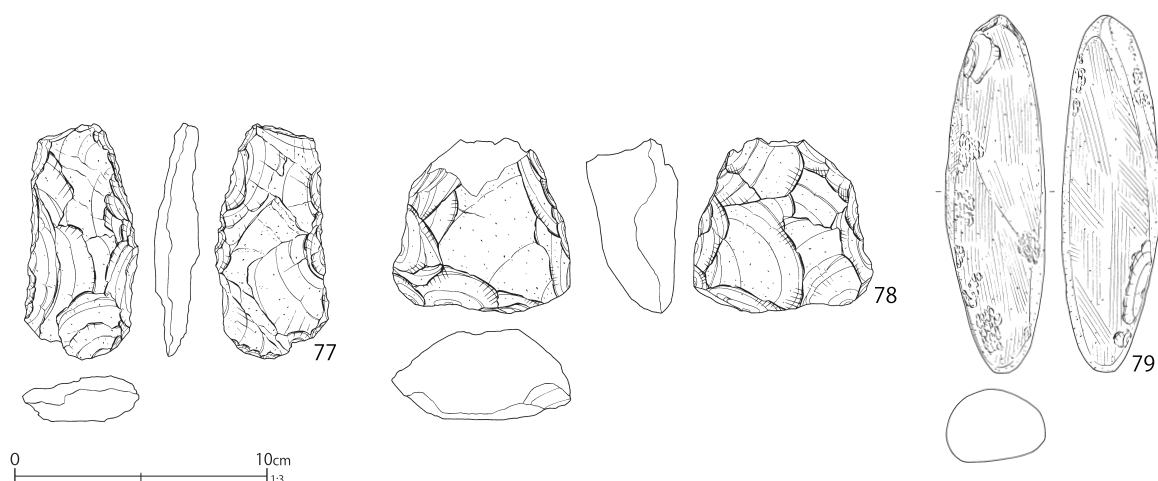
58は口唇部が著しく肥厚しつつ内屈し、口端上に平坦面を持つ。59は口縁直下に「く」の字に張



第 202 图 第 25・27 号住居跡出土遺物 (3)



第 203 图 第 25・27 号住居跡出土遺物（4）



第 204 図 第 25・27 号住居跡出土遺物（5）

り出して、口端がわずかに外屈する。61もこれに類似の器形である。

62～75は土製円盤である。76は滑車型の耳飾りである。無文で、側縁がV字状に深くえぐれている。中央の貫通孔の周囲には放射状の擦痕が観察される。

石器（第204図）

77は打製石斧である。短冊形で、右側縁がやや張り出し、全体が左に反っている。長さ9.4cm、幅4.5cm、厚さ1.7cm、重さ69.89 gである。石材はホルンフェルスである。

79は棒状の磨石である。端正な紡錘状のプロポーションで、断面は定角型であり、4面とも使用される。長軸側両端に剥離や叩打が集中しており、叩き石としても使用されたものと考えられる。

長さ14cm、幅4 cm、厚さ2.9cm、重さ241.16 gである。石材はシルト岩である。

第26号住居跡（第205～211図）

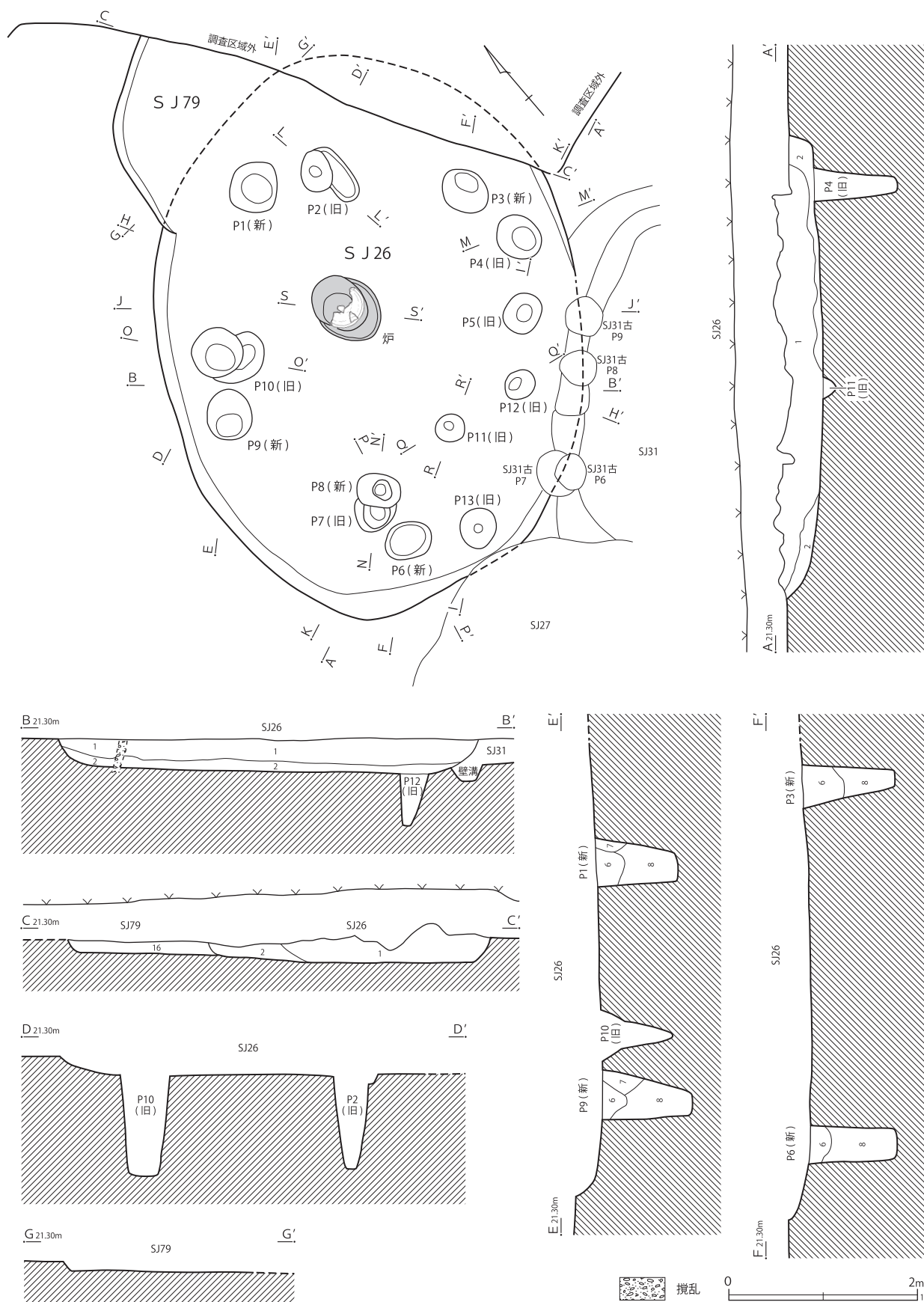
L - 13グリッドに位置する。第31・79号住居跡を壊しており、第27号住居跡とも重複関係にある。また、北東壁の一部が調査区域外に存在する。長径は約6 m、短径4.54mで、長軸はN - 41° - Eを指すが、後述するように上屋の主軸はN - 35° - W付近を指す可能性がある。壁は比較的緩やかに立ち上がり、壁高は最も深い部分で0.2mである。平坦で、中央がやや下がっている。壁溝は検出できなかった。

床面のほぼ中央で炉跡を検出した。埋甕炉で、底部を欠いた浅鉢土器の大破片を正位に埋設していた。土器の周囲に掘りかたを検出した。上下二段の掘り込みを持ち、長径82cm、短径64cm、深さ17cmである。主軸はほぼ南北を指す。

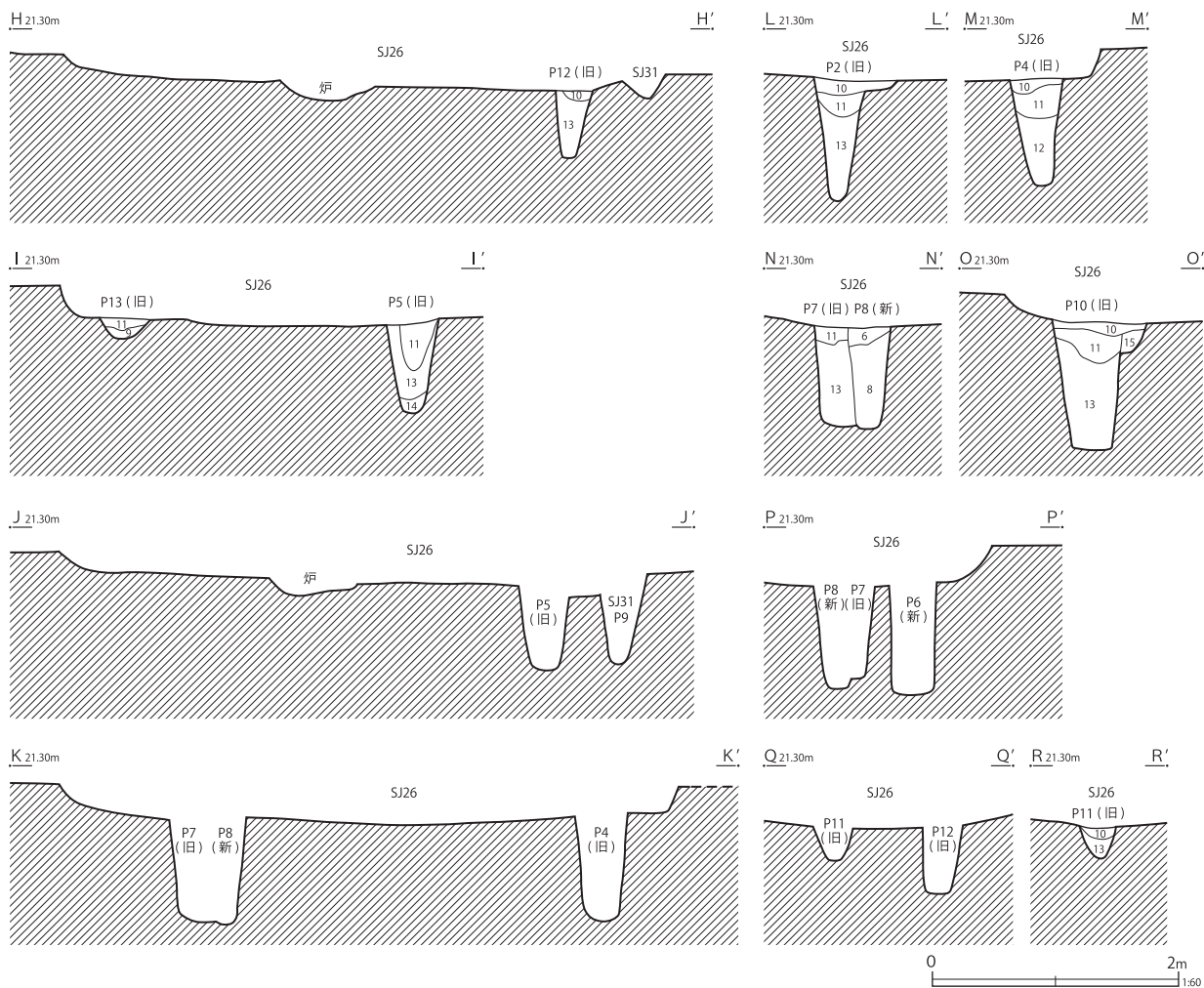
床面上から13本のピットが検出された。これらのピットの時期は覆土の状態から新旧に分けられ

第 23 表 第 26 号住居跡柱穴計測表

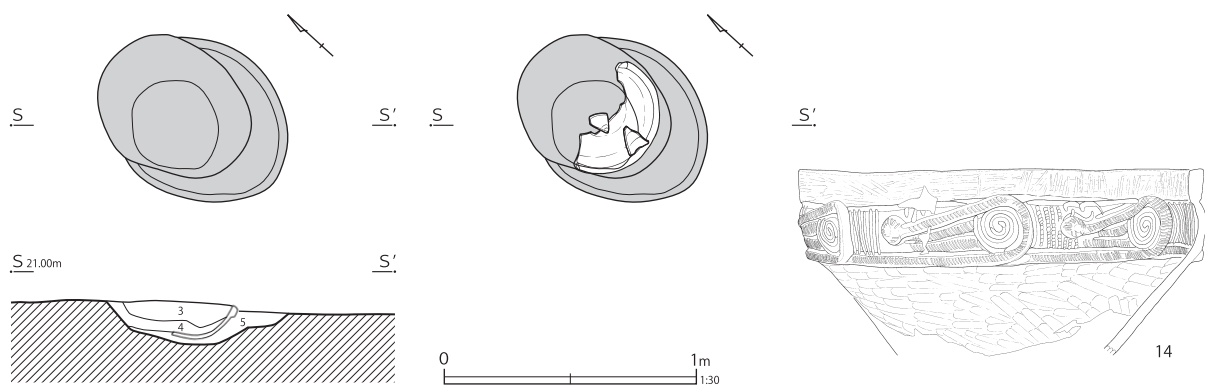
ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)
P 1	54.0	87.7	P 2	42.0	94.5	P 3	54.0	97.8	P 4	50.0	88.6	P 5	44.0	41.9
P 6	50.0	89.6	P 7	44.0	78.0	P 8	46.0	89.1	P 9	53.0	96.0	P 10	78.0	105.3
P 11	32.0	28.0	P 12	34.0	55.4	P 13	42.0	17.5						



第 205 图 第 26·79 号住居跡 (1)



S J 26 炉跡

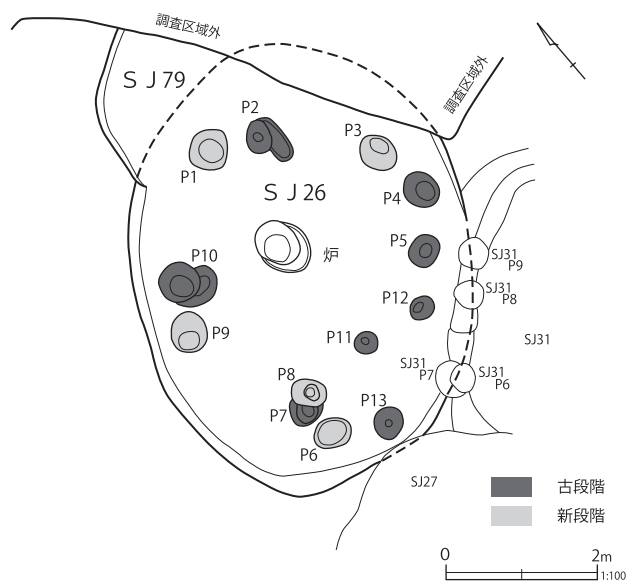


S J 26

- 1 暗褐色土層 : ロームブロック・ローム粒子・焼土ブロック若干含む
- 2 暗褐色土層 : ロームブロック若干 ローム粒子多く 炭化物少量含む
- S J 26 炉
- 3 黒褐色土層 : ロームブロック多く 焼土ブロック・炭化物若干含む
- 4 暗褐色土層 : ロームブロック多く 焼土ブロック・炭化物若干含む
- 5 黒褐色土層 : ロームブロック・焼土ブロック・炭化物若干含む
- S J 26 柱穴
- 6 極暗褐色土層 : ロームブロック若干 炭化物少量含む
- 7 暗褐色土層 : ロームブロック・ローム粒子若干 炭化物少量含む
- 8 極暗褐色土層 : ロームブロック・ローム粒子・炭化物少量含む

- 9 暗褐色土層 : ロームブロック・ローム粒子若干含む
- 10 暗黄褐色土層 : ロームブロック・ローム粒子若干 炭化物少量含む
固く締まっている 貼床
- 11 暗褐色土層 : ロームブロック若干 ローム粒子・炭化物少量含む
- 12 暗褐色土層 : ロームブロック多く ローム粒子・炭化物少量含む
- 13 極暗褐色土層 : ロームブロック・ローム粒子・炭化物少量含む
- 14 黒褐色土層 : ロームブロック若干含む 固く締まっている
- 15 暗黄褐色土層 : ローム粒子若干 炭化物少量含む
- S J 79
- 16 暗黄褐色土層 : ロームブロック若干 ローム粒子多く 炭化物少量含む

第 206 図 第 26・79 号住居跡 (2)



第207図 第26・79号住居跡柱穴変遷図

るが、P1～3・6・8・9は新しい段階の支柱穴と考えられる。また、P2・4・7・10が旧段階の支柱穴と考えられ、各時期とも台形に近い4本柱の上屋を構成するものと考えられる。

南東壁付近にP5・11～13が分布する。出入口口施設の痕跡である可能性もあるが、当住居跡が位置する一帯は複数の住居跡が切り合っており、他の遺構のピットが混在していることも考えられる。

覆土は上下2層からなり、遺物は主に上層から出土している。所属時期は勝坂式末～加曾利EⅠ式期と考えられる。

第26号住居跡出土遺物

土器（第212～216図）

1～5は勝坂系の土器である。1はキャリパー形の深鉢と考えられ、口縁から胴上半部まで残存する。2単位の波状口縁とみられ、口縁内湾して口唇部が著しく肥厚し、内面に稜をなす。口縁直下に無文帯を持ち、胴上半部の文様との境に沈線が巡って段を形成する。

波状口縁波頂部に小渦巻文を配し、これを起点に刻みを伴う隆帯が垂下し、左右にも同様の隆帯が斜行して、文様帯を分割するものとみられる。

波底部には環状の隆帯の周縁に斜位の刻みが巡る車輪状のモチーフを配し、周囲に三叉文を描く。

復元最大径は約27.2cm、現存高は約10.3cmである。胎土は砂質である。器面は暗褐色である。焼成は良い。

2は円筒形深鉢の口縁部である。水平口縁で、1か所に小突起を持つ。胴部との境には1条の沈線が巡って段を形成する。

復元最大径は約18cm、現存高は約6cmである。胎土はやや砂質である。器面は暗灰褐色である。焼成は良い。

3は円筒形深鉢で、口縁から胴部中段まで残存する。水平口縁で、1か所に刻み隆帯の円文を描く小突起を持ち、これを起点に隆帯が胴部へと垂下する。

口縁部は無文で、胴部との境に1条の沈線が巡って段を形成する。胴部の文様帯は刻み隆帯で分割した中に櫛歯文や三叉文、縦位の集合沈線文を描き、文様帯下端を横位の刻み隆帯で区画する。胴下半部は無文である。

復元最大径は約17.8cm、現存高は約15.5cmである。胎土はやや砂質である。器面は暗灰黄褐色で、黒斑がみられる。焼成はやや不良である。

4は胴部中段から底部にかけて残存する。胴下半部が張り出して胴部中段にくびれを持ち、口縁に向かって外反しつつ立ち上がるキャリパー形の深鉢である。

胴部中段のくびれ部分に矢羽根状の刻みを持つ隆帯が巡って文様帯を上下に区画する。胴上半部は無文帯となり、胴下半部には連鎖状の隆帯が弧状に巡って半円形の区画文を形成する。区画から下は底部まで無文である。

復元最大径は約18.4cm、現存高は約17.3cmである。胎土は少量の垂角礫と多量の砂を含み、雲母粒子が混入する。器壁は外面茶褐色、内面黒褐色である。

5は口縁から底部まで残存する。やや寸詰まり

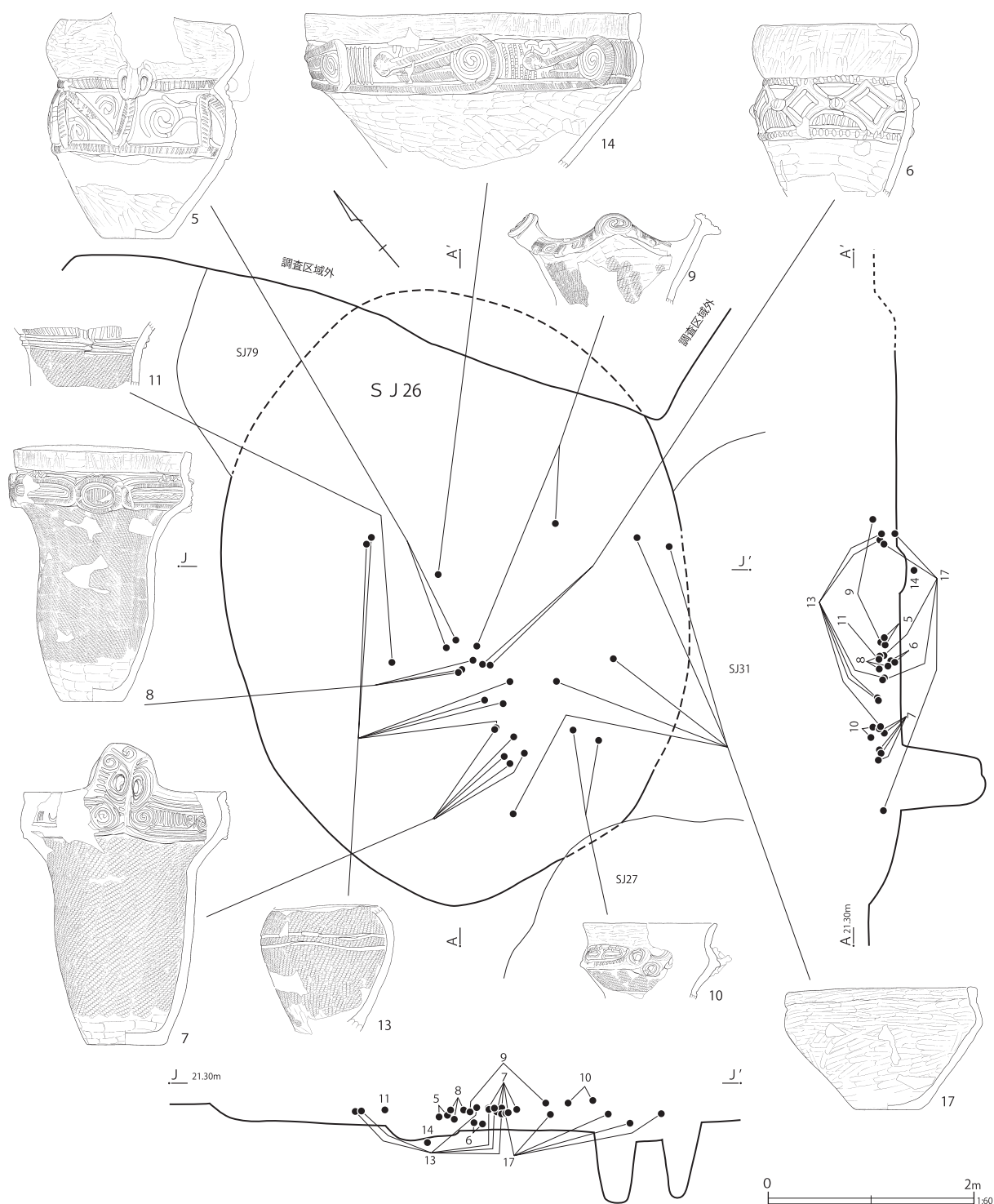
のキャリパー形で、水平口縁上に一對の突起を持つが、いずれも欠失している。

内湾する無文口縁で、口端肥厚して内屈する。頸部にくびれを持ち、胴上半部に文様帯を持つ。文様帯の上下は刻みを持つ隆帯で区画し、内部は刻み隆帯によりN字形に分割されて、渦巻文や三

又文を配置する。胴下半部は無文である。

復元最大径は約27.7cm、現存高は約29.1cmである（突起部分を含む）。胎土はややシルト質である。器壁は外面暗褐色、内面暗灰褐色である。焼成は良い。

6は底部を欠失する。5に類似の器形を持つ深



第 208 図 第 26 号住居跡遺物出土状況（1）

鉢で、口縁部の特徴も共通だが、突起を持たない水平口縁である。

胴上半部に文様帯を持ち、それ以外の部分は無文である。文様帯上下は刻みを持つ隆帯で区画し、内部には弧状の隆帯が上下対向して、接点に中央押圧を持つ突起を配する。

弧状区画の一部は集合沈線を充填され楕歯文となり、隣り合う区画の間の菱形の余白は、2か所で渦巻文を充填する。

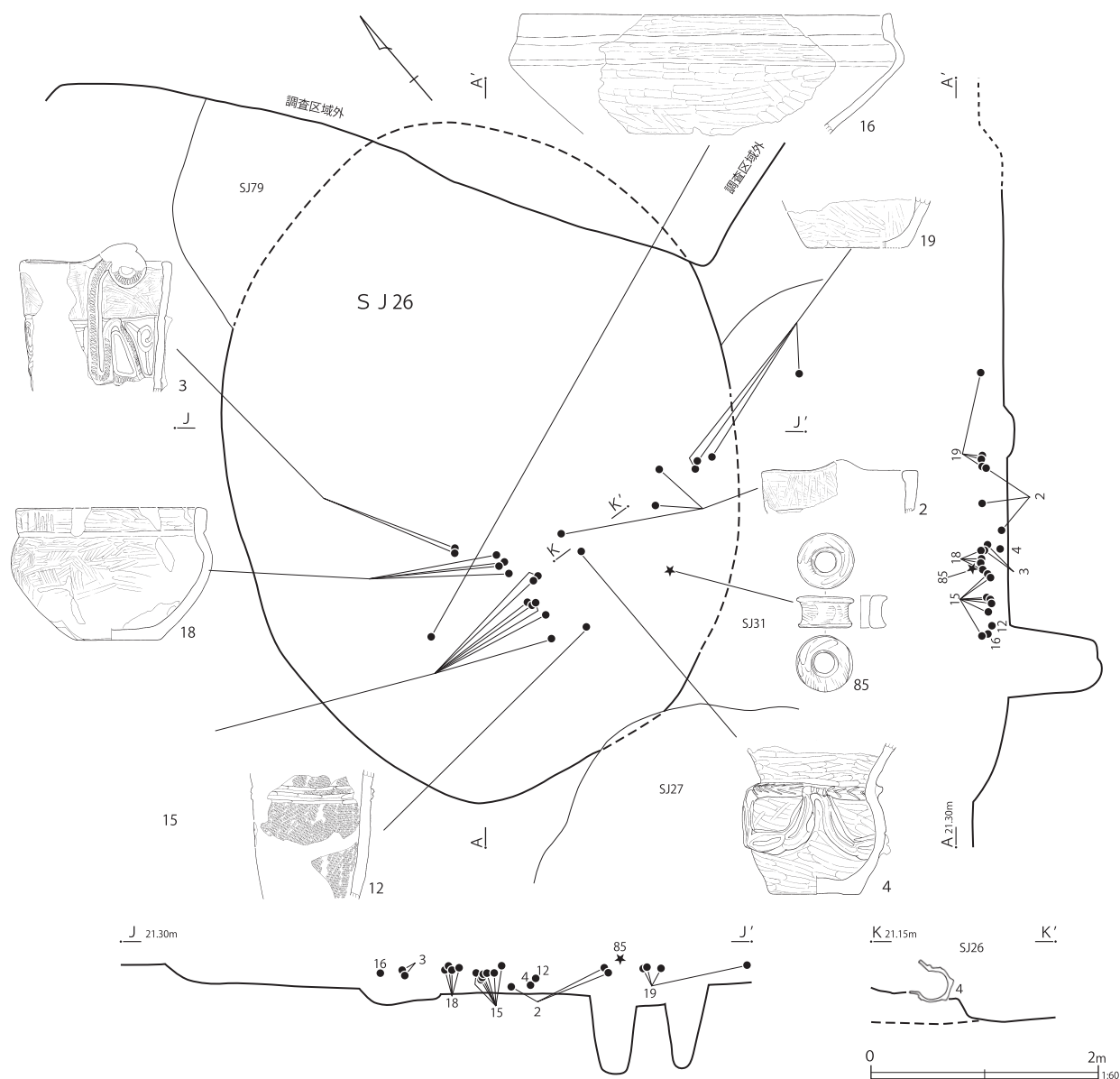
復元最大径は約20.3cm、現存高は約20.9cmである。胎土はやや砂質で、チャート等の亜角礫を

多く含む。器壁は外面暗茶褐色、内面黒褐色である。焼成は良い。

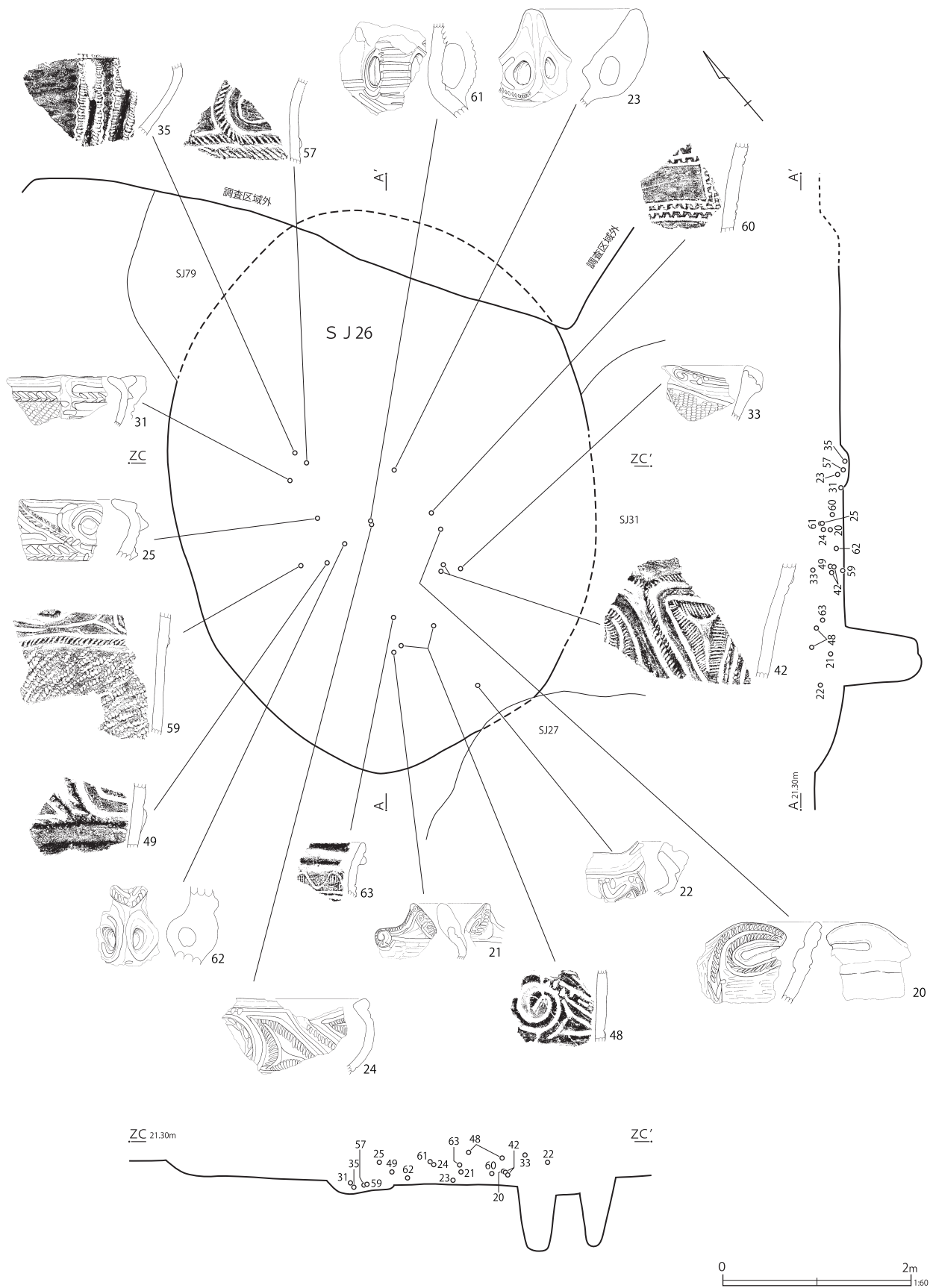
7～11は中峠系の土器である。

7はキャリパー形の深鉢で、水平口縁上に一對の突起を配する。口縁部の文様は密な集合沈線による渦巻文で、上下を平行沈線と隆帯で区画する。突起は背面に横位の貫通孔を持つ眼鏡状突起で、やはり集合沈線と渦巻文を描く。頸部以下にはR L単節縦位回転の縄文を施文し、底部付近のみ無文となる。

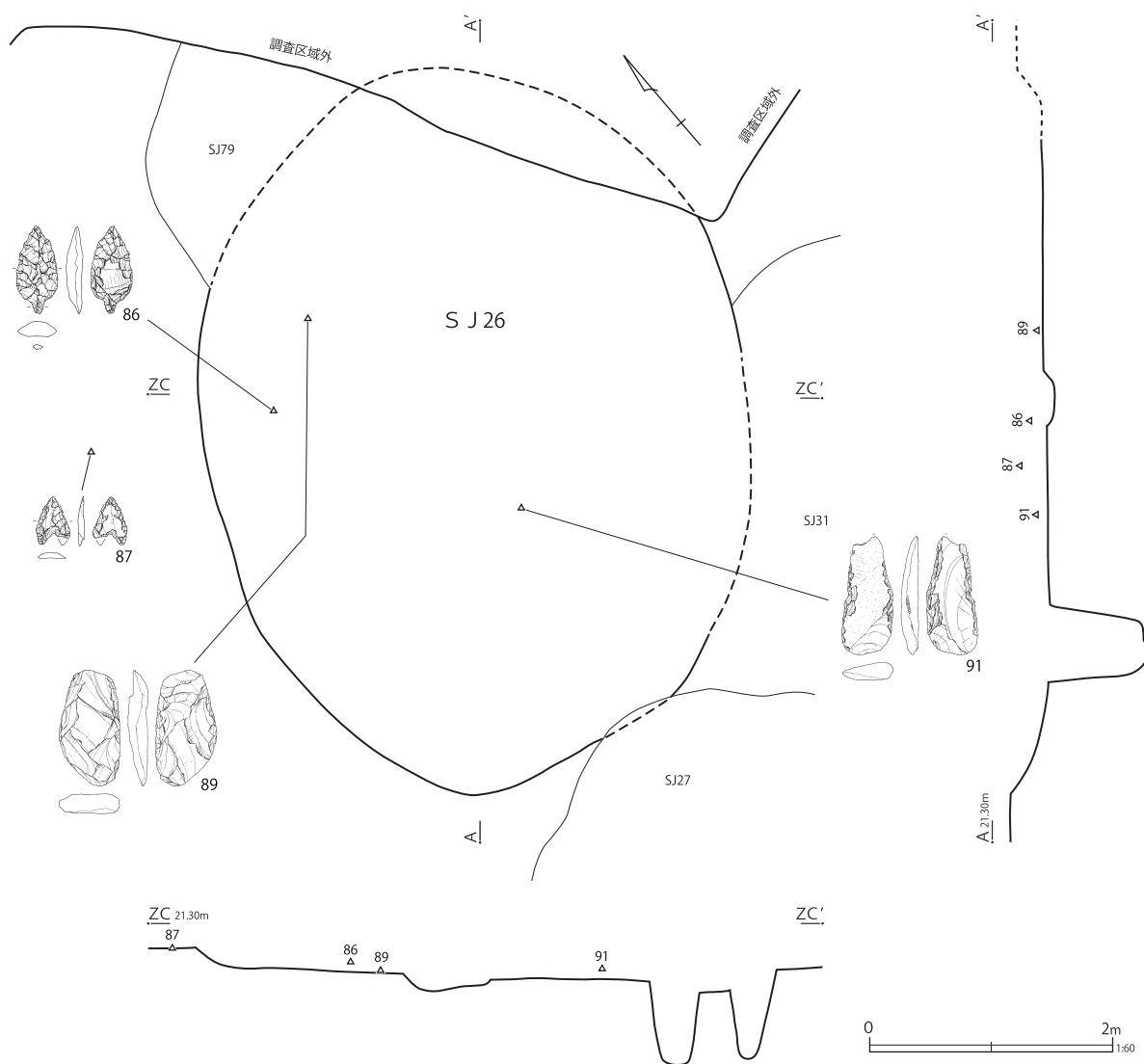
復元最大径は約24.2cm、現存高は約34.7cmで



第 209 図 第 26 号住居跡遺物出土状況 (2)



第 210 図 第 26 号住居跡遺物出土状況 (3)



第 211 図 第 26 号住居跡遺物出土状況 (4)

ある。胎土はシルト質で、黒雲母粒子を少量含む。罶面は黒灰褐色である。焼成は比較的良い。

8は三原田式に類似の深鉢である。無文の水平口縁が垂直に立ち上がり、張り出した胴上半部に文様帯を持つ。

刻みを伴う隆帯による円形区画と横楕円形区画が各4単位づつ交互に配置され、内部には集合沈線文や小波状沈線を描く。口縁部の無文帯との境には平行沈線が巡り、交互の刺突を配する。

胴部にはL R単節の縄文が縦位回転で施文され、底部付近のみ無文となる。

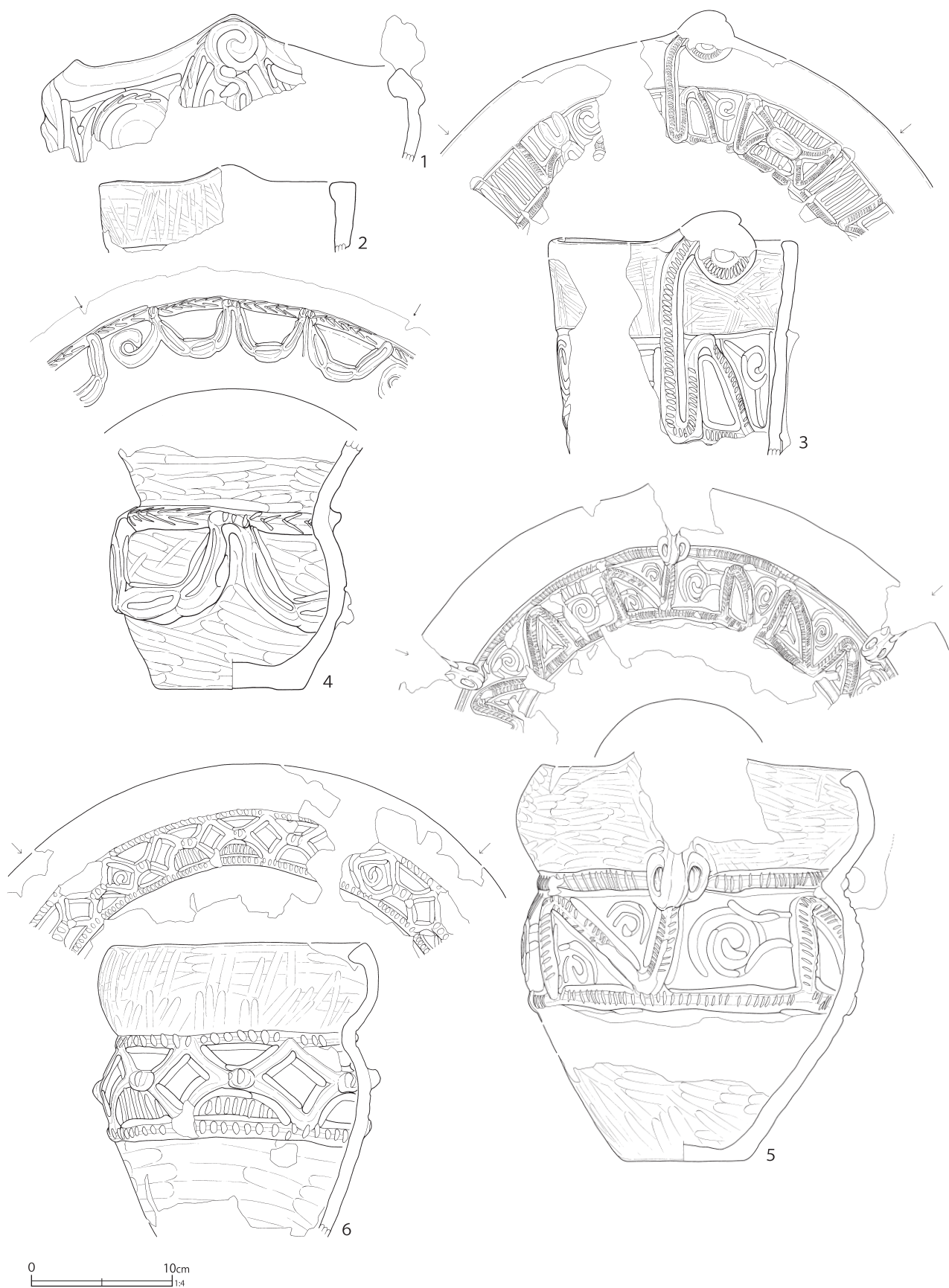
復元最大径は約23.9cm、現存高は約33.1cmで

ある。胎土はやや砂質である。器壁は外面暗褐色、内面暗茶褐色である。焼成は良い。

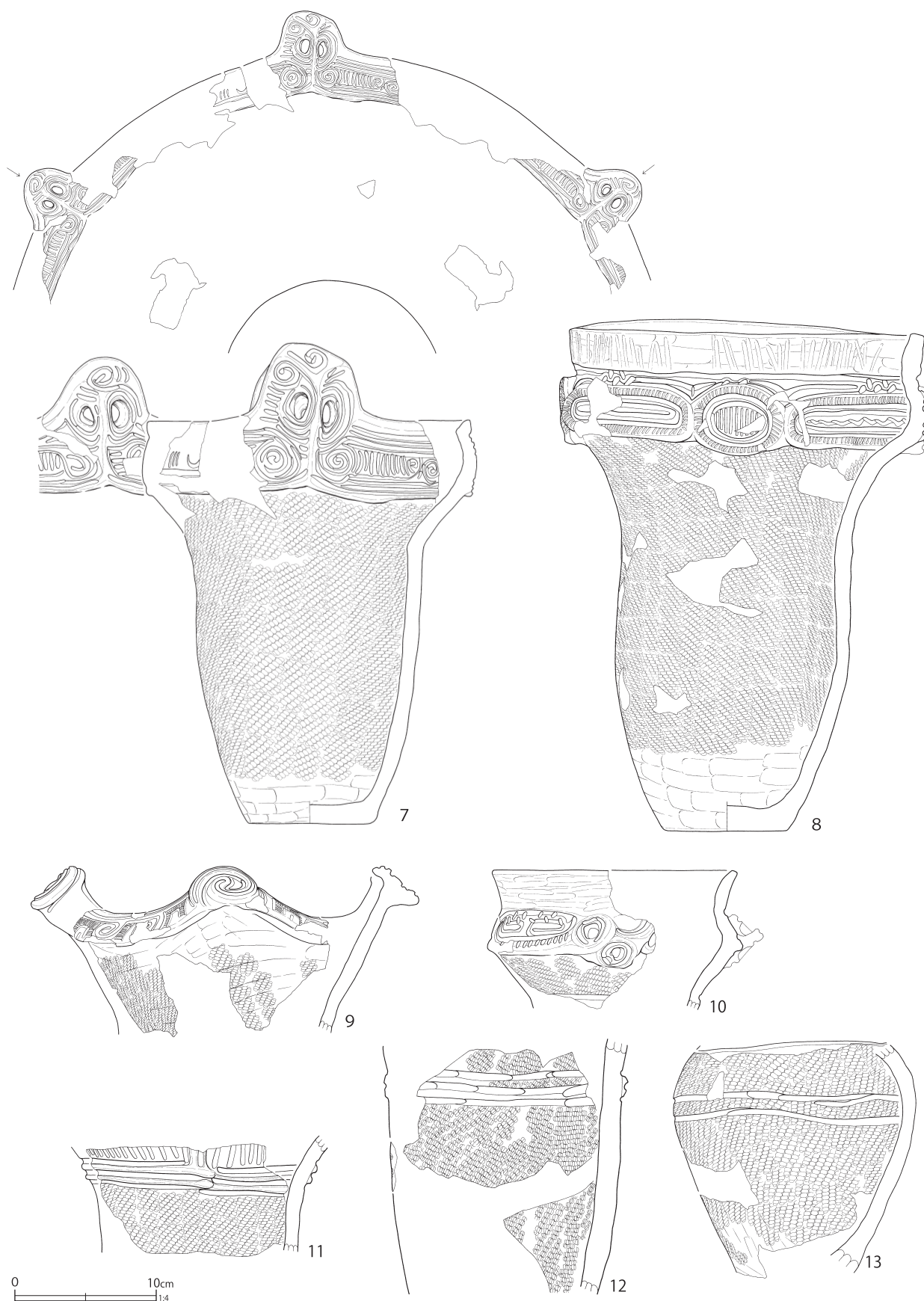
9は大波状口縁の深鉢で、口縁から胴上半部まで残存する。

頸部から口縁にかけて直線的に開き、「く」の字に内屈した口端部に平坦面が形成される。この平坦面が文様帯となる。

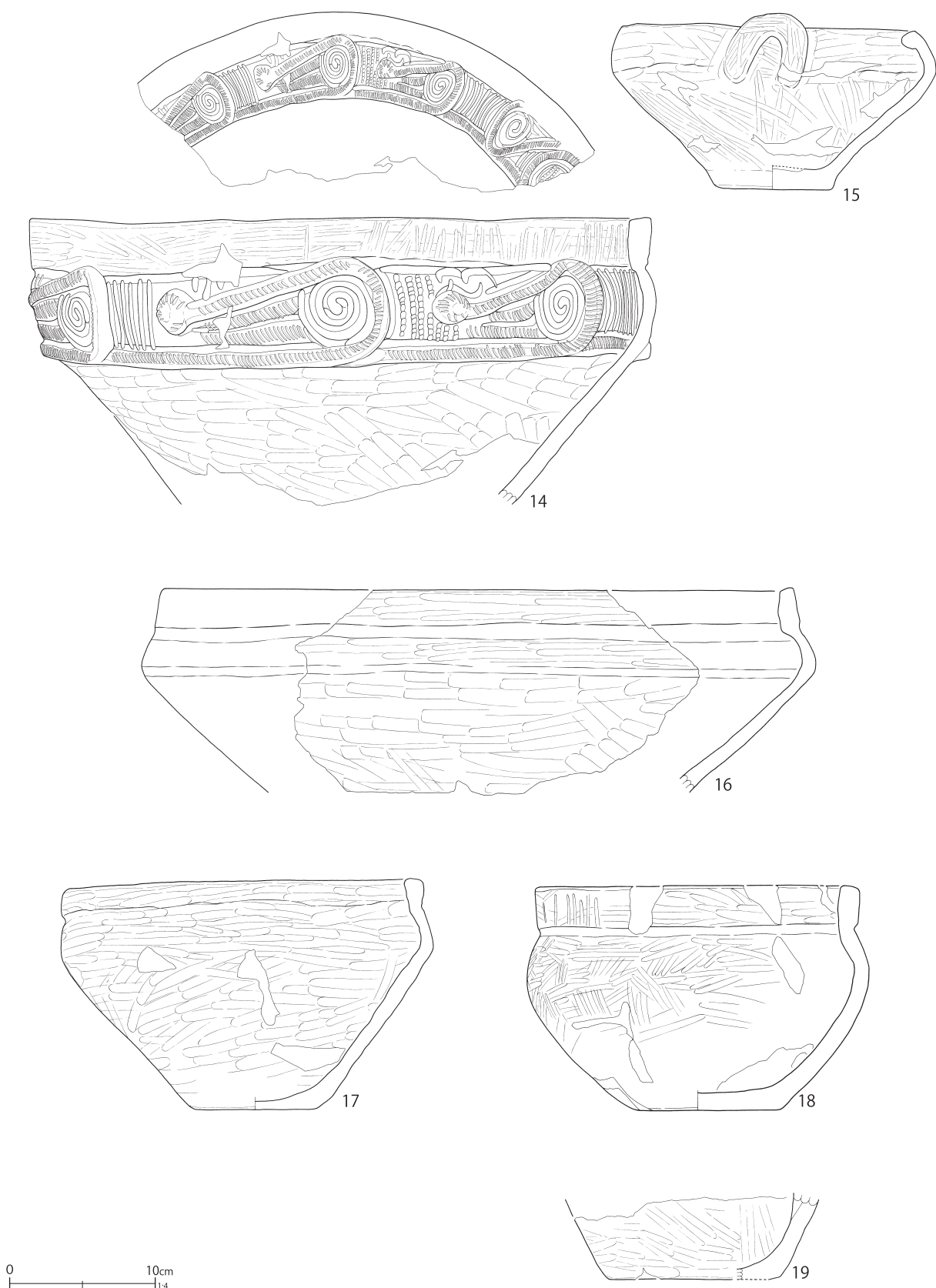
波状口縁の波頂部には隆帯＋沈線による渦巻文を配する。突起間には単沈線による渦巻文と区画文を一筆書き風に描いており、余白は角押し文列で埋めている。胴部にはR L単節縦位回転の縄文を施文する。



第 212 图 第 26 号住居跡出土遺物 (1)



第 213 图 第 26 号住居跡出土遺物 (2)



第 214 图 第 26 号住居跡出土遺物 (3)

復元最大径は約27.4cm、現存高は約11.9cmである。胎土は若干の砂、小礫を含む。器面は暗灰黄褐色である。焼成は良い。

10は三原田式類似の深鉢で、口縁から胴上半部まで残存する。ソロバン玉状に張り出す胴上半部に文様帯を配し、頸部は「く」の字にくびれて、口縁は直線的に外反する。

胴上半部の文様帯には、中央に円孔を持つ隆帯を組み合わせた中空風の突起を、おそらく4単位配置する。突起間には隆帯による楕円形の区画を配し、内部に沈線文を描く。胴部中段には平行沈線が巡り、文様帯との間にはL R単節の縄文を右下がりて施文する。

復元最大径は約20.6cm、現存高は約9.7cmである（突起部分を含む）。胎土はシルト質で、黒雲母粒子を含む。器壁は外面暗灰黄褐色、内面暗灰褐色である。焼成はやや不良である。

11は深鉢の胴部である。胴部中段に2本の隆帯が巡って、ここから上が文様帯となる。文様帯内部を縦位の二本隆帯で分割し、縦位の集合沈線文を描く。胴下半部にはR L単節縦位回転の縄文を施文する。

復元最大径は約17.8cm、現存高は約7.7cmである。胎土は片岩の小礫と黒雲母粒子を多量に含む。器面は暗茶褐色である。焼成は良い。

12は円筒形の深鉢胴部である。上面に沈線を持つ背割れの隆帯が巡り、隆帯上下に沿って各1条の沈線が巡る。地文はR L R複節縦位回転の縄文で、隆帯の上面にも施文している。

復元最大径は約14.3cm、現存高は約15.1cmである。胎土は多量の砂とシルトを含む。器壁は外面明灰黄褐色、内面灰褐色である。焼成は良い。

13はキャリパー形深鉢の胴下半部とみられる。胴部中段のくびれの直下が張り出す腰高な器形で、この最大径の部分に平行沈線が巡る。地文はR L単節縦位回転の縄文である。

復元最大径は約17cm、現存高は約16.5cmであ

る。胎土は小礫とシルトを含む。器壁は外面灰黄褐色で黒斑がみられ、内面暗灰黄褐色である。焼成は良好である。

14～18は浅鉢である。

14は勝坂系の文様を描く浅鉢である。胴下半部を欠失する。

緩やかに内湾する胴上半部に文様帯を持ち、頸部屈曲して口縁は直立する。口縁部文様帯は、上端を沈線、下端を刻み隆帯で区画している。

主文様は沈線による渦巻文と放射状の刻みを持つ小突起を斜めの隆帯で連繋する。

このアンバランスな横S字状のモチーフが連続して描かれ、余白には爪型文や集合沈線文、角押し文列、交互刺突文等を描く。胴下半部は無文である。

復元最大径は約42.9cm、現存高は約19.6cmである。胎土は砂質である。器壁は外面暗橙色～黄褐色、内面黒色である。焼成は良い。

15は口縁から底部まで残存する。胴部中段が「く」の字に張り出し、口縁は内湾して口端部で内屈する。水平口縁上に扁平な隆帯による逆U字状のモチーフを配するほかは無文である。復元最大径は約22.1cm、現存高は約12cmである。胎土はシルト質である。器面は暗橙色で黒斑がみられる。焼成は良い。

16～18は無文の浅鉢である。いずれも胴張りて折り返し口縁という共通の特徴を持つ。

16は口縁部から胴下半部まで残存する。胴上半部に最大径を持って「く」の字に張り出し、頸部屈曲して凹線が巡り、口縁はほぼ直立する。

復元最大径は約46.1cm、現存高は約14.1cmである。胎土は多量の砂礫を含む。器壁は外面暗黄褐色、内面黄褐色である。焼成は良好である。

17は口縁部から底部まで残存する。胴上半部に最大径を持って「く」の字に張り出し、頸部屈曲して段を持ち、口縁はほぼ直立する。

復元最大径は約25.5cm、現存高は約15.7cmで

ある。胎土はやや砂質である。器面は暗橙色で、黒斑がみられる。焼成は良い。

18は口縁部から底部まで残存する。16・17にくらべ緩やかなカーブを描いて立ち上がり、胴上半部に最大径を持って、頸部屈曲して凹線が巡り、口縁は軽微に外反する。

復元最大径は約23.4cm、現存高は約15.2cmである。胎土は極めて砂質である。器壁は外面暗灰褐色で黒斑がみられ、内面黒色である。焼成はやや不良である。

19は無文の底部である。復元最大径は約17.1cm、現存高は約5.9cmである。胎土は多量の粗砂を含む。器壁は外面橙色～黄褐色、内面橙色～黒褐色である。焼成は良い。

20～70は破片資料である。

20～30は勝坂Ⅲ式の深鉢口縁部である。20は無文の口縁上に立ち上がる波頭型の突起で、刻みを持った隆帯によるS字状の文様を描き、ここから胴部に向かって矢羽根状の刻みを持つ隆帯が垂下する。

21は斜めの円盤状突起で、側面に渦巻文と三叉文を描き、刻みを持つ隆帯で渦巻状の小突起と連繋する。22は強く内湾する折り返し口縁で、胴部との境に段を持つ。

23は山形波状口縁で、波頂部に横位の貫通孔を持つ眼鏡状突起を配する。24は内湾する水平口縁で、刻みを伴う隆帯の円文を中心に斜めの隆帯で三角形の区画を連続させる。区画内部には沈線と爪型文が巡り、三叉文を配する。

25も水平口縁で、口唇が内屈して口端上に広い平坦面を持つ。口縁下には矢羽根刻みの隆帯で下端を区画する幅の狭い文様帯を持ち、内部を斜位の隆帯で三角形に区画する。区画中央には凹孔を持つ円文を配し、余白に三叉文を描く。

26・27は円筒形の小型深鉢であろう。いずれも口唇外面に隆帯が巡って文様帯の上端をなす。

28は口縁直下に平行沈線と刻み隆帯による幅

狭の文様帯を持ち、頸部は無文となる。29は口縁下に弧状の隆帯が巡って半円形の区画を形成し、内部に平行沈線文が巡る。30は無文の口縁部で、口唇外面に隆帯と凹線が巡る。胴部との境は斜位の刻みを持つ隆帯で区画する。

35～62は勝坂式の胴部である。35は無文の胴上半部で、縦位の隆帯に沿ってキャタピラ文と小波状沈線が巡る。勝坂Ⅱ式と考えられる。

36以降は勝坂Ⅲ式である。36・37は胴部の文様帯上端を区画する隆帯である。36は刻みを持ち、直下に交互刺突文が巡る。37はRL単節横位回転の縄文を施文する。

38はキャリパー形深鉢の胴上半部であろう。斜位の隆帯で器面を三角形に分割し、内部に三叉文を配する。39は縦長の波頭状モチーフで、前段階の抽象文の名残りであろう。

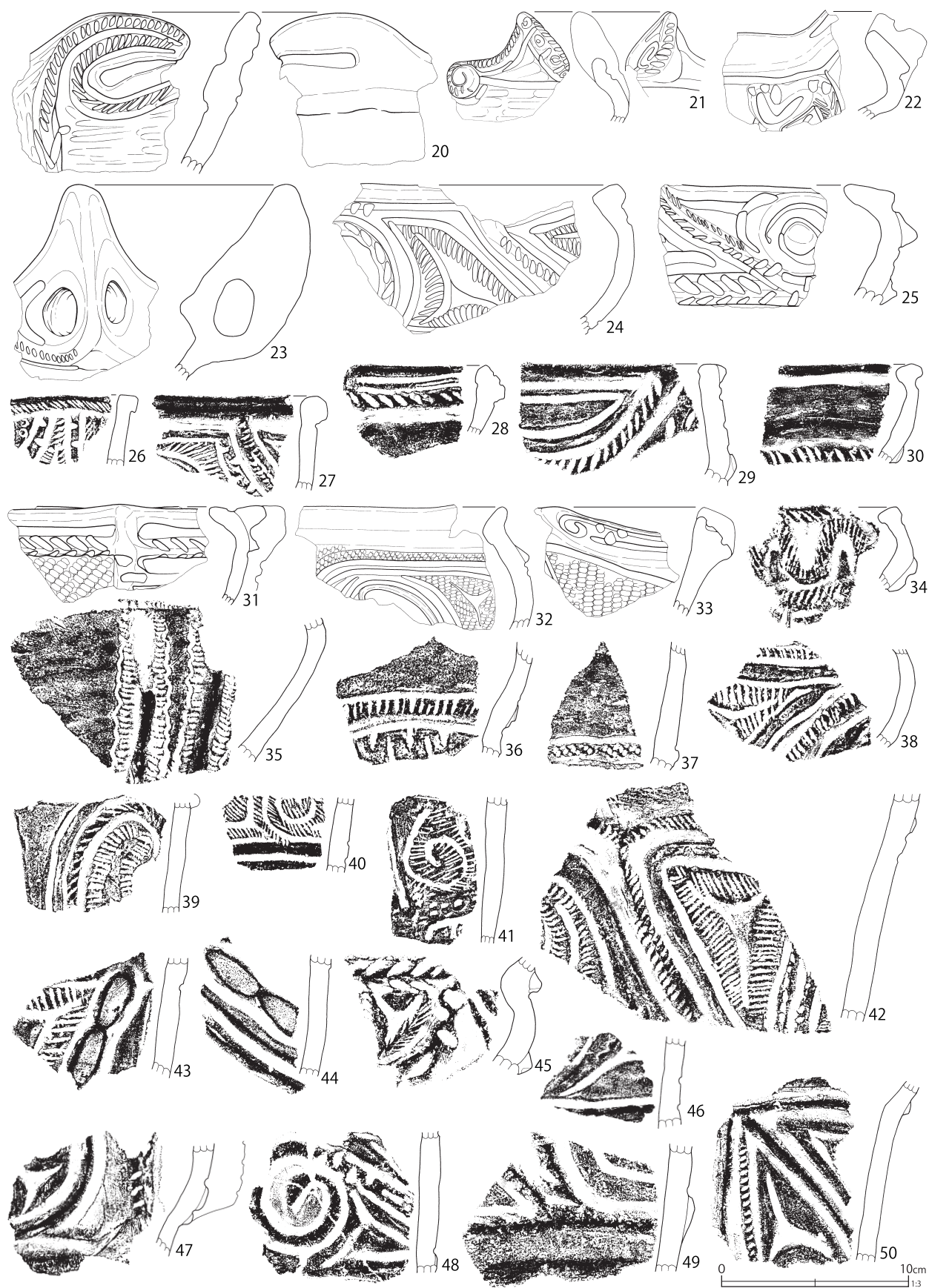
40・41は単沈線の渦巻文に沿って爪型文を施文する。40は文様帯下端の区画付近の破片であろう。42は胴上半部で、頸部に無文帯が存在する。

43・44は上面に楕円形の押圧を伴う連鎖状の隆帯である。45は隆帯上に2個一対の刻みを施す。46～48は無文地に沈線文を描くもので、48は平行沈線による渦巻文を描き、一部に交互刺突文を配する。49は胴部文様帯下端の区画で、扁平な隆帯が用いられ、胴下半部は無文である。53は上面に沈線を伴う背割れの隆帯で、文様帯を上下に分帯する。

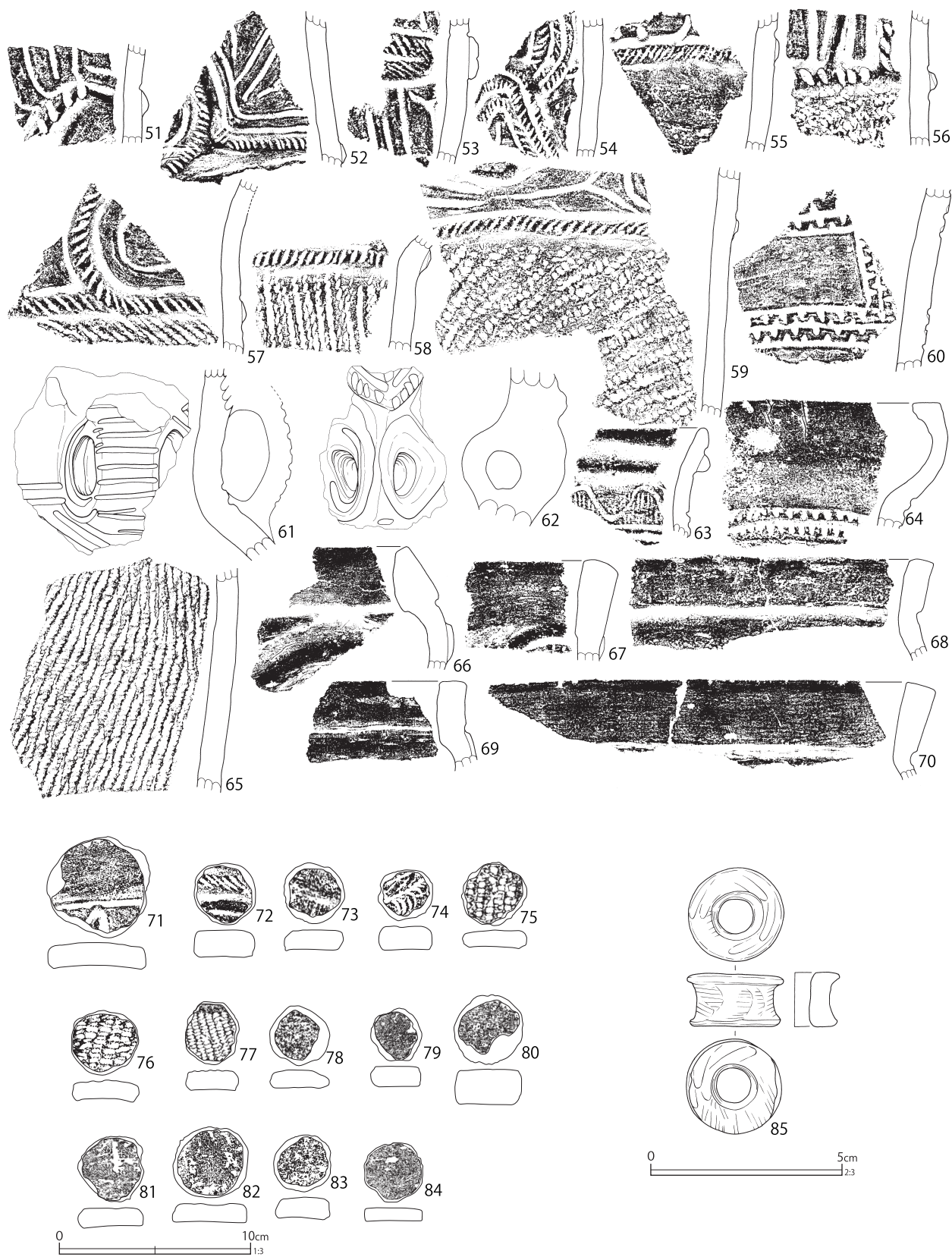
55～59は文様帯下端を区画する横位の隆帯である。55は胴下半部が無文化する。57はLR、56・59はRL単節の縄文、58はRの燃糸文を縦位回転で施文する。

60は交互刺突を伴う平行沈線で器面を長方形に分割する。61・62は胴部中段に付される眼鏡状突起である。

31～34・63は中峠系の深鉢口縁部である。31・33・63は口縁部付近に圧縮された文様帯を持つ。64は曾利系の深鉢口縁部である。65は縄文のみ施



第 215 图 第 26 住居跡出土遺物 (4)



第 216 图 第 26 号住居跡出土遺物 (5)

文される胴部で、地文はRL単節縦位回転の縄文である。

66～70は浅鉢口縁部である。いずれも外面に段を持つ折り返し口縁で、66は内湾するが、それ以外は頸部屈曲して口縁が直立ないし軽微に外屈する。大半が無文とみられるが、66・67は胴上半部に扁平幅広の隆帯で曲線文を描く。

71～84は土製円盤である。74は前期諸磯式の破片を再利用する。85は滑車型の耳飾りである。

石器（第217図）

86・87は石鏃である。

86は凸基有茎の石鏃である。返りを持たない水滴形のプロポーションで、腹面に主要剥離面を残す。長さ3.55cm、幅1.7cm、厚さ0.65cm、重さ3.15gである。石材は黒曜石である。

87は凹基の石鏃で、右脚を折損する。両側縁が緩やかに湾曲し、基部はV字に切れ込む。腹面に主要剥離面（節理面?）を残す。長さ1.95cm、幅1.4cm、厚さ0.25cm、重さ0.45gである。石材は黒曜石である。

88はスクレイパーである。上方に長方形のつまみを持ち、刃部は不整な逆台形である。長さ2.1cm、幅1.6cm、厚さ0.55cm、重さ1.4gである。

石材は黒曜石である。

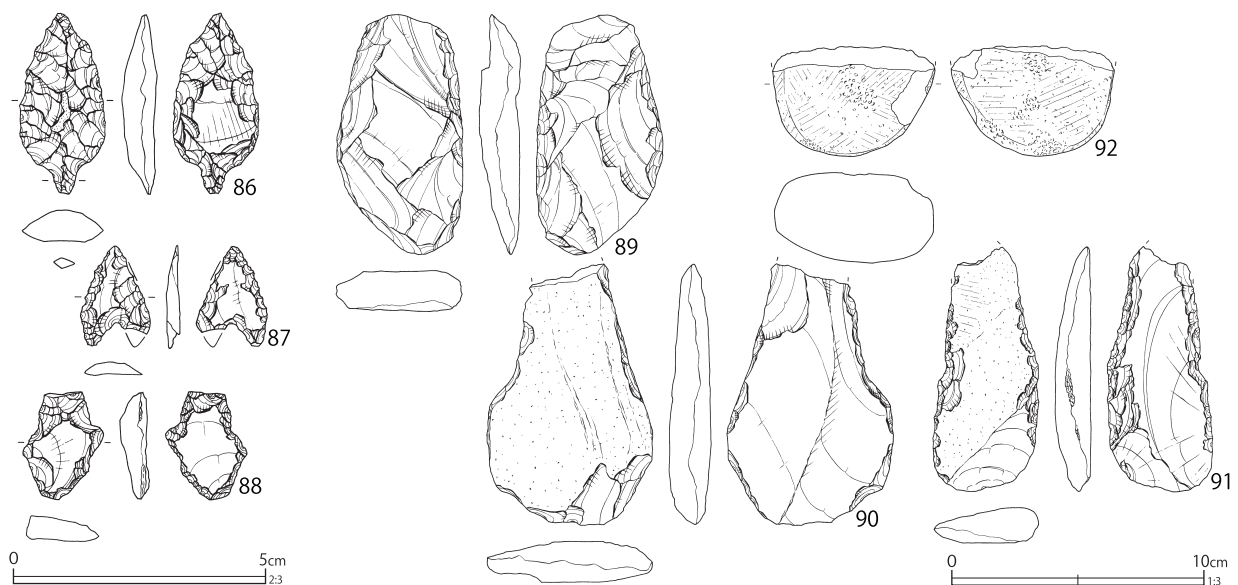
89・90は打製石斧である。

89は短冊形の石斧だが刃部が片刃状で、全体に寸詰まりのプロポーションであることから、再生品の可能性もある。長さ9.5cm、幅4.9cm、厚さ1.6cm、重さ82.71gである。石材は砂岩である。

90は撥形で、基部を折損する。背面に広く自然面を残す。両側縁に両面からの加工による抉りを持ち、刃部の加工は背面側に集中している。長さ10.3cm、幅6.5cm、厚さ1.6cm、重さ116.83gである。石材はホルンフェルスである。

91は短冊形の石斧で、基部を折損する。背面に自然面、腹面に打割面を残している。両側縁に表裏からの調整剥離がみられるが、刃部はほとんど無加工である。長さ9.65cm、幅4.1cm、厚さ1.4cm、重さ61.88gである。石材は砂岩である。

92は楕円形の磨石で、中央から短軸方向に折損する。断面定角型で表裏および両側縁も使用されている。また、表裏面の中央付近に叩打によるあばた状の痕跡が集中することから、凹石としての使用が始まっていた可能性がある。長さ4.35cm、幅6.35cm、厚さ3.5cm、重さ138.77gである。石材は閃緑岩である。



第 217 図 第 26 号住居跡出土遺物（6）

第79号住居跡（第205～207図）

L・13グリッドに位置する。第26号住居跡に壊されており、大半が調査区域外に存在するため、北西壁の一部のみ検出された。長径・短径とも計測不能、主軸方向は不明である。壁は緩やかに立ち上がり、壁高は最も深い部分で0.09mである。壁溝は検出されなかった。

床面は平坦である。炉跡・柱穴その他の施設は検出されなかった。覆土は単層で、遺物はほとんど出土しなかった。所属時期は縄文時代中期と考えられる。

第28号住居跡（第218～224図）

L・19・20グリッドに位置する。隅丸五角形の住居跡で、長径6.16m、短径6.1m、主軸方向はN・42° - Wを指す。壁は比較的緩やかに立ち上がり、壁高は最も深い部分で0.5mである。

床面はほぼ平坦である。壁の直下を壁溝が全周し、さらに床面中央に寄った部分で二重の壁溝が検出された。これらを外側のものから順に壁溝1・2・3と仮称する。

覆土の状態から、最も新しいのは壁溝1であり、当住居跡は2回の建て替え（拡張）が行われたものと思われる。壁溝1が住居跡プランと同じく五角形であるのに対し、壁溝2・3は隅丸方形で、南東側の一辺を共有する等共通点も多く、二度目の建て替えに際して大幅な設計変更が行われたものとみられる。

床面上から20本のピットが検出された。検出面の状況や覆土の状態から、これらのピットには新旧の時間差が想定される。

最も新しい上屋に伴うと思われるのはP1・2・4～6・16・19で、P6以外は五角形の住居跡プ

ランの各コーナー部分に対応している。

これより古いのはP3・7・13・15・17・18・21で、覆土からは検証できなかったが新旧が存在し、壁溝2・3の長方形プランに対応する4本柱を構成するものと考えられる。

P8～12・14はこれらよりさらに古い覆土を持つが、配置に規則性がなく、本住居跡より古い時期の遺構との切り合いの可能性もある。

主軸線上奥壁寄りで炉跡を検出した。3つの地床炉が切り合っており、新旧の上屋に対応するものと思われる。時計回りに炉1・2・3と仮称した。断面観察の結果、炉2が炉1を切っていることは判明したが、炉3との関係は明らかにできなかった。

南東壁直下の壁溝と切り合う状態でごく浅いP20が存在し、壁溝1の主軸線上に位置することから、出入り口施設の痕跡と考えられる。

覆土は上下2層からなり、遺物は主に上層から出土している。所属時期は加曽利EⅠ式期と考えられる。

第28号住居跡出土遺物

土器（第225～229図）

1～6・7は加曽利EⅠ式のキャリパー類深鉢口縁部である。

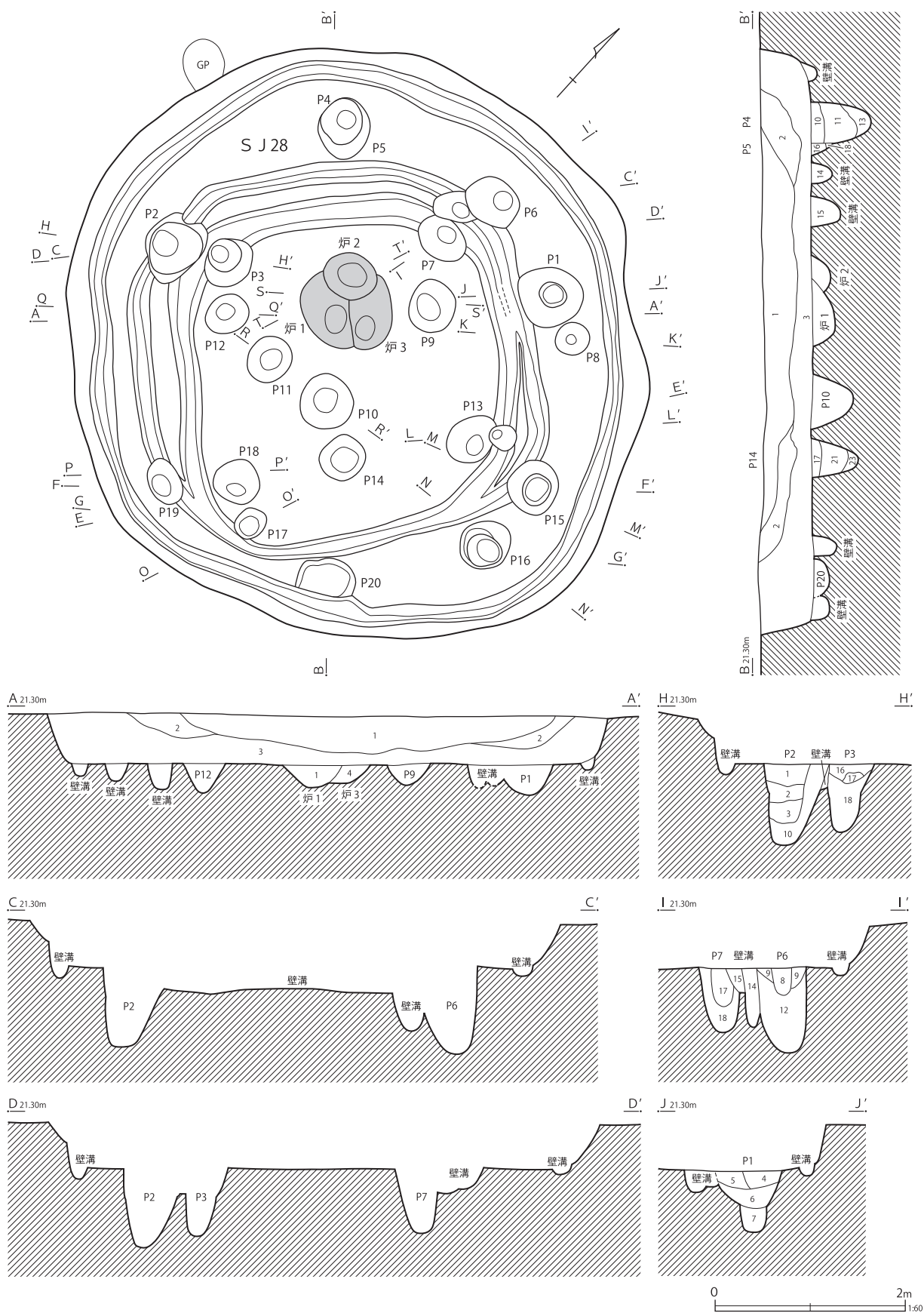
1は水平口縁の深鉢で、口縁から頸部まで残存する。胴部のくびれが少ない寸胴の器形である。

口縁部に上下を1条の隆帯で区画した文様帯を持ち、内部に2本隆帯の横S字文・十字文を描く。頸部無文帯を持たない。地文はLの燃糸文である。

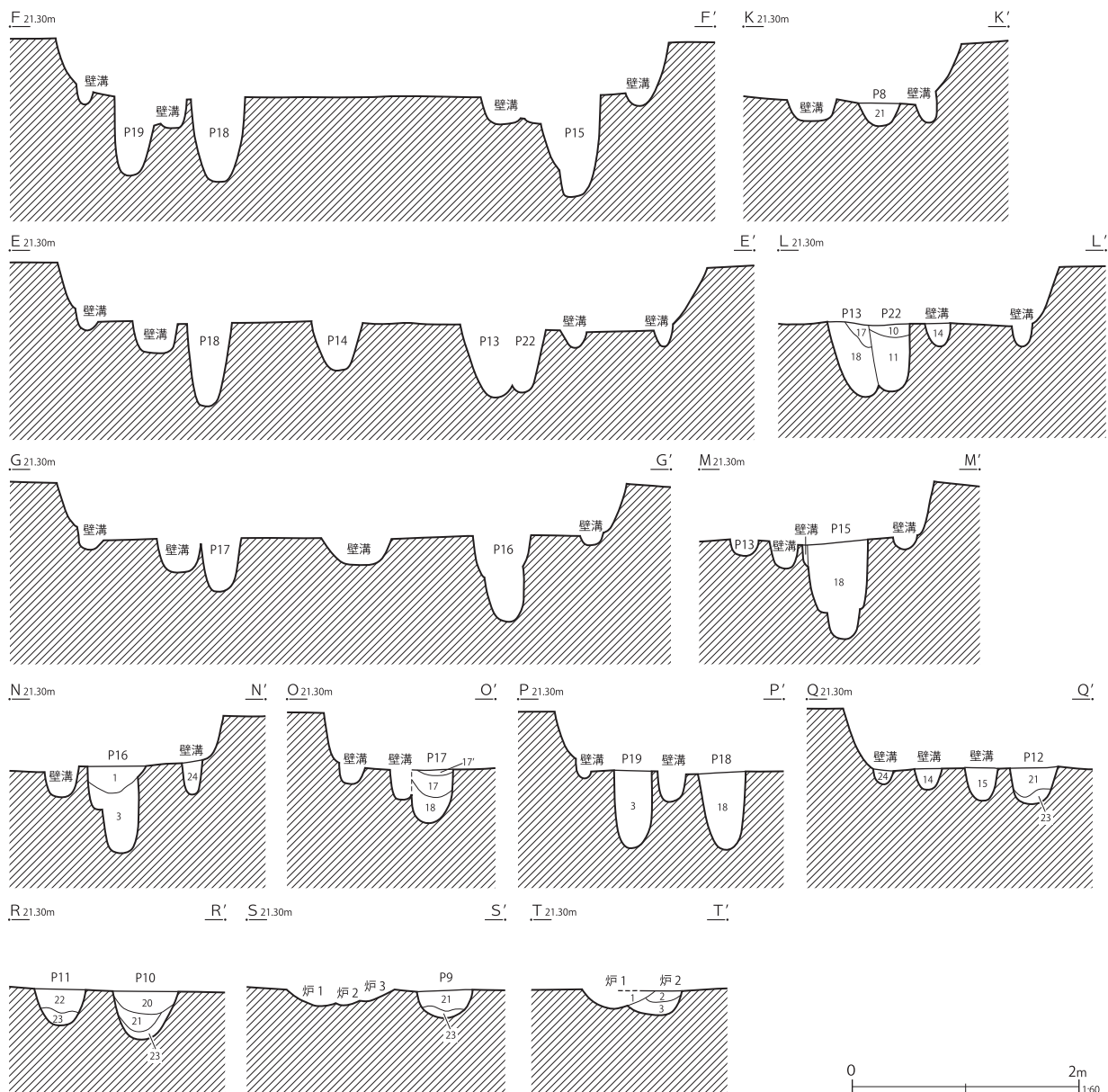
復元最大径は約13.3cm、現存高は約10.2cmである。胎土は黒雲母混じる多量の粗砂を含む。器壁は外面暗茶褐色、内面暗灰褐色である。焼成は

第24表 第28号住居跡柱穴計測表

ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)
P1	70.0	64.8	P2	75.0	81.6	P3	50.0	70.8	P4	48.0	62.6	P5	?	38.6
P6	58.0	87.4	P7	56.0	68.4	P8	36.0	19.6	P9	56.0	25.7	P10	58.0	44.5
P11	50.0	31.4	P12	48.0	30.0	P13	74.0	63.6	P14	48.0	43.1	P15	58.0	87.8
P16	54.0	74.7	P17	36.0	46.1	P18	48.0	72.1	P19	50.0	68.3	P20	62.0	17.0
P21	50.0	63.3												

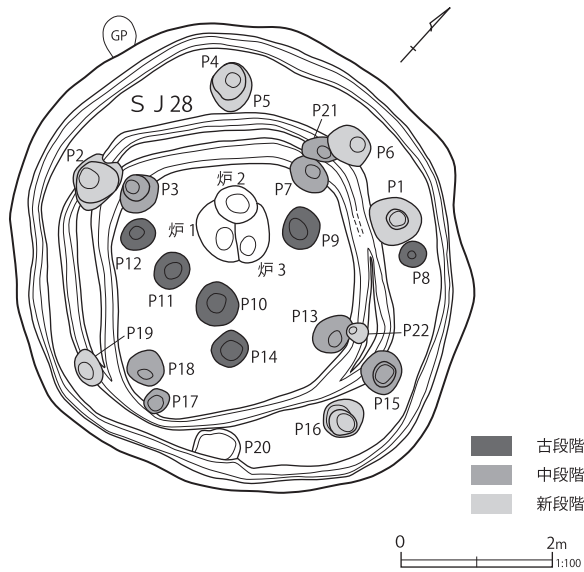


第 218 图 第 28 号住居跡 (1)



- S J 28
- 1 黒褐色土層 : 炭化物わずか 暗褐色粒子・明白黄褐色粒子少量含む
 - 2 暗褐色土層 : 炭化物多く 明褐色粒子少量 明橙褐色粒子わずか 明白黄褐色粒子多く含む 粘性を欠く 締まりよし 1層と2の漸移層か?
 - 3 暗褐色土層 : 焼土粒子わずか(散石部分) 炭化物少量 白色微粒子わずかに 明褐色粒子・明橙褐色粒子多く含む 粘性に欠く 締まりよし
- S J 28 炉
- 1 暗褐色土層 : ローム粒子若干 焼土ブロック多く 炭化物少量含む
 - 2 暗褐色土層 : ロームブロック・ローム粒子・焼土ブロック若干 炭化物少量含む
 - 3 黒褐色土層 : ロームブロック・焼土ブロック若干 炭化物少量含む
 - 4 黒褐色土層 : ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量含む
- S J 28 Pit
- 1 暗褐色土層 : 炭化物わずか 明褐色粒子多く 白色微粒子わずかに含む 粘性弱い 固く締まっている
 - 2 暗褐色土層 : ロームブロック少量 明褐色粒子わずかに含む 粘性弱い 締まり弱い やや均一性の高い層
 - 3 暗褐色土層 : 明褐色粒子わずかに含む 粘性を欠く 締まり弱い
 - 4 暗褐色土層 : ロームブロック・炭化物わずか 明褐色粒子多く 白色微粒子わずかに含む 粘性弱い 締まり弱い
 - 5 暗褐色土層 : 炭化物わずか 明褐色粒子多く 白色微粒子わずかに含む 粘性弱い 固く締まっている
- 6 暗褐色土層 : ロームブロック少量 明褐色粒子わずかに含む 粘性弱い 締まり弱い やや均一性の高い層
 - 7 暗褐色土層 : 明褐色粒子わずかに含む 粘性を欠く 締まり弱い
 - 8 暗褐色土層 : ロームブロック多く ローム粒子少量含む
 - 9 暗褐色土層 : ロームブロック若干 ローム粒子少量含む
 - 10 暗褐色土層 : ロームブロック・ローム粒子・炭化物少量含む
 - 11 暗褐色土層 : ロームブロック若干 ローム粒子少量含む
 - 12 暗褐色土層 : ロームブロック多く ローム粒子若干含む
 - 13 暗黄褐色土層 : ロームブロック・ローム粒子多く含む
 - 14 暗褐色土層 : ロームブロック若干含む (中)
 - 15 暗黄褐色土層 : ロームブロック・ローム粒子若干含む (古)
 - 16 暗褐色土層 : ロームブロック・ローム粒子少量 焼土粒子微量含む
 - 17 暗黄褐色土層 : ロームブロック多く ローム粒子若干含む 固く締まっている (貼床)
 - 18 暗褐色土層 : ロームブロック多く ローム粒子少量含む
 - 19 暗黄褐色土層 : ロームブロック多く ローム粒子若干含む
 - 20 暗褐色土層 : 粗粒ロームブロック少量含む
 - 21 暗褐色土層 : ロームブロック少量含む
 - 22 暗褐色土層 : ロームブロック・焼土ブロック少量含む
 - 23 暗黄褐色土層 : ロームブロック・ローム粒子多く含む
 - 24 暗褐色土層 : ロームブロック若干含む (新) 壁溝

第 219 図 第 28 号住居跡 (2)



第 220 図 第 28 号住居跡柱穴変遷図

やや不良である。

2 は口縁から底部まで残存する。3 単位波状口縁の深鉢で、うち 1 か所の波頂部に小渦巻文を伴う突起を配する。

口縁部の文様帯は上下を 2 本隆帯で区画し、内部に片流れの渦巻文を描く。頸部に無文帯が存在するが、胴部との境には区画を設けない。

地文は R L 単節の縄文で、口縁部では横位回転、胴部では縦位回転で施文する。

復元最大径は約 25.5cm、現存高は約 33.2cm である。胎土は多量の砂・小礫・シルトを含む。器壁は外面灰橙色、内面灰褐色である。焼成はやや不良である。

3 は口縁部の文様帯のみ残存する。水平口縁の深鉢で、4 単位の小突起を配する。

文様帯は上下を隆帯で区画し、内部に二本隆帯で 8 単位の渦巻文を描く。この渦巻文が一つ置きに口端上に突出して 4 か所に半円形の小突起を形成している。

主文様の渦巻文は多条の隆帯により、1 か所で下位の区画線と癒着している。地文は R の撚糸文を横位回転で施文する。

復元最大径は約 37.6cm、現存高は約 8.4cm であ

る。胎土は多量の砂とシルトを含む。器面は黄橙色で黒斑がみられる。焼成はやや不良である。

4 は水平口縁の深鉢で、底部を欠失する。口縁部には横 S 字文を基調とした文様が展開するが、一部の渦巻文は矮小化し、繋ぎ弧文的な意匠となっている。1 か所のみ渦巻文が口端上に突出し、貫通孔を持つ中空突起へと変化している。

頸部には無文帯が存在し、胴部には 2 本隆帯により大柄の渦巻文を描き、上下の懸垂文と接続している。

復元最大径は約 33.7cm、現存高は約 38cm である。胎土は多量の砂と小礫を含む。器面は暗灰黄褐色である。焼成はやや不良である。

5 は比較的小型の深鉢で、口縁から底部まで残存する。頸部に強いくびれを持ち、胴部は比較的寸胴で、底部の直上が張る下膨れの器形である。

口縁部文様帯は上下を 1 本隆帯で区画し、内部には末端小渦巻文化する 2 本隆帯が横走する。また、小渦巻文は上下の区画と 2 本隆帯で連結し、文様帯を上下 2 段の楕円形区画へと分割する。

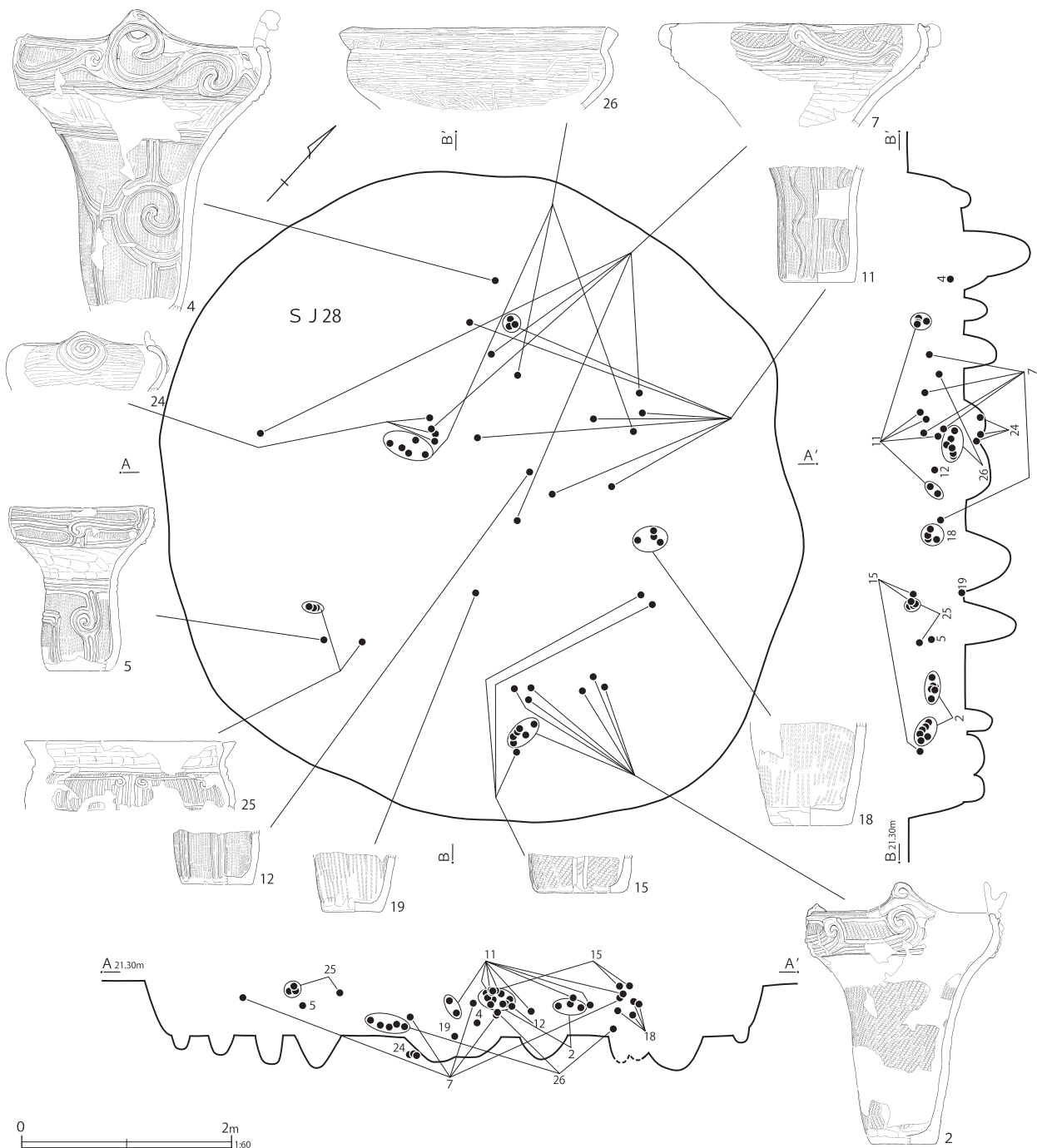
頸部には無文帯を持ち、胴部との境は 2 本隆帯で区画される。胴部の懸垂文は上端が逆 U 字状や波頭状にループしたり、中段に大ぶりの渦巻文を介在する等して単位文化している。

地文は R の撚糸文で、全て縦位回転により施文している。

復元最大径は約 18.2cm、現存高は約 21cm である。胎土は極めて砂質である。器壁は外面灰黄褐色、内面暗灰褐色である。焼成は不良である。

6 は口縁から胴部中段まで残存する。水平口縁で、2 本隆帯の弧状モチーフの間に小渦巻の突起を配する初現的な繋ぎ弧文を描く。文様帯の下端は 1 条の隆帯で水平に閉塞している。

頸部には無文帯を持つ。胴部との境は 2 条の隆帯で区画し、胴部には 1 本隆帯の懸垂文と蛇行懸垂文を交互に配置する。地文は R の撚糸文で、すべて縦位回転で施文している。



第 221 図 第 28 号住居跡遺物出土状況（1）

復元最大径は約31.6cm、現存高は約16.8cmである。胎土は砂質で、赤褐色のシャモットを含む。器壁は外面暗橙色、内面暗灰褐色である。焼成は比較的良い。

7は口縁から頸部まで残存する。水平口縁の深鉢で、6に類似する繋ぎ弧文を描くが、一部の隆帯・突起が剥落する。文様帯下端は1条の隆帯で

水平に閉塞される。

頸部に幅広の無文帯を持つ。地文はRL単節縦位回転の縄文である。

復元最大径は約15.5cm、現存高は約7.9cmである。胎土は砂質で、黒雲母粒子を含む。器壁は外面暗褐色、内面黒褐色である。焼成は比較的良好である。

8は口縁部文様帯が省略される小型の深鉢である。口縁から胴部中段まで残存する。

緩やかに外反しつつ開く朝顔形の器形で、口縁直下に隆帯と平行沈線が巡る。頸部無文帯は持たず、胴部には平行沈線による懸垂文と蛇行懸垂文を施文する。地文はR L単節縦位回転の縄文である。

復元最大径は約35.8cm、現存高は約13cmである。胎土はやや砂質で、石英粒子と赤褐色シャモットを含む。器面は黄褐色で黒斑がみられる。焼成は比較的良好。

9～15は懸垂文を描く深鉢の胴部～底部で、大

半がキャリパー類深鉢に伴うものと思われる。

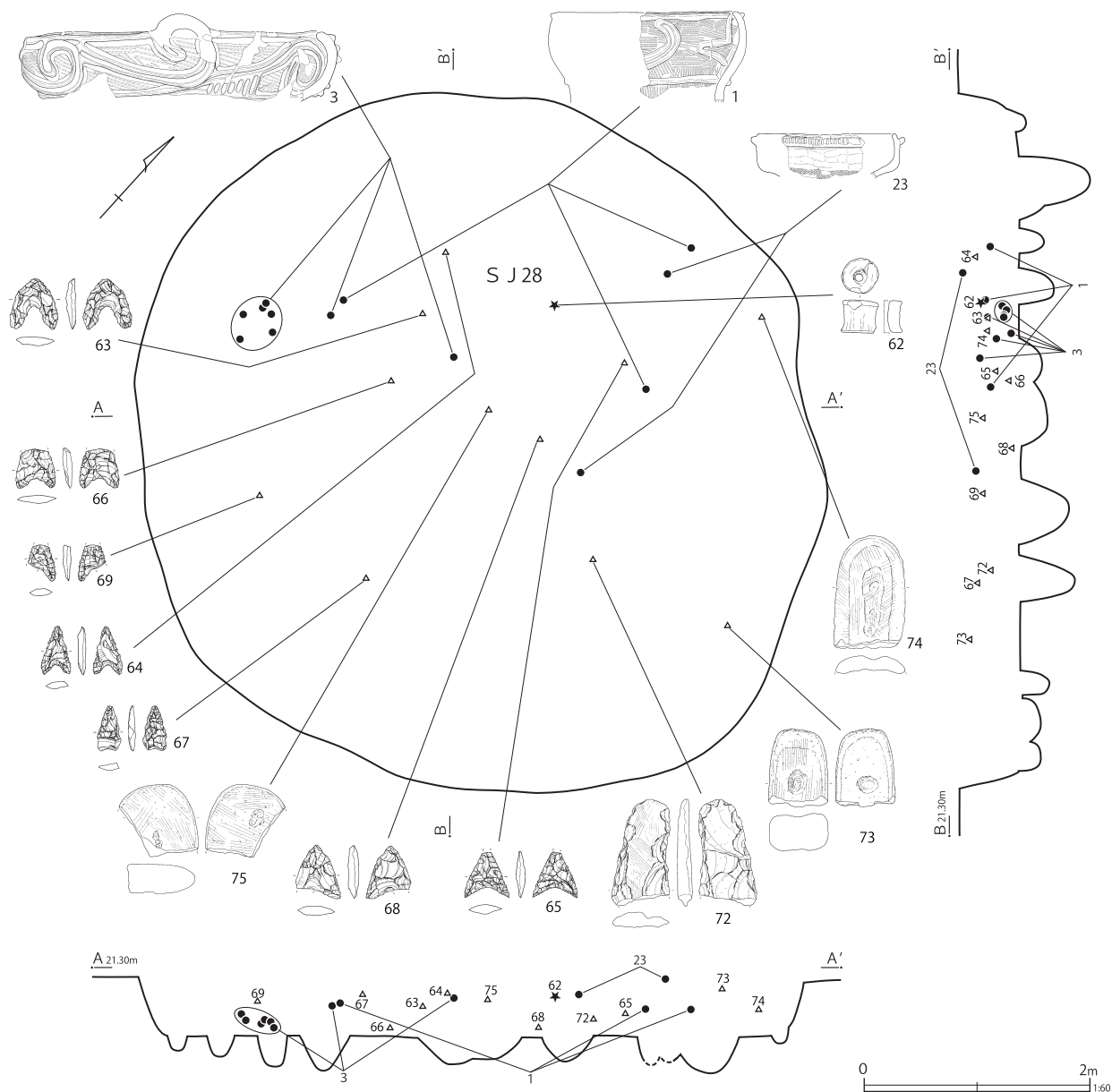
9は頸部から底部まで残存する。胴部はほぼ円筒状で、頸部から緩やかに外反する。

頸部無文帯を持ち、胴部との境は2条の隆帯で区画する。胴部には2本隆帯の懸垂文が垂下するが、中段には2本隆帯の大柄な横S字文を2単位描く。モチーフ末端には小渦巻文を配し、また2本の隆帯間を階段状に連結している。地文はR縦位回転の撚糸文である。

復元最大径は約21.5cm、現存高は約24.4cmである。胎土は若干の砂とシルトを含み、黒雲母粒子が混じる。器面は灰橙色で、焼成はやや不良で



第 222 図 第 28 号住居跡遺物出土状況（2）



第223図 第28号住居跡遺物出土状況（3）

ある。

10は胴部中段のみ残存する。1本隆帯の懸垂文と蛇行懸垂文が交互に垂下する。地文はR縦位回転の撚糸文である。

復元最大径は約14cm、現存高は約10.5cmである。胎土は砂質である。器面は橙色で、焼成は不良である。

11は胴部中段から底部まで残存する。2本隆帯の懸垂文と1本隆帯の蛇行懸垂文が交互に垂下する。地文はRの撚糸文である。

復元最大径は約11.8cm、現存高は約14.6cmである。胎土はややシルト質である。器壁は外面暗灰橙色、内面黒褐色～橙色である。焼成は良い。

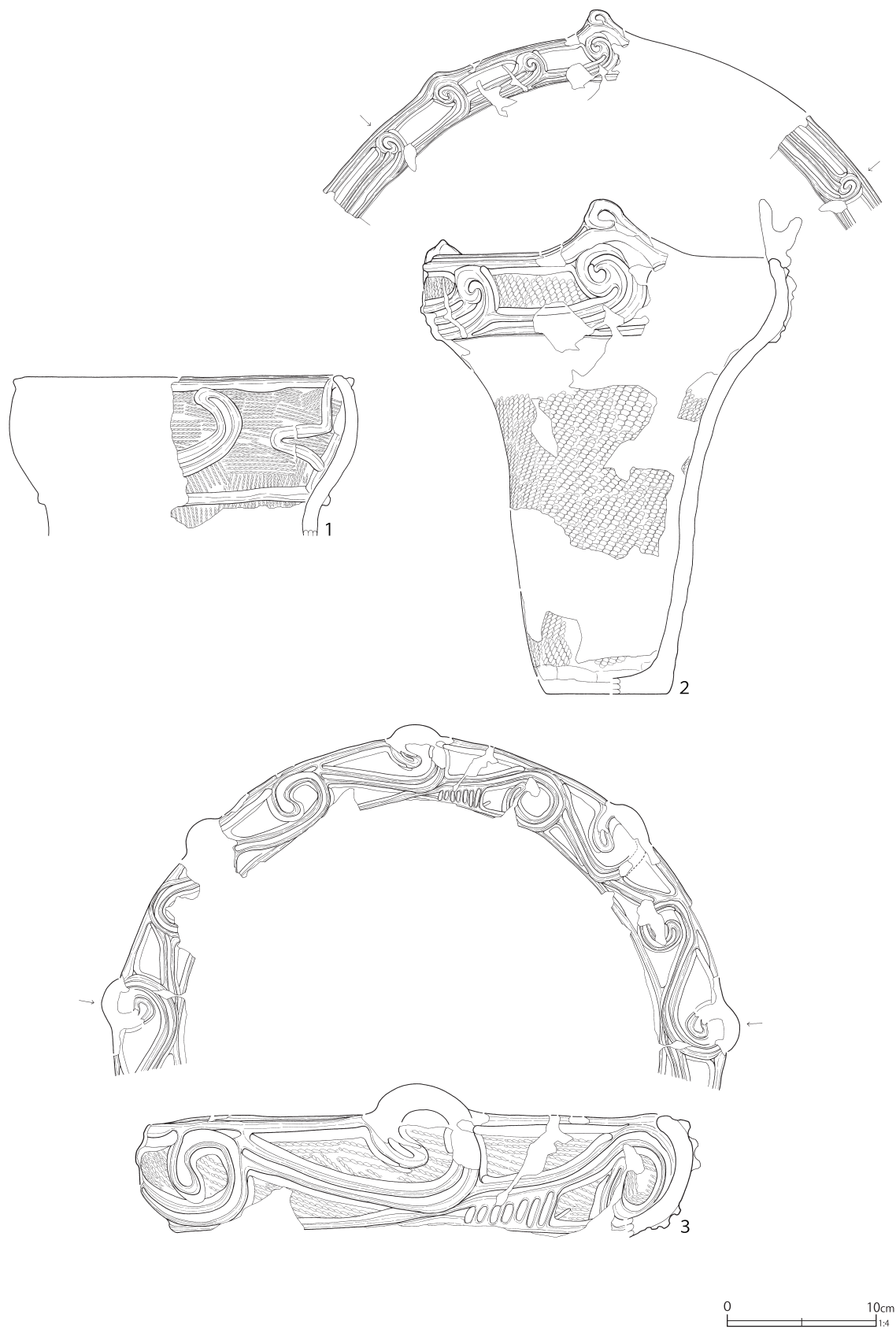
12は胴下半部から底部まで残存する。2本隆帯の懸垂文が垂下するが、隆帯の下端が癒着しループする。地文はRの撚糸文である。

復元最大径は約10.7cm、現存高は約6.8cmである。胎土はややシルト質である。器壁は外面暗黄褐色、内面黒褐色である。焼成は比較的良い。

13は胴部中段のみ残存する。2本隆帯の懸垂文



第 224 图 第 28 号住居跡遺物出土状況 (4)



第 225 図 第 28 号住居跡出土遺物（1）

と1本隆帯の蛇行懸垂文が交互に垂下する。地文はR L単節縦位回転の縄文である。

復元最大径は約13.7cm、現存高は約8cmである。胎土は若干の砂とシルトを含む。器壁は外面灰橙色、内面黒灰褐色である。焼成は比較的良好い。

14は底部から胴部中段まで残存する。平行沈線の懸垂文と単沈線の蛇行懸垂文が交互に垂下する。地文はR L単節縦位回転の縄文である。

復元最大径は約9.6cm、現存高は約9.3cmである。胎土は若干の砂とシルトを含む。器壁は外面灰黄褐色、内面暗灰褐色である。焼成は良好い。

15は底部のみ残存する。平行沈線の懸垂文が垂下する。地文はR L単節縦位回転の縄文である。

復元最大径は約12.9cm、現存高は約4.9cmである。胎土は若干のシルトを含む。器壁は外面灰黄褐色、内面黒褐色である。焼成は良好い。

16は胴上半部から底部まで残存する。中段が緩やかに張る紡錘形で、底面は上げ底である。上方にごく細い沈線で円文らしきものを描く。地文はR L単節縦位回転の縄文である。

復元最大径は約10.2cm、現存高は約13.1cmである。胎土はシルト質である。器壁は外面灰橙色、内面灰褐色である。焼成は比較的良好い。

17～19は地文のみの胴部～底部である。

17は胴部中段にくびれを持ち、横位の撫でにより地文が磨り消されている。地文はR縦位回転の撚糸文である。

復元最大径は約14.3cm、現存高は約15.7cmである。胎土は砂質である。器壁は外面暗灰黄褐色、内面黒褐色である。焼成は良好い。

18・19は胴下半部から底部まで残存する。地文はいずれもR縦位回転の撚糸文である。

18は復元最大径約14.4cm、現存高は約13cmである。胎土はシルト質である。器面は灰黄褐色で、焼成はやや不良である。

19は復元最大径は約10.2cm、現存高は約7.6cmである。胎土は多量の砂と小礫を含む。器壁は外

面明黄褐色、内面灰黄褐色である。焼成は比較的良好い。

20は縦位の集合沈線文を地文とする胴部である。平行沈線による曲線的なモチーフを描く。復元最大径は約12.3cm、現存高は約8.1cmである。胎土はやや砂質である。器面は暗橙色～暗灰褐色である。焼成は良好い。

21・22は曾利系の深鉢である。内湾する無文の水平口縁を持つ。

21は頸部に2本の隆帯が巡り、胴部には平行沈線の懸垂文が垂下するものとみられる。地文はR縦位回転の撚糸文である。

復元最大径は約15.8cm、現存高は約8cmである。胎土は少量の砂を含む。器面は橙色で黒斑がみられる。焼成は良好である。

22は頸部に2条の隆帯が巡り、胴部にはR縦位回転の撚糸文を施文する。復元最大径は約15cm、現存高は約8.9cmである。胎土は白色の小礫・砂・シルトを含む。器面は暗灰黄褐色である。焼成は良好い。

23は口縁から頸部まで残存する。「く」の字に屈曲して垂直に立ち上がる無文口縁で、外面に1条の刻み隆帯が巡る。頸部にはR L単節横位回転の縄文を施文する。

復元最大径は約18cm、現存高は約5.2cmである。胎土はシルト質で、白色の砂粒を含む。器面は暗灰褐色である。焼成は良好い。

24～26は浅鉢である。

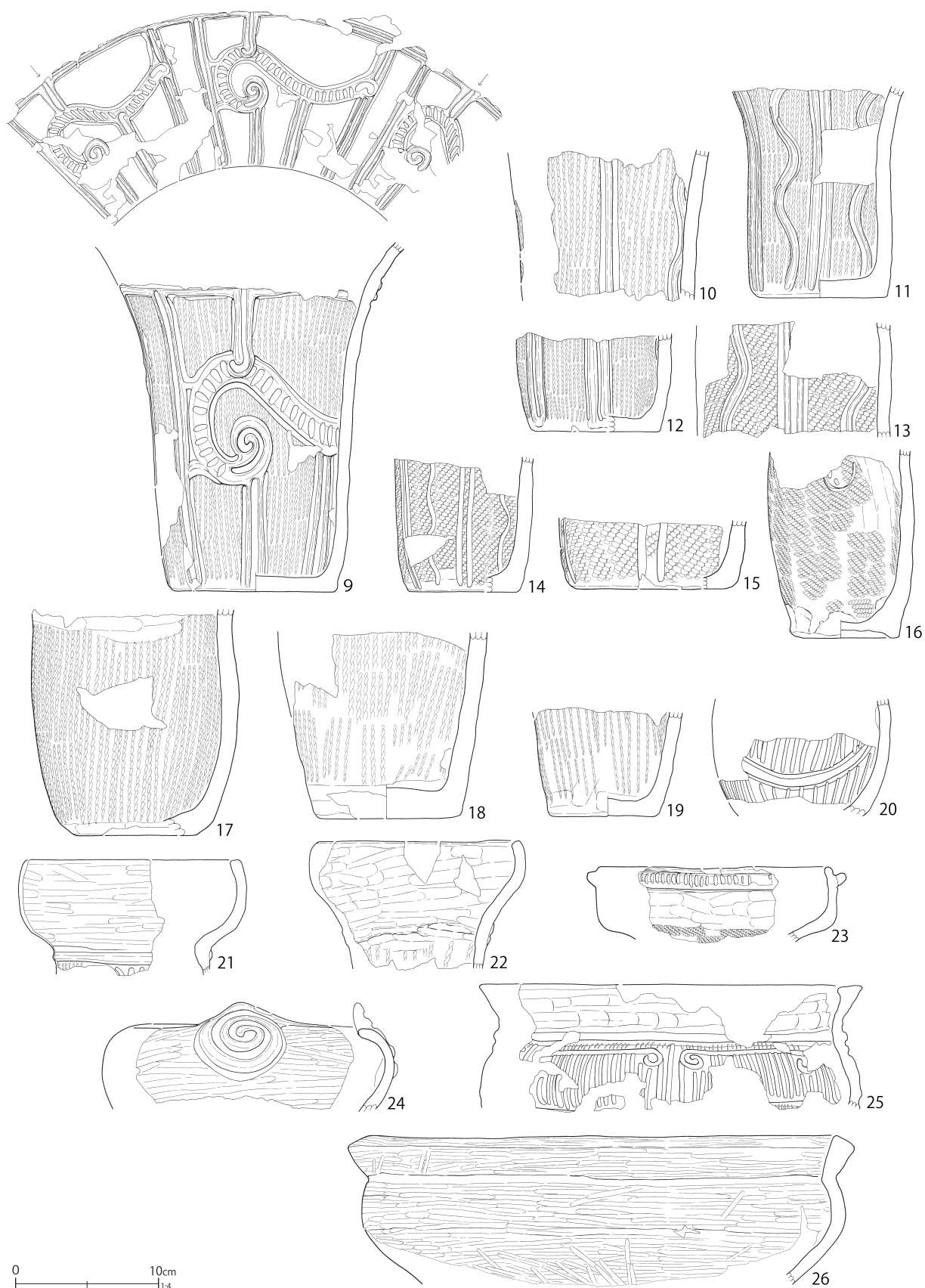
26は内湾する無文の口縁上に山形の突起を配し、直下に隆帯+凹線による渦巻文を配する。復元最大径は約20.5cm、現存高は約7.3cmである。胎土はやや砂質である。器面は灰褐色～灰橙色である。焼成は比較的良好い。

25は口縁から胴部中段まで残存する。胴上半部に文様帯を持つ。頸部にくびれを持ち、口縁部は無文で外反する。

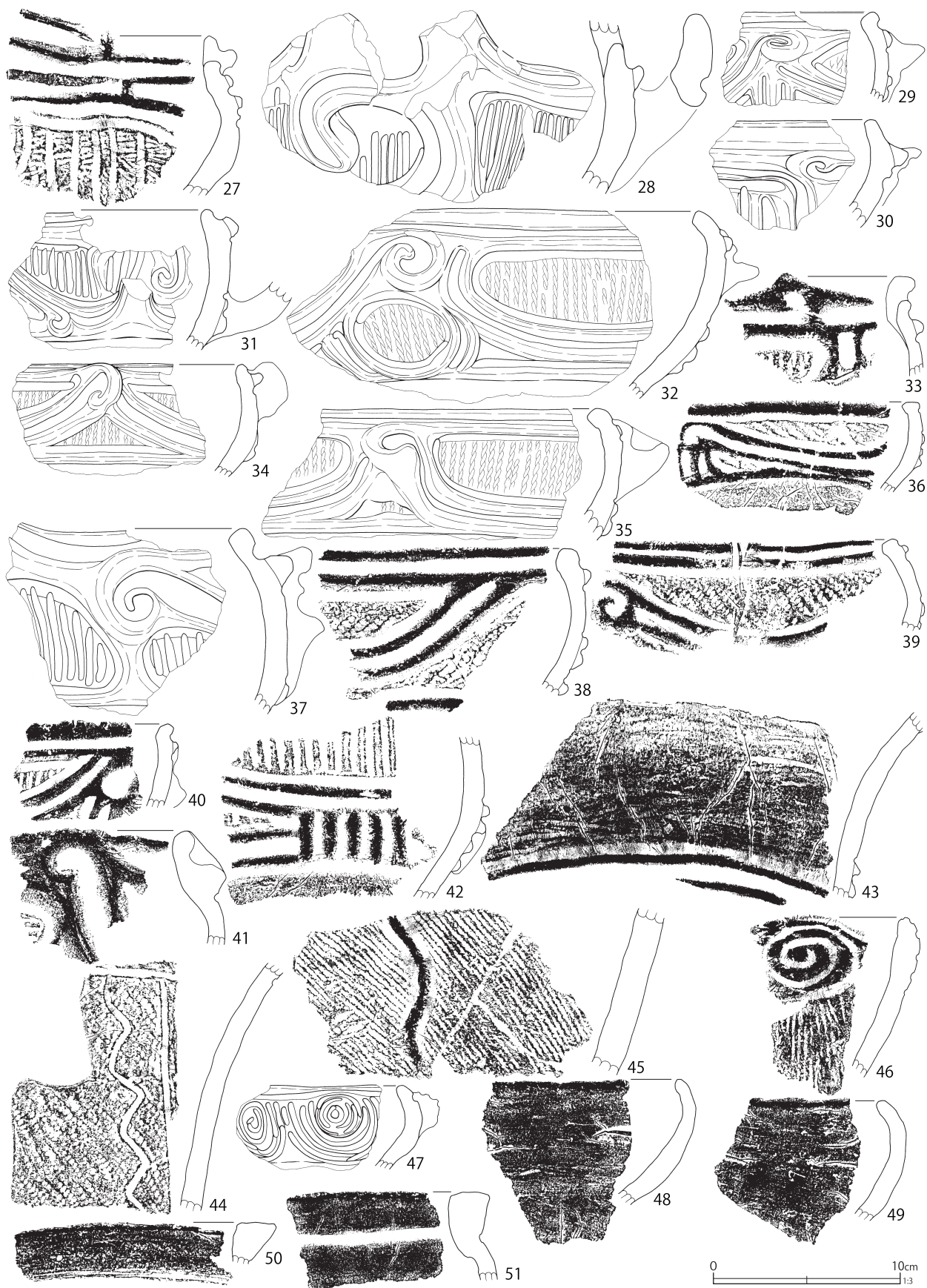
文様帯上下は刻みを持つ隆帯で区画し、内部を



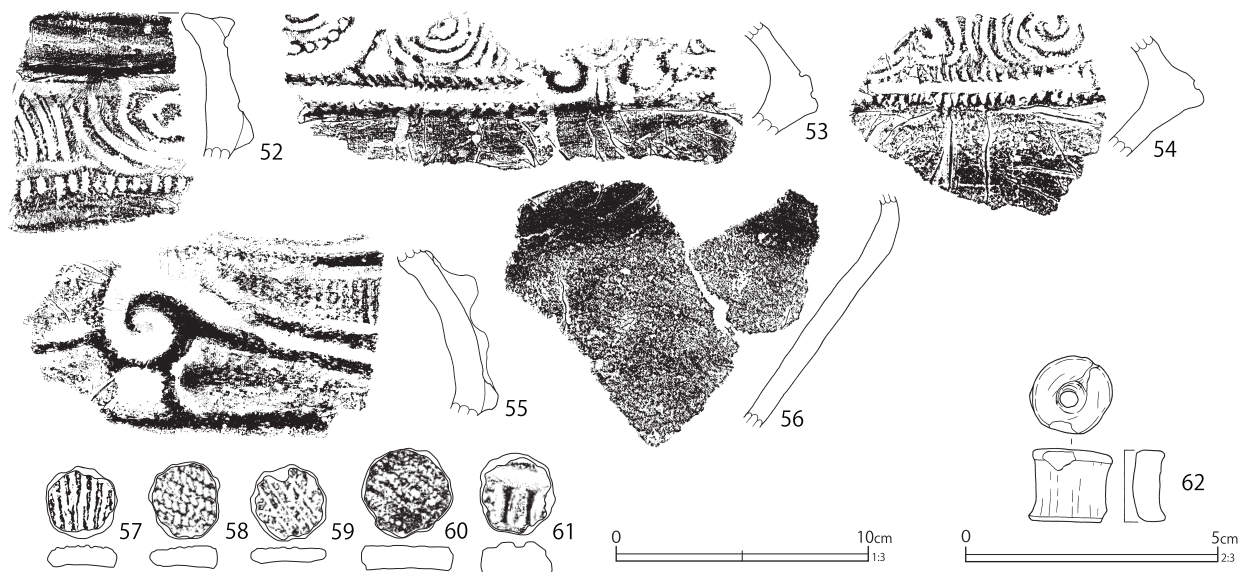
第 226 图 第 28 号住居跡出土遺物 (2)



第 227 图 第 28 号住居跡出土遺物 (3)



第 228 图 第 28 号住居跡出土遺物 (4)



第 229 図 第 28 号住居跡出土遺物（5）

縦位の沈線で分割して長方形の区画をつくりだす。区画の接点には対向する小渦巻文を配する。地文は縦位の集合沈線文である。

復元最大径は約26.6cm、現存高は約8.8cmである。胎土はやや砂質で、チャート・凝灰岩の垂角礫が目立つ。器壁は外面暗橙色、内面暗茶褐色である。焼成は良い。

26は無文の浅鉢で、口縁から胴下半部まで残存する。胴張りで、頸部にくびれを持ち、口縁は軽微に外反する。

復元最大径は約35.1cm、現存高は約10.4cmである。胎土は若干の砂とシルトを含み、黒雲母粒子が混じる。器面は黄橙色～暗橙色で、黒斑がみられる。焼成は良い。

27～56は破片資料である。27～41は加曾利E I式で、キャリパー類深鉢の口縁部である。

28は口縁部の渦巻文から連続する中空突起を持つ。27も同様の突起へと接続するものとみられる。31は横位の貫通孔を持つ橋梁状の突起であろう。

29・32・34～36・38～42等は2本隆帯による弧状モチーフの末端に小渦巻文の突起を配する初現的な繋ぎ弧文である。いずれも文様帯下端を隆帯で水平に閉塞している。29・36は渦巻文から下に

数条の隆帯が垂下する。32は渦巻文と下位の区画との間に円文を配置する。

42は同種の文様を持つ口縁部文様帯で、弧状文の波底部と下位の区画が数本の隆帯を介して癒着している。30は上下の区画をつなぐ縦位の隆帯の上面に小渦巻文を配する。37は区画文内部が複数の楕円形区画へと分割されている。

地文は29・34・35・40がR、32・33がLの撚糸文である。36・39はRL、38はLRの縄文である。28・30・31・37は縦位の集合沈線を地文とする。27はL横位回転の撚糸文上に縦位の集合沈線文を施文している。

43はキャリパー類深鉢の頸部無文帯で、胴部との境は2条の隆帯で区画している。

44・45は同種の深鉢の胴部とみられる。44は頸部との境を平行沈線で区画し、沈線による懸垂文と蛇行懸垂文が垂下する。45は1本隆帯の蛇行懸垂文である。いずれも地文はLR単節縦位回転の縄文である。

46は波状口縁の深鉢である。口縁直下は無文帯を持ち、波状口縁の波頂部に単沈線の渦巻文を配する。胴部にはR縦位回転の撚糸文を施文する。47は水平口縁の直下に1条の沈線が巡り、密な集合沈線による渦巻文が並ぶ。渦文の中央には1つ

置きに円錐形の突起を伴うものとみられる。

48・49は内湾する無文口縁で、曽利系の土器に伴うものとみられる。

50～56は浅鉢である。51は胴張りで頸部屈曲し、口縁が直立する。折り返し口縁で外面に段を持ち、口端上は平坦に整形している。

53・54は胴部中段が「く」の字に張り出し、胴上半部に文様帯を持って、密な沈線による渦巻文を描く。

53は文様帯下端を矢羽根状の刻みを伴う隆帯で区画し、文様帯内部も隆帯で曲線的に分割する等、勝坂式末の深鉢の特徴を残している。52はこれに短かく内屈する口縁部を付すもので、文様帯の幅も狭く、深鉢の可能性もある。

55はキャリパー類深鉢の口縁部文様を流用したもので、繋ぎ弧文を描き、R縦位回転の撚糸文を施文する。56は無文の胴部である。

57～61は土製円盤である。62は滑車形の耳飾りで、中央の貫通孔から外へと擦痕が生じている。

石器（第230図）

63～69は石鏃である。

63は凹基鏃である。基部はV字状に深く切れ込み、体部に比較して長大な返しを持つブーメラン型のプロポーションである。長さ2.2cm、幅2.1cm、厚さ0.4cm、重さ1.6gである。石材はチャートである。

64は凹基鏃である。体部は端正な二等辺三角形で、腹面に主要剥離面を残す。長さ2.1cm、幅1.3cm、厚さ0.4cm、重さ0.78gである。石材はチャートである。

65は凹基鏃で、先端折損する。長さ2cm、幅1.95cm、厚さ0.4cm、重さ1.02gである。石材はチャートである。

66は凹基で、体部中段から先端側を折損する。長さ1.75cm、幅1.7cm、厚さ0.4cm、重さ1.17gである。石材は黒曜石である。

67は平基ないし凹基である。全体に紡錘形で、

基部が僅かに切れ込む。長さ2cm、幅1.05cm、厚さ0.35cm、重さ0.63gである。石材は黒曜石である。

68は大型の凹基鏃で、左脚が折損する。長さ2.3cm、幅2cm、厚さ0.5cm、重さ2.02gである。石材は粘板岩である。

69はV字に切れ込む凹基で、先端部と左脚を折損する。長さ1.6cm、幅1.25cm、厚さ0.3cm、重さ0.62gである。石材はチャートである。

70は玉である。全体の2／3程度が残存する。長さ1cm、幅0.8cm、厚さ0.5cm、重さ0.45gである。石材は滑石である。

71・72は打製石斧である。

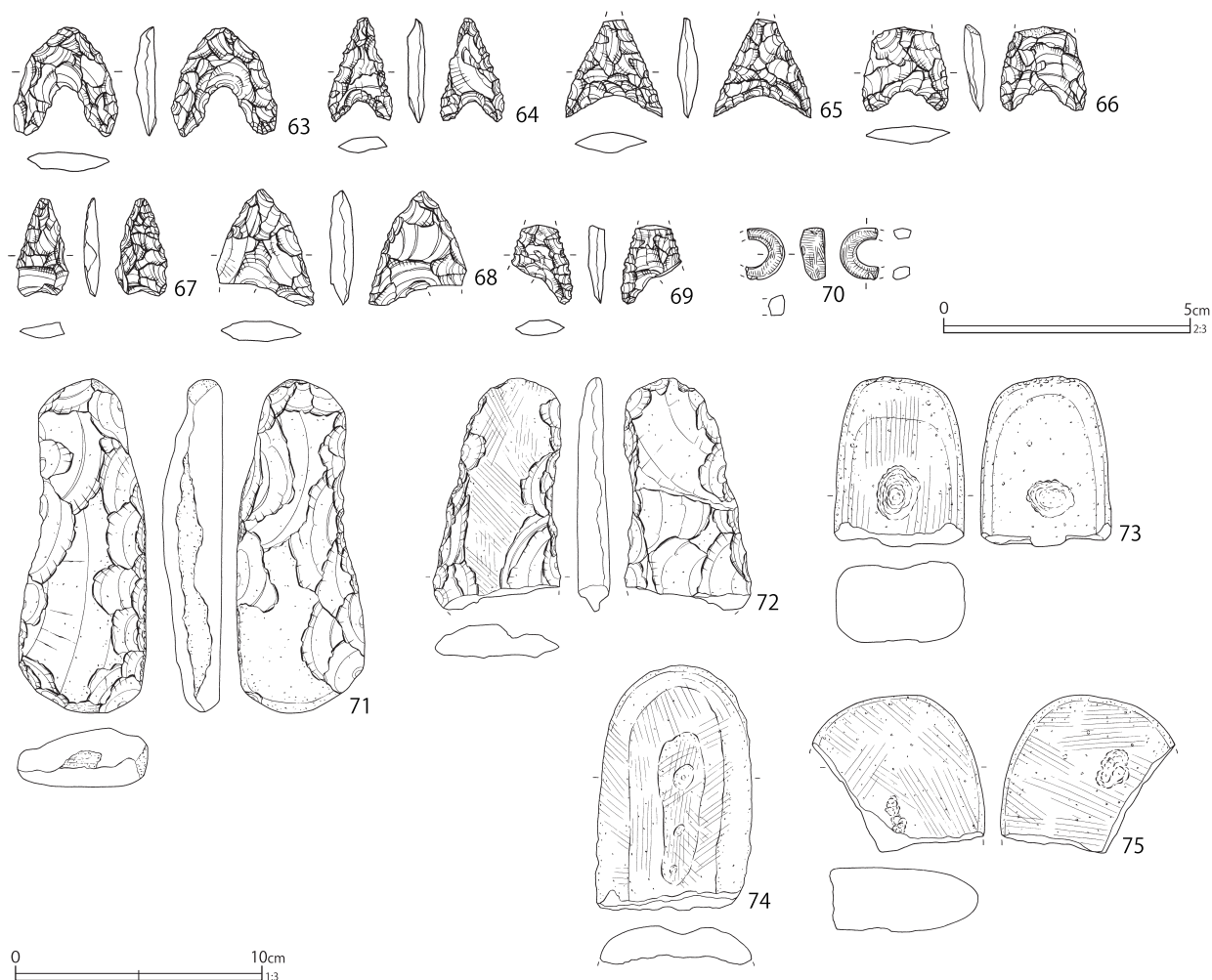
71はP14から出土した。短冊形の石斧で、全体に左へと湾曲する。刃部背面側に自然面を残す。長さ13.5cm、幅5.1cm、厚さ2.4cm、重さ210.89gである。石材は礫岩である。

72は短冊形で、刃部を折損する。背面に広く自然面を残すが、この面に著しい擦痕がみられ、磨石からの再加工の可能性がある。長さ9.3cm、幅5.1cm、厚さ1.3cm、重さ86.47gである。石材はシルト岩である。

73は磨石である。短軸方向に折損しており、全体の2／3程度が残存する。断面長方形で、4面使用される。凹石に転用されており、表裏各1か所の凹孔が残る。長さ6.9cm、幅5.2cm、厚さ3.3cm、重さ192.65gである。石材は閃緑岩である。

74は砥石である。背面が剥落しており、短軸方向にも折損している。周縁部が直線的に面取りされており、中央に凹溝が生じる。長さ10cm、幅6.3cm、厚さ1.6cm、重さ127.75gである。石材は粗粒の砂岩である。

75は磨石である。扁平な自然石の両面を使用する。凹石に転用されており、両面に凹孔を残す。長さ6.4cm、幅7cm、厚さ2.5cm、重さ143.46gである。石材は閃緑岩である。



第 230 図 第 28 号住居跡出土遺物（6）

第29号住居跡（第231～234図）

K・L-19・20グリッドに位置する。第28号土壌に壊されている。

長径5.07m、短径4.31mの隅丸方形の住居跡で、主軸方向はほぼ南北を指す。壁は緩やかに立ち上がり、壁高は最も深い部分で0.2mである。

床面は平坦で、中央がやや下がっている。壁溝は検出できなかった。

主軸線上やや奥壁寄りで炉跡を検出した。楕円形の地床炉で、主軸は住居跡本体とほぼ共通である。長径108cm、短径65cm、深さ12cmである。

炉跡の覆土下面からP9・10を検出した。覆土

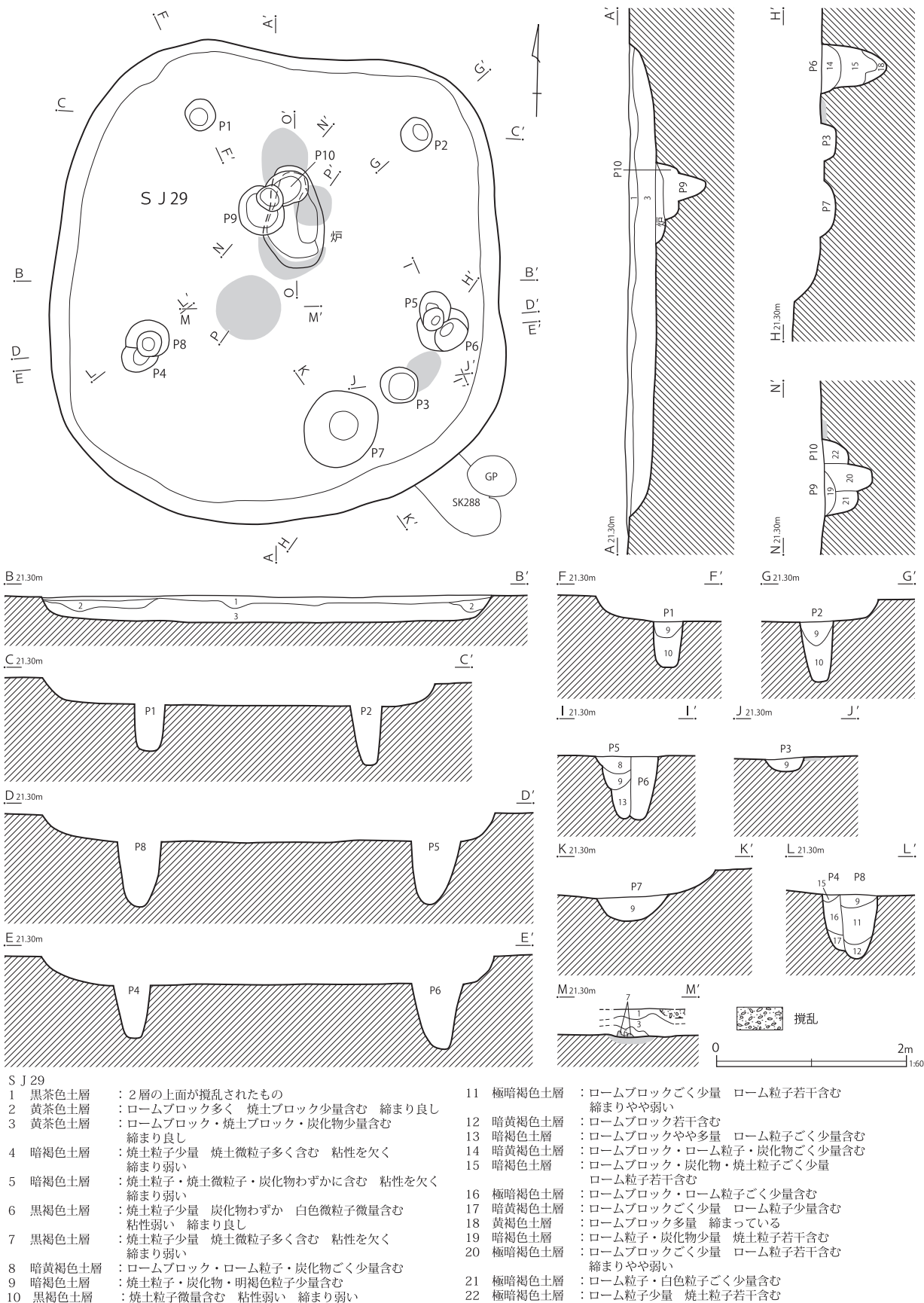
にほとんど焼土を含まないことから、炉の掘りかたの一部か、本住居跡より古い時期の遺構との切り合いの可能性が考えられる。

また、炉跡の南西側約25cmの位置にも直径70cmの円形の焼土跡が存在するほか、床面南東側のP3とP5・6の間にも焼土が検出された。いずれも掘り込みを伴わないが、古い時期の炉跡の痕跡である可能性もある。

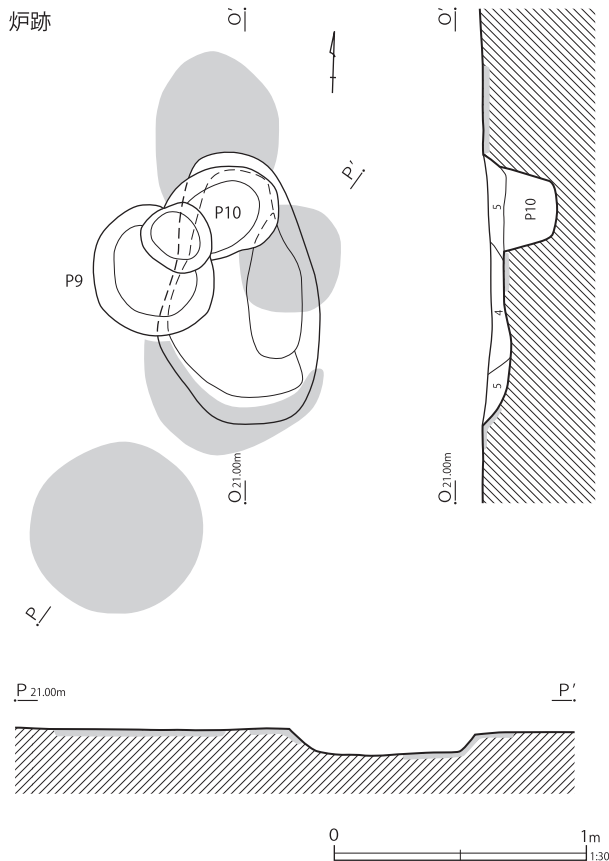
床面上からは、炉跡下面の2本を含め10本のピットが検出された。これらのうちP1・2・4～6・8が支柱穴で、4本柱の上屋を構成するものと考えられる。P4と8、P5と6はそれぞれ切

第 25 表 第 29 号住居跡柱穴計測表

ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)
P1	32.0	47.8	P2	36.0	63.4	P3	40.0	14.4	P4	36.0	55.7	P5	42.0	64.7
P6	54.0	66.5	P7	84.0	28.7	P8	44.0	68.8	P9	56.0	51.1	P10	44.0	26.7



第 231 図 第 29 号住居跡 (1)



第 232 図 第 29 号住居跡（2）

り合い関係にあり、ほぼ同位置での建て替えが行われた可能性がある。

南壁付近にごく浅いピット P 3・P 7 が位置している。出入り口施設の痕跡である可能性があるが、主軸線から東に大きくずれている。

覆土は上下 2 層からなり、遺物は両層の境界面付近を中心に出土している。所属時期は加曾利 E I 式期と考えられる。

第29号住居跡出土遺物

土器（第235図）

いずれも破片資料である。

2・3 は勝坂Ⅱ式である。いずれも円筒形の深鉢で、半裁竹管状工具の条線を地文とする。

2 は口縁部である。口唇外面に隆帯を巡らせ、口端上面は平坦に整形している。3 は胴部である。上面に半裁竹管状工具の刻みを伴う棒状の貼付文を中心に、同一工具の平行沈線文による鋸歯文を描く。

4～11 は加曾利 E 式キャリパー類深鉢の口縁部である。4 は横位の貫通孔を持つ橋梁状突起を持つ。口縁部の文様帯は長方形の区画文化し、縦位の集合沈線文を施文する。頸部には無文帯を持つ。

5・9 は 2 本隆帯の弧状モチーフがみられる。8 は弧状モチーフが上位の区画と接する部分で、渦巻文の一部とみられる。11 はほぼ横走する隆帯がみられ、クランク状のモチーフを描くものと考えられる。

12・15 は同種の口縁部文様帯である。15 は弧線文の波底部と下方の区画帯とが数本の隆帯で連結されている。13・14 は頸部の無文帯である。上下の文様帯との境は隆帯により水平に区画される。

16・17 は半裁竹管状工具の平行沈線文による懸垂文を描く。16 は大柄の渦巻文から懸垂文が派生する部分とみられる。17 は頸部との隆帯区画から懸垂文が垂下する。

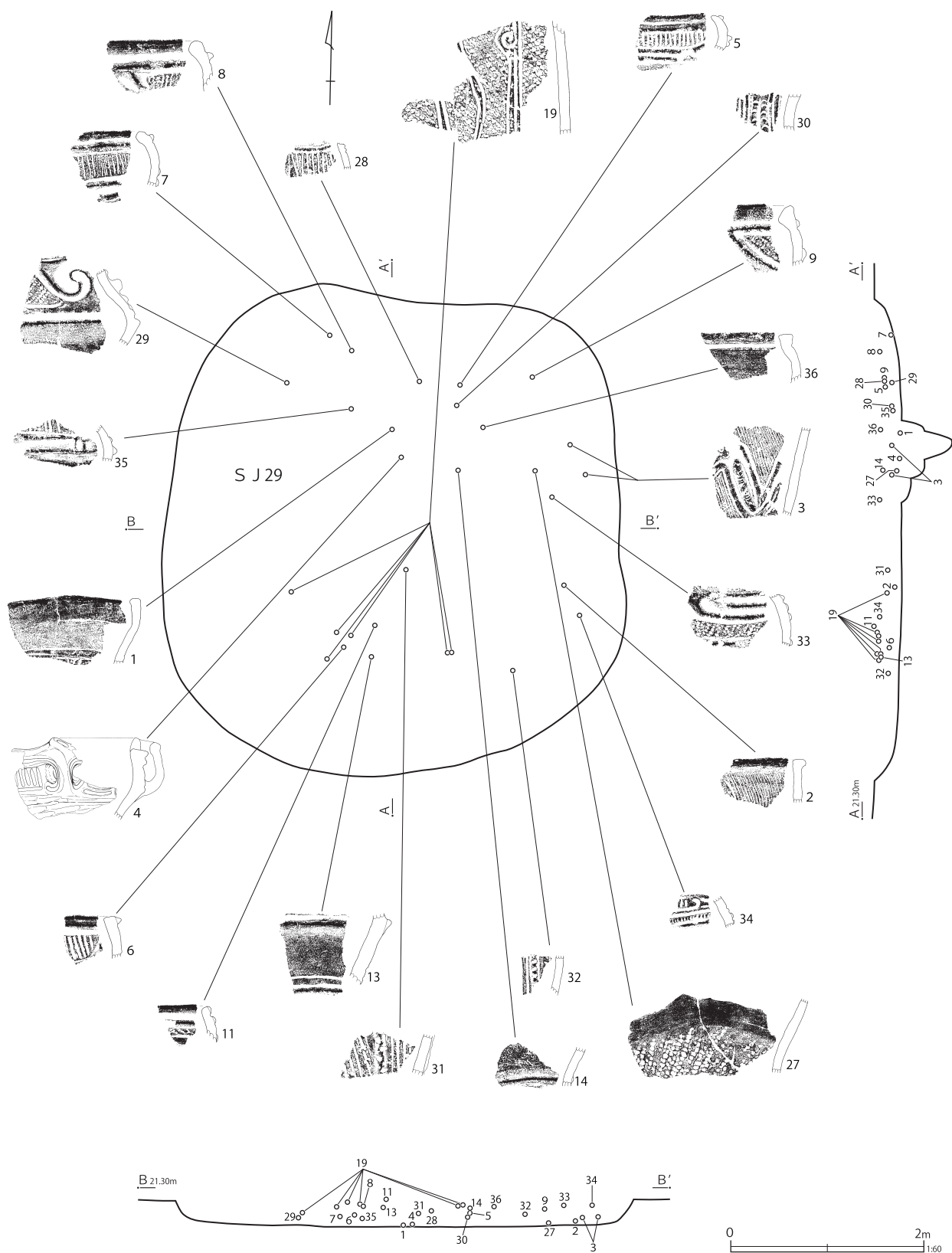
20・21・25・26 も半裁竹管状工具による懸垂文である。25 は波状懸垂文と併用している。19 は棒状工具の平行沈線で懸垂文を描く。3 本沈線の懸垂文と 2 本沈線の波状懸垂文を交互配置し、一部に小渦巻文を配する。地文は複節の縄文である。18・22～24 は隆帯の懸垂文である。

27 は頸部無文帯と胴部の縄文帯との境で、隆帯等による区画を持たない。

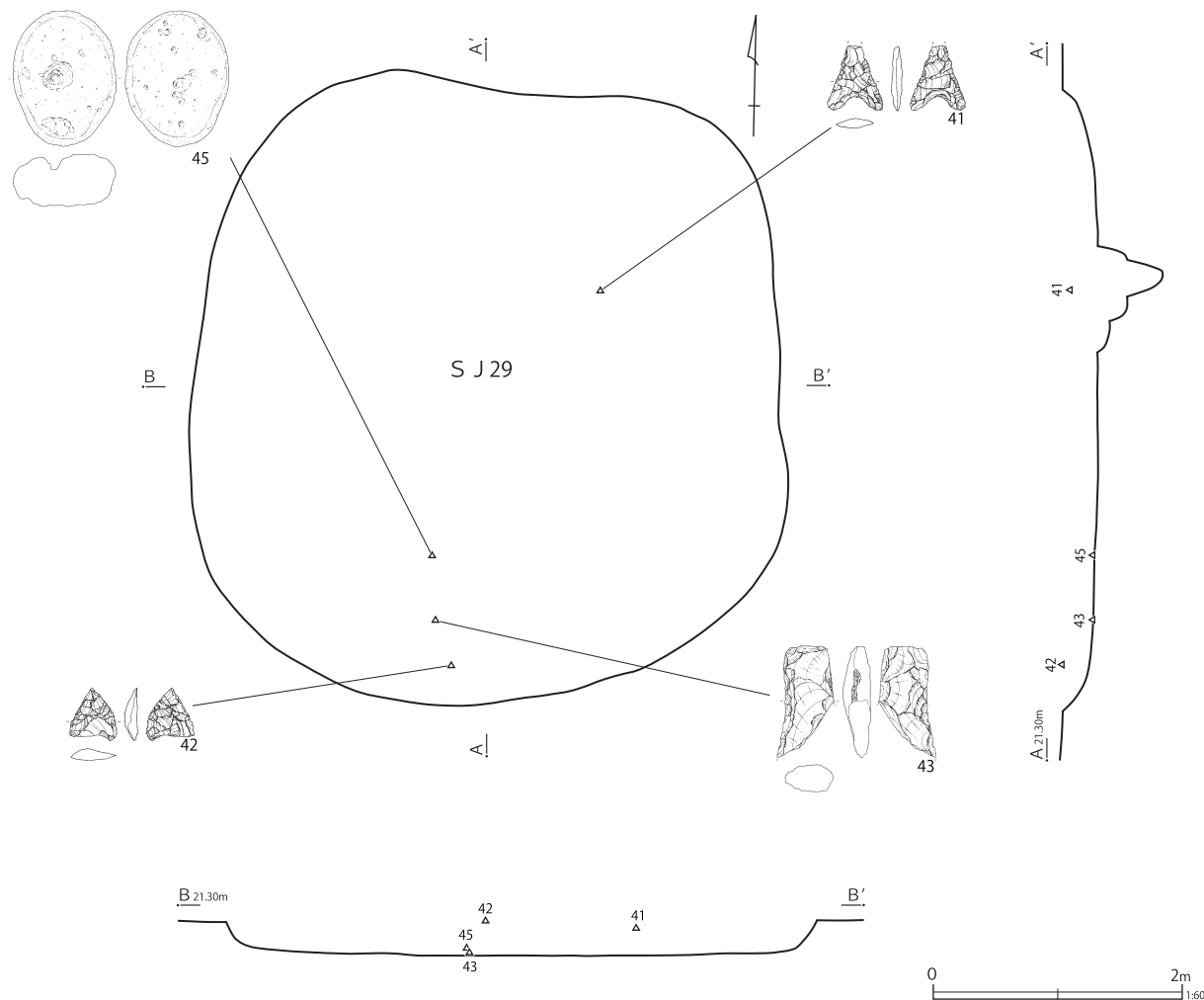
1・28～32 は曾利系の土器である。1 は内湾する無文の口縁部で、胴部との境を平行沈線で区画し、平行沈線の懸垂文を描く。胴部には縄文を施文する。28・30～32 は胴部で、半裁竹管状工具による縦位の集合沈線文を地文とし、刺突や刻みを伴う隆帯の懸垂文を描く。28 は横位の平行沈線による頸部の区画がみられる。

29・33～36 は浅鉢である。36 は無文、それ以外は胴上半部に文様帯を持つ。37～39 は無文の底部で、いずれも浅鉢と考えられる。

40 は土製円盤である。



第 233 图 第 29 号住居跡遺物出土状況 (1)



第234図 第29号住居跡遺物出土状況(2)

石器 (第236図)

41・42は石鏃である。

41は凹基で、先端部を折損する。両側縁は内向きに緩やかなカーブを描き、基部は深く切れ込む。長さ2.55cm、幅2.2cm、厚さ0.4cm、重さ1.78gである。石材はチャートである。

42は平基ないし凹基の鏃である。両側縁がやや張り出す正三角形で、右脚がわずかに突出する。背面基部側に主要剥離面を残す。

長さ2.05cm、幅1.9cm、厚さ0.5cm、重さ1.55gである。石材は黒曜石である。

43は撥形の打製石斧で、刃部を斜め方向に折損する。背面側の破断面に沿って数回の剥離が見られ、刃部を再生しようとした可能性がある。長さ8.9cm、幅4.6cm、厚さ2.2cm、重さ97.76gである。

石材はホルンフェルスである。

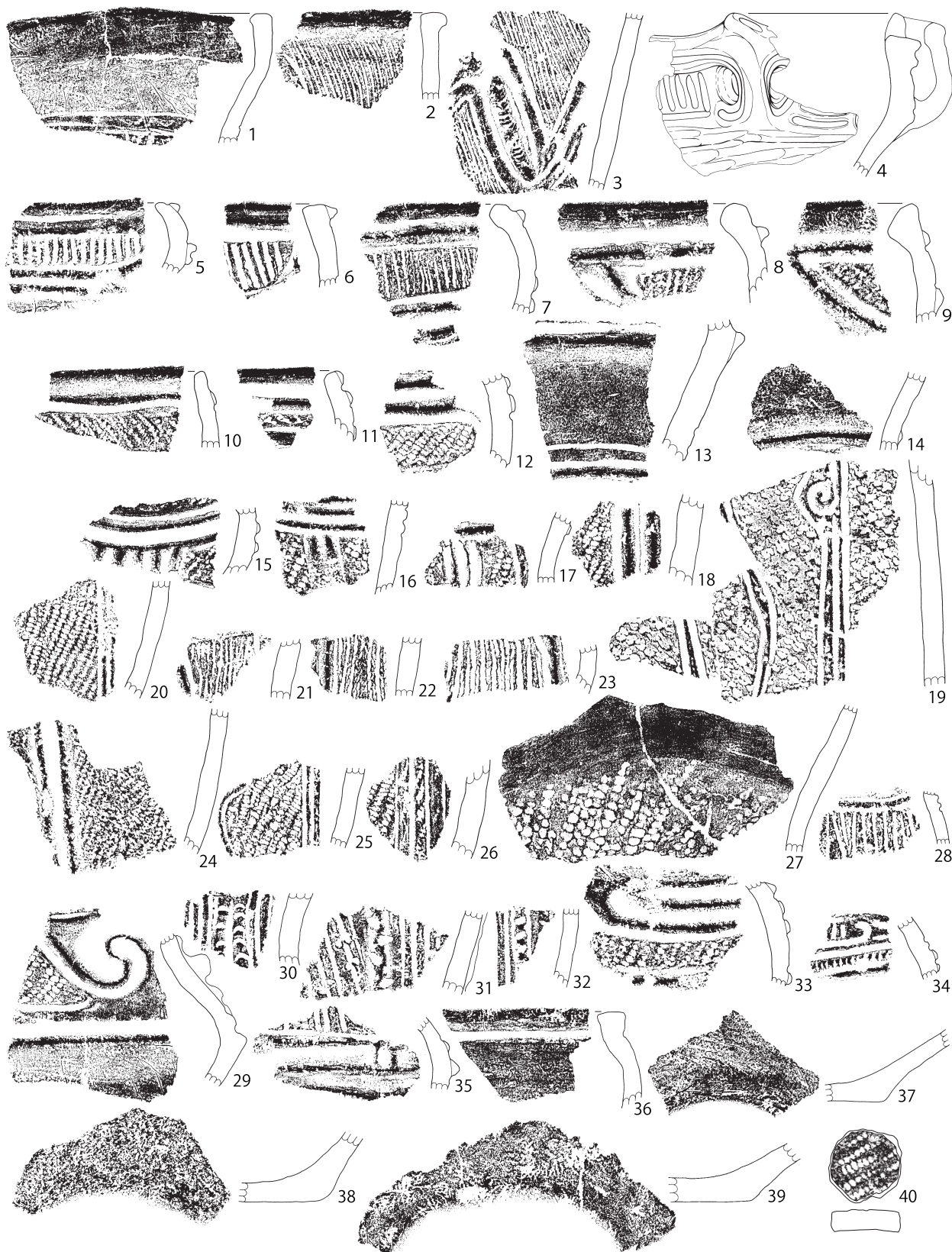
44は棒状の磨石で、P3から出土した。全体のプロポーションは紡錘形であり、断面定角型で4面使用される。

凹石に転用されており、表裏とも中央に1～2か所の凹孔が残る。また、長軸側一端が叩打により著しく損滅している。

長さ8.7cm、幅3.4cm、厚さ2.8cm、重さ128.58gである。石材は安山岩である。

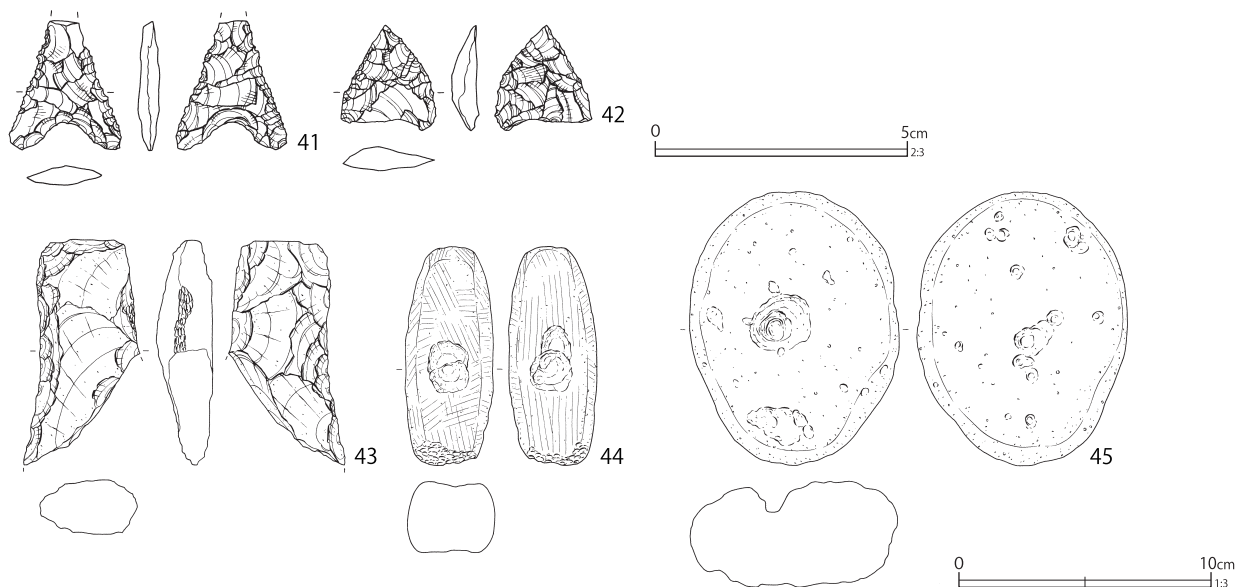
45は軽石製品である。楕円形の自然礫をそのまま使用したものと思われ、表面中央に1つの凹孔を持つ。裏面にも多数の凹孔がみられるが、石材自体多孔質であるため自然のものと紛らわしい。

長さ10.9cm、幅8.3cm、厚さ4.2cm、重さ138.47gである。石材は多孔質の軽石である。



0 10cm
1:3

第 235 图 第 29 号住居跡出土遺物 (1)



第 236 図 第 29 号住居跡出土遺物（2）

第31号住居跡（第237～241図）

L・M - 13・14グリッドに位置する。第26号住居跡に壊されており、第25・27号住居跡を壊している。

本住居跡からは2か所の炉跡が検出されており、柱穴や壁溝の配置等から、主軸方向を大きく変更した建て替えが行われたものと考えられる。

このうち、北西 - 南東方向に主軸を持つ古段階の住居跡を第31号（古）、主軸をほぼ90° 変更し、かつ床面積を南西へと大きく拡張した新段階の住居跡を第31号（新）と命名した。

第31号（古）住居跡

長径4.71m、短径は計測不能だが、約4mと考えられる。隅丸長方形の住居跡で、主軸方向はN - 32° - Wを指す。壁はほとんど残存しないが、壁高は最も深い部分で約0.3mとみられる。

床面は平坦で、中央付近がやや下がっている。主軸線上奥壁寄りで炉跡を検出した。楕円形の地床炉で、奥壁寄りに小ピット風の落ち込みが存在する。長径110cm、短径85cm、深さ25cmである。

第27号住居跡との切り合いにより南西壁をほとんど失っているが、壁溝はほぼ一巡するものとみ

られる。床面上から11本のピットが検出された。これらのうちP 1～5・10が主柱穴で、4本柱の上屋を構成するものと考えられる。また、P 4・5、P 2・10は切り合っており、建て替えが行われた可能性がある。

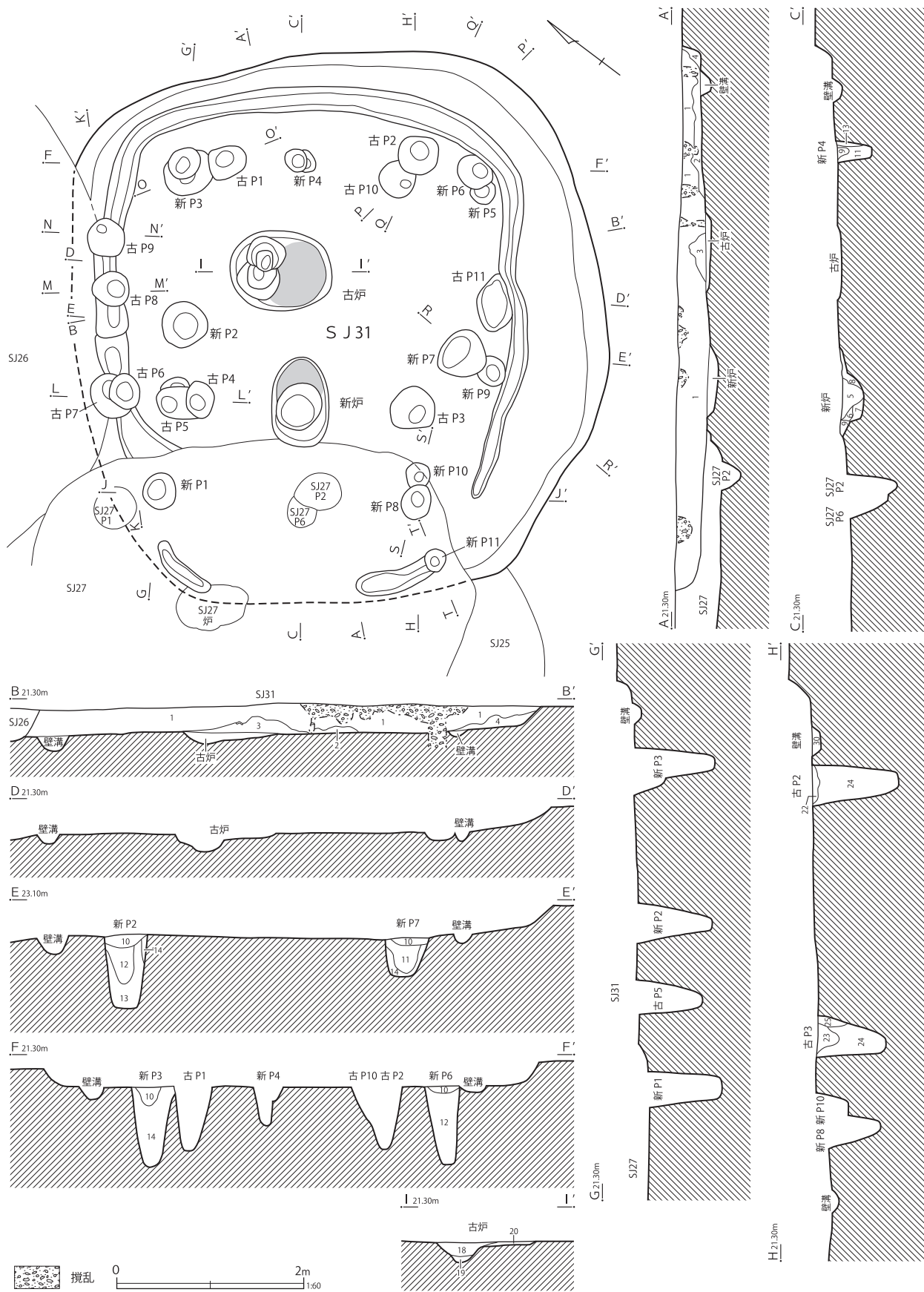
主軸線上南東側の壁溝に接して浅い落ち込みP 11が存在し、これが出入り口施設の痕跡と考えられる。

所属時期は加曾利E I 式以前と考えられる。

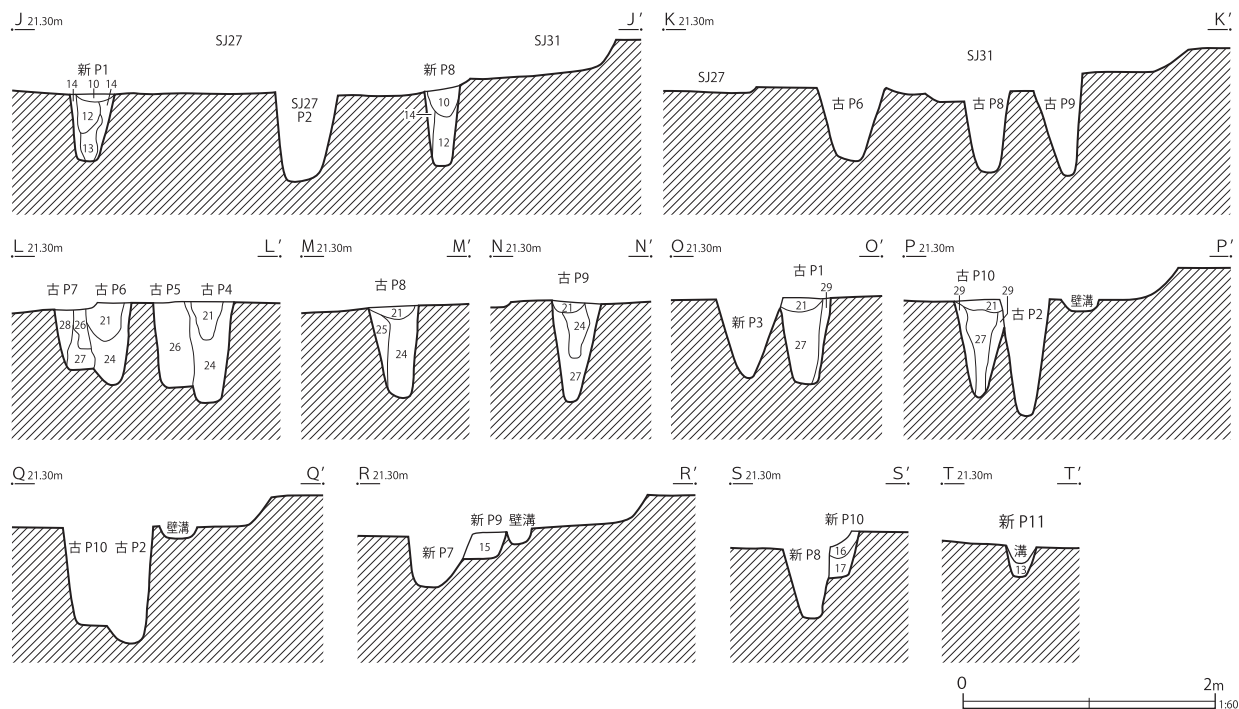
第31号（新）住居跡

北西壁を第26号住居跡、南西壁を第27号住居跡に壊されており、正確な規模は計測不能だが、長径約5.8m、短径約5.7mの隅丸長方形の住居跡と考えられる。主軸方向はN - 53° - Eを指す。壁は緩やかに立ち上がり、壁高は最も深い部分で0.25mである。床面は平坦で、南西方向に緩やかに傾斜する。第27号住居跡床面上で、本住居跡のものとみられる壁溝の一部を検出した。それぞれ西と南のコーナー部分と考えられ、その他の部分は第31号（古）住居跡の壁溝を再利用している可能性がある。

主軸線上やや南西寄りに炉跡を検出した。この炉跡が通常通り奥壁寄りに設けられたと考える



第 237 图 第 31 号住居跡 (1)



- S J 31
- 1 暗褐色土層 : ローム粒子・焼土粒子・炭化物若干含む
 - 2 暗褐色土層 : ロームブロック多く ローム粒子・炭化物若干含む
 - 3 暗褐色土層 : ロームブロック少量 焼土ブロック多く 炭化物若干含む
 - 4 暗黄褐色土層 : ロームブロック・ローム粒子多く 炭化物少量含む
- S J 31 新炉
- 5 暗褐色土層 : ロームブロック少量 焼土ブロック・炭化物若干含む
 - 6 暗褐色土層 : ロームブロック若干 ローム粒子少量 炭化物若干含む
 - 7 暗褐色土層 : ロームブロック少量 焼土ブロック微量 炭化物若干含む
 - 8 暗褐色土層 : ロームブロック若干 焼土ブロック多く 炭化物若干含む
 - 9 暗褐色土層 : ロームブロック・ローム粒子・炭化物若干含む
- S J 31 新Pit
- 10 極暗褐色土層 : ロームブロック若干 炭化物・焼土ブロック少量含む
 - 11 暗褐色土層 : ロームブロック多く含む
 - 12 暗褐色土層 : 粗粒ロームブロック微量 ロームブロック・ローム粒子・炭化物少量含む
 - 13 暗褐色土層 : ロームブロック少量 ローム粒子若干 炭化物少量含む
 - 14 暗褐色土層 : ロームブロック・ローム粒子若干 炭化物少量含む
 - 15 暗褐色土層 : ロームブロック少量 ローム粒子若干 焼土ブロック微量 炭化物少量含む
 - 16 暗褐色土層 : ロームブロック若干 ローム粒子少量含む
 - 17 暗褐色土層 : ロームブロック微量含む
- S J 31 古炉
- 18 暗褐色土層 : ロームブロック少量 焼土ブロック・炭化物若干含む
 - 19 暗褐色土層 : ロームブロック多く ローム粒子・炭化物若干含む 粘性を欠く
 - 20 暗褐色土層 : ロームブロック若干 焼土ブロック多く 炭化物若干含む
- S J 31 古Pit
- 21 極暗褐色土層 : ロームブロック若干 炭化物少量含む
 - 22 極暗褐色土層 : ロームブロック・ローム粒子若干 炭化物少量含む
 - 23 極暗褐色土層 : 粗粒ロームブロック少量 ロームブロック若干 炭化物少量含む
 - 24 暗褐色土層 : 粗粒ロームブロック少量 ロームブロック若干 炭化物少量含む
 - 25 暗黄褐色土層 : ロームブロック若干 ローム粒子多く含む
 - 26 極暗褐色土層 : ロームブロック・炭化物少量含む
 - 27 暗褐色土層 : 粗粒ロームブロック少量 ロームブロック若干 炭化物少量含む
 - 28 暗褐色土層 : 粗粒ロームブロック少量 ローム粒子若干 炭化物少量含む
 - 29 暗黄褐色土層 : ロームブロック若干 ローム粒子多く含む
 - 30 暗褐色土層 : 粗粒ロームブロック少量 ロームブロック若干含む 壁溝覆土

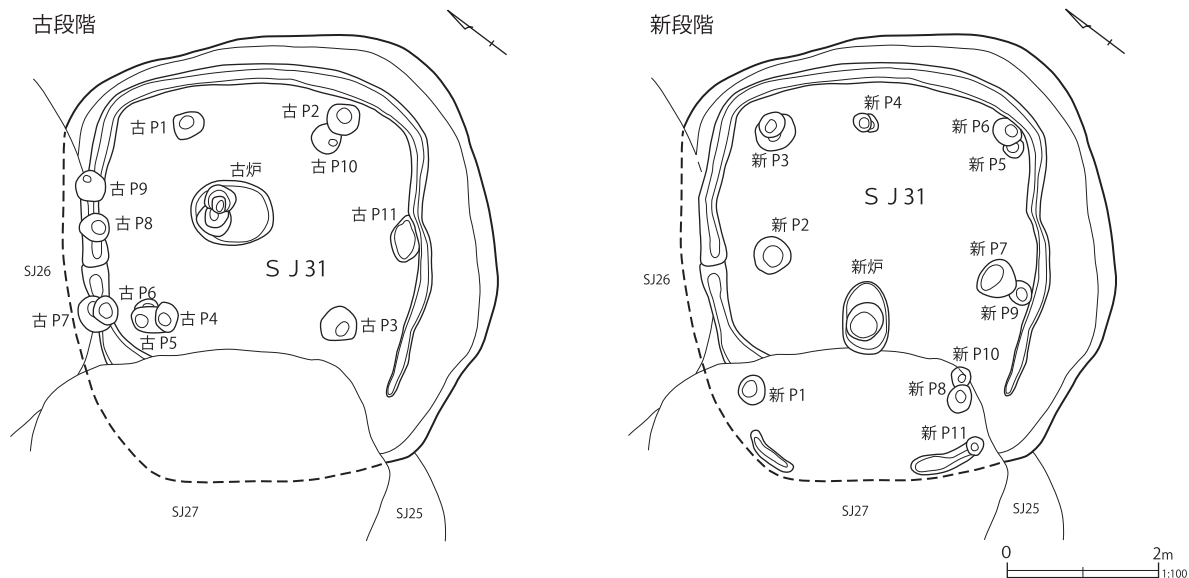
第 238 図 第 31 号住居跡（2）

第 26 表 第 31 号（新）住居跡柱穴計測表

ビットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ビットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ビットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ビットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ビットNo.	長径(cm)	深さ(cm)
P 1	38.0	54.0	P 2	48.0	77.8	P 3	52.0	85.3	P 4	36.0	40.3	P 5	26.0	10.5
P 6	36.0	84.0	P 7	52.0	43.0	P 8	38.0	64.5	P 9	32.0	20.7	P 10	26.0	35.7
P 11	24.0	29.5												

第 27 表 第 31 号（古）住居跡柱穴計測表

ビットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ビットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ビットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ビットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ビットNo.	長径(cm)	深さ(cm)
P 1	42.0	69.3	P 2	46.0	92.6	P 3	47.0	73.8	P 4	40.0	80.8	P 5	46.0	70.1
P 6	38.0	66.7	P 7	48.0	51.0	P 8	40.0	73.8	P 9	40.0	81.5	P 10	38.0	78.2
P 11	60.0	9.0												



第 239 図 第 31 号住居跡変遷図

と、出入口を北寄りに想定せざるを得ない。このため、本住居跡は例外的に出入口寄りに炉を持つものと考えた。また、非常に長軸（桁行き）の長い住居跡であるため、一時的に新旧の炉を併用していた可能性もある。

床面上から11本のピットが検出された。これらのうちP 1～10が支柱穴で、6本柱の上屋を構成するものと考えられる。P 4は棟持ち柱であろう。主軸の北東側を構成するP 5・6、P 7・9、P 8・10がそれぞれ切り合っていることから、建て替えが行われた可能性がある。

出入口施設らしきものは検出されなかった。覆土は床面直上の2・3層を別にすればほぼ単層で、遺物は床面中央部付近を中心に出土している。所属時期は加曽利E I式期と考えられる。

第31号住居跡出土遺物

土器（第242～245図）

1は加曽利E I式のキャリパー類深鉢で、ほぼ完形品である。3単位の波状口縁で、波頂部に渦巻文を配する。口縁部文様帯には片流れの渦巻文が巡り、1か所のみモチーフが左右反転する。

頸部には無文帯を持つ。胴部には2本隆帯の懸

垂文が垂下する。地文はRの撚糸文である。

復元最大径は約22.1cm、現存高は約25.1cmである。胎土はやや砂質で、凝灰岩等の小礫を含む。器壁は外面暗橙色、内面黒褐色である。焼成は良い。

2は円筒形の深鉢で、口縁から底部まで残存する。ほぼ垂直に立ち上がり、頸部でわずかに外反する。

水平口縁上に隆帯+沈線による幅狭の文様帯が巡り、4単位の小突起を配する。頸部無文帯を持たない。

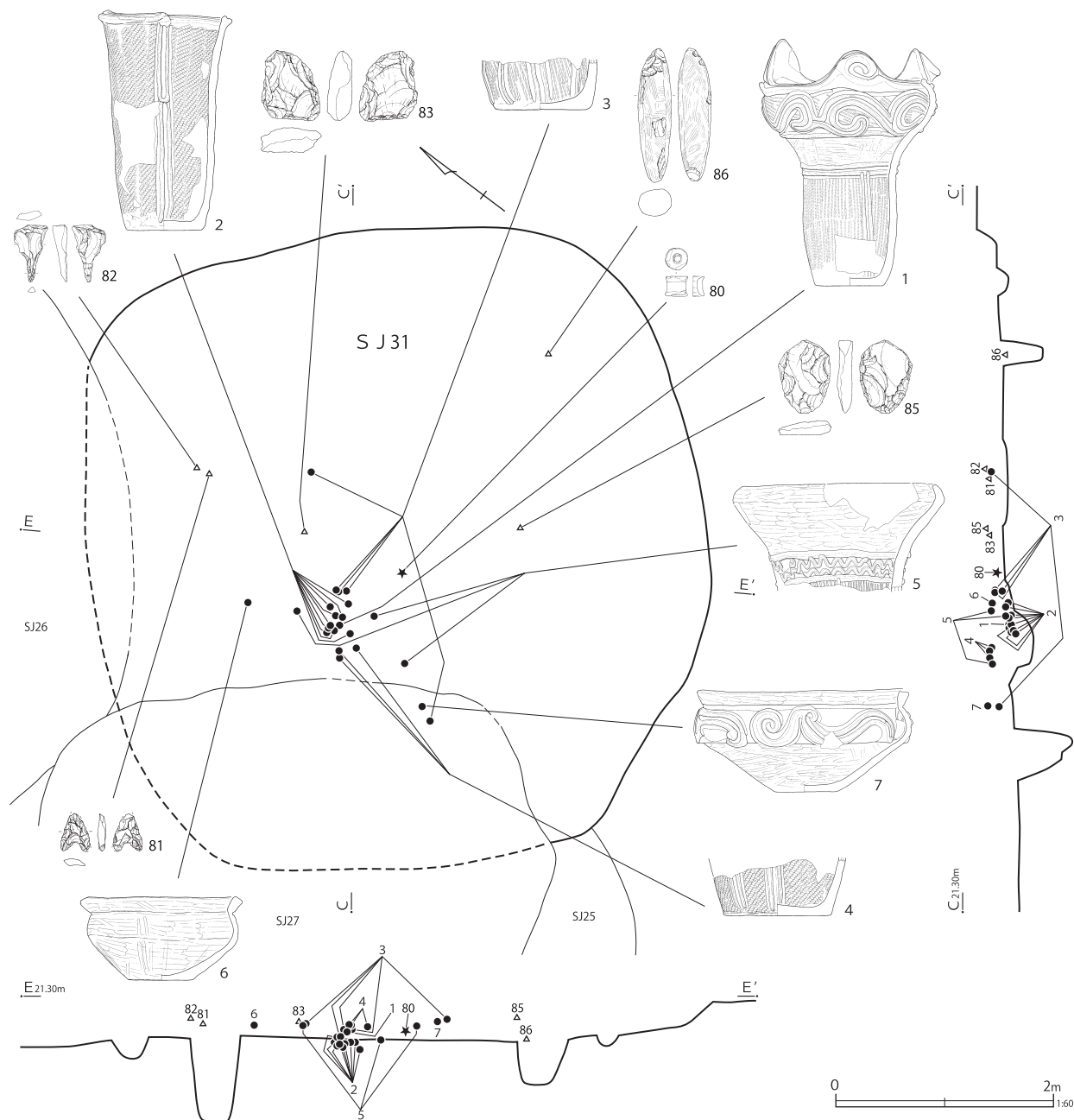
突起から胴部に2本隆帯の懸垂文が垂下し、胴部中段で隆帯がU字状にループする。地文はRL単節縦位回転の縄文である。

復元最大径は約16.2cm、現存高は約26.8cmである。胎土は多量の砂とシルトを含む。器面は暗灰褐色である。焼成はやや不良である。

3・4は同類の深鉢底部である。

3は2本隆帯の懸垂文と1本隆帯の蛇行懸垂文が交互に描かれる。地文はRの撚糸文で、縦位回転で施文される。

復元最大径は約13.8cm、現存高は約6.2cmであ



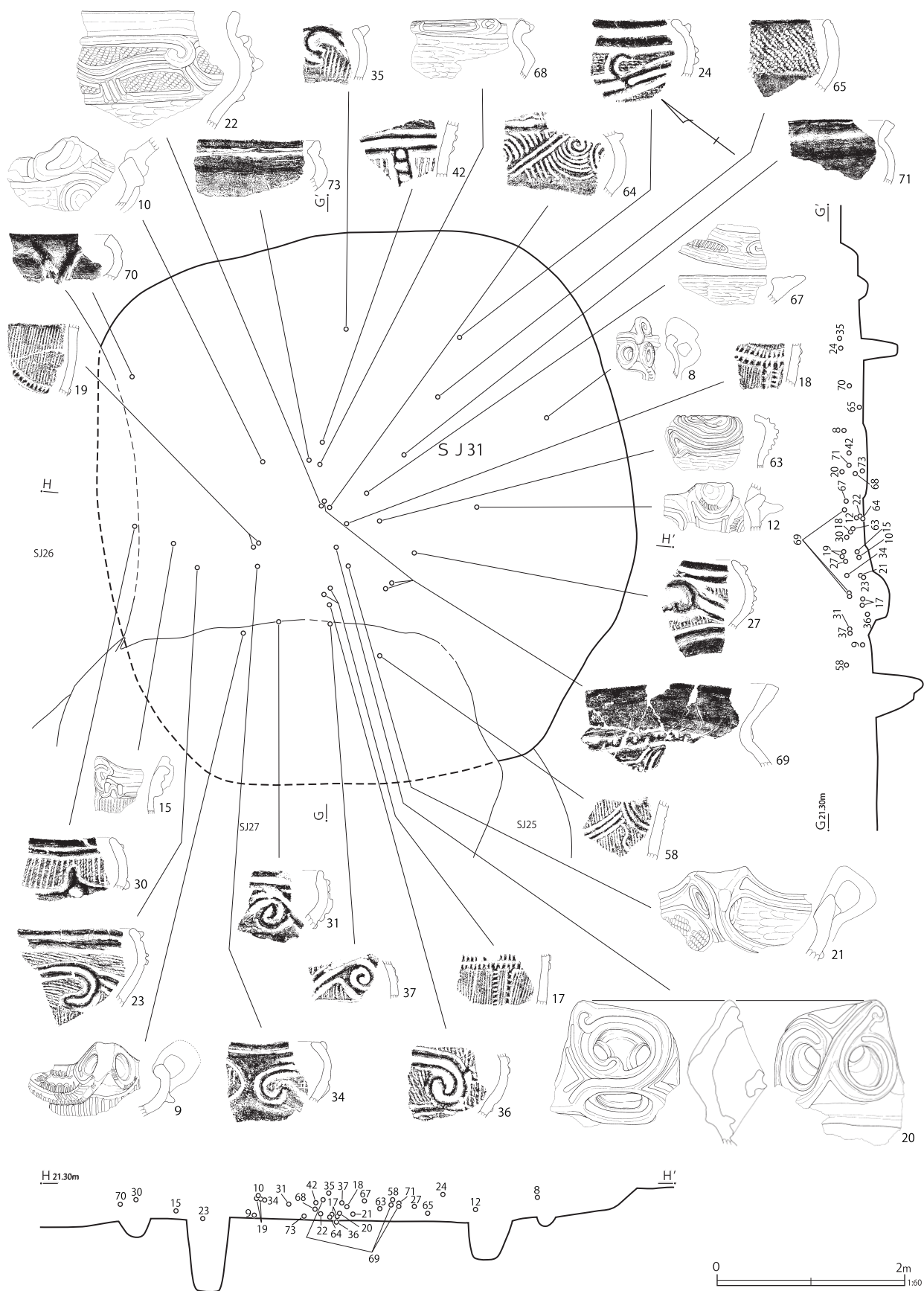
る。胎土は砂質である。器壁は外面黄橙色、内面灰黄褐色である。焼成は比較的良い。

4は2本隆帯の懸垂文である。地文はR L単節縦位回転の縄文である。復元最大径は約16.4cm、現存高は約7.1cmである。胎土は砂質である。器壁は外面黄橙色、内面灰黄褐色で黒斑がみられる。焼成は比較的良い。

5は曽利系の深鉢で、口縁から胴部中段まで残

存する。頸部から口縁にかけて直線的に開き、口唇直下で内屈する。頸部には2段の小波状浮線文が巡り、上下を隆帯で区画する。胴部には縦位の集合沈線文を描く。

復元最大径は約25.8cm、現存高は約13cmである。胎土は砂質である。器壁は外面暗茶褐色、内面暗灰黄褐色～黒褐色である。焼成は比較的良好である。



6は無文の浅鉢で、完形品である。胴張りで、頸部屈曲し、口縁は外屈する。折り返し口縁で外面に段を持ち、口端上は平坦に整形される。

復元最大径は約19.6cm、現存高は約10.1cmである。胎土は多量の粗砂を含む。器面は暗橙色で黒斑がみられる。焼成は良い。

7は浅鉢で、口縁から底部まで残存する。器形は6に似るが、やや扁平である。胴部中段に隆帯による段を持ち、ここから胴上半部にかけて文様帯を配する。

主文様は扁平な隆帯によって描かれ、渦巻文と横S字文が一単位となって連続し、随所にモチーフの崩れが生じるものとみられる。

復元最大径は約26.7cm、現存高は約12.5cmである。胎土はやや砂質である。器壁は外面黄橙色で黒斑がみられ、内面橙色で黒斑がみられる。焼成は良い。

8～77は破片資料である。

8は勝坂Ⅰ式、9は勝坂Ⅱ式と考えられる。

10～14は勝坂Ⅲ式である。10・11は折り返し口縁上に突起を配する。12は口縁下に楕円形の区画文を配する。13は球胴状に張る胴上半部、14は円筒形の深鉢とみられ、矢羽根状の刻みを持つ隆帯が文様帯を縦に分割する。

15は中峠系の深鉢口縁部で、口縁直下に圧縮された文様帯を持ち、波状口縁の波頂部に小渦巻文と捻り棒状の貼付文を配する。

16～19は曾利Ⅰ式系の深鉢胴部である。地文条線上に刻み隆帯により縦横の区画や弧状文・渦巻文を描くものと思われる。19は隆帯の交点に小渦巻文の突起を配する。

20～33は加曾利EⅠ式のキャリパー類深鉢である。20は口縁上に立ち上がる中空突起で、4方向に開いた貫通孔に沿って末端小渦巻状の凹線が巡る。

23・24・26・31・35・36は横S字文のバリエーションである。27～29は繋ぎ弧文的な文様であろ

う。34は隆帯間の地文部が楕円形の区画文化しており、時期が下る可能性がある。

42～56は隆帯や平行沈線の区画帯や懸垂文を描く深鉢胴部である。42は階梯状のモチーフが用いられる。48・57は浅鉢胴上半部の文様帯とみられる。58は時期の下る連弧文土器である。

59～62は深鉢底部である。62は沈線、それ以外は隆帯による懸垂文である。

63は浮線+沈線により密な渦巻文を描く深鉢口縁部で、頸部に無文帯を持つ。64は集合沈線の密な渦巻文を描く土器で、浅鉢の可能性もある。65は口縁部に縄文帯、頸部に無文帯を持つ。

67～77は浅鉢である。67・68は口端上、69は胴上半部に文様帯を持つ。70は内湾する口縁外面に扁平な隆帯による文様を描く。

78・79は土製円盤で、78は前期諸磯式の破片を再利用する。80は滑車型の耳飾りである。

石器（第245図）

81は石鏃である。V字に切れ込む凹基で、先端部折損する。腹面に主要剥離面を残す。長さ1.7cm、幅1.35cm、厚さ0.4cm、重さ0.77gである。石材はチャートである。

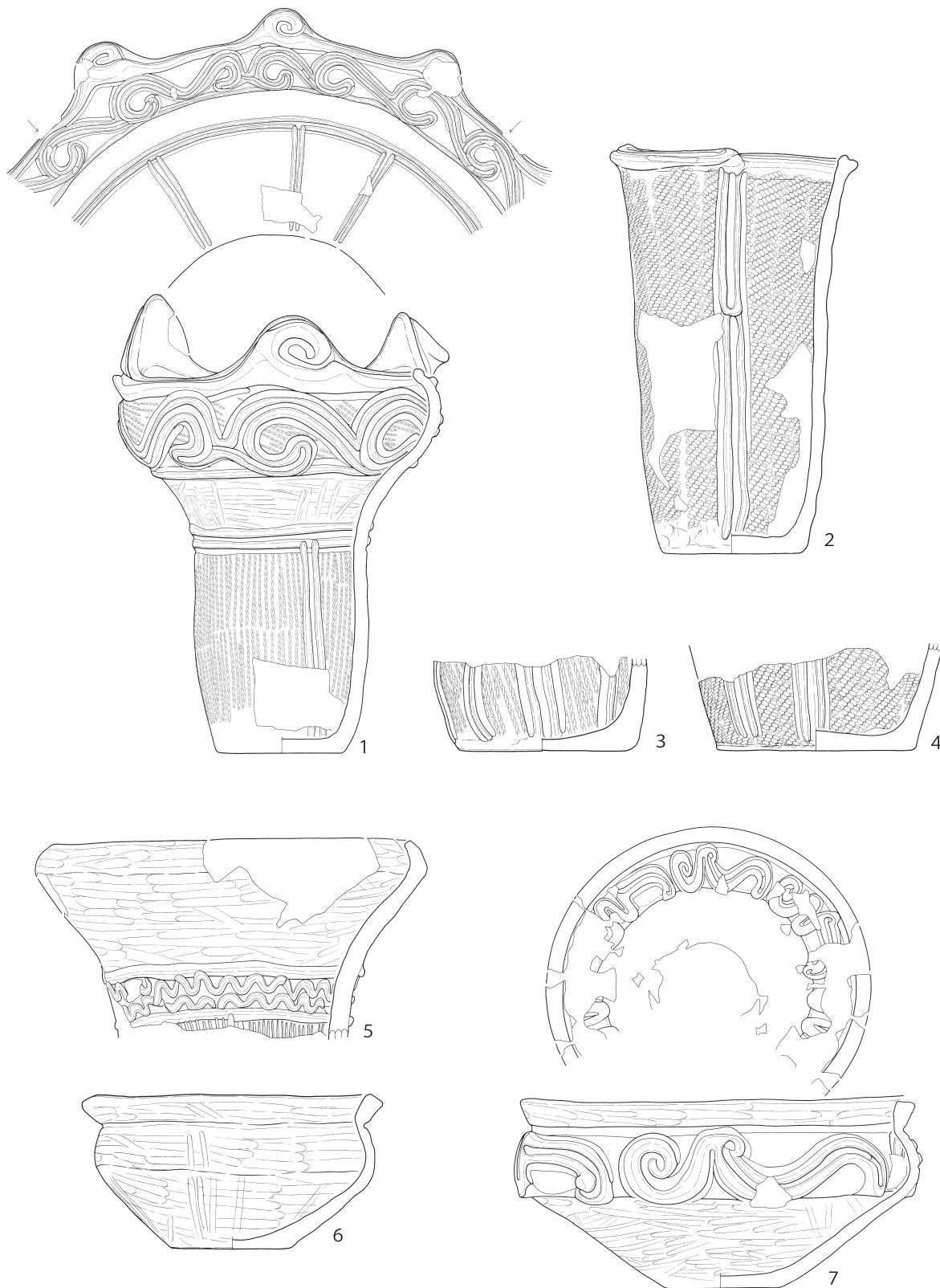
82は石錐で、完形品である。逆三角形の頭部と、断面三角形の比較的長い錐部を持つ。長さ3.9cm、幅2.3cm、厚さ1cm、重さ5.52gである。石材はチャートである。

83・84は打製石斧である。

83は長軸と短軸の差が少ない寸詰まりの石斧で、基部を折損したものの再生品と考えられる。長さ6.4cm、幅5.3cm、厚さ2.2cm、重さ86.39gである。石材は安山岩である。

84は短冊形で、胴部中段を短軸方向に折損する。背面に広く自然面を残し、腹面に打割面を残す。長さ7.4cm、幅4.4cm、厚さ2.3cm、重さ103.45gである。石材はホルンフェルスである。

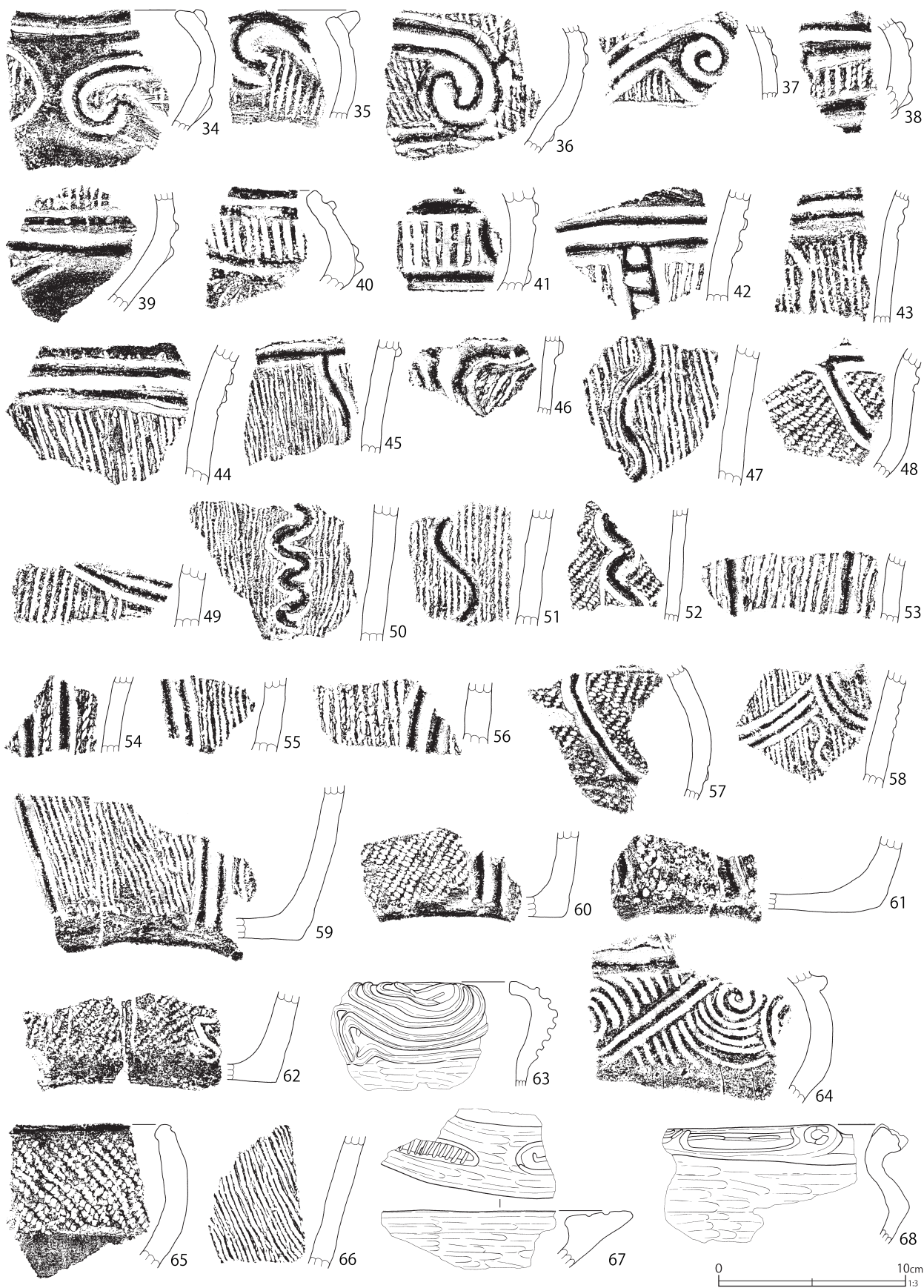
85は比較的大型のスクレイパーである。倒卵形のプロポーションで、横長の剥片を素材とし、長



第 242 図 第 31 号住居跡出土遺物 (1)



第 243 图 第 31 号住居跡出土遺物 (2)

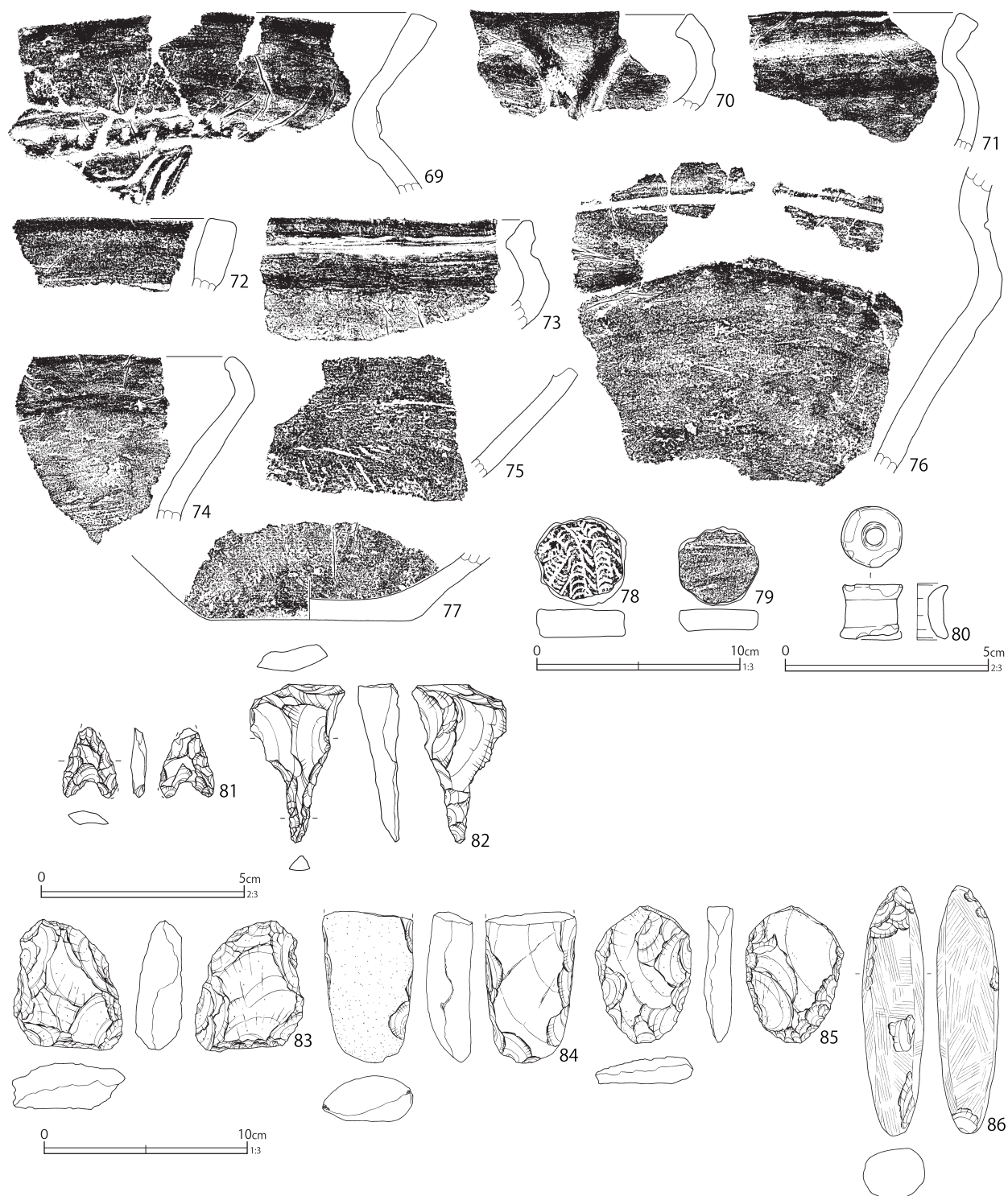


第 244 图 第 31 号住居跡出土遺物 (3)

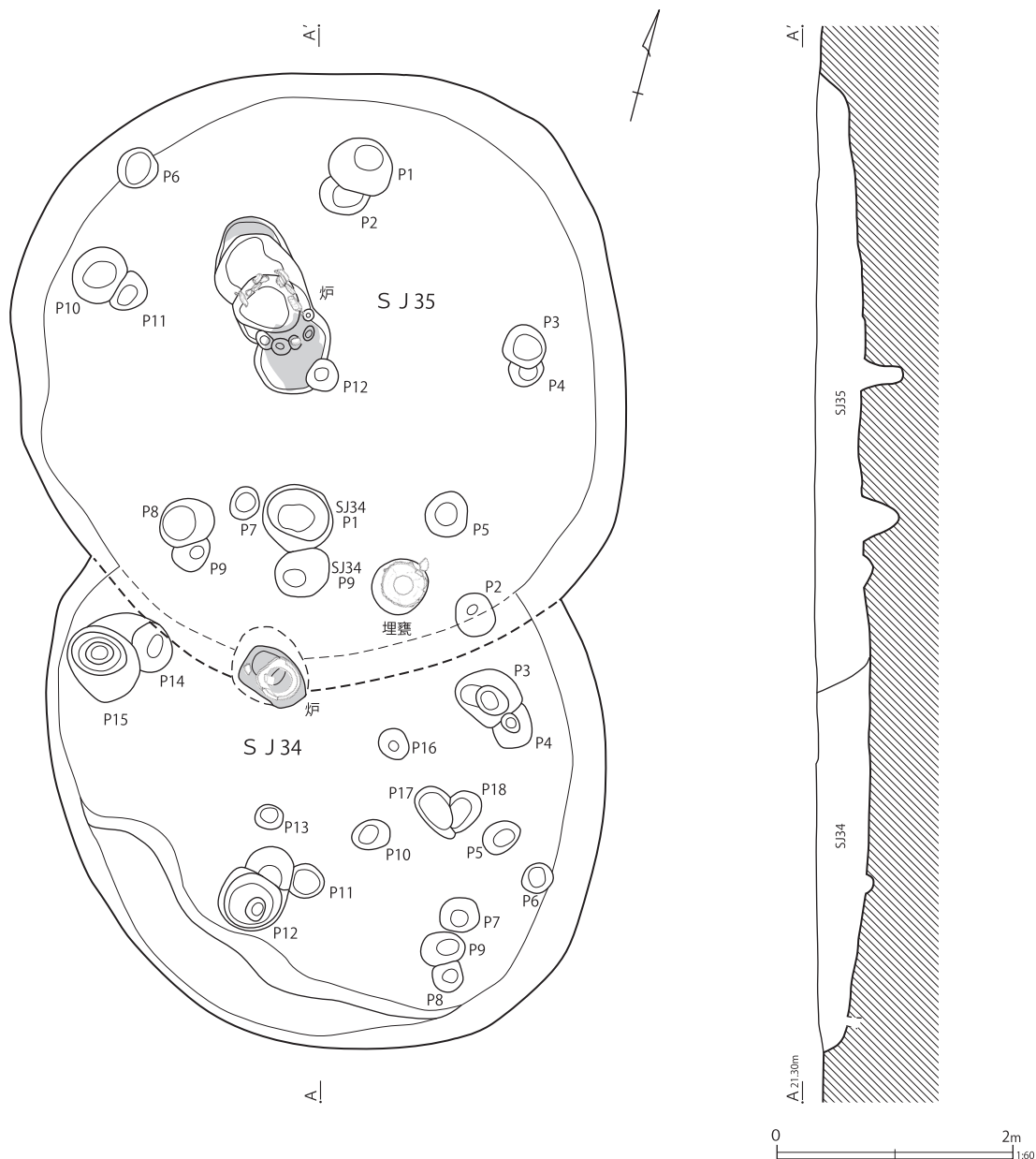
軸一端と両側縁に表裏からの調整剥離を施す。長さ6.7cm、幅4.7cm、厚さ1.3cm、重さ48.59gである。石材は黒色頁岩である。

86は棒状の磨石である。紡錘形のプロポーションを持ち、断面は定角型で、4面使用される。長

軸側の一端に剥離が集中するほか、側縁にも剥離がみられることから、叩き石としても使用されたものと考えられる。長さ12.2cm、幅3cm、厚さ2.5cm、重さ146.64gである。石材は砂岩である。



第 245 図 第 31 号住居跡出土遺物（4）



第 246 図 第 34・35 号住居跡概念図

第34号住居跡（第246～252図）

M - 12・13グリッドに位置する。第35号住居跡に壊されている。長径約5.2m、短径4.6mの楕円形の住居跡で、主軸方向はN - 51° - Wを指す。壁は緩やかに立ち上がり、壁高は最も深い部分で0.3mである。床面は中央がすり鉢状に低くなっており、南壁の一部にテラス状の高まりを持っていた。壁溝は検出されなかった。

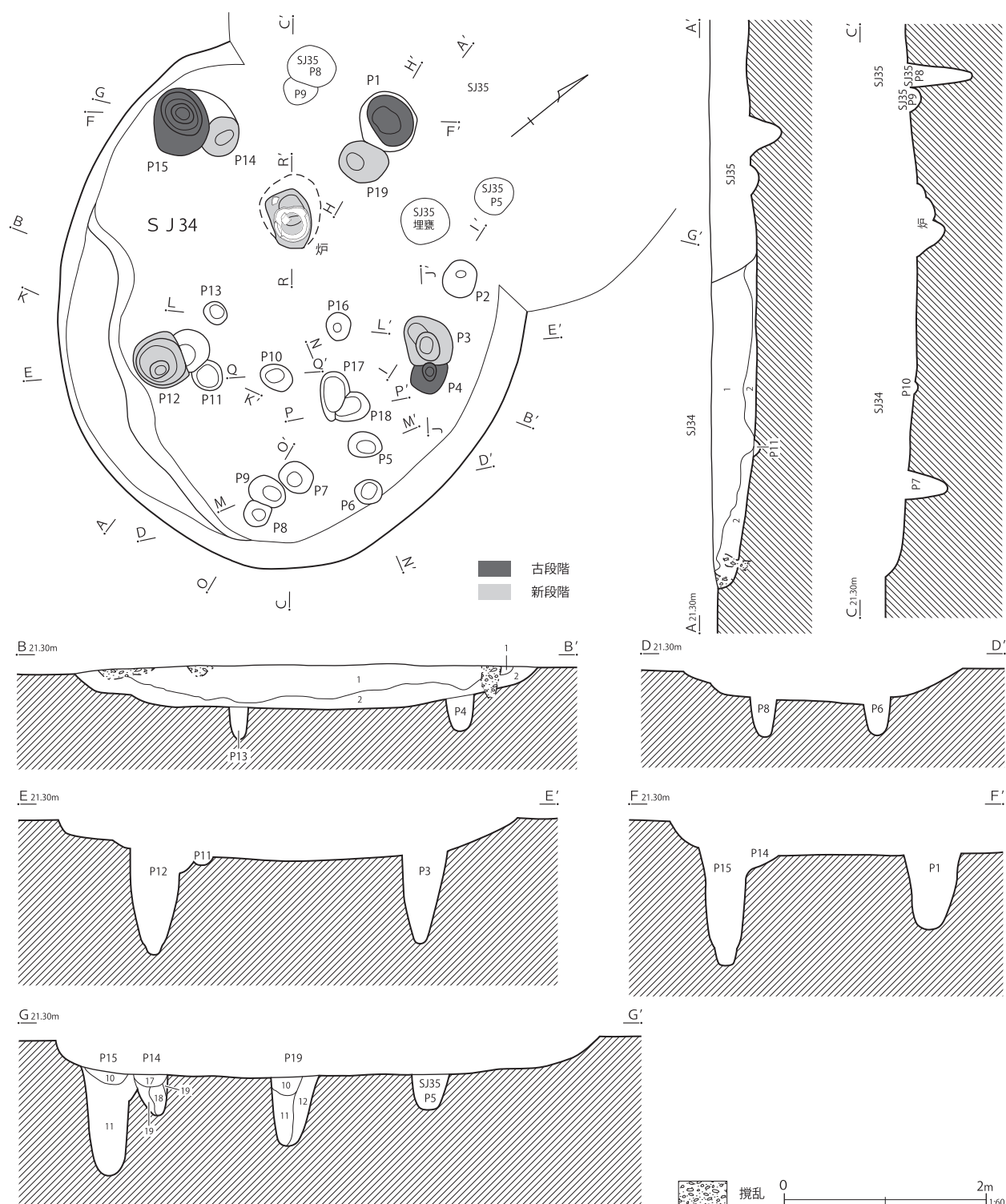
主軸線上奥壁寄りに炉跡を検出した。埋甕炉で、

深鉢土器の口縁から胴上半部までの部分を正位に埋設していた。土器の周囲に掘りかたを検出した。炉体土器直下の部分が一段深く穿たれた二段の掘り込みを持つ。長径75cm、短径61cm、深さ32cmである。

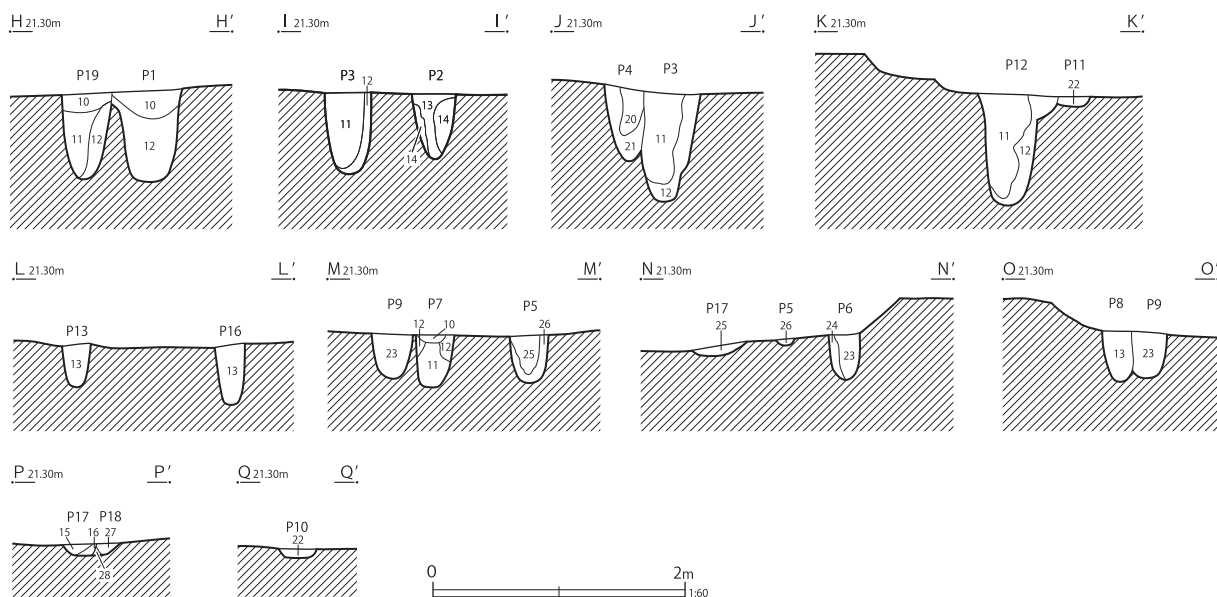
床面上から19本のピットが検出された。これらのうちP 1・3・4・12・14・15・19が主柱穴で、4本柱の上屋を構成するものと考えられる。覆土の状態や切り合い等からこれら主柱穴には新旧が

存在し、P 3・14・19が新段階、P 1・4・15が古段階に属しており、P 12は共有されているものと考えられる。したがって、本住居跡の上屋はほぼ同じ規格で少なくとも1回の建て替えが行われた可能性がある。

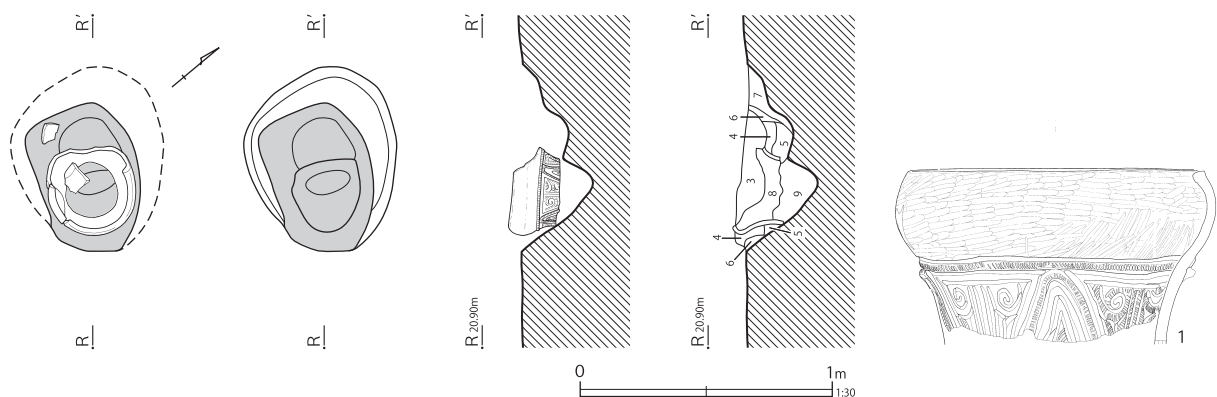
主柱穴に囲まれる長方形の空間は住居の奥壁寄りに偏っているのに対し、住居前面にはP 5～10・17・18等の小ピットが集中する。これらのピットは出入り口施設の一部を構成するものと考えられる。



第 247 図 第 34 号住居跡 (1)



炉跡



S J 34

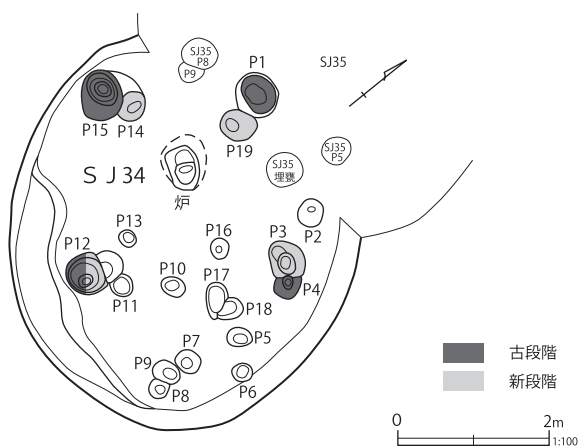
- 1 黒褐色土層 : ロームブロック少量 ローム粒子若干 焼土粒子少量
炭化物多く含む
- 2 暗褐色土層 : ロームブロック若干 ローム粒子多く 焼土粒子少量
炭化物若干含む
- S J 34 炉
- 3 暗褐色土層 : ロームブロック・焼土ブロック若干 炭化物少量含む
- 4 暗褐色土層 : ロームブロック若干 焼土ブロック微量 炭化物少量含む
- 5 暗褐色土層 : 焼土ブロック若干 炭化物少量含む
- 6 暗褐色土層 : ロームブロック若干 ローム粒子・炭化物少量含む
- 7 暗褐色土層 : 粗粒ロームブロック若干 ローム粒子・炭化物少量含む
- 8 暗褐色土層 : ロームブロック・炭化物少量含む
- 9 暗褐色土層 : ロームブロック若干含む 締まり良好
- S J 34 Pit
- 10 極暗褐色土層 : ロームブロック微量 ローム粒子少量 焼土粒子・炭化物
・白色粒子微量含む
- 11 暗褐色土層 : ロームブロック微量 ローム粒子少量 炭化物微量含む
- 12 暗褐色土層 : ロームブロック・ローム粒子少量 炭化物微量含む
- 13 暗褐色土層 : ロームブロック・ローム粒子・炭化物微量含む

- 14 暗黄褐色土層 : ロームブロック非常に多く 炭化物微量含む
- 15 暗褐色土層 : ロームブロック・ローム粒子少量 炭化物微量含む
- 16 暗褐色土層 : ロームブロック若干 ローム粒子少量含む
- 17 暗褐色土層 : ロームブロック少量 ローム粒子若干 炭化物微量含む
- 18 暗褐色土層 : ロームブロック少量 ローム粒子・炭化物微量含む
- 19 暗褐色土層 : ロームブロック・炭化物微量含む
- 20 暗褐色土層 : ロームブロック微量 ローム粒子少量 炭化物微量含む
- 21 暗褐色土層 : ロームブロック微量 ローム粒子非常に多く
炭化物微量含む
- 22 暗褐色土層 : ロームブロック・ローム粒子若干 炭化物微量含む
- 23 暗褐色土層 : ローム粒子少量 焼土粒子微量 炭化物少量含む
- 24 暗褐色土層 : ロームブロック若干 ローム粒子・炭化物微量含む
- 25 極暗褐色土層 : ロームブロック微量 ローム粒子少量 焼土粒子・
炭化物微量含む
- 26 極暗褐色土層 : ロームブロック若干 ローム粒子少量 焼土粒子微量含む
- 27 暗褐色土層 : ロームブロック・ローム粒子・炭化物微量含む
- 28 暗褐色土層 : ロームブロック非常に多く含む

第 248 図 第 34 号住居跡 (2)

第 28 表 第 34 号住居跡柱穴計測表

ビットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ビットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ビットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ビットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ビットNo.	長径(cm)	深さ(cm)
P 1	58.0	71.5	P 2	36.0	55.7	P 3	58.0	89.7	P 4	34.0	60.7	P 5	34.0	38.8
P 6	26.0	36.8	P 7	34.0	42.2	P 8	26.0	40.0	P 9	37.0	35.0	P 10	32.0	7.5
P 11	32.0	9.3	P 12	76.0	100.0	P 13	24.0	33.3	P 14	72.0	45.5	P 15	66.0	117.0
P 16	28.0	49.2	P 17	46.0	8.8	P 18	38.0	7.0	P 19	48.0	67.5			



第 249 図 第 34 号住居跡柱穴変遷図

覆土は上下2層からなり、遺物は主に上層、とりわけ下層との境界面付近から多く出土している。所属時期は勝坂式末～加曾利E I 式期だが、炉体土器の時期がやや古い。

第34号住居跡出土遺物

土器（第253～257図）

1は炉体土器である。水平口縁の深鉢で、口縁から胴部中段まで残存する。

胴部中段にくびれを持ち、口縁内湾して、口唇断面肥厚し、口端上面を平坦に整形する。口縁は無文で、頸部に刻みを伴う隆帯を巡らせて胴部との境を区画する。胴部は鋸歯状の刻み隆帯が巡って上位の隆帯との間に三角形の区画文を構成する。区画内部には沈線による渦巻文・三叉文等を描き、余白を爪型文や集合沈線文が埋めている。

復元最大径は約33.8cm、現存高は約18.7cmである。胎土はやや砂質で、チャート等の亜角礫とシャモットを含む。器壁は外面暗褐色、内面暗橙色である。焼成は良い。

2は円筒形の深鉢で、口縁から底部まで残存する。折り返し口縁で、胴上半部から中段にかけて文様帯を持ち、刻みを伴う隆帯により曲線的なモチーフを描く。隆帯間の余白には沈線文を描く。

文様帯の下端は矢羽根状の刻みを伴う隆帯で区画される。胴下半部にはR L単節の縄文が右下が

りに施文され、条の方向を縦に揃えている。

復元最大径は約16.3cm、現存高は約25.9cmである。胎土はシルト質で、黒雲母含む砂粒を混入する。器壁は外面暗灰褐色～黄橙色、内面黒褐色である。焼成は良い。

3は円筒形の深鉢で、口縁から胴部中段まで残存する。口縁部に無文帯を持ち、逆U字状の隆帯が付されて、口端上に小突起を形成する。

胴部に文様帯を持ち、口縁部との境を平行沈線で区画する。文様帯内部は刻み隆帯により分割し、沈線文や爪型文列を描く。

復元最大径は約23.8cm、現存高は約20cmである。胎土はシルト質である。器面は灰黄褐色である。焼成は不良である。

4は円筒形の小型深鉢で、口縁から胴上半部にかけて残存する。水平口縁上に小突起を持ち、ここから胴部に縦位の隆帯が垂下する。口縁直下に1条の沈線が巡って、以下に文様帯を配置する。

U字状の沈線が巡って上位の区画線の間に半円形の区画を構成し、内部に刺突文を充填する。地文はRの撚糸文で、文様帯内部にも施文する。

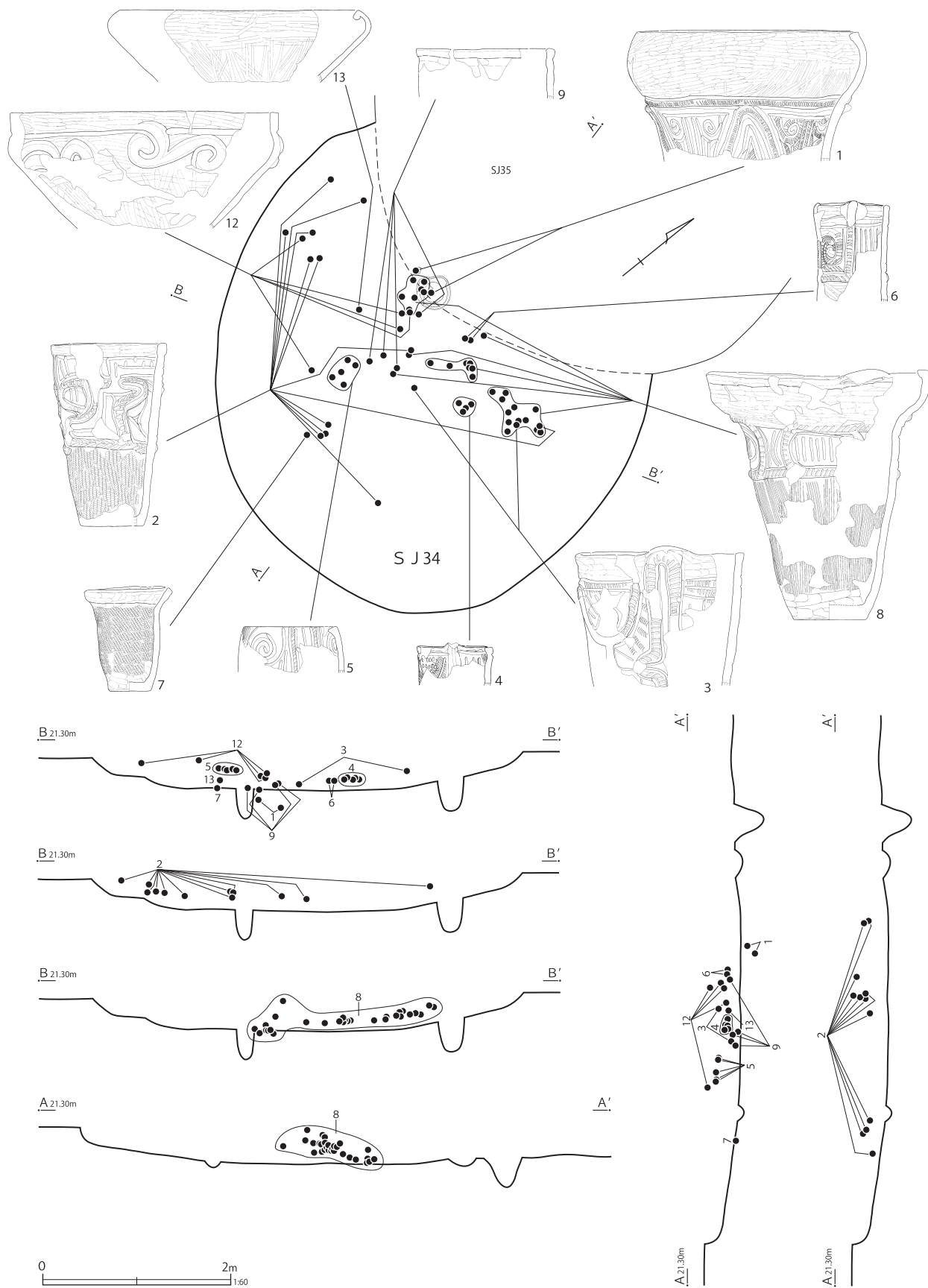
復元最大径は約10.5cm、現存高は約5.9cmである。胎土はシルト質である。器面は暗褐色で、焼成は良い。

5は円筒形の小型深鉢で、口縁から胴上半部にかけて残存する。

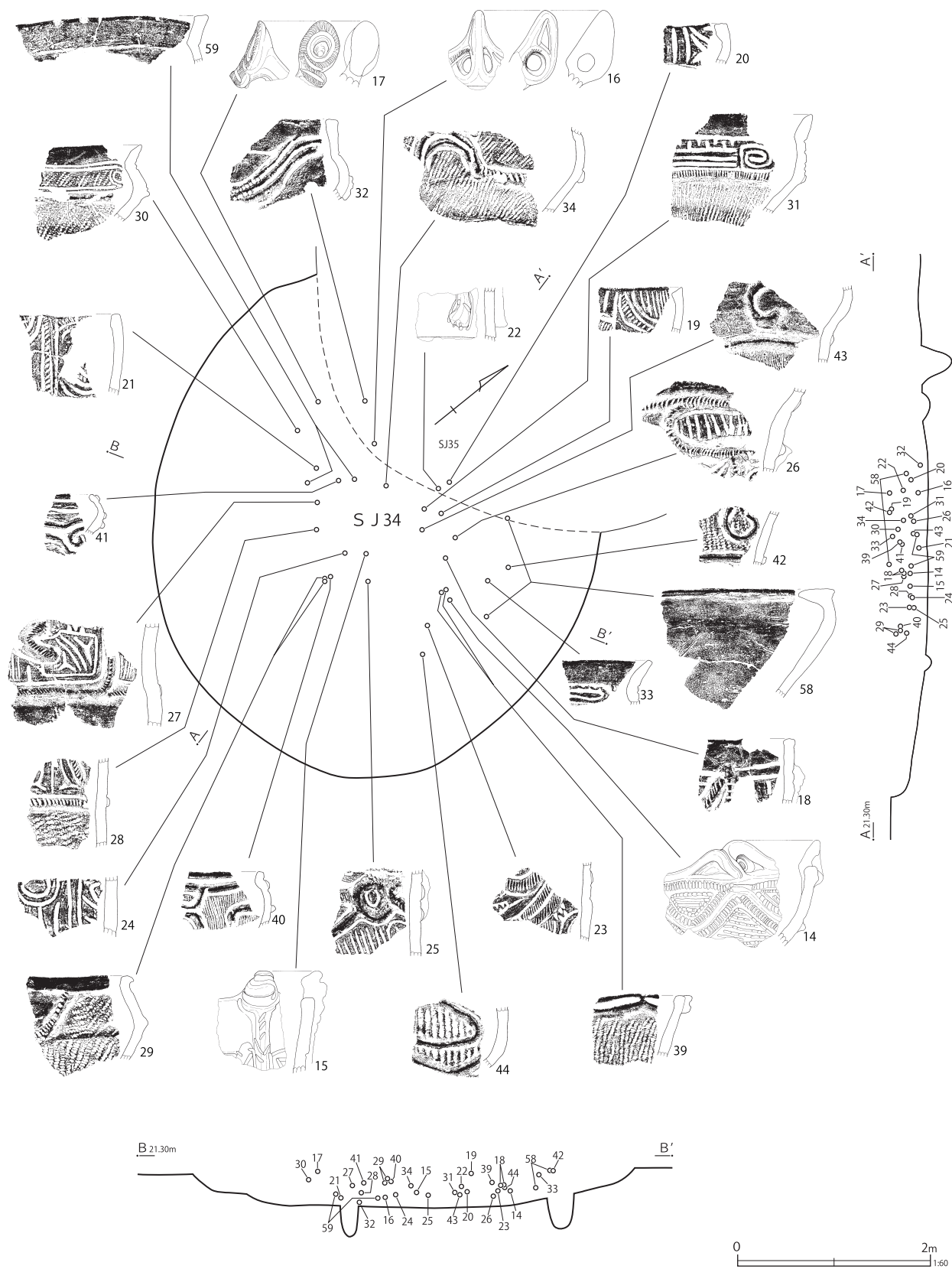
口縁に向かってやや内湾しつつ立ち上がり、口唇断面肥厚して内面に稜をなす。口端から胴部にかけて一続きの文様帯を持つ。縦位の多条沈線によって文様帯を分割し、単沈線による渦巻文や櫛歯文を描く。

復元最大径は約15cm、現存高は約6.4cmである。胎土はシルト質である。器壁は外面灰橙色、内面灰黄褐色である。焼成は良い。

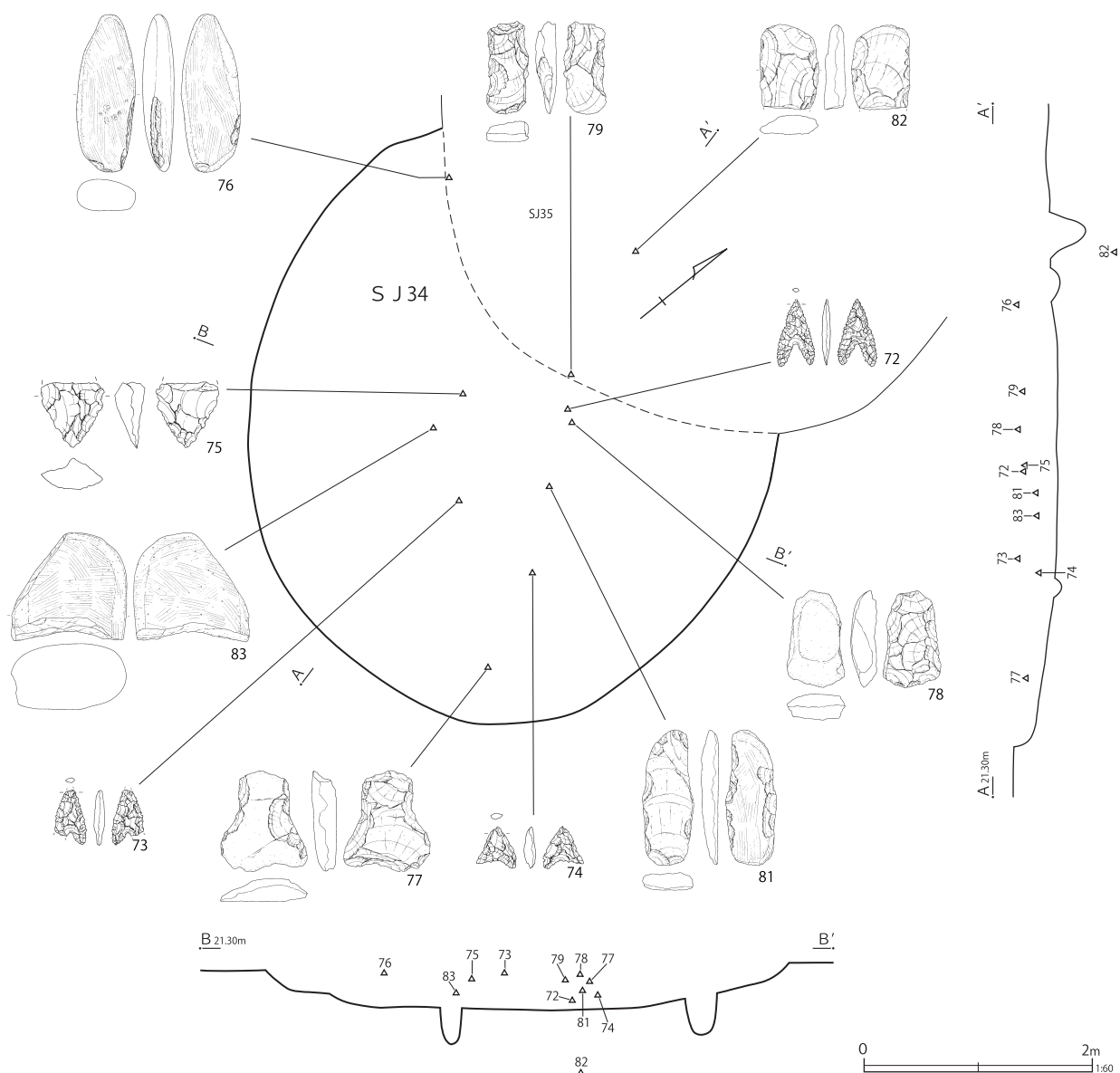
6は円筒形の深鉢で、口縁から胴下半部まで残存する。無文の水平口縁上に縦位の隆帯を付して、4単位の小突起を形成する。



第 250 図 第 34 号住居跡遺物出土状況 (1)



第 251 图 第 34 号住居跡遺物出土状況 (2)



第 252 図 第 34 号住居跡遺物出土状況（3）

胴上半部に文様帯を持ち、上を平行沈線、下を刻み隆帯で区画する。文様帯内部を縦位の刻み隆帯で分割して長方形の区画を構成し、内部には集合沈線文や渦巻文を描いて、余白は爪型文で埋めている。

復元最大径は約10.6cm、現存高は約14.1cmである。胎土はシルト質である。器壁は外面灰黄色～黒灰褐色、内面黒褐色である。焼成は良い。

7はほぼ完形品の小型深鉢である。胴部は寸胴で、頸部が「く」の字に屈曲し、口縁外反する。また、頸部にはごく浅い凹線が巡って、外面に段

を形成する。胴部にはLR単節縦位回転の縄文を施文する。

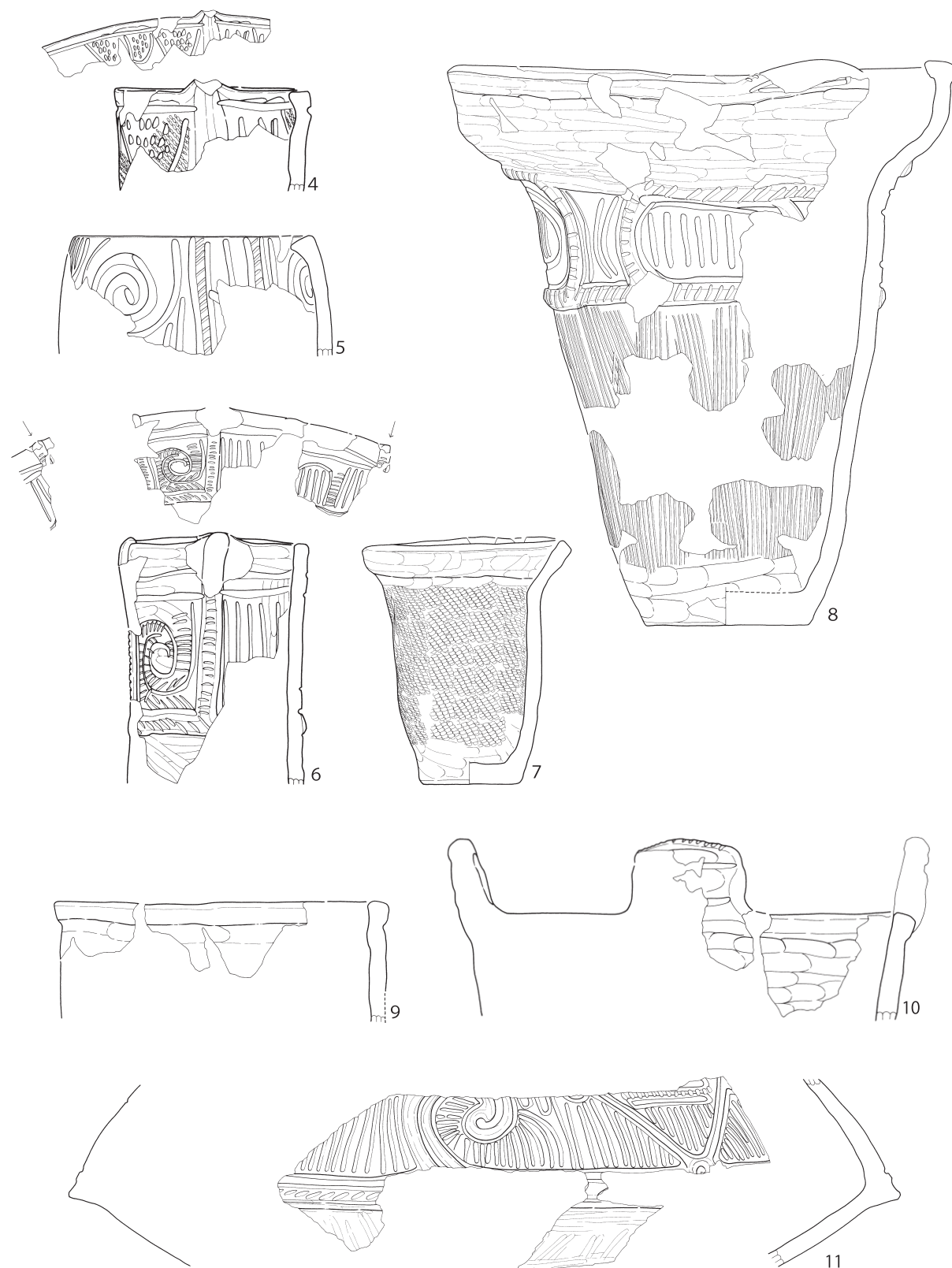
復元最大径は約12.3cm、現存高は約14.8cmである。胎土はシルト質である。器壁は外面暗橙色、内面黒褐色である。焼成は良い。

8は口縁から底部まで残存する。水平口縁の深鉢で、口端上に小突起を持つ。胴部は寸胴で、頸部に強いS字状の屈曲を持ち、口縁は直立する。折り返し口縁で内外面に段を持ち、口端上面を平坦に整形している。

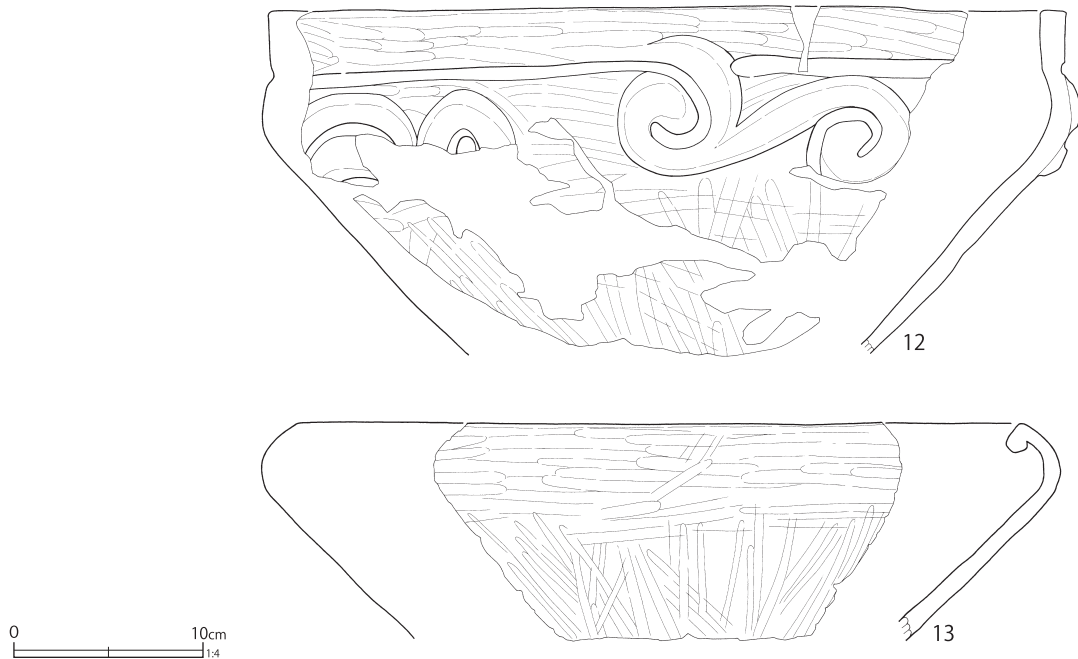
口縁無文で、胴上半部に文様帯を持ち、刻み隆



第 253 图 第 34 号住居跡出土遺物 (1)



第 254 図 第 34 号住居跡出土遺物（2）



第 255 図 第 34 号住居跡出土遺物（3）

帯による楕円形の区画文を描く。区画内部には集合沈線文を描く。胴部には櫛歯状工具による縦位の条線文を施文する。

復元最大径は約19.5cm、現存高は約6.8cmである。胎土はシルト質である。器面は灰黄褐色で黒斑がみられる。焼成はやや不良である。

9は円筒形深鉢の口縁部である。無文の折り返し口縁で、外面に段を形成する。復元最大径は約27.8cm、現存高は約10.5cmである。胎土はシルト質である。器面は暗灰黄褐色である。焼成は比較的良い。

10は無文の深鉢口縁部である。水平口縁上に板状の突起を持ち、前面に横位の平行沈線文を配し、上面には刻みを施す。復元最大径は約31.6cm、現存高は約33.9cmである。胎土は砂質で、チャート等の垂角礫を含む。器面は暗褐色～黄橙色である。焼成は比較的良い。

11は浅鉢の胴部である。中段が「く」の字に張り出して、刻みを伴う隆帯が巡る。胴上半部には隆帯による渦巻文と鋸歯文を描き、余白に集合沈線文を施文する。胴下半部は無文である。

復元最大径は約51.8cm、現存高は約11.8cmである。胎土は若干の砂とシルトを含む。器面は暗褐色である。焼成は良い。

12は水平口縁の浅鉢で、口縁から胴下半部まで残存する。胴上半部が張り出す腰高の器形で、頸部屈曲して口縁が直立する。胴上半部に文様帯を持ち、扁平幅広な隆帯により横S字文を基調とする文様を描く。

復元最大径は約39cm、現存高は約16.7cmである。胎土は多量の砂と小礫を含む。器壁は外面茶褐色で黒斑がみられ、内面黒褐色である。

13は無文の浅鉢である。胴上半部が強く張って内湾し、口端が内屈して、内面に段を形成する。復元最大径は約37.2cm、現存高は約10.1cmである。胎土はやや砂質で黒雲母粒子を含む。器壁は外面が暗灰黄褐色で黒斑がみられ、内面は黒褐色である。焼成は良い。

14～62は破片資料である。うち14～28は勝坂式で、ほとんどが同Ⅲ式と考えられる。

14は水平口縁上にひねりを持つ突起を配し、口縁下に波状の隆帯を巡らせて三角形の区画文を構

成する。区画内部にはキャタピラ文が巡り、内部には角押し文列を充填する。勝坂Ⅰ式であろう。

15は円筒形深鉢の口縁部で、水平口縁上にらせん状の突起を配し、胴部にかけて縦位の隆帯が垂下する。16は山形の突起で、横位の貫通孔を持つ眼鏡状突起を配する。17は中央に貫通孔を持つ山形突起で、側面に刻み隆帯の楕円文と褶曲文を描く。

18～21は水平口縁で、20が口縁内湾するキャリパー形、それ以外は円筒形の深鉢と考えられる。18は口縁部無文で、胴部の文様帯との間を平行沈線で区画する。

19・21は縦位の区画の左右に沈線による櫛歯文を配する。20も類似の文様だが、櫛歯文は形骸化し、上下対向の弧線文となっている。

22は口縁部無文帯の下端で、胴部との境に段を形成する。垂下する縦位の隆帯の末端が肥大化して、縦位の刻みを施しており、人体表現の一部とも考えられる。

23～25は胴部の文様帯である。23・24は沈線文主体だが、25は隆帯による円文を中心に器面を分割して、集合沈線文を施文する。26は8に類似の楕円形区画文である。27・28は文様帯下端の区画で、いずれも刻み隆帯を用いている。胴下半部は、27は無文、28はRL単節の縄文である。

29～39は中峠系の深鉢である。29～34は三原田式類似の器形で、胴上半部に最大径を持って内湾し、頸部屈曲して短い口縁が立ち上がる。

30・31は最大径の部分に隆帯が巡って、頸部との間に文様帯を構成する。29は斜位の刻み隆帯を付す。30・31は渦巻文を中心とした区画文を描く。33も頸部に圧縮された区画文を持つ。32は無文地に幅広の隆帯＋平行沈線による波状文が巡る。平行沈線の一部は角押し文となっている。

34～36は胴上半部の文様帯下端で、34は背割れ隆帯の逆U字文を配し、下方の刻み隆帯と融合している。

37～39は地文のみの口縁で、39は口縁直下に背割れ隆帯を分割した横楕円形のモチーフが巡る。

40～44は口縁部に渦巻文を中心とした文様帯を持つ口縁部で、加曾利EⅠ式もしくはこれに前出する土器であろう。45・46は頸部もしくは胴部中段に巡る横位の区画帯である。

47～55は地文のみの胴部および底部である。50には懸垂文の一部がみられる。

57～60は浅鉢である。57は外反する口縁で、頸部に沈線が巡っており、胴上半部に文様帯を持つ可能性がある。58は口縁から胴部中段まで残存するが、内屈した口唇部の外面に隆帯が巡り、口端上に広い平坦面を作り出している。

59は胴張りで頸部屈曲する無文の浅鉢とみられる。60は無文の浅鉢胴下半部である。61・62も無文の底部だが、深鉢の可能性もある。

63～71は土製円盤である。

石器 (第258図)

72～74は石鏃である。

72は端正な二等辺三角形のプロポーションで、基部が深くV字に切れ込む凹基鏃である。長さ2.85cm、幅1.7cm、厚さ0.4cm、重さ1.18gである。石材はチャートである。

73も形態は72に似るが、先端部と左脚が折損する。長さ2.4cm、幅1.4cm、厚さ0.5cm、重さ1.25gである。石材はチャートである。

74は正三角形で、基部の挟りに乏しく、右脚のみ凹基風に作り出されている。長さ1.8cm、幅1.7cm、厚さ0.5cm、重さ1.07gである。石材はチャートである。

75はスクレイパーと考えたが、尖頭器の基部の可能性もある。中段で短軸方向に折損している。残存部分は全体に三角形で、右側縁と鋭角な下端部を中心に調整剥離を施している。

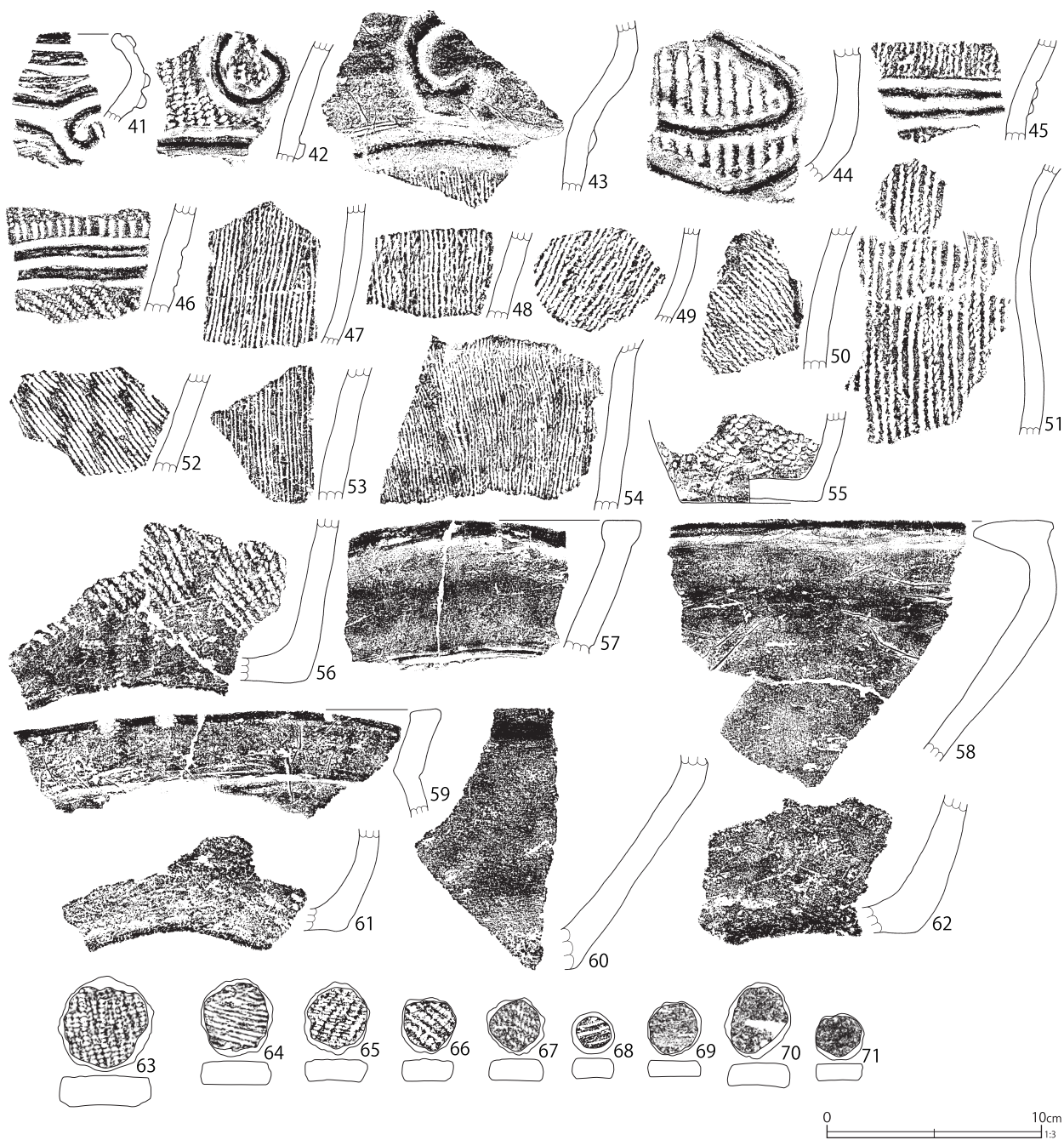
長さ2.9cm、幅2.7cm、厚さ1.3cm、重さ6.84gである。石材はチャートである。

76はプロポーションから磨製石斧と考えたが、



0 10cm
1:3

第 256 图 第 34 号住居跡出土遺物 (4)



第 257 図 第 34 号住居跡出土遺物（5）

棒状の磨石の可能性もある。断面定角型で前面に擦痕を残す。刃部は磨滅して丸みを帯びており、破損後に磨石転用されたものと考えた。

右側縁の刃部寄りに剥離が集中しているほか、背面中央部に数か所の凹孔が観察される等、数種類の転用が行われたものと考えられる。長さ13.7cm、幅5.1cm、厚さ2.75cm、重さ304.93gで

ある。石材は砂岩である。

77～82は打製石斧である。

77は撥形で、背面に自然面、腹面に打割面を残している。長さ8.8cm、幅7.5cm、厚さ2.1cm、重さ138.35gである。石材は砂岩である。

78は短冊形で、背面全体が自然面となっている。長さ8.45cm、幅5cm、厚さ2.1cm、重さ114.38g



第 258 図 第 34 号住居跡出土遺物（6）

である。石材は黒色頁岩である。

79は短冊形で、長さ8.1cm、幅3.7cm、厚さ1.8cm、重さ56.96gである。石材は黒色頁岩である。80は短冊形で、背面に擦痕を持つ自然面が残る。長さ9.8cm、幅5.2cm、厚さ2.3cm、重さ126.85gである。石材はシルト岩である。

81は短冊形で、腹面に残る自然面には擦痕が観

察され、磨石から再加工された可能性がある。背面刃部側に打割面を残す。長さ11.8cm、幅4.5cm、厚さ1.5cm、重さ111.78gである。石材は安山岩である。

82は胴部中段から刃部寄りを折損するが、短冊形であろう。長さ7.4cm、幅5.1cm、厚さ1.9cm、重さ93.28gである。石材はホルンフェルスであ

る。

83は楕円形の磨石で、短軸方向に折損する。扁平な自然石を両面使用している。長さ9.4cm、幅10.1cm、厚さ5.7cm、重さ836.01gである。石材は安山岩である。

第35号住居跡（第246・259～263図）

M・12・13グリッドに位置する。第34号住居跡を壊している。長径約5.3m、短径5.15mの楕円形の住居跡で、主軸方向はN・40°・Wを指す。

壁は比較的緩やかに立ち上がり、壁高は最も深い部分で0.29mである。床面は平坦で、南東方向に向けて緩やかに傾斜している。壁溝は検出されなかった。

主軸線上奥壁寄りで炉跡を検出した。主軸方向に延びる数珠つなぎの掘り込みを持っており、数度の造り替えを経ているものと考えられる。

中央の掘り込みを巡るようにして10点あまりの礫と土器片が配置されており、またこれに対向して抜き取り痕とみられるピット列が検出された。従って、本住居跡の炉は最終段階では石囲い（土器片囲い）炉として存在し、廃絶時に一部の礫が抜き取られ再利用されたものと考えられる。

床面上から12本のピットが検出された。これらのうちP1～4・8～11が主柱穴と考えられ、4本柱の上屋を構成するものと考えられる。

主軸線上南東側の壁近くに埋甕が存在し、これが出入り口施設であると考えられる。深鉢土器の口縁から胴部中段までの部分を正位に埋設したもので、周囲には土器より一回り大きな掘りかたを検出した。

覆土は上下2層からなり、遺物は主に上層から出土している。所属時期は加曾利EⅠ式期と考えられる。

なお、本住居跡の覆土中からは奈良～平安時代の甕の胴部破片が数十点出土した。調査中には認識できなかったが、該期の遺構が存在した可能性がある。

第35号住居跡出土遺物

土器（第264～267図）

1は勝坂系の土器で、破片の一部が第34号住居跡から出土しており、壁の崩落等によって同住居跡の覆土から流入したのと考えられる。

緩やかに外反しつつ開く円筒形の深鉢で、胴上半部のみが残存する。

口縁部は無文で、胴部には幅広の文様帯を持つ。文様帯内部は2条の刻み隆帯により上下に分帯し、縦位の刻み隆帯で縦方向にも分割して、長方形の区画を形成する。区画内部には平行沈線の逆U字モチーフを描き、さらに沈線による交互の刻みを施している。

復元最大径は約21.4cm、現存高は約13.2cmである。胎土は砂質である。器壁は外面暗橙色、内面暗褐色である。焼成は良い。

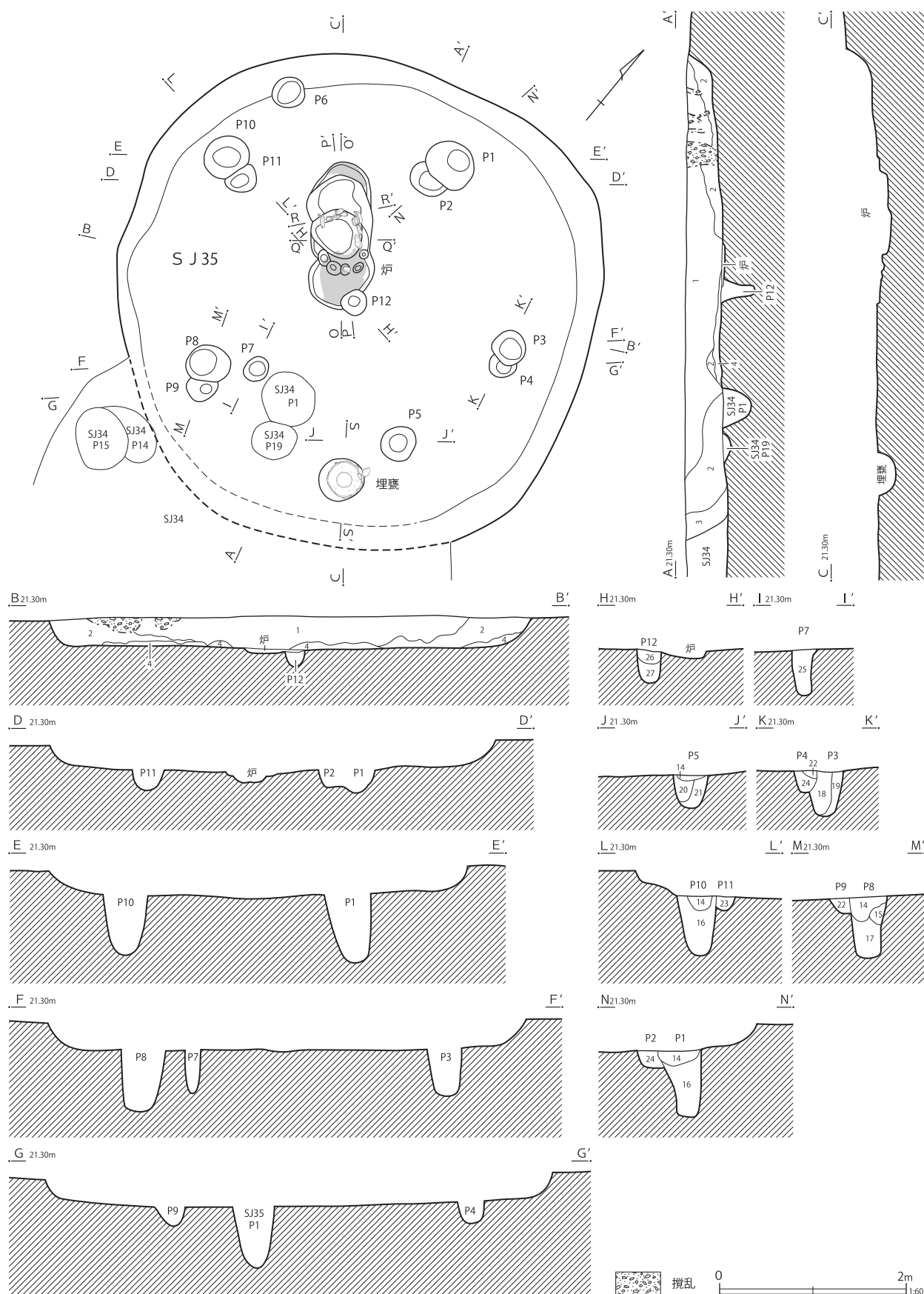
2～4は加曾利E式のキャリパー類深鉢である。2は口縁から頸部まで残存する。緩やかな波状口縁で、波頂部には口縁部文様帯の渦巻文から連続する中空突起を配する。また、波底部にも形骸化した渦巻文を配し、両者の間に楕円形の区画文を形成する。区画内の地文は縦位の集合沈線文である。頸部には無文帯を持つ。

復元最大径は約49cm、現存高は約16.8cmである。胎土は砂質である。器面は黄褐色で、焼成はやや不良である。

3は水平口縁の深鉢で、口縁から頸部まで残存する。2本隆帯の弧状モチーフを描き、接点にボタン状の突起を配する繋ぎ弧文的な文様を描く。

弧状モチーフは、接点となる部分の下を横位の隆帯で連結することによって、文様帯下端を水平に閉塞している。また、ボタン状突起を起点として水平な隆帯が巡っており、弧状モチーフの内部をさらに上下に分帯している。地文は縦位の集合沈線文である。頸部には無文帯を持つ。

復元最大径は約35.4cm、現存高は約10.8cmである。胎土は多量の砂と小礫を含む。器壁は外面



第 259 图 第 35 号住居跡 (1)

第 29 表 第 35 号住居跡柱穴計測表

ビットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ビットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ビットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ビットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ビットNo.	長径(cm)	深さ(cm)
P 1	54.0	73.3	P 2	42.0	19.3	P 3	36.0	48.0	P 4	30.0	25.3	P 5	38.0	34.3
P 6	34.0	22.0	P 7	28.0	49.0	P 8	48.0	64.3	P 9	34.0	21.0	P 10	50.0	56.0
P 11	34.0	20.5	P 12	26.0	34.4	P 13			P 14			P 15		

暗褐色、内面暗灰黄褐色である。焼成は比較的良い。

4 は出入り口部の埋甕である。口縁部から胴部中段まで残存する。

水平口縁で、無文の口唇部が外屈する。口縁部には繋ぎ弧文を描き、下端を隆帯で閉塞する。頸部に無文帯を持ち、胴部との境は2条隆帯で区画する。胴部には隆帯による懸垂文と蛇行懸垂文が交互に垂下する。地文はRの撚糸文で、口縁部では右下がり、胴部では縦位回転で施文される。

復元最大径は約37.3cm、現存高は約24cmである。胎土はやや砂質である。器壁は外面暗橙色、内面暗橙色～黄橙色である。焼成は良い。

5 は曾利系の深鉢である。口縁から胴下半部まで残存する。胴部は寸胴で、頸部が「く」の字に屈曲し、口縁は内湾しつつ立ち上がる。口縁は無文で、胴部との境には半裁竹管状工具の平行沈線文が断続的に巡る。胴部にはRL単節縦位回転の縄文を施文し、平行沈線の懸垂文を描く。

復元最大径は約24.5cm、現存高は約22.8cmである。胎土は多量の砂とシルトを含む。器壁は外面暗灰黄褐色、内面灰橙色である。焼成は比較的良い。

6 も曾利系の深鉢である。口縁部から頸部まで残存する。口縁は無文で、胴部との境には平行沈線文が巡る。胴部にはRL単節縦位回転の縄文を施文し、平行沈線の懸垂文を描く。

復元最大径は約22.8cm、現存高は約8.6cmである。胎土は若干の粗砂を含む。器面は暗茶褐色である。焼成は良好である。

7 は器台で、脚部のみ残存する。無文で、側面に円形の貫通孔を複数持つ。

復元最大径は約15.8cm、現存高は約6.9cmであ

る。胎土は砂質である。器面は黄橙色である。焼成は良い。

8 は浅鉢胴部である。胴部中段が「く」の字に張り、頸部屈曲して口縁外反する。胴上半部に文様帯を持ち、2本隆帯の長方形区画を描き、内部に縦位の集合沈線文を施文する。縦横の区画の交点に小渦巻文を配し、胴下半部は無文である。

復元最大径は約43.3cm、現存高は約10.3cmである。胎土は若干の粗砂、小礫を含む。器壁は外面灰黄褐色、内面黒色である。焼成は良い。

9～33は破片資料である。9・10は勝坂式の口縁部である。9は円筒形の深鉢で、口唇内面が突出して、口端上に平坦面を持つ。外面には沈線による渦巻文を描く。10は柱状の突起である。

11は中峠系の土器で、外反する波状口縁である。口縁直下に1条の隆帯と凹線が巡って外面に段をなし、波頂部側面に盲孔を配する。頸部に無文帯を持ち、胴部との境は1条の隆帯で区画する。

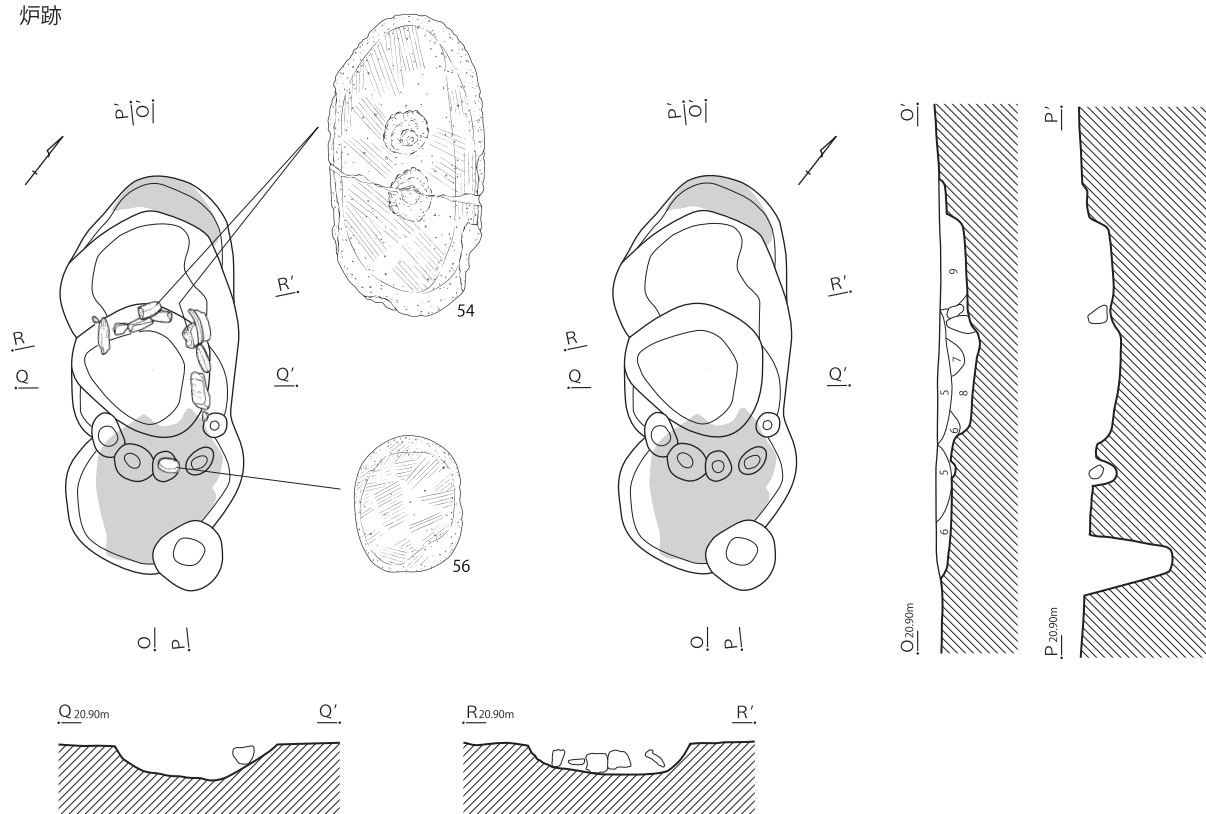
12～17は加曾利E I式のキャリパー類深鉢口縁部である。12は箱形の中空突起である。13も中空突起の一部で、口縁部文様帯の大柄な渦巻文から派生する。地文はRの撚糸文である。

15は繋ぎ弧文で、弧状の区画内部をさらに横走する隆帯で分帯する手法は3に共通する。地文は縦位の集合沈線である。

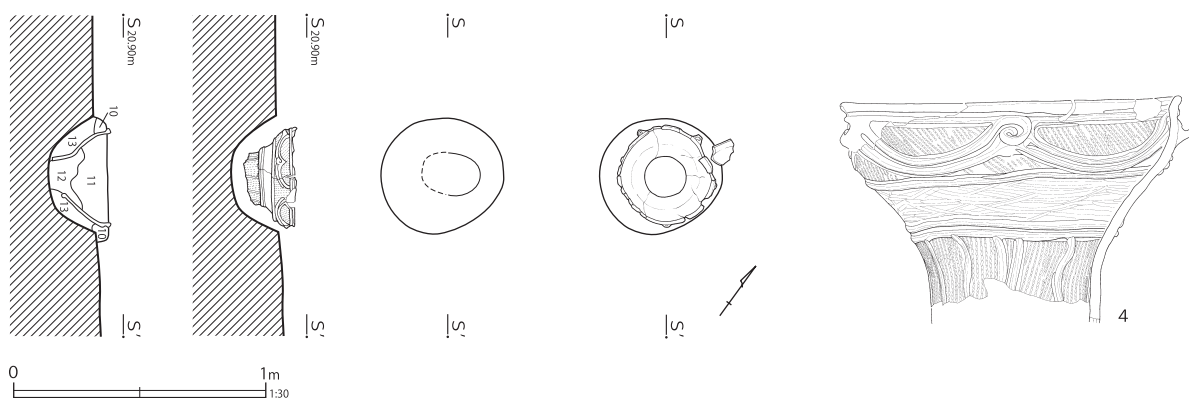
14も繋ぎ弧文の一部であろう。地文はRの撚糸文である。16は圧縮し幅狭となった口縁部文様帯で、上を1条、下を2条の隆帯で区画する。区画の下には平行沈線の懸垂文が垂下する。地文はLR単節横位回転の縄文である。

17は口縁直下の破片で、文様带上端の区画と、扁平な隆帯による渦巻文の一部がみられる。地文はRの撚糸文である。18は口縁部文様帯の一部で、

炉跡



埋甕



S J 35

- 1 黒褐色土層 : ローム粒子若干 焼土粒子少量 炭化物若干含む
- 2 暗褐色土層 : ローム粒子多く 焼土粒子少量 炭化物若干含む
- 3 暗褐色土層 : ローム粒子多く 焼土粒子少量 炭化物若干含む
ロームブロック少量 ローム粒子若干 焼土粒子少量
炭化物多く含む
- 4 暗褐色土層 : ロームブロック若干 ローム粒子多く 炭化物若干含む
- S J 35 炉
- 5 暗褐色土層 : ロームブロック・焼土ブロック少量 炭化物若干含む
- 6 暗褐色土層 : ロームブロック若干 焼土ブロック多く 炭化物若干含む
- 7 暗褐色土層 : ロームブロック少量 ローム粒子若干 焼土ブロック少量
炭化物若干含む
- 8 暗褐色土層 : ロームブロック若干 ローム粒子多く 焼土ブロック・
炭化物若干含む
- 9 暗褐色土層 : ロームブロック・ローム粒子・焼土ブロック少量 炭化物
若干含む

S J 35 埋甕

- 10 暗褐色土層 : ロームブロック若干 炭化物少量含む
- 13 暗褐色土層 : ローム粒子若干含む

S J 35 Pit

- 14 極暗褐色土層 : ロームブロック微量 ローム粒子少量 焼土粒子・炭化物
微量 白色粒子少量含む
- 15 極暗褐色土層 : ロームブロック・ローム粒子少量 炭化物微量含む
- 16 極暗褐色土層 : ロームブロック少量 ローム粒子・焼土粒子・炭化物微量
含む
- 17 極暗褐色土層 : ロームブロック・ローム粒子・炭化物微量含む
- 18 極暗褐色土層 : ロームブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化物微量含む
- 19 暗褐色土層 : ロームブロック少量 ローム粒子・炭化物微量含む
- 20 極暗褐色土層 : ロームブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化物微量含む
- 21 暗褐色土層 : ロームブロック微量 ローム粒子若干 炭化物微量含む
- 22 暗褐色土層 : ロームブロック微量 ローム粒子少量 焼土粒子・炭化物
微量含む
- 23 極暗褐色土層 : ロームブロック微量 ローム粒子多く 焼土粒子・炭化物
微量含む
- 24 暗褐色土層 : ロームブロック微量 ローム粒子非常に多く 炭化物微量
含む
- 25 極暗褐色土層 : ロームブロック少量 ローム粒子・焼土粒子・炭化物微量
含む
- 26 黒褐色土層 : ロームブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化物少量含む
- 27 暗褐色土層 : ロームブロック・炭化物微量含む

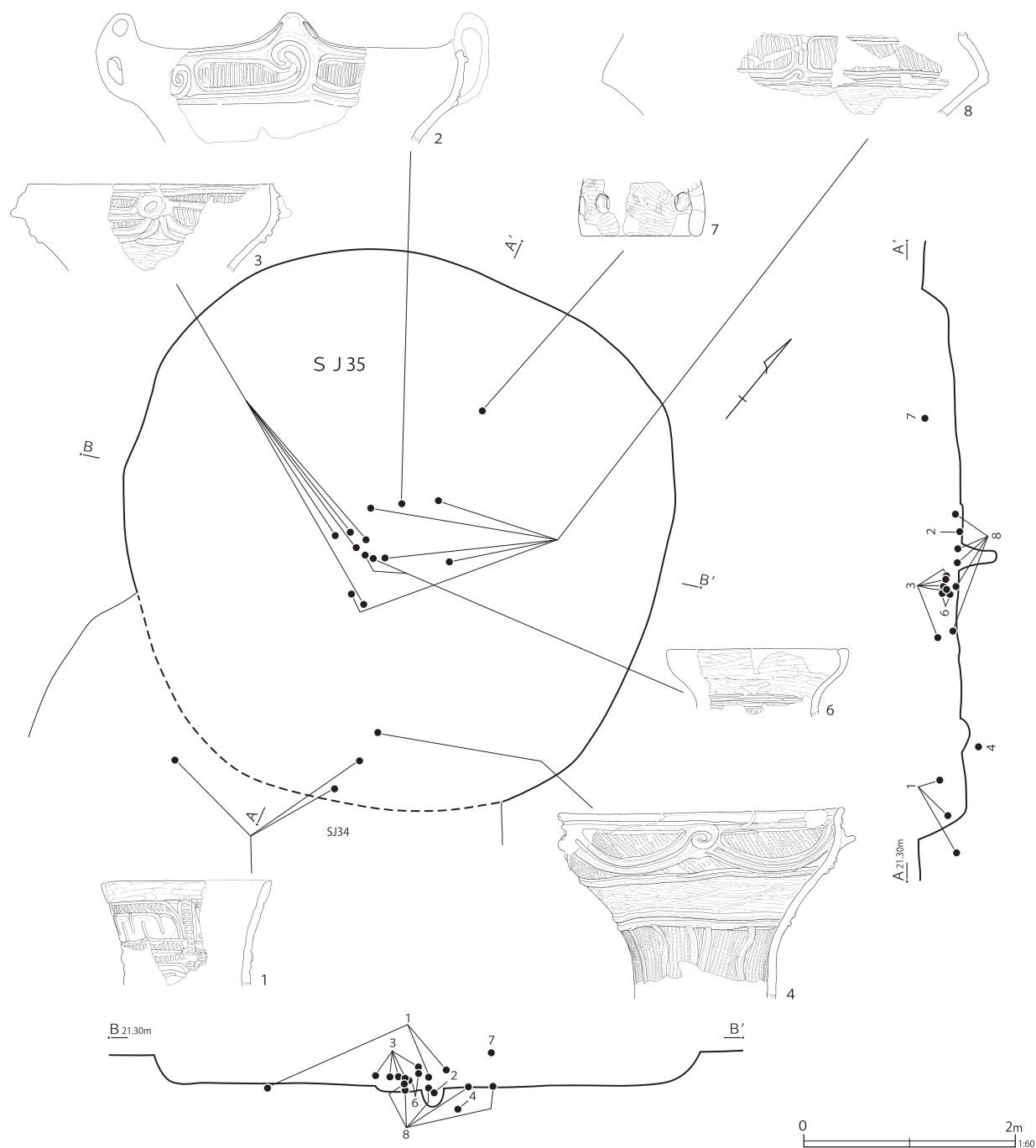
第 260 図 第 35 号住居跡 (2)

2本隆帯により大柄の渦巻文を描く。文様帯下端は1条の隆帯で区画し、頸部無文帯はみられない。地文はRの撚糸文である。19は頸部無文帯で、胴部との境を2条の隆帯により区画する。

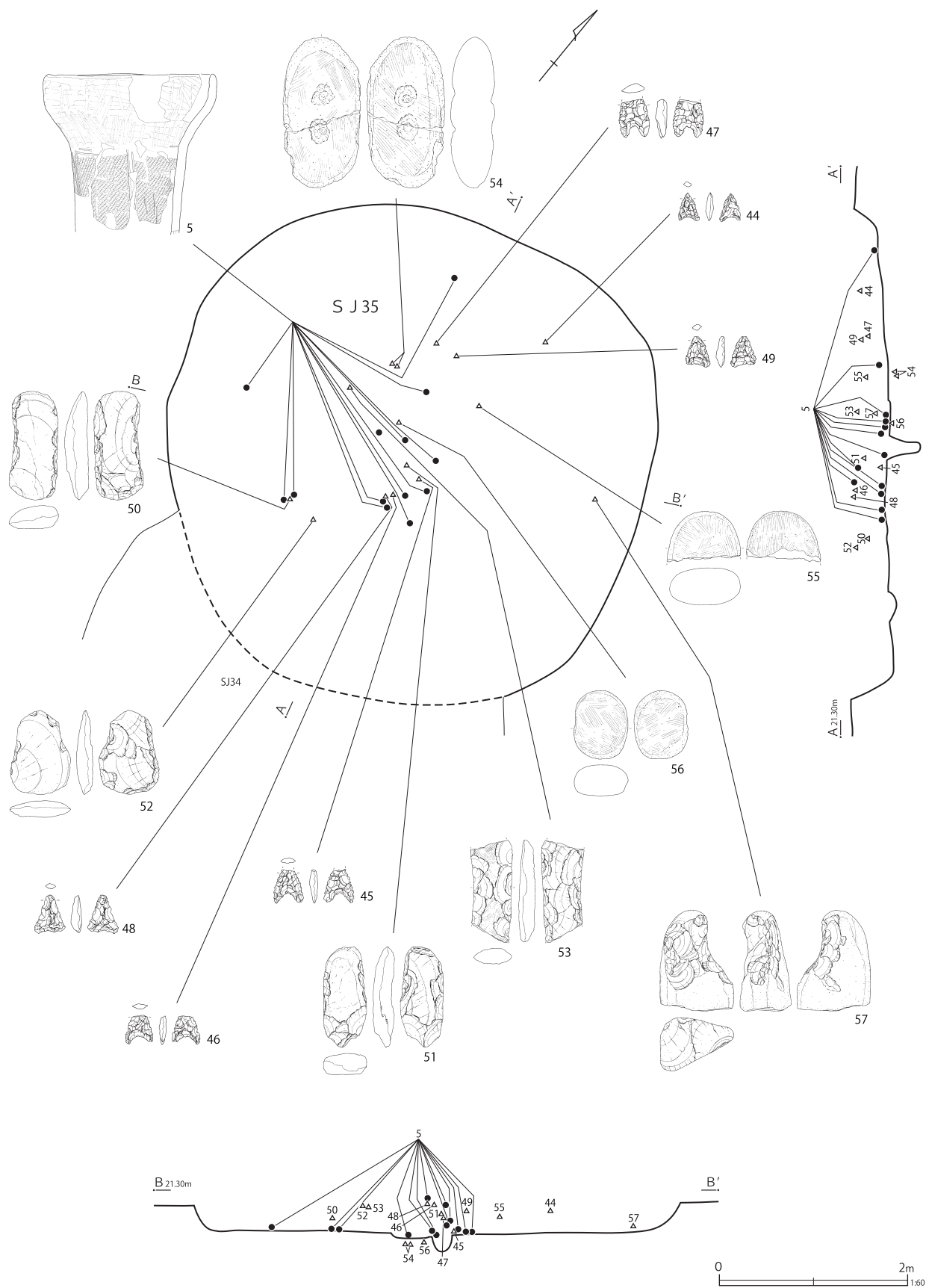
20～27は同類の深鉢胴部である。20は頸部との境を半裁竹管状工具の平行沈線文で区画し、胴部に同一工具による懸垂文が垂下する。地文はRL単節縦位回転の縄文である。

21は頸部との境を2条の隆帯で区画し、胴部には2本隆帯の懸垂文が垂下する。地文はRL単節縦位回転の縄文である。

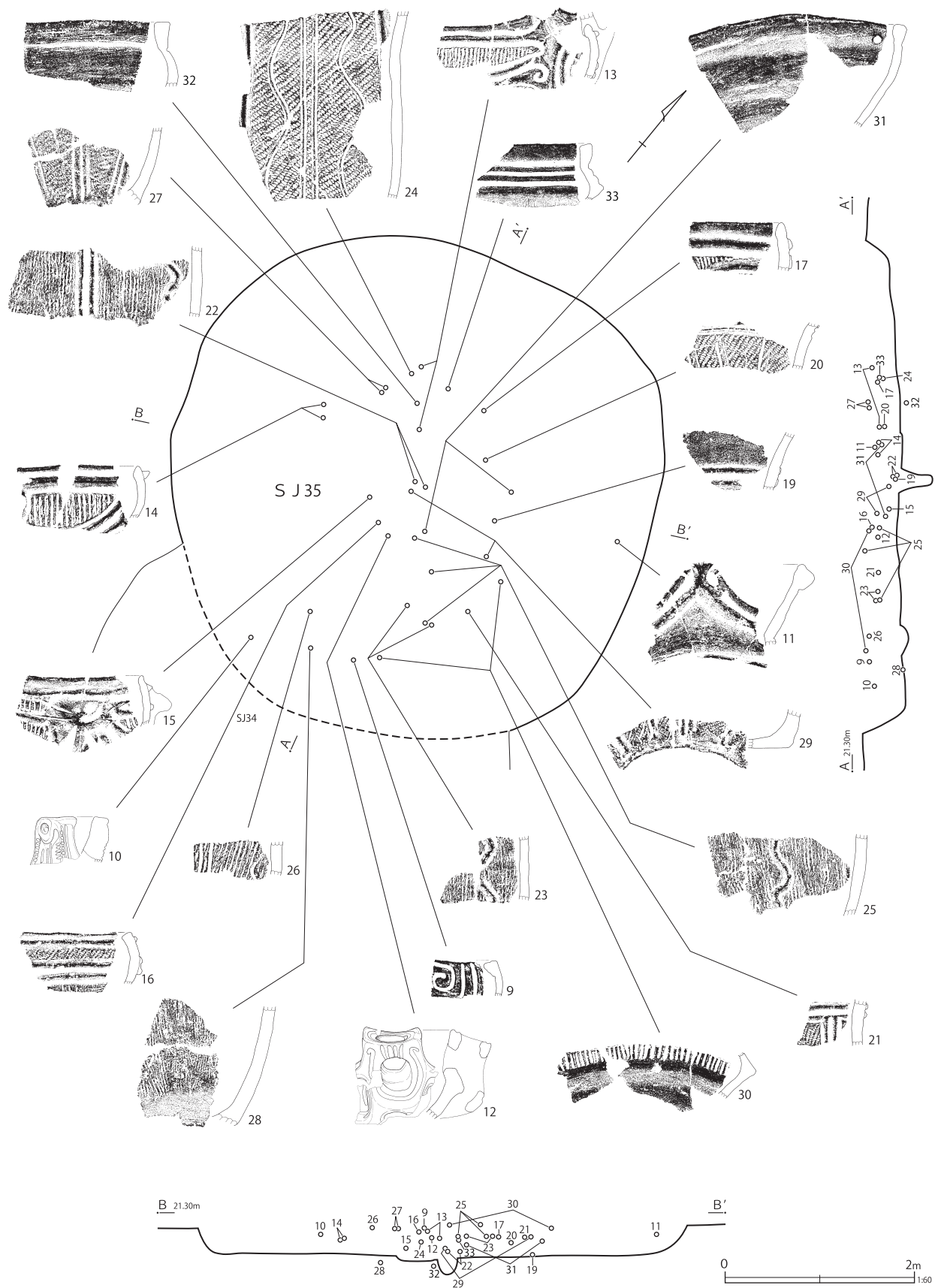
22～26は懸垂文が垂下する胴部である。複列の懸垂文と単独の蛇行懸垂文の交互配置であり、20は半裁竹管による平行沈線、26・27は棒状工具の平行沈線、他は隆帯が用いられる。24は隆帯による懸垂文の間に半裁竹管状工具の懸垂文と波状懸



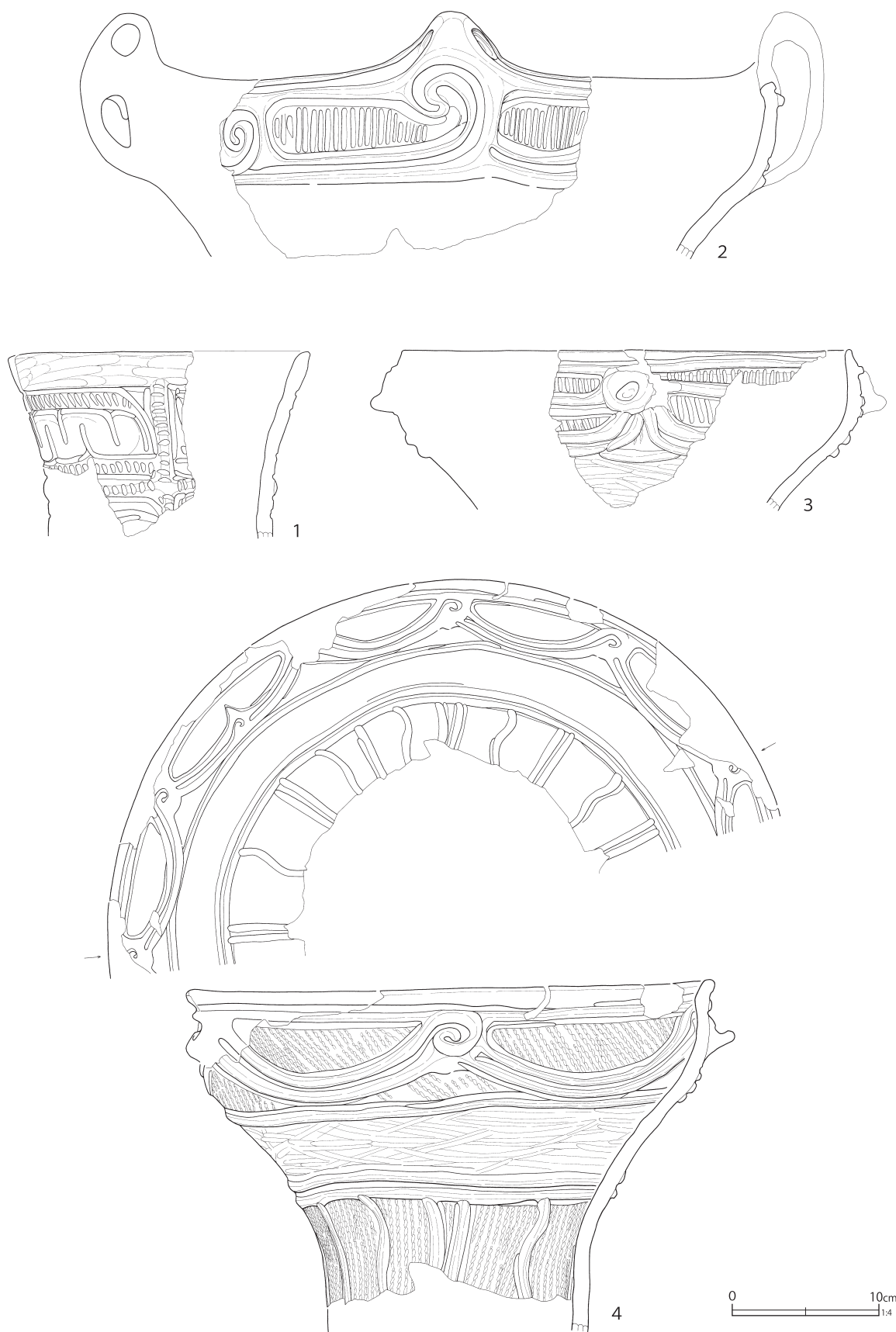
第 261 図 第 35 号住居跡遺物出土状況（1）



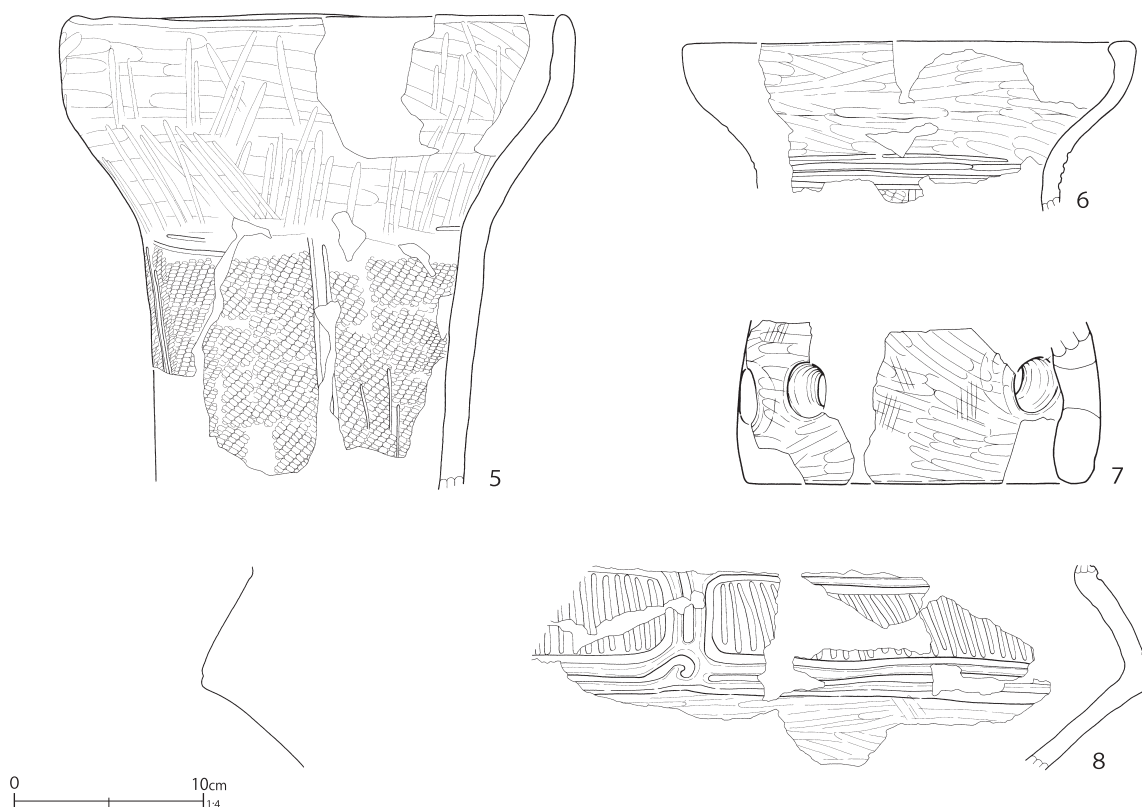
第 262 図 第 35 号住居跡遺物出土状況 (2)



第263図 第35号住居跡遺物出土状況(3)



第 264 图 第 35 号住居跡出土遺物 (1)



第 265 図 第 35 号住居跡出土遺物（2）

垂文を描く。

地文は22・23・25・26はRの撚糸文、24・27はR L単節の縄文で、すべて縦位回転で施文する。28は地文撚糸文のみの胴下半部である。地文はRの撚糸文で、底部付近は無文となる。29は底部で、隆帯の懸垂文が垂下し、R L単節縦位回転の縄文を施文する。

30～33は浅鉢である。30は胴部中段が「く」の字に張り出し、胴上半部に文様帯を持つ。地文は縦位の集合沈線文で、胴下半部は無文である。33はこれに類似する器形で、口縁から胴部中段まで残存する。口縁は外面に段を持つ折り返し口縁で、胴上半部と頸部に3条の凹線が巡る。

31・32は無文の浅鉢である。31は緩やかに内湾しつつ立ち上がる単調な器形で、口唇部が肥厚して内外に軽微な段を持つ。32は胴張りの浅鉢で、頸部屈曲して口縁直立する。折り返し口縁で、外面に段を持ち、口端上面を平坦に整形している。

34～42は土製円盤である。

石器（第268図）

43～49は石鏃である。

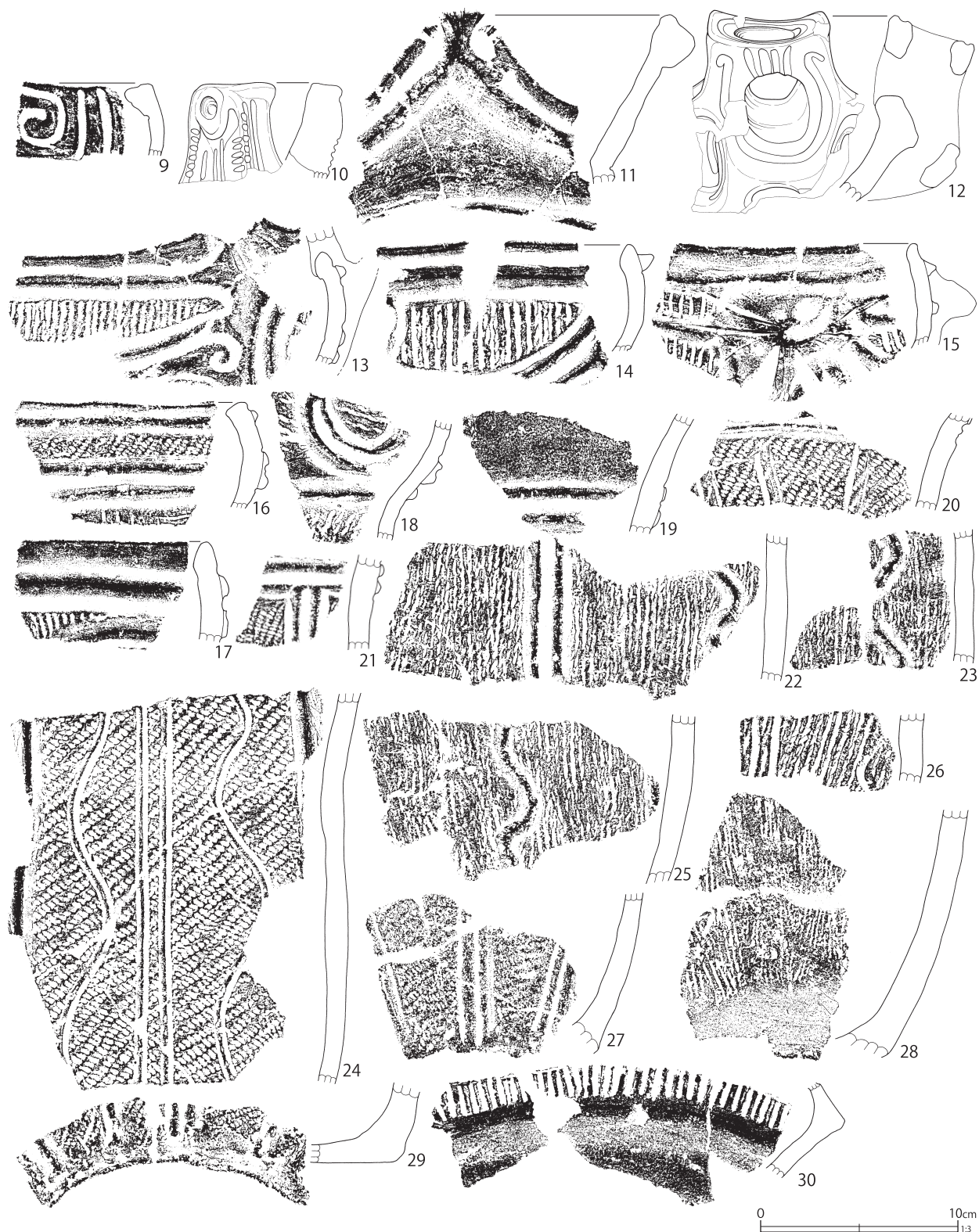
43は凹基の鏃で、左脚を折損する。両側縁が緩やかに内湾する紡錘形で、基部はV字状に切れ込む。長さ3cm、幅1.5cm、厚さ0.6cm、重さ2.14gである。石材はチャートである。

44は凹基の鏃で、完形品である。基部は緩やかな弧を描く。長さ1.5cm、幅1.1cm、厚さ0.4cm、重さ0.46gである。石材はチャートである。

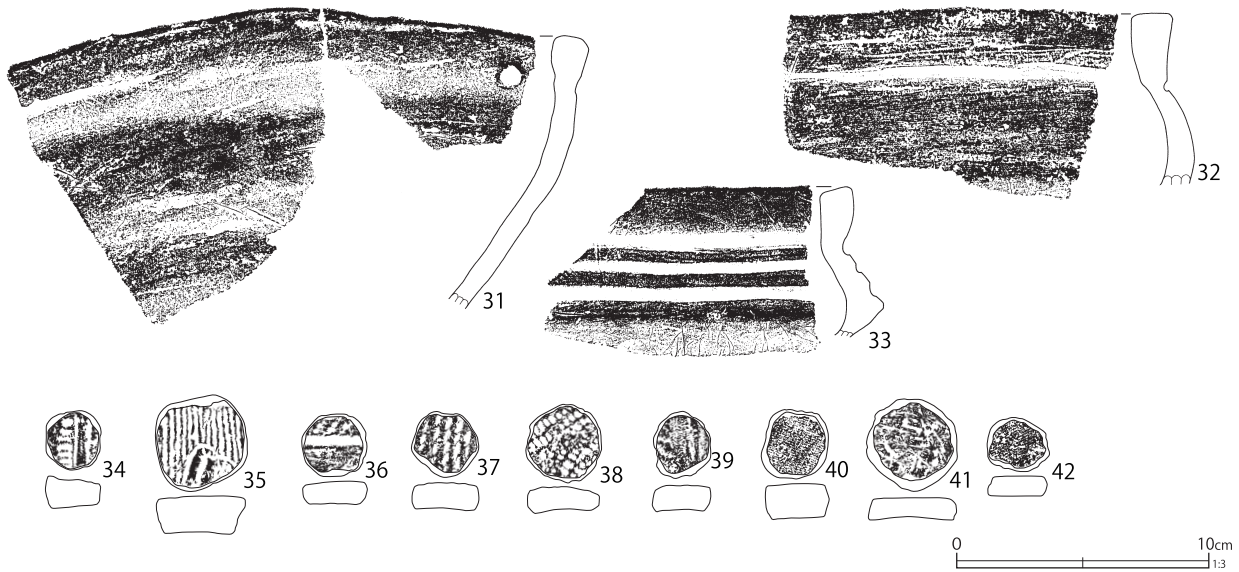
45は凹基の鏃で、先端部を折損する。長さ1.8cm、幅1.5cm、厚さ0.4cm、重さ0.89gである。石材はチャートである。

46は凹基の鏃で、先端部が折損する。長さ1.5cm、幅1.4cm、厚さ0.4cm、重さ0.69gである。石材はチャートである。

47は凹基の鏃で、ほぼ中段から先端部側を折損する。プロポーシオンは43に似て、基部は深く切れ込む。長さ2cm、幅1.6cm、厚さ0.6cm、重さ1.46gである。石材は黒曜石である。



第 266 図 第 35 号住居跡遺物出土遺物（3）



第 267 図 第 35 号住居跡遺物出土遺物（4）

48は平基で、両側縁が緩やかな内向きのカーブを描く。長さ2.1cm、幅1.6cm、厚さ0.6cm、重さ1.21 gである。石材はチャートである。

49は平基の鏃である。二等辺三角形のプロポーションで、先端部はやや鈍角である。長さ1.6cm、幅1.3cm、厚さ0.5cm、重さ0.7 gである。石材は黒曜石である。

50～53は打製石斧である。

50は短冊形である。両側縁と刃部腹面側に剥離が集中し、基部は無加工である。長さ11.5cm、幅5.1cm、厚さ2.5cm、重さ190.72 gである。石材は安山岩である。

51は短冊形の石斧で、背面に広く自然面を残す。中央が張り出す三角形の刃部を持つ。長さ10.6cm、幅4.6cm、厚さ2.3cm、重さ144.97 gである。石材はホルンフェルスである。

52はやや寸詰まりの撥形である。背面に打割面を持つ。両側縁に剥離が集中して、緩やかな内向きのカーブを作り出す。長さ8.8cm、幅6.3cm、厚さ1.7cm、重さ108.64 gである。石材はホルンフェルスを使用する。

53は短冊形で、刃部と基部が折損する。背面に残る自然面に擦痕がみられることから、磨石から

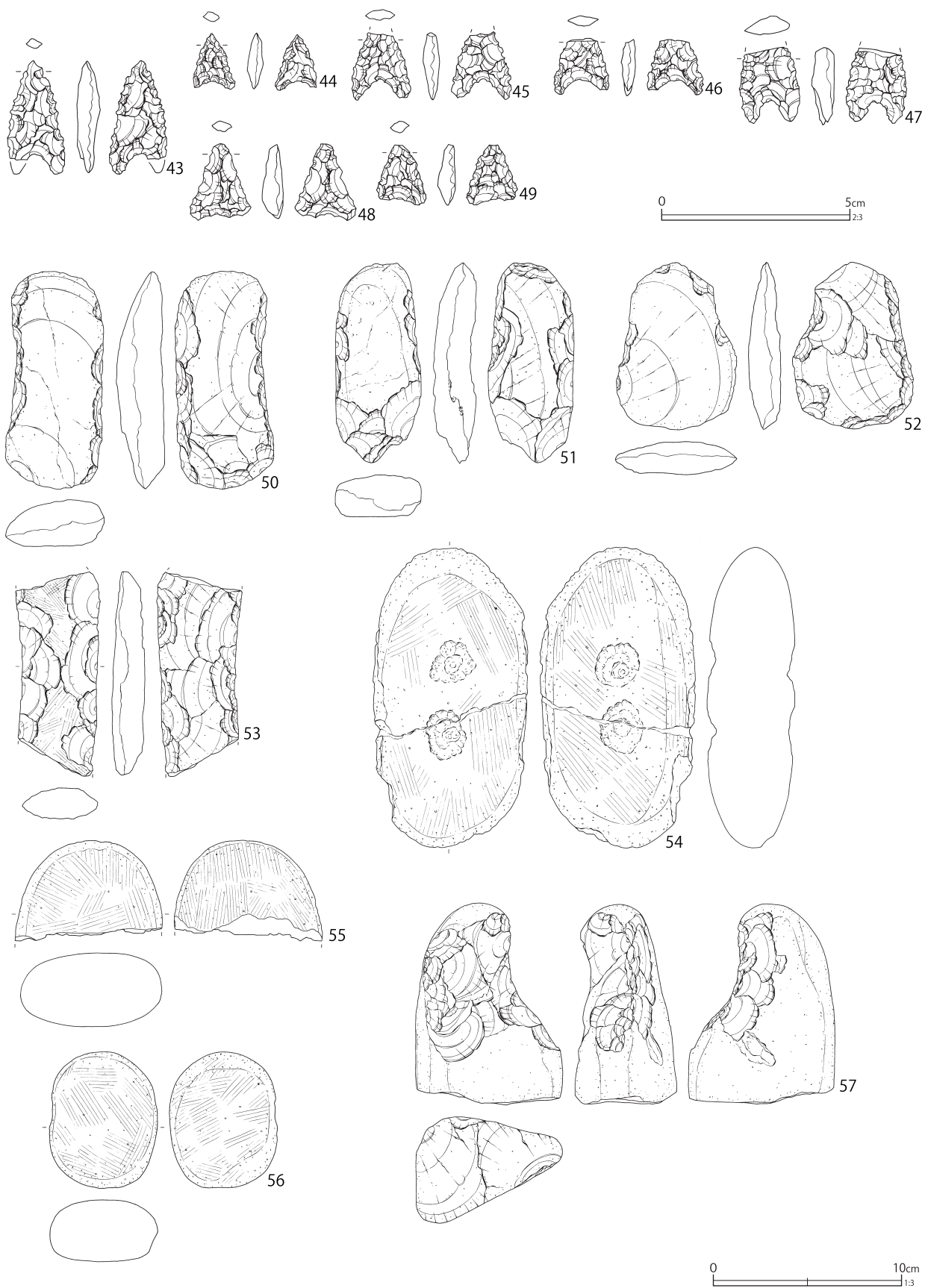
転用された可能性がある。長さ10.8cm、幅4.5cm、厚さ1.6cm、重さ102.68 gである。石材は砂岩である。

54～56は磨石である。54は楕円形で、表裏に使用面を持つ。また、凹石に転用されており、表裏各2つの凹孔を持つ。本資料は中段から二つに折れた状態で炉石に転用されていた。長さ16.8cm、幅8.2cm、厚さ4.6cm、重さ839.2 gである。石材は多孔質安山岩である。

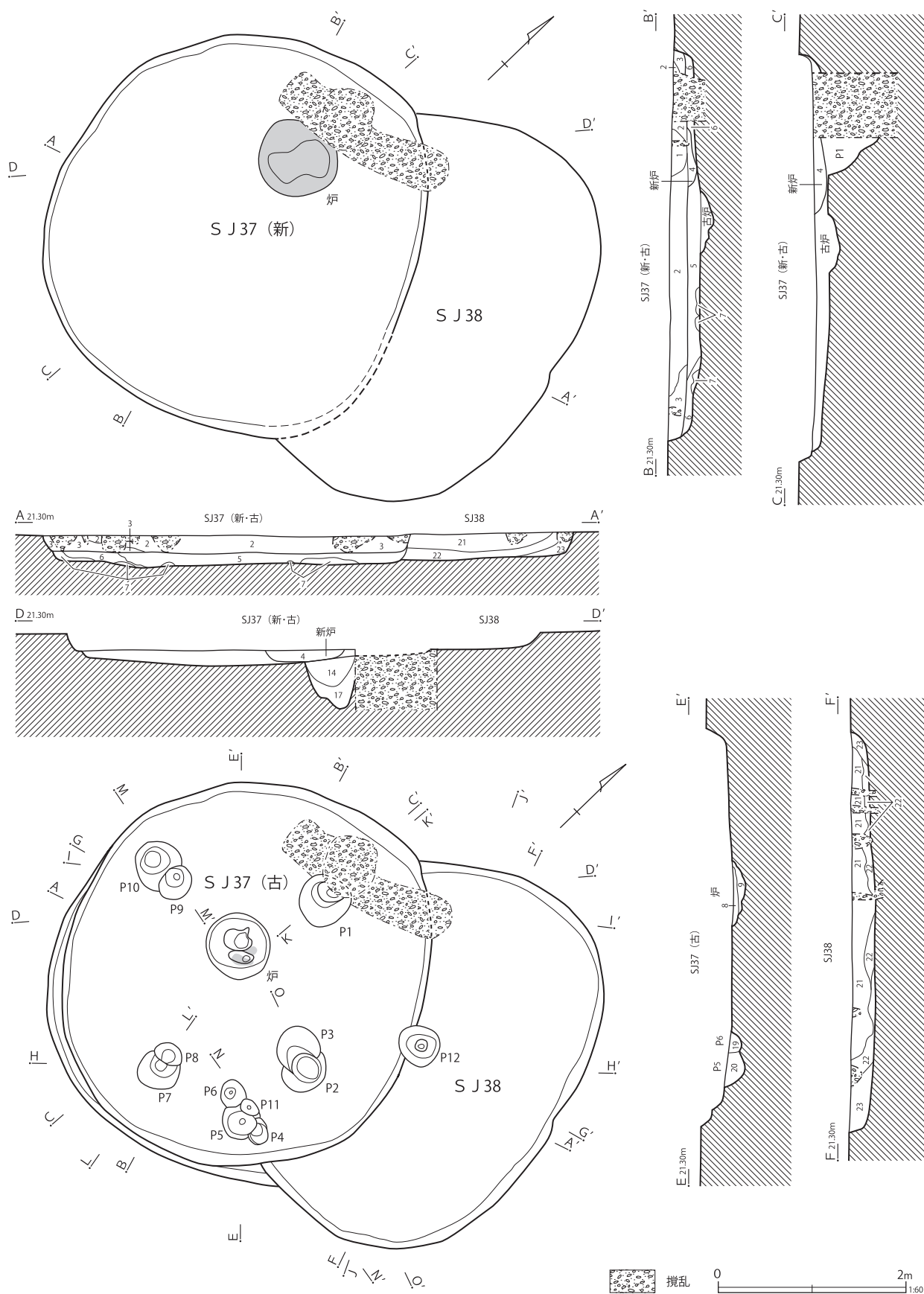
55は中央から折損しているが、円形ないし楕円形で、表裏に使用面を持つ。長さ5.3cm、幅7.7cm、厚さ4cm、重さ202.44 gである。石材は安山岩である。

56も炉石に転用されていたもので、楕円形の磨石である。両面使用される。長さ7.2cm、幅5.7cm、厚さ3.3cm、重さ140.69 gである。石材は多孔質安山岩である。

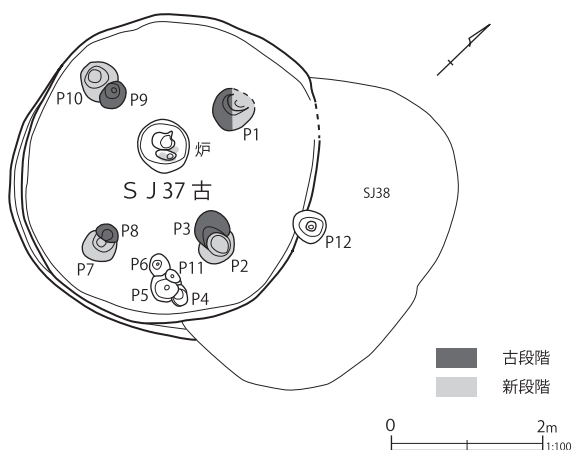
57はいわゆる凡字型石器である。楕円形の礫を短軸方向に割り、さらに片側縁に打撃を繰り返して深い抉りを形成している。底面には交差する2方向の剥離がみられるが、顕著な摩耗は示していない。長さ10.6cm、幅7.8cm、厚さ5.4cm、重さ469.1 gである。石材はシルト岩である。



第 268 図 第 35 号住居跡出土遺物（5）



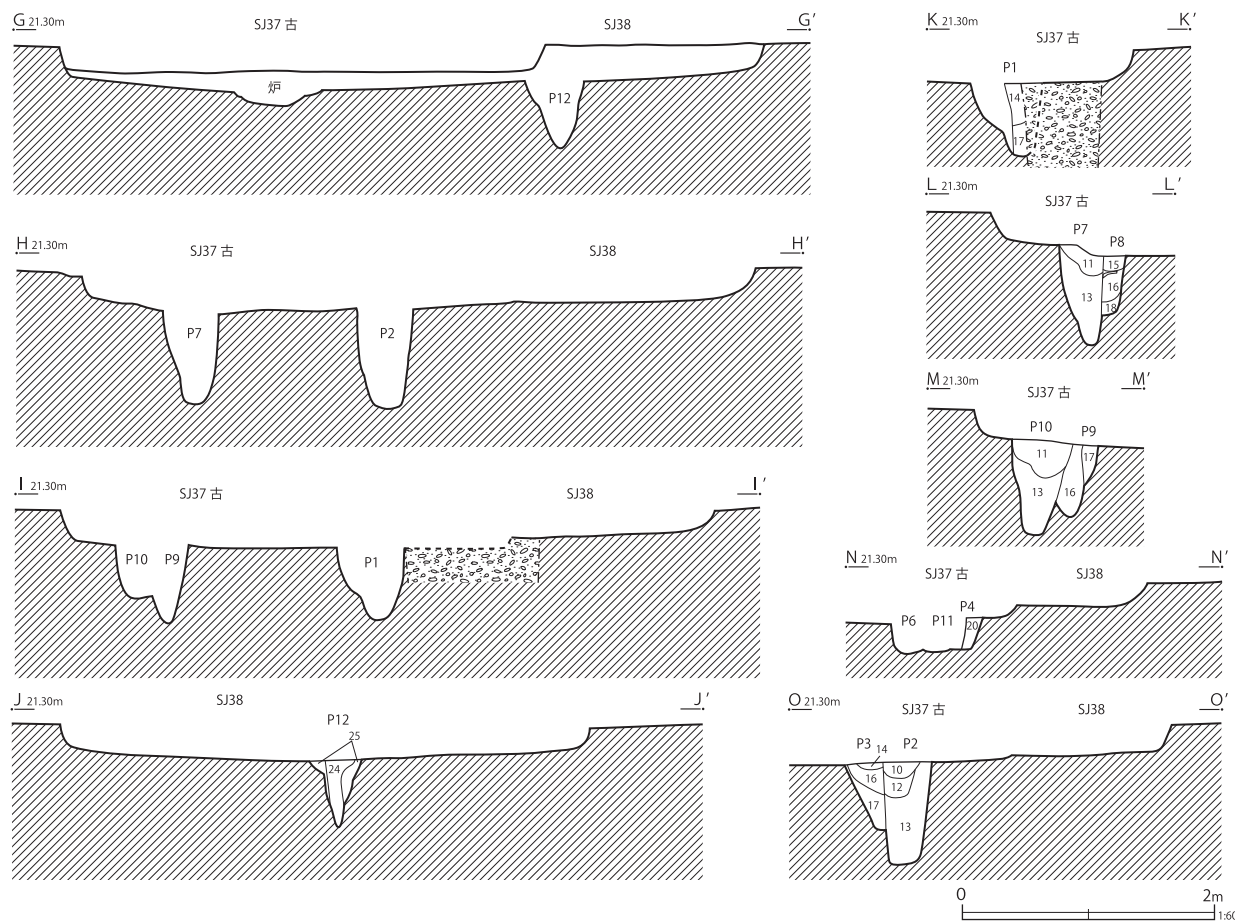
第 269 图 第 37·38 号住居迹 (1)



第 270 図 第 37 号住居跡柱穴変遷図

第 30 表 第 37 号住居跡柱穴計測表

ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)
P 1	54.0	60.7	P 2	52.0	79.0
P 3	46.0	51.7	P 4	28.0	14.6
P 5	38.0	21.7	P 6	30.0	49.4
P 7	44.0	76.0	P 8	32.0	44.0
P 9	38.0	60.5	P10	54.0	76.6
P11	22.0	14.4	P12	45.0	53.6



S J 37・38

- 1 極暗褐色土層 : ローム粒子多く 焼土粒子・炭化物若干含む
- 2 暗褐色土層 : ローム粒子若干 焼土粒子少量 炭化物若干含む
- 3 暗褐色土層 : ロームブロック若干 ローム粒子多く 炭化物若干含む
- 4 暗褐色土層 : ロームブロック少量 ローム粒子多く 焼土ブロック・炭化物若干含む SJ37 (新) の炉
- 5 暗褐色土層 : ロームブロック若干 焼土ブロック少量 炭化物若干含む
- 6 暗黄褐色土層 : ロームブロック若干 ローム粒子多く含む
- 7 暗黄褐色土層 : ロームブロック多く ローム粒子若干含む
- 8 暗褐色土層 : 焼土ブロック若干含む SJ37 (古) の炉
- 9 暗褐色土層 : ロームブロック・ローム粒子・焼土ブロック若干含む SJ37 (古) の炉
- 10 暗褐色土層 : ロームブロック・炭化物少量含む
- 11 暗褐色土層 : ロームブロック若干 焼土ブロック・炭化物少量含む

- 12 暗褐色土層 : ロームブロック・炭化物少量含む
- 13 暗褐色土層 : ロームブロック微量 炭化物少量含む
- 14 暗褐色土層 : ロームブロック微量 焼土ブロック・炭化物少量含む
- 15 暗褐色土層 : ロームブロック少量 焼土ブロック微量 炭化物少量含む
- 16 暗褐色土層 : ロームブロック若干 焼土ブロック・炭化物少量含む
- 17 暗褐色土層 : ローム粒子若干 炭化物少量含む
- 18 暗褐色土層 : ロームブロック若干 ローム粒子少量含む
- 19 暗黄褐色土層 : ロームブロック・ローム粒子若干含む
- 20 暗黄褐色土層 : ロームブロック若干 ローム粒子多く含む
- 21 極暗褐色土層 : ローム粒子若干 焼土粒子少量 炭化物若干含む
- 22 暗褐色土層 : ロームブロック若干 ローム粒子多く 炭化物若干含む
- 23 暗黄褐色土層 : ローム粒子多く 炭化物少量含む
- 24 暗黄褐色土層 : ロームブロック若干 ローム粒子多く含む
- 25 暗黄褐色土層 : 粗粒ロームブロック若干 ローム粒子多く含む

第 271 図 第 37・38 号住居跡 (2)

第37号住居跡（第269～272図）

N・O-14グリッドに位置する。第38号住居跡を壊している。覆土掘削中に炉跡を検出し、上下2面の床面が存在することが判明した。上位のものを第37号（新）、下位を第37号（古）と仮称した。

第37号（新）住居跡

長径4.08m、短径4.06mの楕円形の住居跡で、主軸方向はN-47°-Wを指す。壁は比較的緩やかに立ち上がり、壁高は最も深い部分で0.16mである。床面は平坦で、南方向へ緩やかに傾斜している。壁溝は検出できなかった。

主軸線上北壁寄りで炉跡を検出した。不整円形の地床炉で、直径87cm、深さ15cmである。

床面上からピットは検出できなかった。また、第37号（古）の床面を調査した際にも、本住居跡の炉跡に対応する柱穴は検出されなかった。

覆土はほぼ単層である。所属時期は勝坂式末～加曾利E I 式期と考えられる。

第37号（古）住居跡

長径4.23m、短径3.89mの楕円形の住居跡で、主軸方向はN-47°-Wを指す。壁は比較的緩やかに立ち上がり、壁高は最も深い部分で0.23mである。床面は平坦で、中央部分がわずかに下がっている。壁溝は検出できなかった。

主軸線上やや奥壁寄りに炉跡を検出した。円形の地床炉で、直径70cm、深さ12cmである。

床面上から12本のピットが検出された。これらのうちP 1～3・7～10が主柱穴で4本柱の上屋を構成するものと考えられ、また、切り合いや覆土の状態から新旧の時間差が存在し、建て替えが行われた可能性がある。

具体的には、住居床面の外周で壁近くに位置するP 2・7・10が新段階、内周のP 1・3・8・9が古段階に属するものと考えられる。P 1に対応する新段階の柱穴は検出できず、隣接する攪乱により破壊されたものとみられる。

主軸線上南東側の壁近くにP 4～6・11が集中しており、これが出入り口施設の痕跡と考えられる。覆土は壁際の三角堆積層を除けばほぼ単層で、遺物は主に炉の周辺から少量出土している。所属時期は勝坂式末～加曾利E I 式期と考えられる。

第37号住居跡出土遺物

土器（第274～277図）

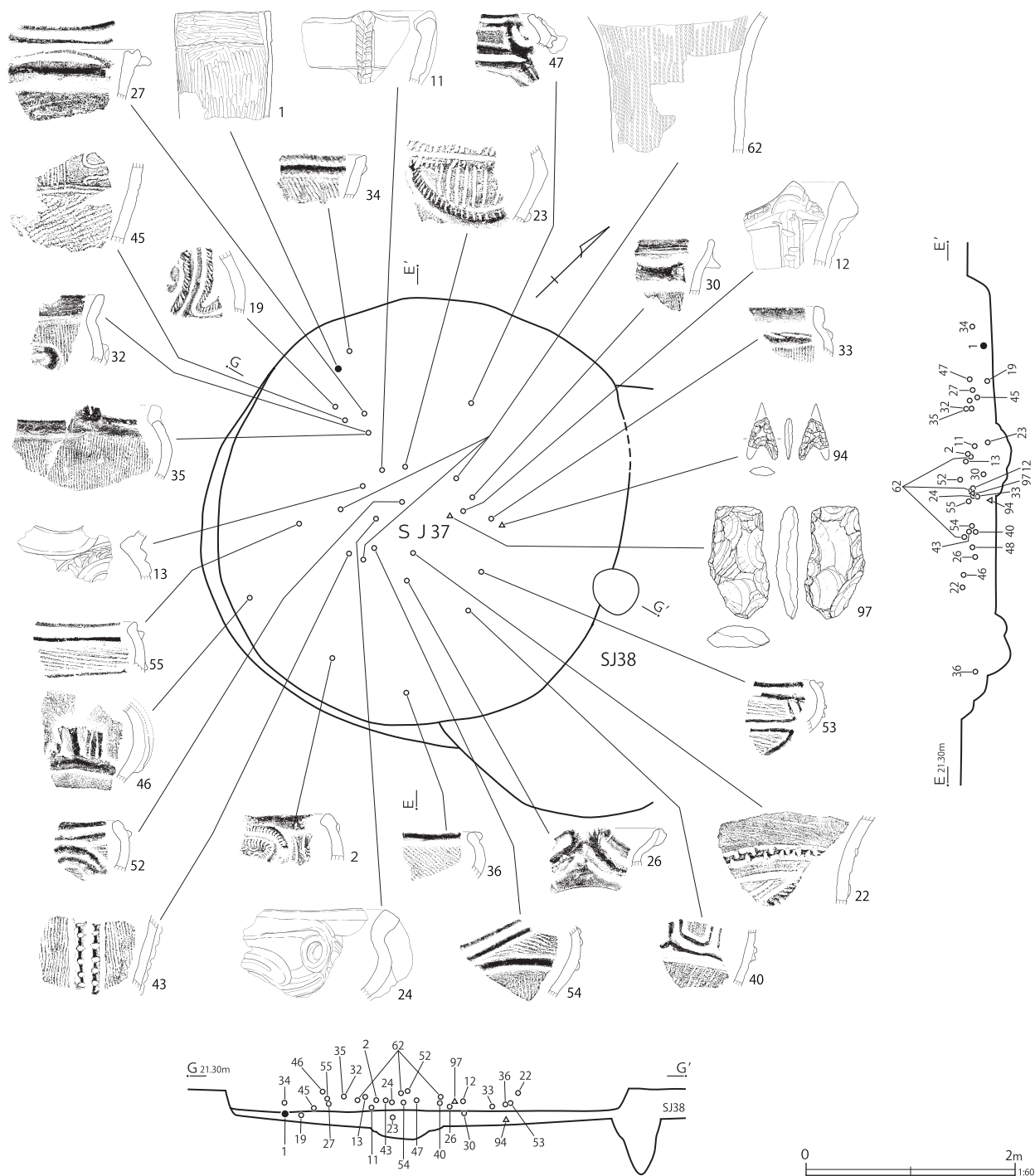
1は無文の円筒形深鉢である。水平口縁の折り返し口縁で、外面に段を持つ。復元最大径は約11.2cm、現存高は約13.9cmである。胎土は若干の小礫・砂・黒雲母粒子を含む。器壁は外面暗橙色で黒斑がみられ、内面黒褐色である。焼成は良好である。

2～6は勝坂Ⅱ式である。2は内湾する口縁部で、キャリバー形の深鉢である。折り返し口縁で表裏に段を持ち、口縁直下には刻みを持つ隆帯で楕円形の区画文を描く。区画の内部には半裁竹管状工具による平行沈線文とキャタピラ文、弧状の刺突列が巡る。

3・4は円筒形の深鉢で、いずれも折り返し口縁である。3は多段の平行沈線間を縦位の短沈線により交互に刻む。4は半裁竹管状工具の爪型文を伴う隆帯が多段に巡り、同一工具による斜位の刺突を施す。5は半裁竹管状工具の平行沈線文で曲線的なモチーフを描き、これに沿ってキャタピラ文を施文する。6は隆帯による楕円形区画に沿ってキャタピラ文を施文する。

7～10はこれらに伴う阿玉台式である。いずれも胎土に金雲母を含む。7は折り返し口縁に沿って幅広の角押し文が巡る。8は口縁直下にV字状の隆帯を配し、半裁竹管状工具先端による斜位の刺突列が巡る。9は球胴状に張る胴上半部で、無文地に篋状工具による斜位の刻みが巡る。10は曲線的な隆帯に沿って半裁竹管状工具の平行沈線文を描き、同一工具による集合沈線文を施文する。

11～22は勝坂Ⅲ式である。11・12は円筒形深鉢口縁部で、口縁上の突起から縦位の隆帯が垂下す



第 272 図 第 37 号住居跡遺物出土状況

る。12の口唇上には交互刺突を伴う楕円形の区画文を配する。13・14はキャリパー形深鉢で、矢羽根状の刻みを持つ隆帯で楕円文を描く。15は円筒形深鉢で、口端内屈する。

16・19～23は胴部の文様帯である。刻みを持つ隆帯で区画文を描く。20は区画内部に雨だれ状の列点文を充填する。22は頸部に無文帯を持ち、胴

部との境を交互刺突を伴う平行沈線で区画する。23は隆帯と集合沈線による楕円文である。

22は浅鉢口縁部～胴上半部で、眼鏡状突起を配し、扁平な隆帯による文様を描く。

25～42は中峠系の土器である。25は口縁直下が「く」の字に張り出して刻み隆帯が巡り、半裁竹管状工具による円文と楕円形区画を描く。

26は先割れの波状口縁で、隆帯による楕円形区画が巡る。27は口縁直下に隆帯+沈線の楕円文が巡る。28は胴上半部が張り出し、頸部が屈曲して、無文の口縁が立ち上がる。

29も無文の口縁で、口端内屈して上面に広い平坦面を形成する。胴上半部は張り出して縄文を施文する。30・31は外反口縁で、頸部に隆帯が巡る。30の隆帯には縦位の押圧がみられる。32は胴上半部が張り出して、2本隆帯による曲線文を描く。33も胴張りで、頸部に斜めの短沈線を伴う隆帯が巡る。

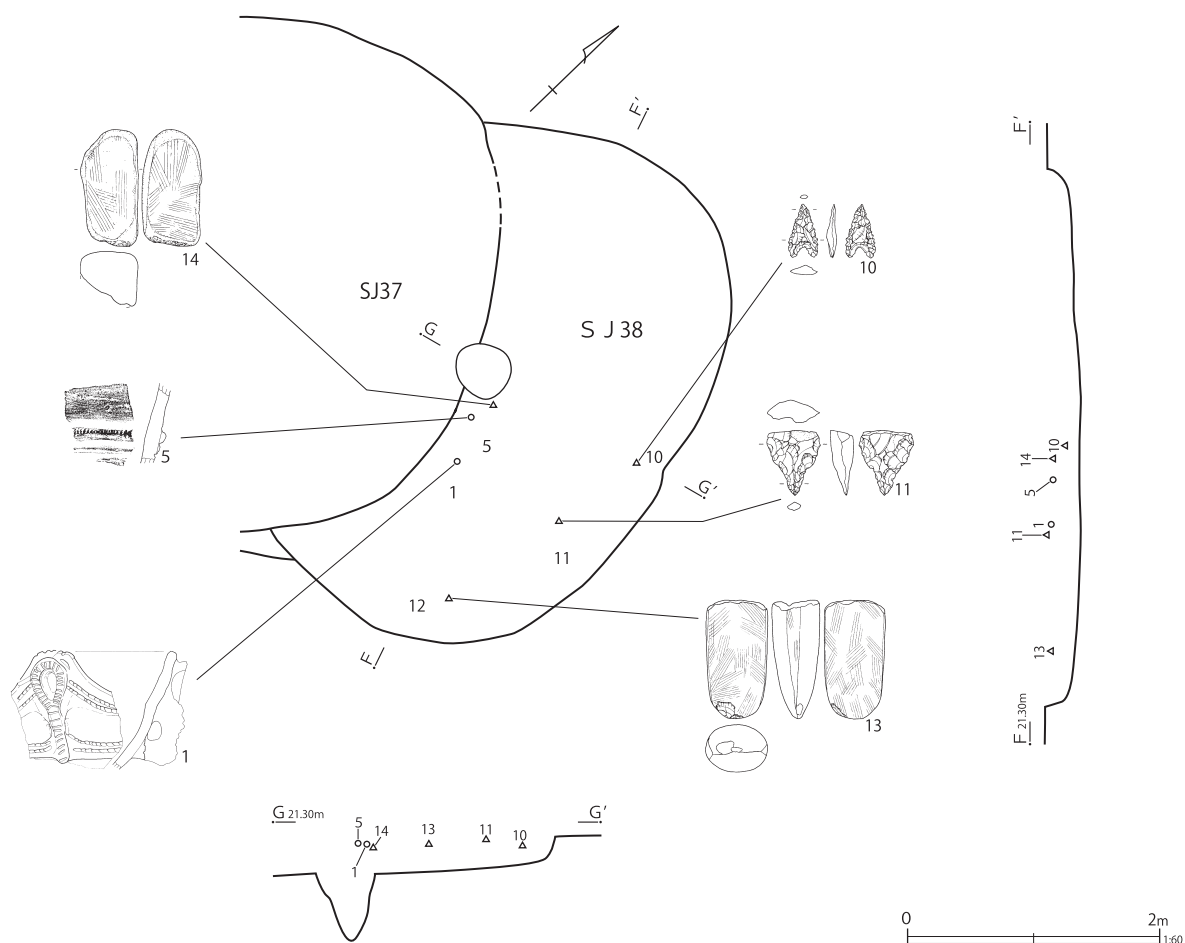
34は無文の外反口縁で、口縁直下に1条の隆帯が巡る。胴部にはL無節縦位回転の縄文を施文するが、口縁部の隆帯に沿って同一原体の側面圧痕が巡る。35・36は内湾口縁で、35は1個の瘤状突起を配する。37～40は隆帯文を持つ胴上半部であ

る。

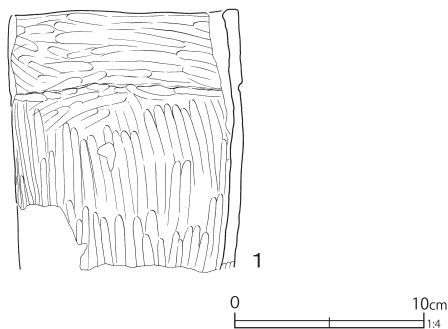
41・42は集合沈線文上に刻み隆帯によるモチーフを描く。42は文様帯下端を背割れの隆帯で区画し、胴下半部には撚糸文を施文する。43・44は刻みを持つ2本隆帯が垂下する胴部である。45は胴上半部に文様帯を持って沈線文を描き、胴下半部は縄文帯となる。46～49は曽利系の深鉢で、縦位の浮線+沈線を地文とする。

50～57は加曾利E I 式のキャリパー類深鉢である。上下を隆帯で区画した口縁部文様帯を持ち、2本隆帯で横S字文や十字文等を描く。50は内屈する口端上にも文様帯を持つ。54は文様帯下端の区画で、頸部に無文帯を持たない。

58～61はこれらに伴う胴部である。59・60は頸部との境を区画する隆帯で、60は頸部無文帯を持つ。61は半裁竹管状工具による区画が巡り、同一



第 273 図 第 38 号住居跡遺物出土状況



第 274 図 第 37 号住居跡出土遺物 (1)

工具による曲線文が胴部に展開する。

62～76は地文のみの胴部である。縄文・捺糸文がほぼ同比率で存在し、縄文はしばしば0段多条が用いられる。77～79は底部および直上の破片で、無文帯が存在する。

80～89は無文の浅鉢である。80・81は胴張りで頸部屈曲し、口縁は垂直に立ち上がる。81は折り返し口縁で、外面に段を持つ。85は同じ器形の胴上半部である。82・83は内湾口縁で、いずれも外面に段を持つ。84は外反口縁で、内面に稜を持つ。86～89は直線的に開く胴下半部で、86は内湾する胴上半部へと接続する。

90～92は土製円盤である。

石器 (第277図)

93～95はいずれも凹基の石鏃である。93は先端部折損する。長さ2cm、幅1.5cm、厚さ0.5cm、重さ1.05gである。石材は黒曜石である。94は先端部と右脚を折損する。長さ2cm、幅1.4cm、厚さ0.4cm、重さ0.81gである。石材は青灰色チャートである。95も先端部と右脚を折損する。長さ2cm、幅1.7cm、厚さ0.5cm、重さ1.4gである。石材は赤色チャートである。

96はスクレイパーである。不整な台形で、右側縁部に片刃の刃部を持つ。長さ4.4cm、幅3.9cm、厚さ1cm、重さ15.03gである。石材は頁岩である。

97は短冊形の打製石斧である。刃部が右へと湾曲しており、再生品の可能性がある。長さ10.8cm、

幅5.8cm、厚さ2.1cm、重さ137.52gである。石材は安山岩である。

第38号住居跡 (第269・271・273図)

N・O・14・15グリッドに位置する。第37号住居跡に壊されている。長径4.26m、短径は切り合いにより計測不能である。主軸方向はN - 21° - Wを指す。壁は緩やかに立ち上がり、壁高は最も深い部分で0.23mである。

床面は平坦で、中央がやや低くなっている。炉跡・壁溝・ピットは検出されなかった。覆土は上下2層からなり、遺物は主に上層からごく少量出土している。所属時期は勝坂Ⅱ式期と考えられる。

第38号住居跡出土遺物

土器 (第278図)

1は阿玉台Ⅱ式である。山形波状口縁で、波頂部に刻みを持つ。波頂部の直下には楕円形の貼付文と、横位の貫通孔を持つ扁平な橋梁状把手を配する。

これらの突起・把手は口縁部文様帯を垂直に分割しており、左右に三角形の区画を形成する。区画内部には複列の角押し文が巡り、文様帯下端は隆帯で区画する。胎土に多量の金雲母を含む。

2～5は勝坂Ⅱ式である。2・3は隆帯による区画文で、2は三角形、3は楕円形の区画を描き、隆帯に沿って幅広の角押し文が巡る。4は無文の口縁で、円筒形の深鉢とみられる。5は無文の口縁部～頸部と、胴部の文様帯との境界部分とみられ、半裁竹管による爪型文を伴う隆帯が巡る。

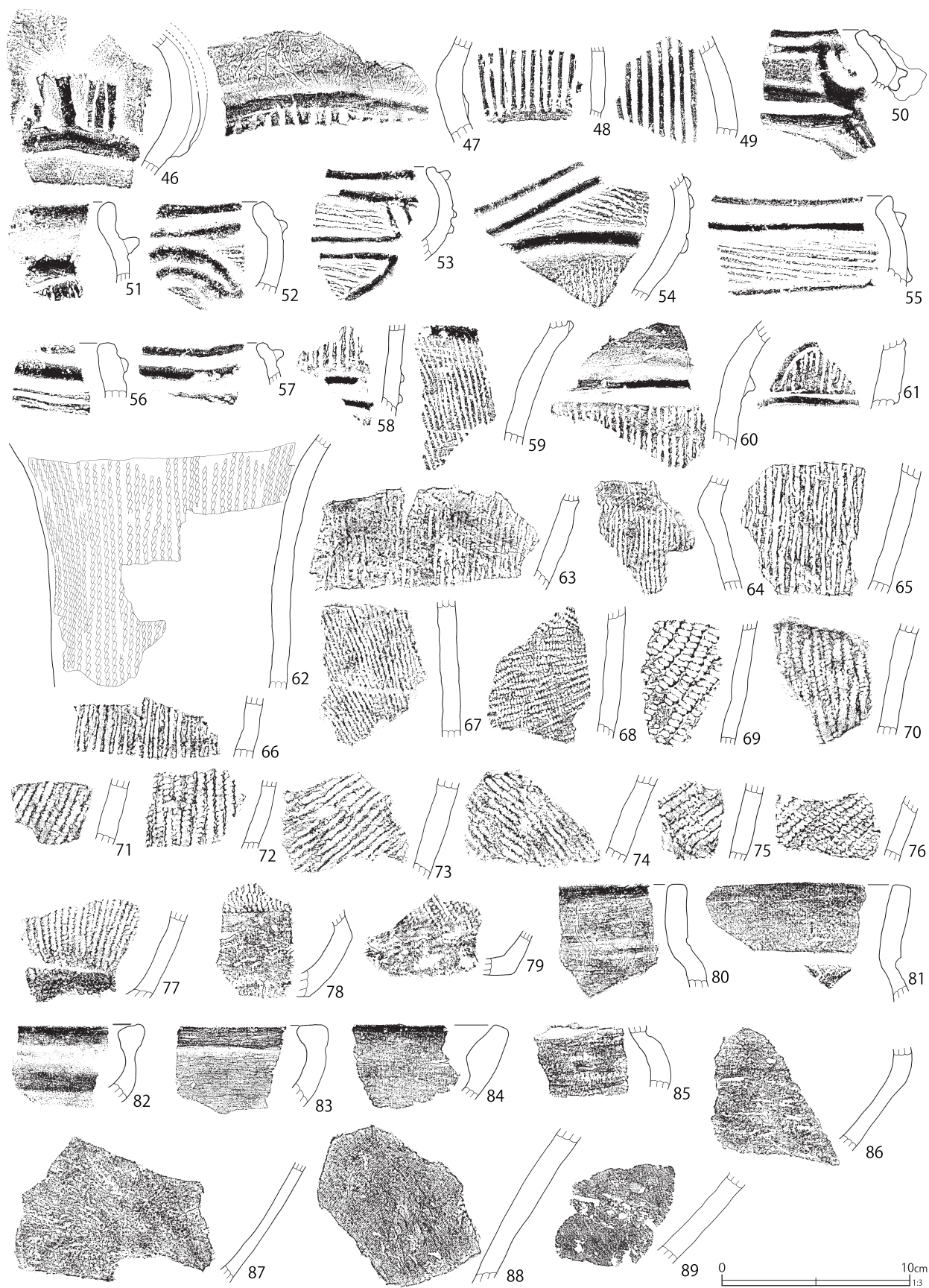
6・7は地文のみの破片で、RL横位回転の縄文を施文するが、いずれも0段多条の原体を使用している。8は有孔罌付土器である。断面三角形の罌の上面に貫通孔を持つ。罌の下には角押し文が巡る。

石器 (第278図)

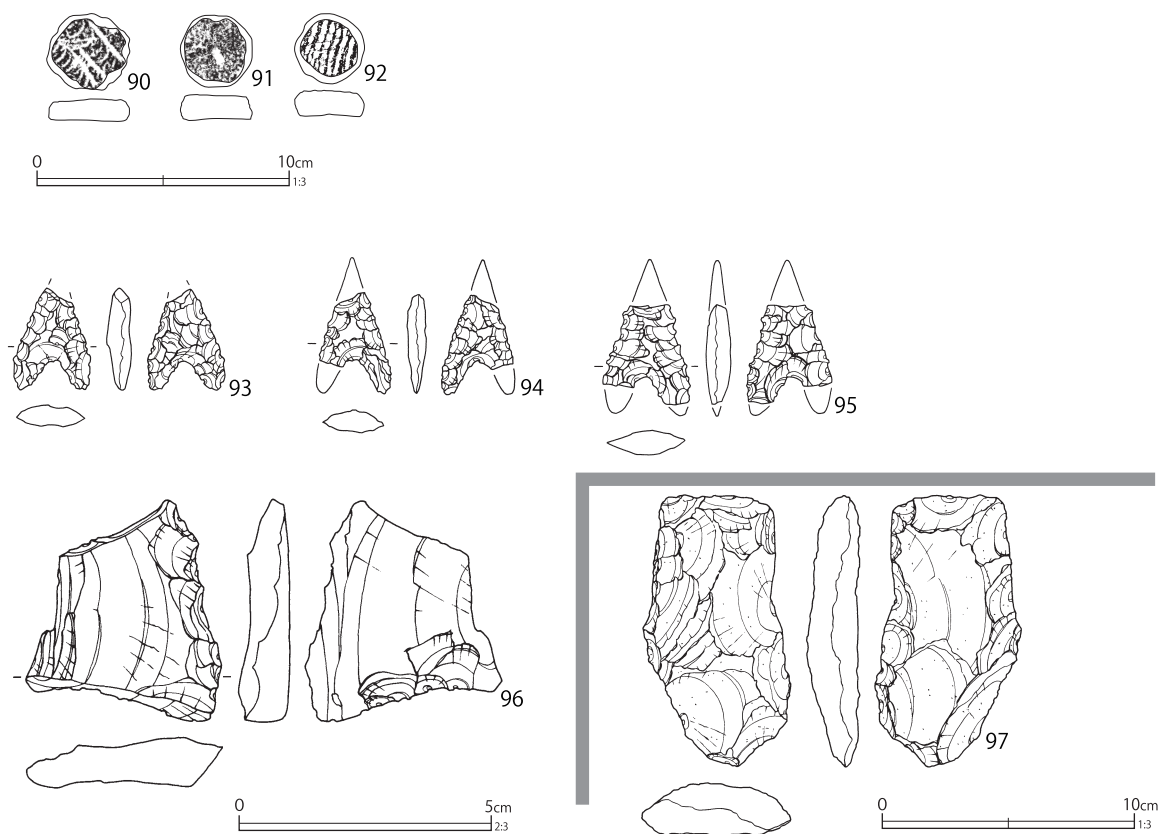
9・10は石鏃である。9は凹基で、長さ2.5cm、幅1.7cm、厚さ0.4cm、重さ1.52gである。石材は灰色チャートである。10はV字に切れ込む凹基



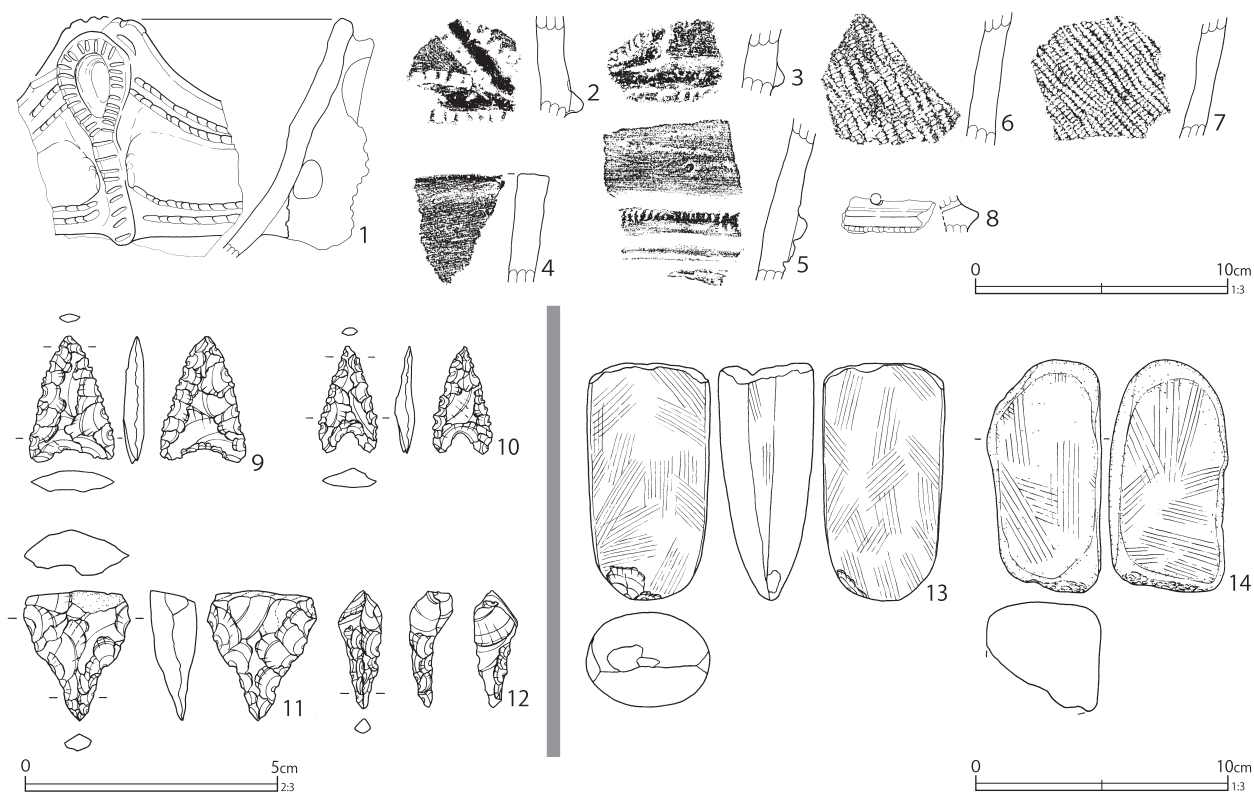
第 275 图 第 37 号住居跡出土遺物 (2)



第 276 图 第 37 号住居跡出土遺物 (3)



第 277 图 第 37 号住居跡出土遺物 (4)



第 278 图 第 38 号住居跡出土遺物

で、長さ2.1cm、幅1.2cm、厚さ0.4cm、重さ0.59gである。石材は青灰色チャートである。

11・12は石錐である。11は体部逆三角形で短い錐部を持つ。長さ2.6cm、幅2.1cm、厚さ0.9cm、重さ3.65gである。石材は青灰色チャートである。12は断面三角形の細長い錐部に小さなつまみが付くもので、長さ2.3cm、幅0.9cm、厚さ0.9cm、重さ0.82gである。石材は黒曜石である。

13は磨製石斧で、基部側が折損する。長さ9.5cm、幅4.8cm、厚さ3.8cm、重さ283.3gである。石材は安山岩である。14は磨石である。不整楕円形の礫を使用し、長軸一端が叩き石として使用される。長さ9.3cm、幅4.5cm、厚さ4.6cm、重さ259.24gである。石材は礫岩である。

第39号住居跡（第279・280図）

M - 10グリッドに位置する。第160・228号土壌および近世のピット多数に壊されている。また、覆土北西部分、全体の二分の一近くが調査区域外に存在する。

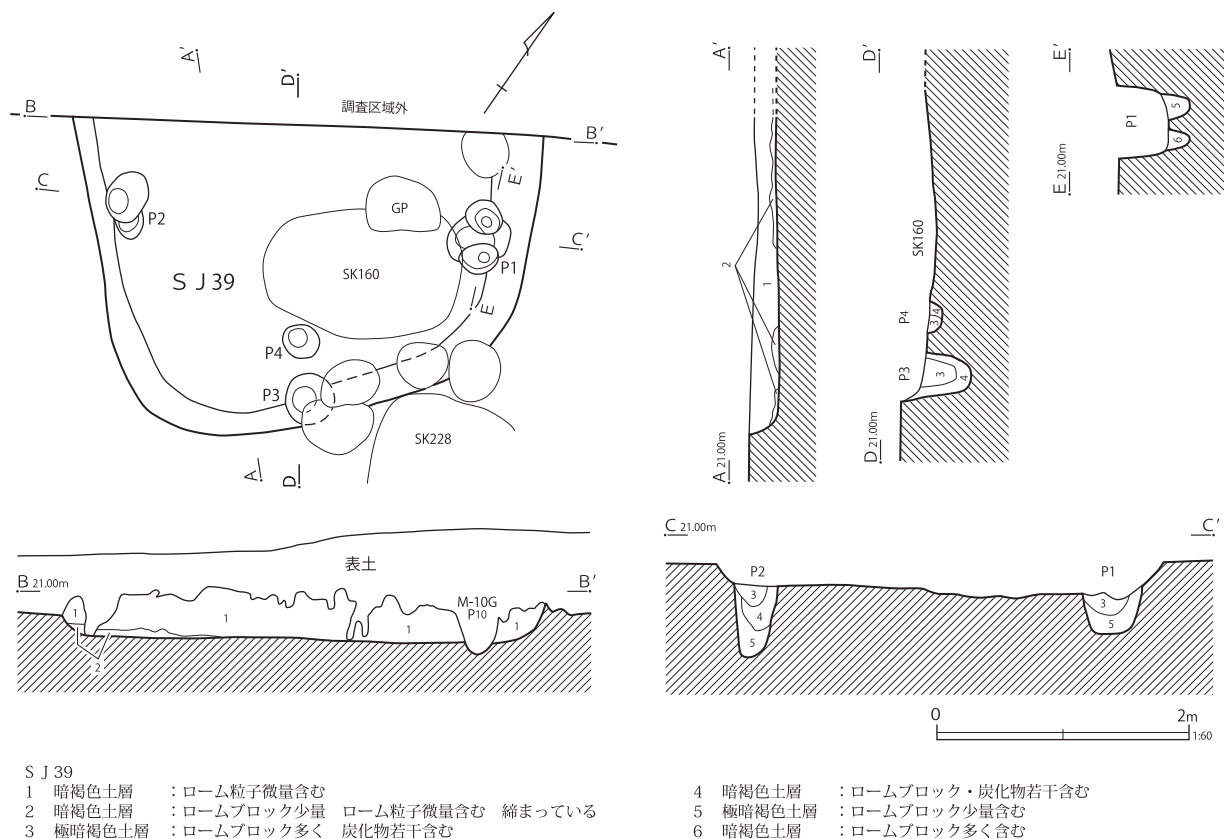
長径は計測不能、短径3.75mで、主軸方向はN - 33° - W付近に存在するものとみられる。壁は比較的緩やかに立ち上がる。壁高は最も深い部分で0.22mである。

床面は平坦で、東方向へと緩やかに傾斜している。炉跡および壁溝は検出できなかった。床面上から4本のピットが検出された。これらのうちP1・2は主柱穴と考えられるが、柱穴配置は不明である。主軸線上南東側の壁近くにP3・4が存在し、これらは出入り口施設の可能性がある。

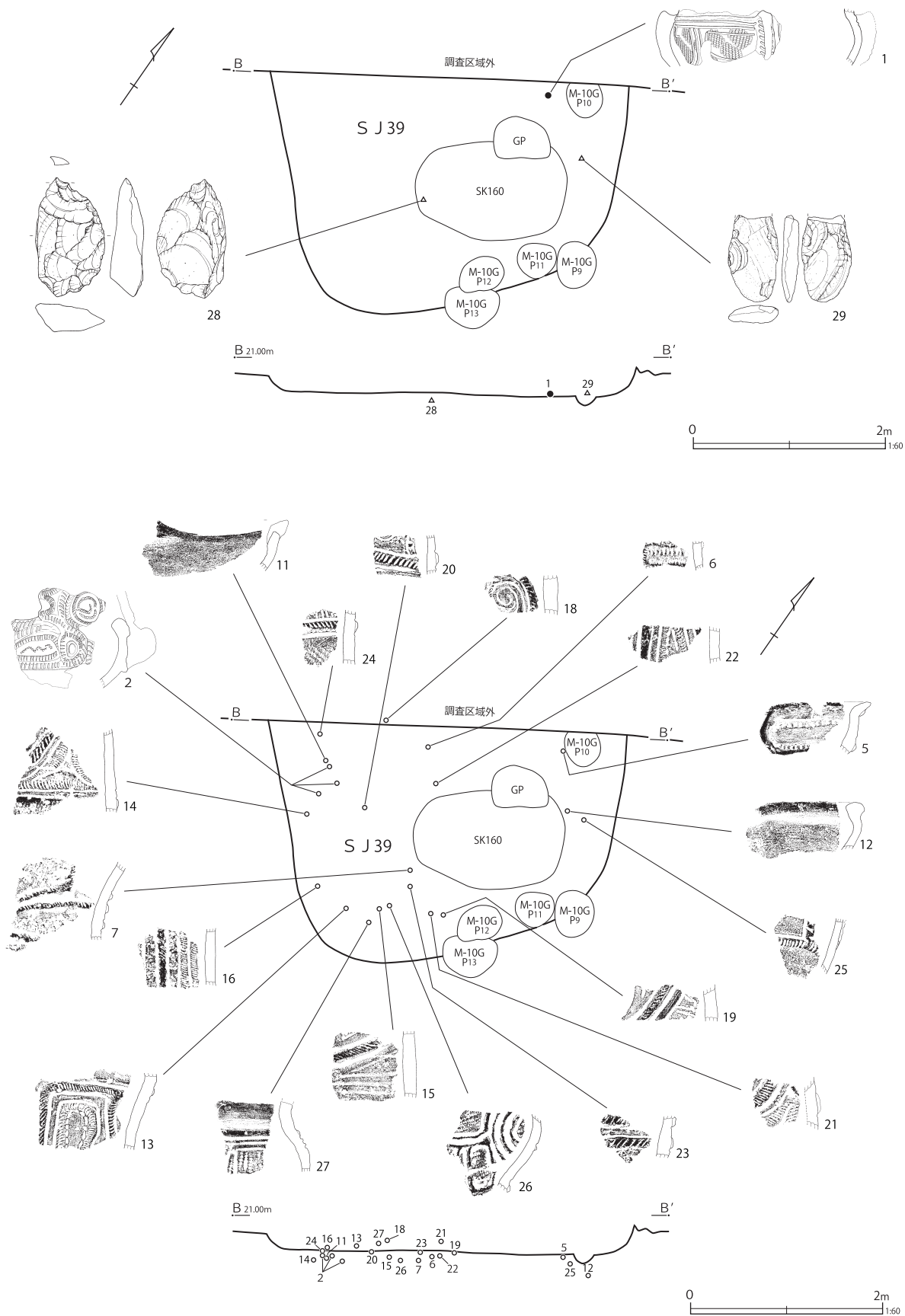
覆土は単層で、遺物は主に床面付近から少量出

第31表 第39号住居跡柱穴計測表

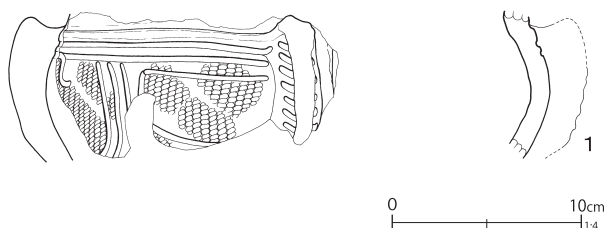
ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)
P1	58.0	63.0	P2	52.0	74.6	P3	42.0	54.4	P4	30.0	15.2			



第279図 第39号住居跡



第280図 第39号住居跡遺物出土状況



第 281 図 第 39 号住居跡出土遺物 (1)

土した。所属時期は勝坂Ⅲ式期と考えられる。

第39号住居跡出土遺物

土器 (第281・282図)

1 は深鉢胴下半部である。両側縁に刻みを持つ鱗状の突起で器面を縦位に分割し、平行沈線による半円形の区画文を描く。胴部中段には無文帯を持ち、文様帯との境を隆帯+平行沈線文で区画する。地文はRL単節の縄文を右下がりに施文する。

突起部分を含む復元最大径は約30.8cm、現存高は約7.7cmである。胎土は砂質である。器壁は外面灰橙色、内面茶褐色である。焼成は良い。外面が被熱により風化している。

2～27は破片資料である。2～7は勝坂Ⅰ式で、隆帯による区画文に沿って角押し文や三角押し文を施文する。

8～25は勝坂Ⅲ式で、刻み隆帯に沿って爪型文や平行沈線文を描き、余白に渦巻文や三叉文を配する。8・9は円筒形深鉢の口縁部で、8は幅狭の無文帯を持つが、9は集合沈線文を描く。10は口縁部直下に凹線を持ち胴上半部が軽微に張るもので、12も類似の器形とみられる。11は波状口縁で、波頂部に何らかの突起が付される。23～25は文様帯下端の区画で、いずれも刻みを持つ隆帯が巡る。

26・27は中峠系の土器である。26は4本隆帯による渦巻文を描き、一部の隆帯間に幅広の角押し文を施文する。27は胴部中段に無文帯を持ち、胴下半部に平行沈線文を描くもので、1と同一個体の可能性がある。

石器 (第282図)

28は尖頭器である。横長の剥片を素材に右側縁からの剥離を繰り返し、木葉形のプロポーションをつくりだしている。長さ6.2cm、幅3.6cm、厚さ1.7cm、重さ35.6gである。石材は頁岩である。

29は短冊形の打製石斧で、中段から短軸方向に折損する。背面に広く自然面を残す。両側縁に調整剥離が集中して抉りを作り出し、刃部はほとんど無加工である。長さ9cm、幅5.1cm、厚さ1.8cm、重さ97.47gである。石材は砂岩である。

第40号住居跡 (第283～289図)

N・11グリッドに位置する。第203・224号土壇に壊されている。長径4.29m、短径3.76mの楕円形の住居跡で、主軸方向はN・36° - Wを指す。壁は緩やかに立ち上がり、壁高は最も深い部分で0.3mである。壁溝は検出できなかった。

床面は平坦で、北西方向に緩やかに下がっている。主軸線上奥壁寄りで炉跡を検出した。埋甕炉で、深鉢胴部中段を正位に埋設していた。土器の周囲に掘りかたを検出した。長径91cm、短径70cm、深さ21cmで、土器にくらべ掘りかた部分が大きく、土器の外側にも大量の焼土が堆積していたことから、土器埋設以前にも地床炉として機能していたことも考えられる。

床面上から18本のピットが検出された。これらのうちP1～14が支柱穴と考えられる。

さらに、これらの柱穴には新旧の時間差が存在し、

$$\text{古段階} = P 3 \cdot 6 \cdot 9 \cdot 12$$

$$\text{中段階} = P 2 \cdot 5 \cdot 8 \cdot 11 \cdot (14 \cdot 15)$$

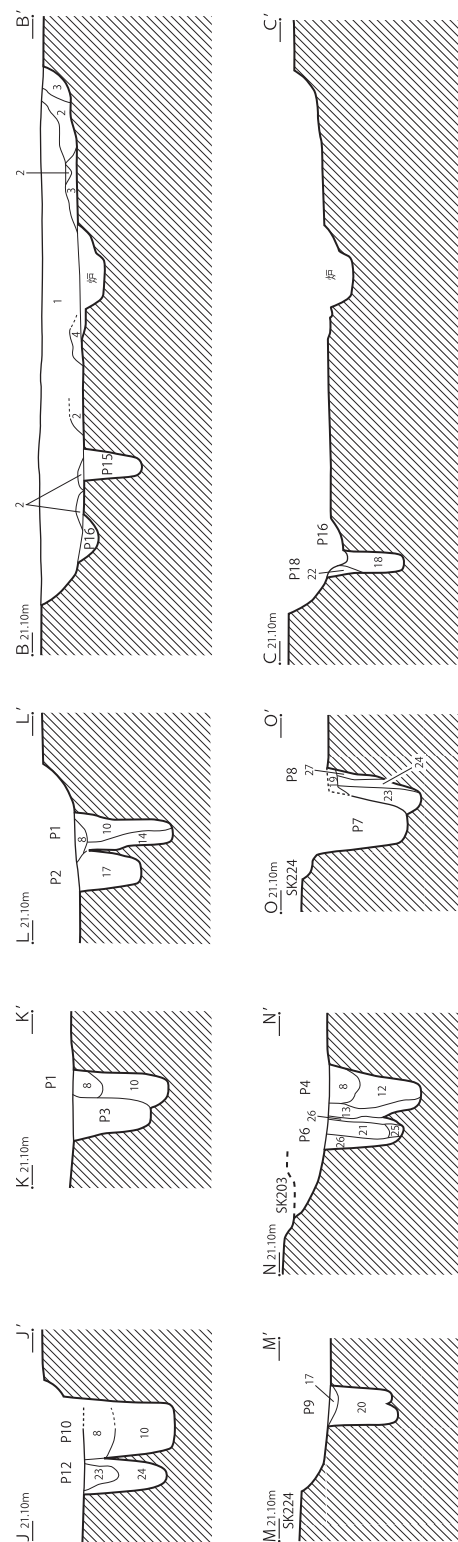
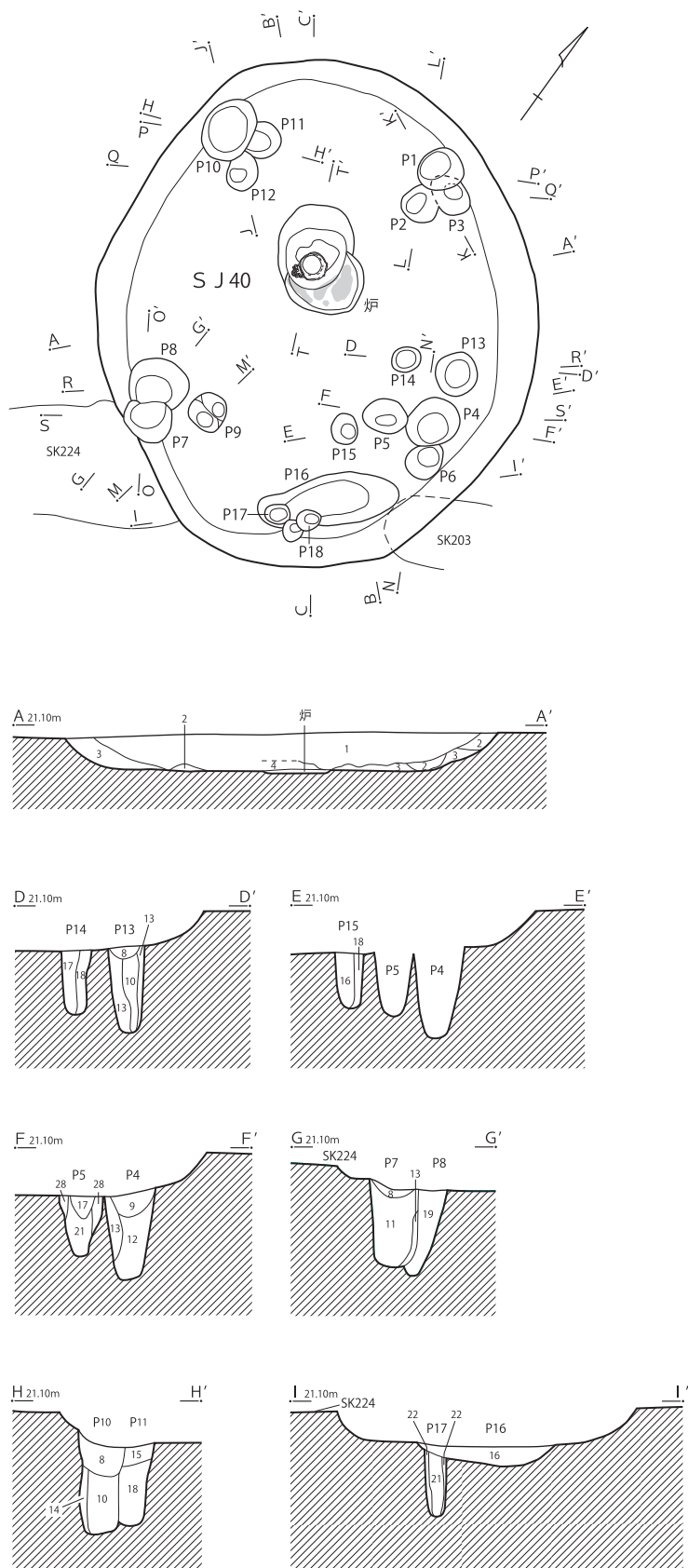
$$\text{新段階} = P 1 \cdot 4 \cdot 7 \cdot 10 \cdot (13)$$

という変遷をたどるものと考えられる。いずれも基本的な柱穴配置は4本柱で、南東コーナー部分のみ北側に重複して同等の規模の柱穴が存在している。

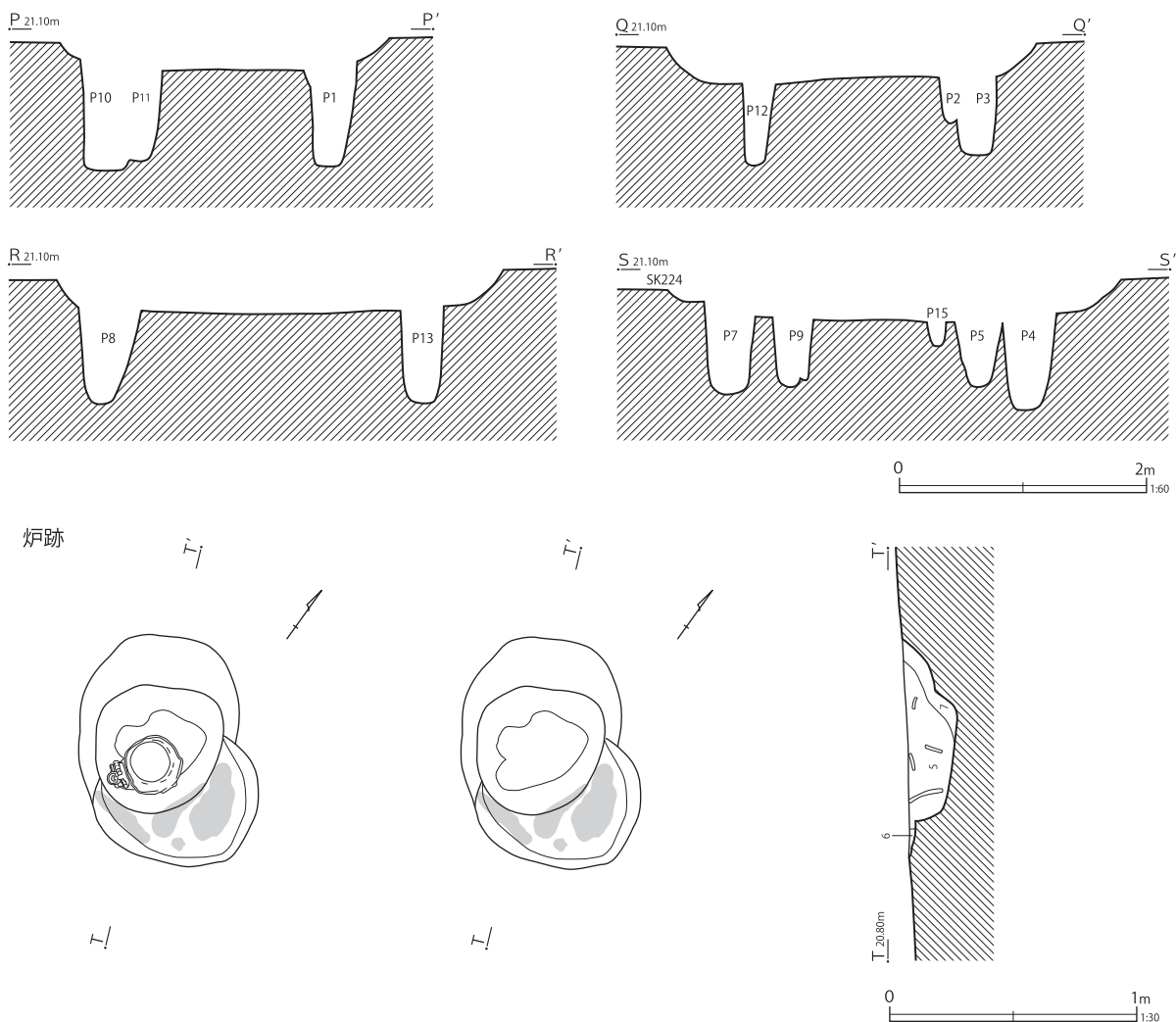
主軸線上南東側の壁近くにP16～18が存在し、これが出入り口施設と考えられる。覆土は壁際の



第 282 图 第 39 号住居跡出土遺物 (2)



第 283 图 第 40 号住居跡 (1)



S J 40

- 1 極暗褐色土層 : ロームブロック若干 焼土ブロック少量 炭化物若干含む
 2 極暗褐色土層 : ロームブロック微量 ローム粒子若干 炭化物少量含む
 3 暗褐色土層 : ロームブロック・ローム粒子若干 炭化物少量含む
 4 暗褐色土層 : ロームブロック・焼土ブロック若干 炭化物少量含む
 5 暗褐色土層 : ロームブロック多く 焼土ブロック・炭化物若干含む
 6 暗褐色土層 : ロームブロック・焼土ブロック多く 炭化物若干含む
 7 暗褐色土層 : ロームブロック・焼土ブロック多く 炭化物少量含む
 8 暗褐色土層 : ロームブロック若干 炭化物少量含む
 9 暗褐色土層 : ロームブロック若干 焼土ブロック・炭化物少量含む
 10 暗褐色土層 : ロームブロック若干 ローム粒子多く 炭化物少量含む
 11 暗褐色土層 : ロームブロック微量 ローム粒子多く 炭化物少量含む
 12 暗褐色土層 : ロームブロック・炭化物少量含む
 13 暗褐色土層 : ロームブロック若干 ローム粒子・炭化物少量含む
 14 暗黄褐色土層 : ロームブロック若干 ローム粒子多く 炭化物少量含む

- 15 暗褐色土層 : ロームブロック多く 炭化物少量含む
 16 暗黄褐色土層 : ロームブロック少量 ローム粒子多く 炭化物少量含む
 17 暗褐色土層 : ロームブロック若干 炭化物少量含む
 18 暗褐色土層 : ロームブロック少量 ローム粒子若干 炭化物少量含む
 19 暗黄褐色土層 : ロームブロック少量 ローム粒子多く含む
 20 暗黄褐色土層 : ロームブロック少量 ローム粒子多く 炭化物少量含む
 21 暗褐色土層 : ロームブロック・ローム粒子若干 炭化物少量含む
 22 暗黄褐色土層 : ロームブロック・ローム粒子多く 炭化物少量含む
 23 暗黄褐色土層 : ロームブロック多く ローム粒子若干 炭化物少量含む
 24 暗黄褐色土層 : ロームブロック少量 ローム粒子多く含む
 25 暗褐色土層 : ロームブロック多く含む 固く締まっている
 26 暗褐色土層 : ロームブロック若干 ローム粒子・炭化物少量含む
 27 暗黄褐色土層 : ロームブロック少量 ローム粒子多く含む
 28 暗褐色土層 : ロームブロック少量 ローム粒子若干 炭化物少量含む

第 284 図 第 40 号住居跡 (2)

第 32 表 第 40 号住居跡柱穴計測表

ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)
P 1	44.0	82.3	P 2	32.0	49.6	P 3	(26.0)	61.5	P 4	46.0	77.6	P 5	36.0	50.6
P 6	34.0	71.4	P 7	43.0	65.7	P 8	52.0	78.6	P 9	32.0	54.6	P 10	54.0	92.7
P 11	32.0	66.5	P 12	32.0	54.2	P 13	38.0	74.6	P 14	26.0	52.1	P 15	26.0	46.1
P 16	120.0	22.2	P 17	22.0	49.8	P 18	36.0	69.7						

三角堆積土壌を別にすればほぼ単層で、遺物は中央付近の中～上層を中心に出土している。所属時期は勝坂式末～加曾利E I 式期と考えられる。

第40号住居跡出土遺物

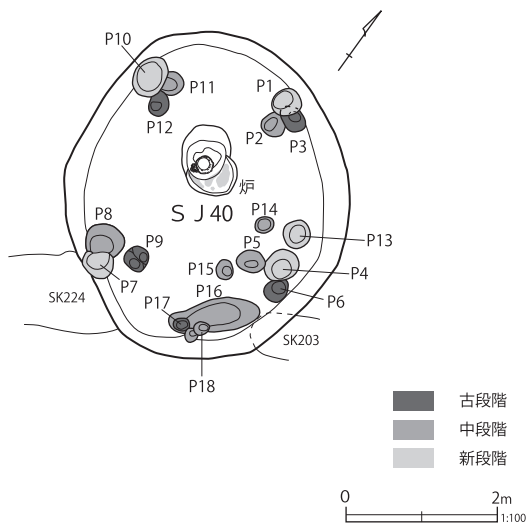
土器（第290～294図）

1は胴部のみ残存する。勝坂系の土器で、円筒形の深鉢である。平行沈線文による弧状文が上下に対向し、接点に交互刺突を施す。上半の弧状文は内部に集合沈線文を描いて橢円文となり、下半は角押し文列を充填する。文様帯下端は斜め刻みの隆帯で区画する。

復元最大径は約16.2cm、現存高は約8.4cmである。胎土は砂質で、黒雲母粒子を多量に含む。器面は暗灰褐色で、焼成は良好である。

2は口縁から胴部中段まで残存する。無文口縁の深鉢で、頸部に刻み隆帯の楕円形区画が巡り、区画の接点に交互の刻みを施す。口縁直下に刻み隆帯の楕円形区画文を単独で配し、内部に交互刺突文を描く。区画の下からは矢羽根刻みの隆帯2本が垂下し、頸部の区画に連結する。

復元最大径は約34.9cm、現存高は約18.6cmである。胎土は砂質である。器面は茶褐色で、黒斑がみられる。焼成は良い。



第285図 第40号住居跡柱穴変遷図

3～11は中峠系の土器である。3は波状口縁の深鉢で、頸部にくびれを持つ外反口縁である。口縁直下に微隆起線による楕円形区画文が並んで波頂部で交差し、1か所のみ刻みを伴う小渦巻状の突起を配する。胴部にはR無節の撚糸文を施文し、胴部中段に1条の沈線が巡る。

復元最大径は約19.3cm、現存高は約12.7cmである。胎土は砂と小礫をやや多く含む。器面は橙色で、焼成は良い。内面に風化による剥落がみられる。

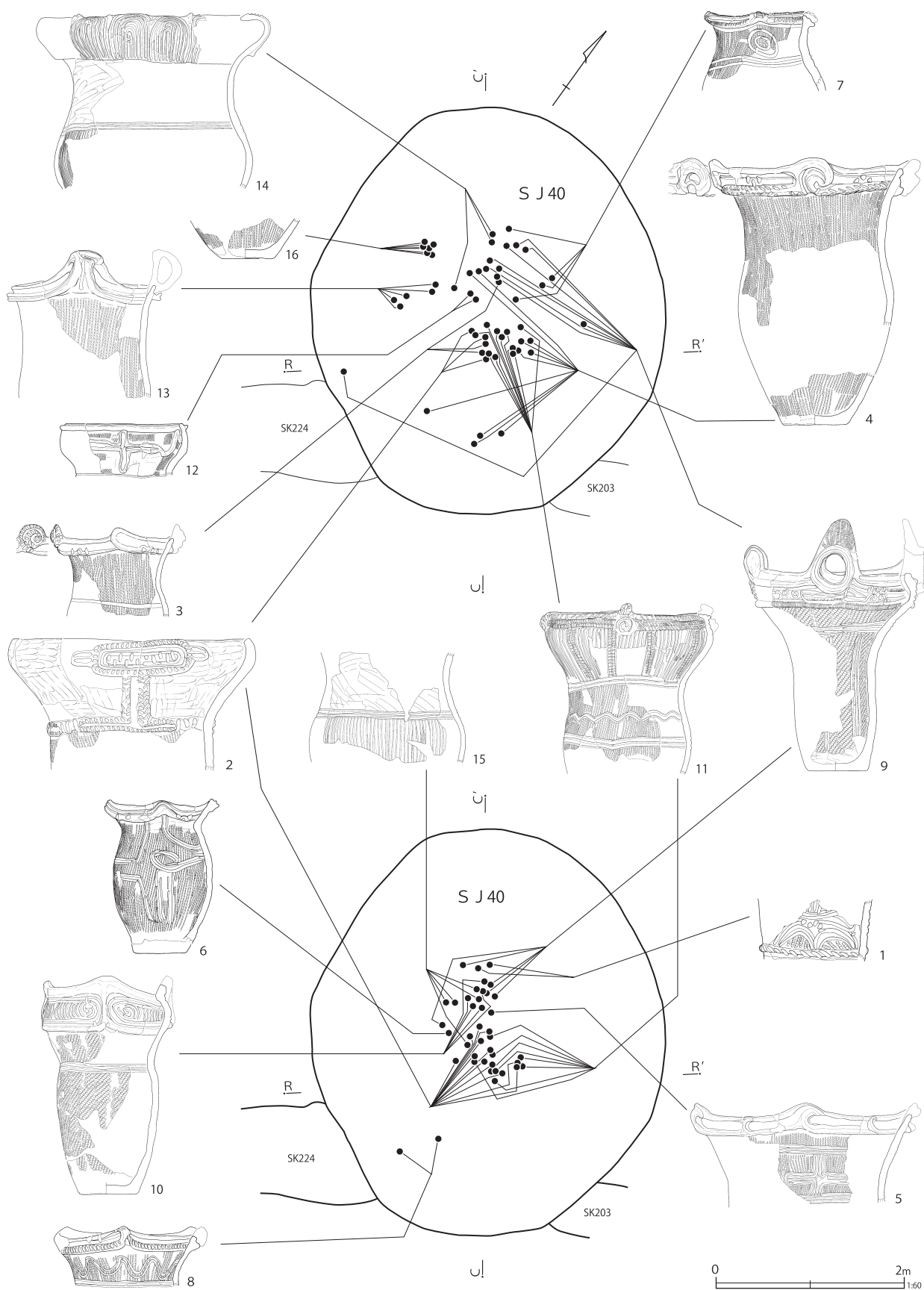
4は水平口縁で、胴部中段の一部を除き口縁から底部まで残存する。口縁直下に楕円形の区画文を持ち、下端を矢羽根刻みの隆帯で区画する。区画の接点には隆帯+沈線の波頭状モチーフを持つ突起を4単位配する。胴部にはR縦位回転の撚糸文を施文する。

復元最大径は約30cm（突起含む）、現存高は約37.6cmである。胎土は砂質で、シャモット・雲母粒子を含む。器壁は外面黄橙色、内面暗橙色で、いずれも黒斑がみられる。焼成は比較的良好。

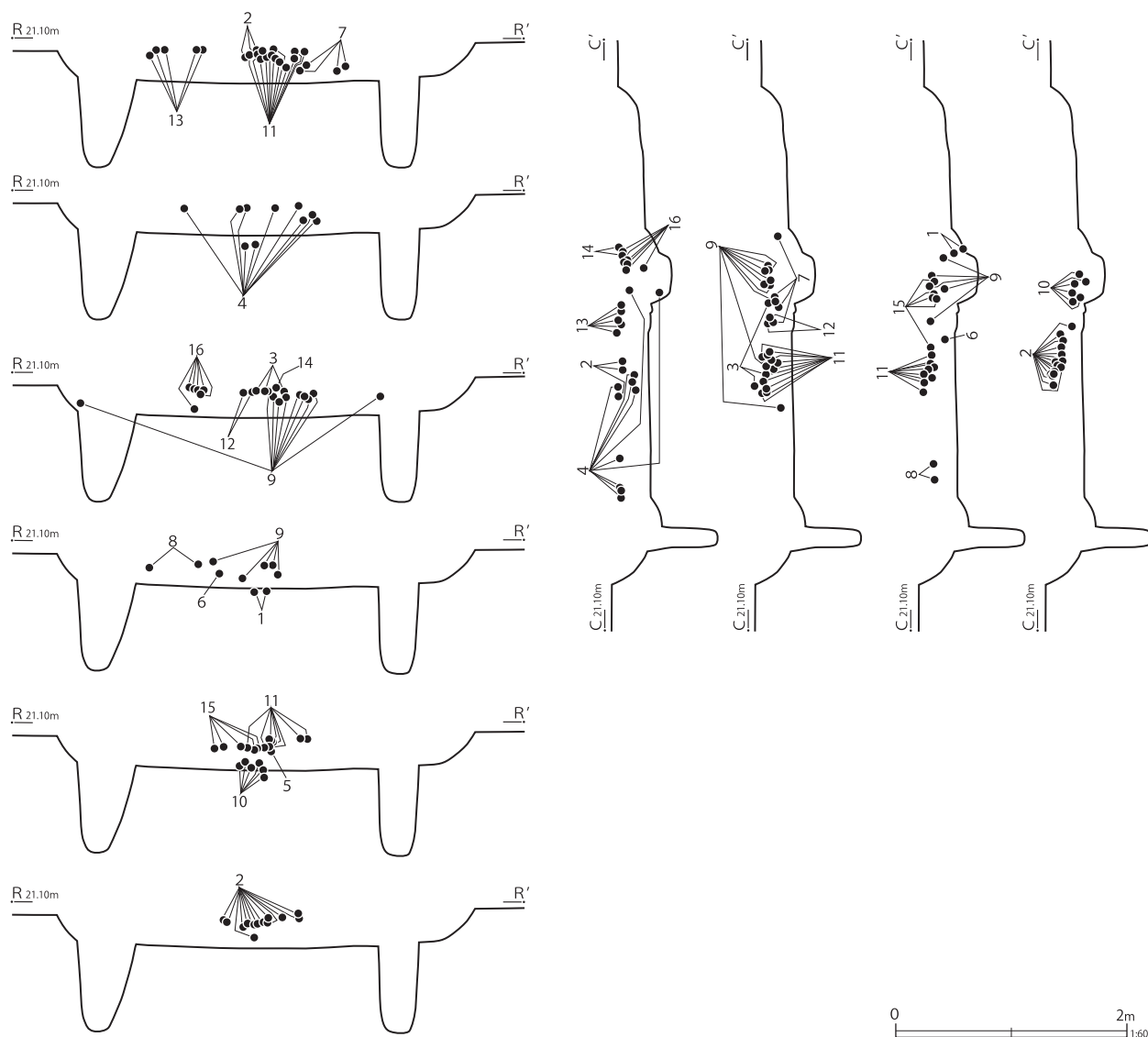
5は口縁から胴部中段まで残存する。緩やかな波状口縁で、口縁直下に上下を隆帯で区画した文様帯を持つ。波状口縁波頂部には4に似た波頭状突起を配し、波底部にはC字状の区切り隆帯を配している。頸部には上下を平行沈線文で区切った文様帯を持ち、内部には平行沈線による十字文を描く。

復元最大径は約32.3cm、現存高は約14cmである。胎土は多量の砂・小礫・金雲母粒子を含む。器壁は外面灰黄褐色、内面暗灰黄褐色である。焼成は良い。

6は底部のみ欠失する。胴部紡錘形で、頸部が「く」の字にくびれ、短い外反口縁を持つ。山形波状口縁で、口縁直下に隆帯+平行沈線による幅狭の文様帯を持ち、波底部に3個1単位の交互刻みを配する。胴部には半裁竹管状工具による十字文を描き、縦横の沈線の交点に円文を配する。地



第 286 图 第 40 号住居跡遺物出土状況 (1)



第 287 図 第 40 号住居跡遺物出土状況（2）

文はR縦位回転の撚糸文である。

復元最大径は約16.6cm、現存高は約20.4cmである。胎土はやや砂質である。器壁は外面暗灰橙色、内面暗褐色である。焼成は良い。

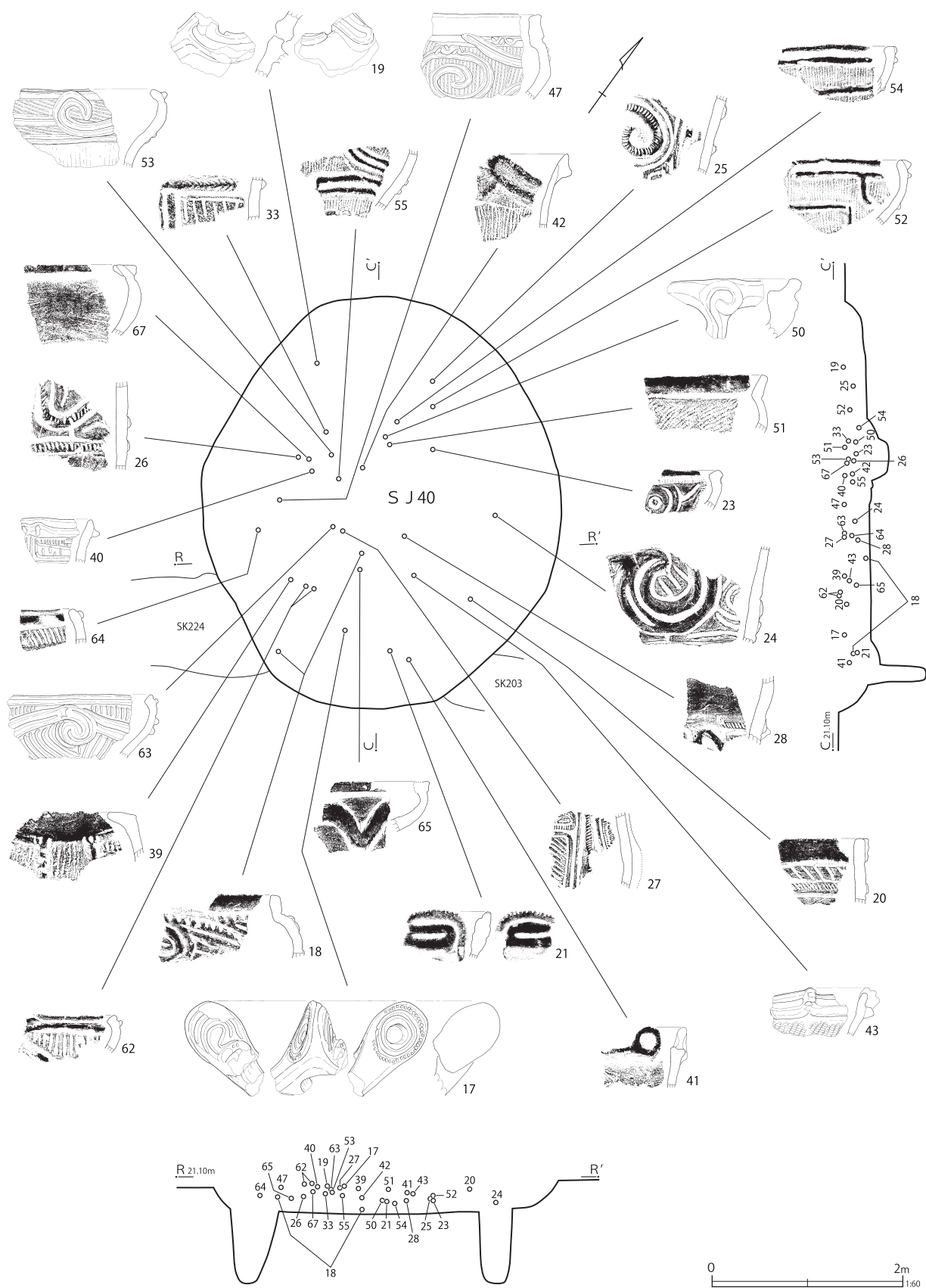
7は口縁から胴部中段まで残存する。緩やかな波状口縁で、口縁部直下に上下を刻み隆帯で区画した幅狭の文様帯を持つ。波頂部には縦位の短い平行沈線を描き、内部に横位の刻みを施す。

頸部には二重の円文を描き、胴部中段に平行沈線が巡る。地文はRの撚糸文で、縦位回転で施文する。

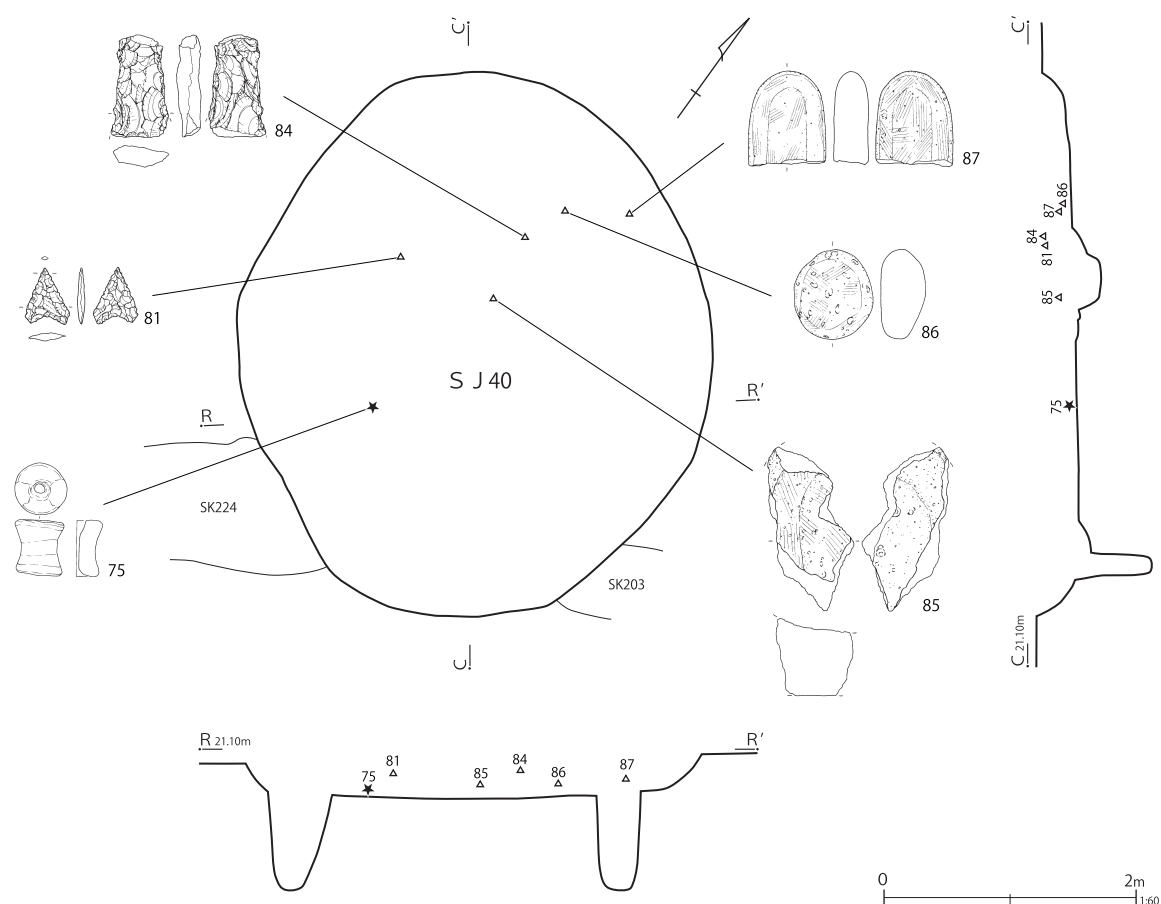
復元最大径は約16cm、現存高は約11.2cmである。胎土はシルト質である。器壁は外面明灰橙色、内面灰褐色である。焼成はやや不良である。

8は口縁部から頸部まで残存する。3単位の波状口縁で口縁直下に幅狭の楕円形区画文を描き、文様帯下端に刻みを持つ隆帯で区画する。頸部には平行沈線による波状文が巡り、胴部との境は平行沈線で水平に区画する。地文はR縦位回転の撚糸文である。

復元最大径は約21.8cm、現存高は約8.4cmである。胎土は若干の砂を含み、黒雲母粒子が混じる。



第 288 图 第 40 号住居跡遺物出土状況 (3)



第 289 図 第 40 号住居跡遺物出土状況（4）

器壁は外面暗茶褐色、内面茶褐色で、黒斑がみられる。焼成は良好である。

9は口縁から底部まで残存する。水平口縁上に3単位の突起を持つが、2つは中央に小渦巻文を持つ小突起、1つは山形の大突起で、中央に貫通孔を伴う円文を配し、突起上部には角押し文列を施文する。

口縁下に区画文が巡って交互刺突文や小渦巻文を描き、半裁竹管状工具の刻みを伴う隆帯で文様帯下端を区画する。頸部には平行沈線文が巡り、胴部に平行沈線の懸垂文が垂下する。地文はR L単節縦位回転の縄文である。

復元最大径は約24.8cm、現存高は約35.5cmである。胎土は砂質で白色粒子が目立つ。器面は橙色である。焼成は良い。

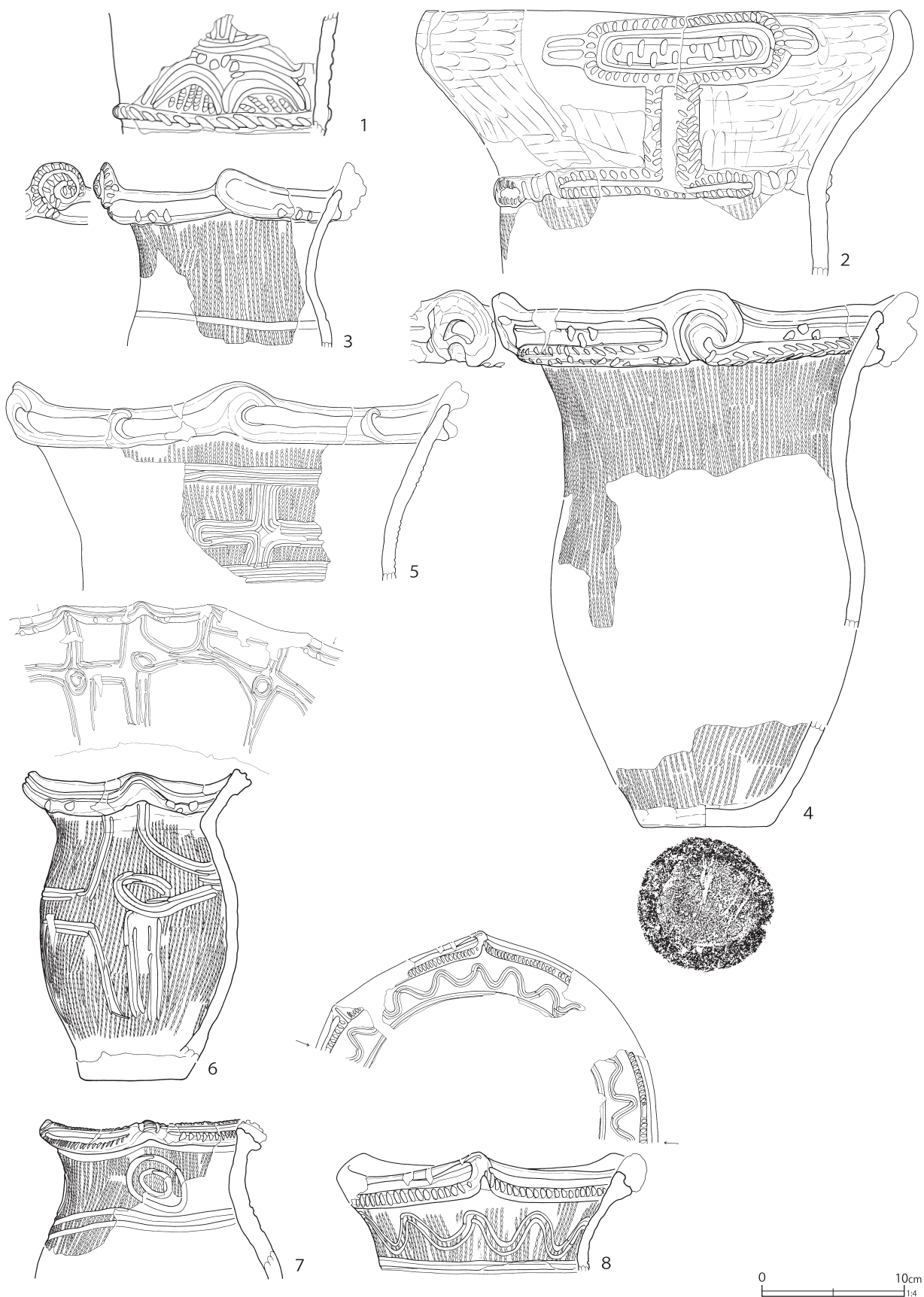
10は口縁から底部まで残存する。4単位の波状

口縁で、波頂部から下がる隆帯で口縁部文様帯を縦に分割し、楕円形の区画文を形成している。区画文内部には平行沈線文が巡り、集合沈線によって密な渦巻文を描く。文様帯下端は隆帯で区画する。

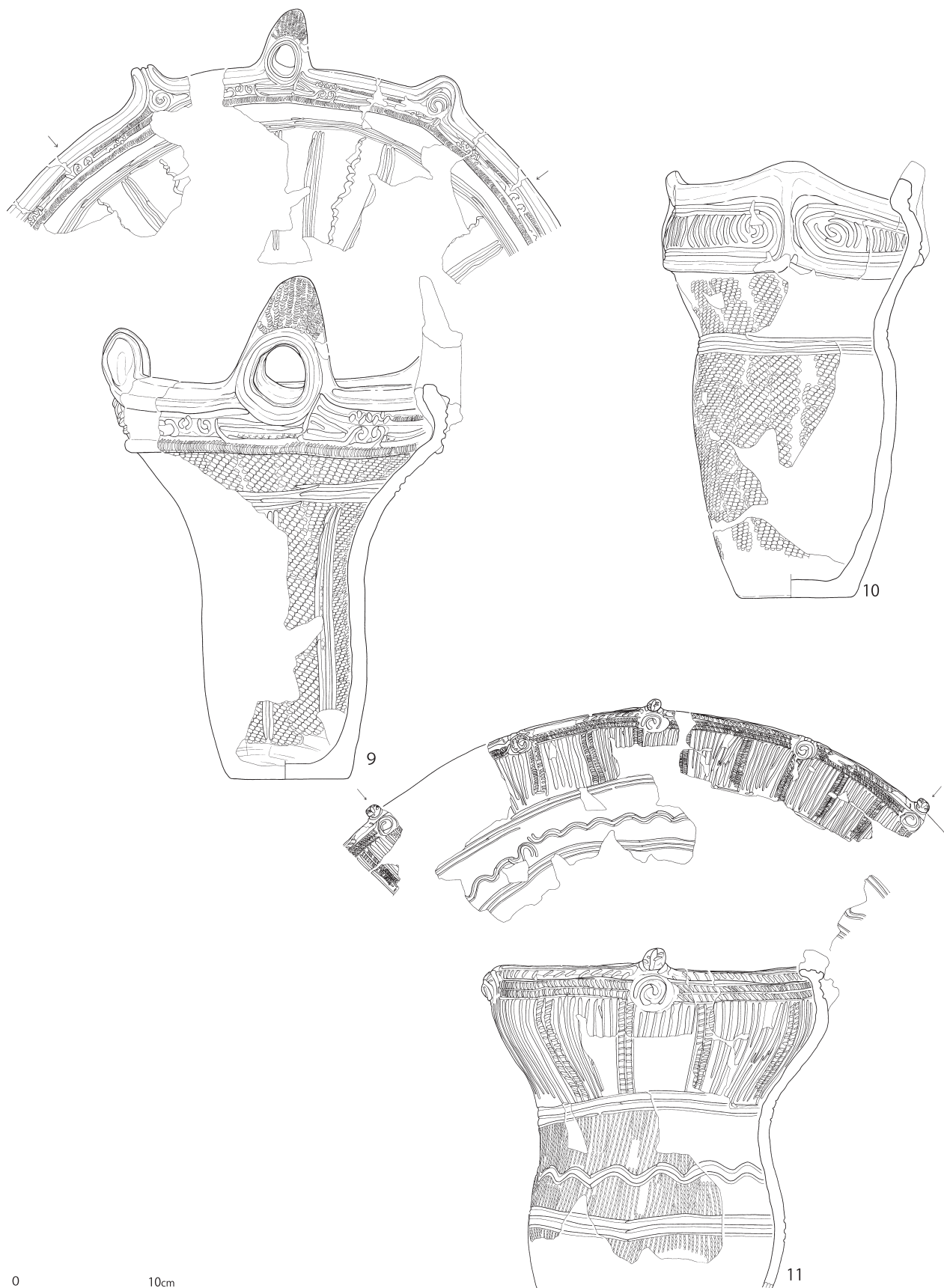
胴部中段にくびれを持って3本沈線の区画が巡る。地文はR L単節縦位回転の縄文で、結束回転の綾織り文を伴っている。

復元最大径は約19.1cm、現存高は約30.8cmである。胎土は砂質で、金雲母粒子含む。器面は暗褐色である。焼成は良い。

11は胴下半部が欠失する。頸部にくびれを持ち、口縁と胴下半部が張るキャリパー形の深鉢である。水平口縁で、口縁直下に小渦巻文を伴う円錐形の小突起を4単位配し、うち対向する2か所では上面に背割れの楕円形突起を伴っている。口縁直下



第 290 图 第 40 号住居跡出土遺物 (1)



第 291 図 第 40 号住居跡出土遺物（2）

に斜めの刻みを持つ隆帯が巡り、これに沿って刻みを持つ平行沈線文が巡る。胴上半部には刻みを伴う3本沈線の懸垂文が垂下し、間隙には縦位の集合沈線文を施文する。

胴部中段には半裁竹管状工具の平行沈線文で上下を区切った文様帯を持ち、R縦位回転の撚糸文上に平行沈線の小波状文が巡る。

復元最大径は約25.1cm、現存高は約24cmである。胎土は多量の砂・シルトを含み、チャート・亜角礫が混じる。器壁は外面灰黄褐色～灰橙色で黒斑がみられる。焼成は良い。

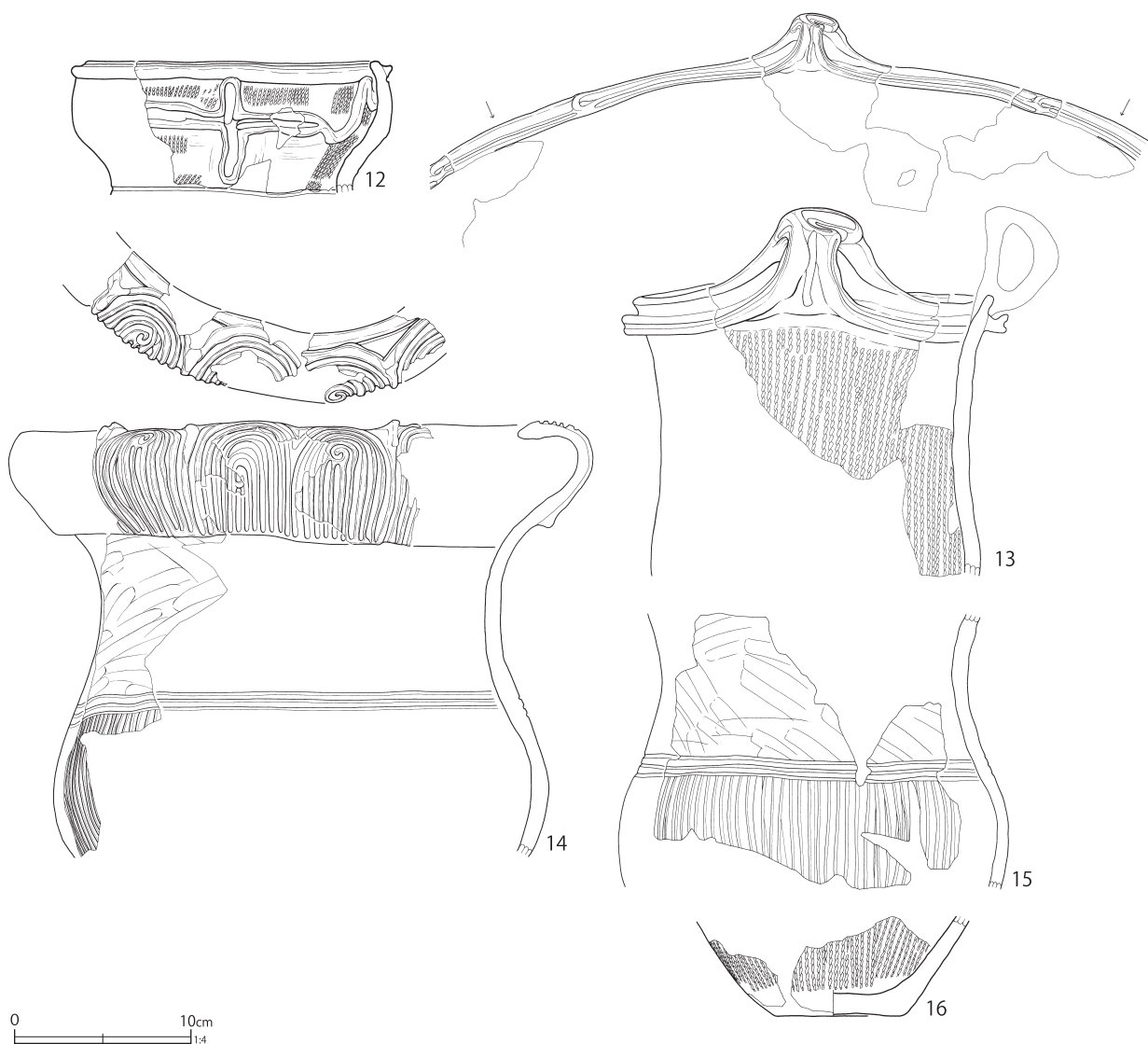
12は加曾利E I 式のキャリパー類深鉢である。口縁から頸部まで残存する。2本隆帯で十字文を

描き、頸部には1条の隆帯が巡って文様帯下端を区画する。頸部無文帯は存在しない。地文はR縦位回転の撚糸文である。

復元最大径は約18.2cm、現存高は約7.4cmである。胎土は白色の砂粒と小礫を多く含む。器面は暗橙色である。焼成は良い。

13は寸胴の深鉢で、口縁から胴下半部まで残存する。口縁直下に背割れ隆帯による区画を持ち、1か所に大柄の渦巻文から変化した中空突起、2か所にC字状の隆帯による区切り文を配する。地文はR縦位回転の撚糸文である。

復元最大径は約24.6cm（突起含む）、現存高は約20.8cmである。胎土は多量の砂と、黒雲母粒



第 292 図 第 40 号住居跡出土遺物（3）

子を含む。器面は暗褐色である。焼成は良い。

14は曾利Ⅰ式系の深鉢で、口縁から胴下半部まで残存する。頸部に幅広の無文帯を持ち、口縁と胴下半部にそれぞれ文様帯を持つ。

口縁部の文様帯は浮線＋沈線による密な褶曲文を描き、中心に小渦巻文を配する。口端は強く内屈して、数か所に小突起を配する。胴下半部には縦位の集合沈線を描き、無文帯との境を平行沈線で区画する。

復元最大径は約33cm、現存高は約24.6cmである。胎土はやや砂質で、黒雲母粒子を多く含む。器壁は外面暗灰褐色、内面暗褐色である。焼成は良い。

15は頸部から胴下半部まで残存する。14と共通の文様であり、同一個体の可能性もある。復元最大径は約22cm、現存高は約15.5cmである。胎土はやや砂質である。器壁は外面暗橙色、内面暗褐色である。焼成は良い。

16は深鉢底部である。R縦位回転の撚糸文を施文する。復元最大径は約15.4cm、現存高は約5.7cmである。胎土は小礫と砂を多量に含む。器壁は外面灰黄褐色、内面茶褐色である。焼成はやや不良である。

17～74に破片資料をまとめた。17～37は勝坂式である。大半が勝坂Ⅲ式だが、27のみ勝坂Ⅱ式と考えられる。

17・19は中央に貫通孔を持つ突起で、17は上方左側縁に凹孔を中心とする同心円文を描き、右側縁には沈線によるR字状のモチーフを描く。21は表裏に波頭状のモチーフを描く突起である。

20・22は円筒形の深鉢である。折り返し口縁で外面に段を持ち、刻み隆帯による横位の区画を持つ。23は口縁直下にキャタピラ文による三角形の区画を構成し、同心円文と三叉文を描く。

38・39も円筒形の深鉢口縁部で、縦位の隆帯が垂下する。38は内面に隆帯が巡る先割れの口縁で、外面無文地に刻み隆帯が垂下する。39は「く」の

字に内屈する口縁で、外面にRL単節の縄文を右下がりに施文し、交互刻みの隆帯が垂下する。

24～37は胴部破片である。器面を隆帯で分割し、沈線文や爪型文を施文する。大半は刻み隆帯だが、24は上面に沈線を伴う背割れ隆帯である。31は扁平な上面に幅広の角押し文を伴う。33は矢羽根刻みの隆帯である。28は頸部に無文帯を持つ。35・37は文様帯下端の区画で、37の胴下半部は無文である。

40～45は中峠系の土器である。40～43は口縁部直下に圧縮された文様帯を持つもので、多くは頸部以下地文だが、40は頸部に文様帯を持つ。44は隆帯による楕円形の区画文が並ぶ。45は胴上半部が張り出す三原田式類似の土器である。

46～59は加曾利EⅠ式のキャリパー類深鉢である。46は2本隆帯により横S字文やクランク文等のモチーフを描く。46・47は渦巻文と口縁部の区画との接点に3個1単位の交互刺突文を配する。47は渦巻文に接して上下対向する弧状モチーフを配している。

50は渦巻文から派生する中空突起である。52・54は1本隆帯のクランク文である。53は片流れの渦巻文で、頸部に無文帯が存在する。

55～57・59は口縁部文様帯の一部である。55は頸部と胴部の境を隆帯で区画し、無文帯を持たない。59は頸部無文帯を持つが、口縁部文様帯下端の区画線が存在しない。60・61は頸部ないし胴上半部の文様帯である。60は小波状文、61は7に類似の同心円文である。

62～64は集合沈線を地文とする土器で、63は隆帯による繋ぎ弧文的なモチーフを描く。64は密な集合沈線の渦文と考えられる。

65～71は浅鉢で、65は唯一文様帯を持ち、扁平な隆帯による曲線文が胴上半部に展開する。72・73は無文の底部で、72は浅鉢、他は深鉢である。74の底面は篋削りにより上げ底状となる。

75は滑車型の耳飾りである。76～80は土製円盤



第 293 图 第 40 号住居跡出土遺物 (4)

である。

石器 (第295図)

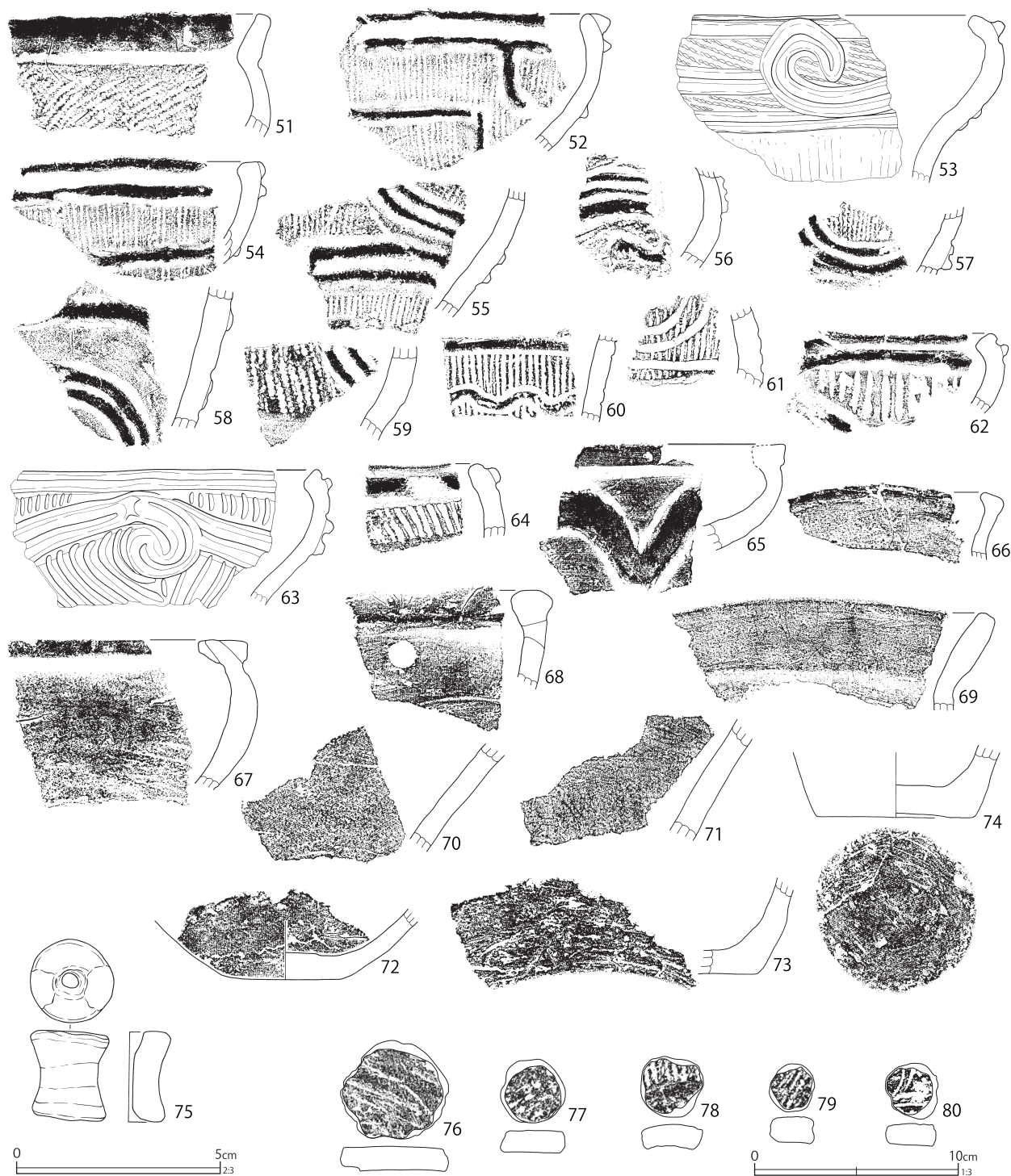
81・82は石鏃である。

82は浅いV字に切れ込む凹基の鏃である。長さ2.2cm、幅1.8cm、厚さ0.3cm、重さ0.85gである。石材は灰色チャートである。82は平基で、先端や

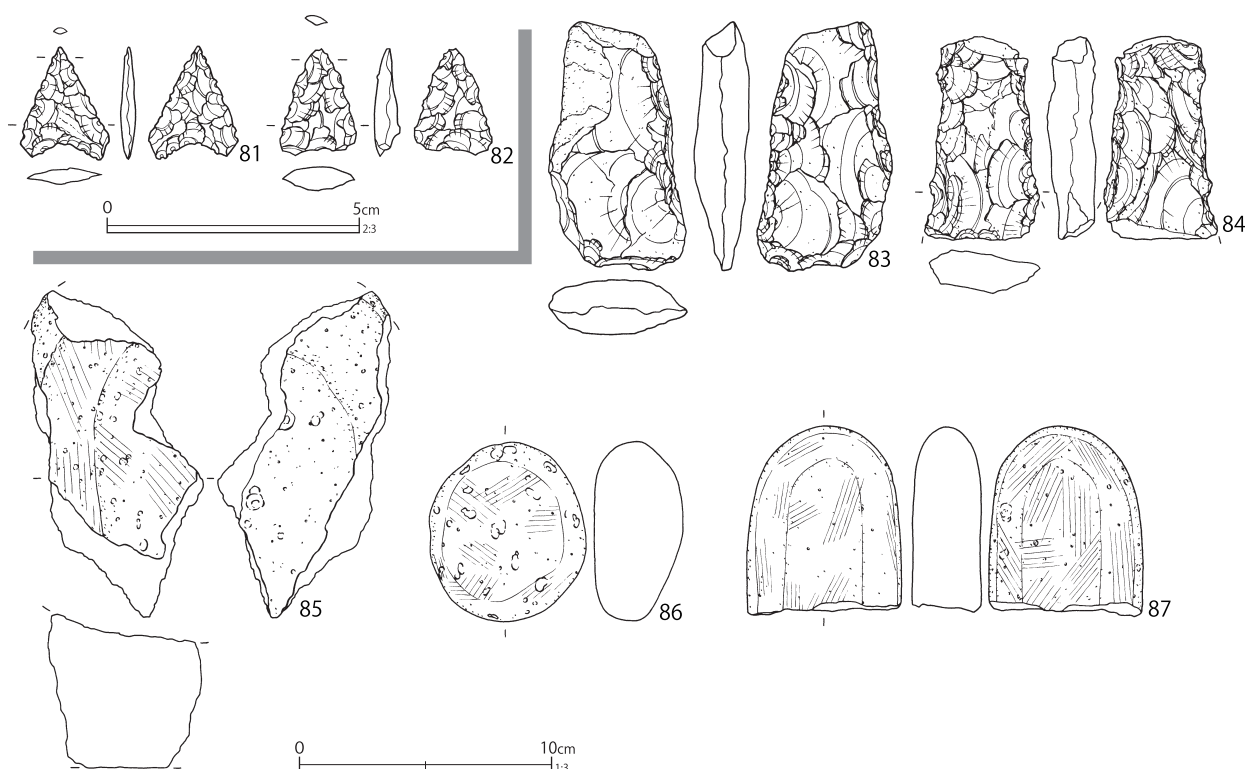
や鈍角である。長さ2.1cm、幅1.5cm、厚さ0.5cm、重さ1.15gである。石材は青灰色チャートである。

83・84は打製石斧である。

83は短冊形の石斧で、背面基部側に自然面を残す。長さ10cm、幅5.4cm、厚さ2.2cm、重さ



第 294 図 第 40 号住居跡出土遺物 (5)



第 295 図 第 40 号住居跡出土遺物（6）

120.14 g である。石材はホルンフェルスである。84は撥形とみられるが、末広りの刃部を折損する。基部末端に自然面を残す。長さ8.1cm、幅4.5cm、厚さ2cm、重さ81.22 g である。石材は黒色頁岩である。

85は石皿片である。本来楕円形であったとみられ、磨り面の裏側平坦面を持ち、数か所の凹孔がみられる。長さ12.9cm、幅6.8cm、厚さ6.1cm、重さ449.22 g である。石材は溶岩である。

86は軽石製品である。円形の自然石が面取りされている。長さ7.1cm、幅6.2cm、厚さ3.5cm、重さ55.03 g である。石材は軽石である。

87は磨石である。小判形で、表裏に使用面を持つ。長さ7.5cm、幅6.1cm、厚さ2.8cm、重さ211.01 g である。石材は閃緑岩である。

第42号住居跡（第296～300図）

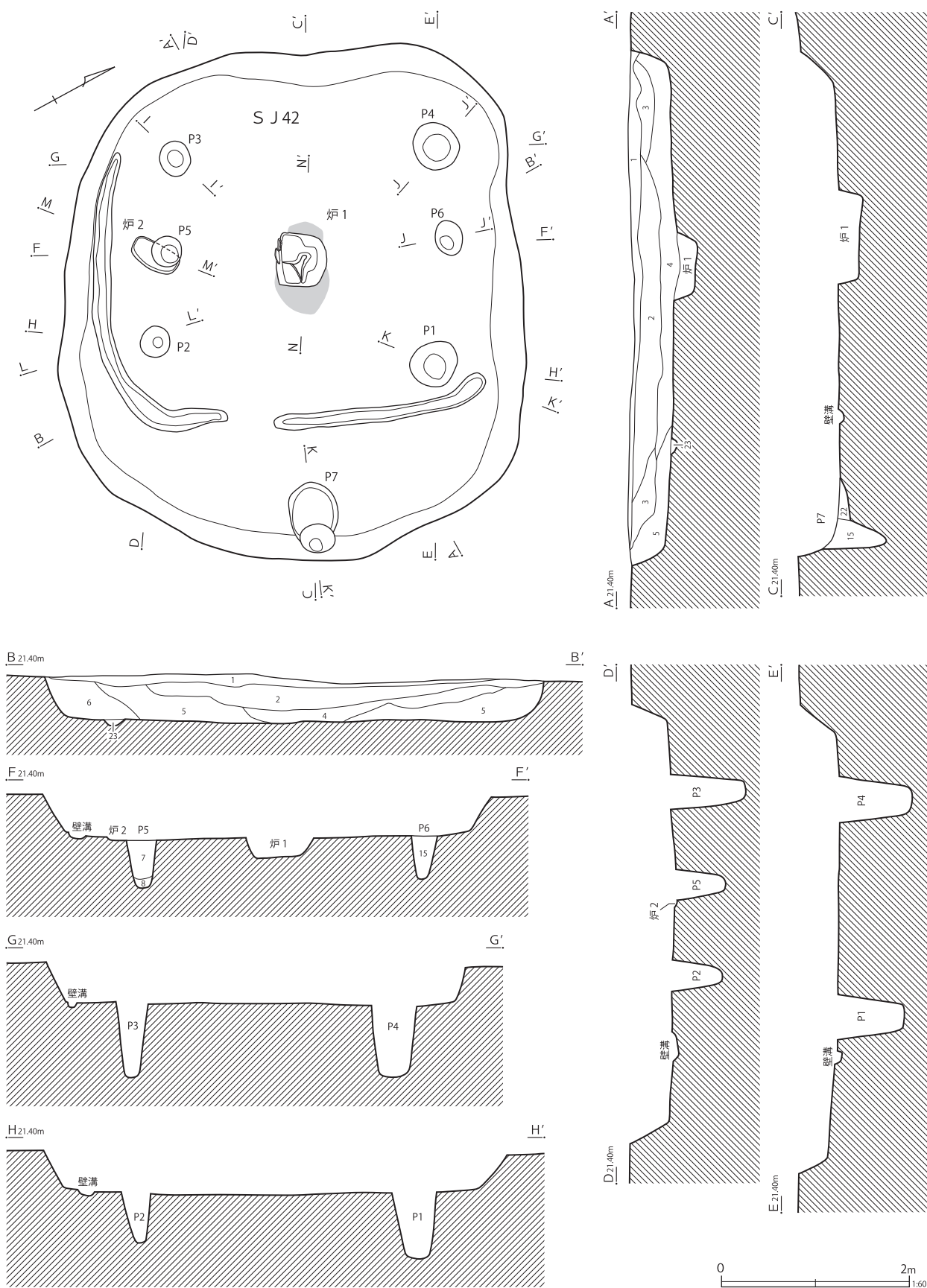
K・L - 18・19グリッドに位置する。

長径5.46m、短径4.96mの隅丸方形の住居跡で、主軸方向はN - 63° - Wを指す。壁はやや鈍角で立ち上がり、壁高は最も深い部分で0.4mである。南西壁直下に壁溝を検出し、南東壁から内側へ1～1.3mほど入った部分でも断続的に壁溝を検出した。床面は平坦で、南東方向へ緩やかに傾斜している。

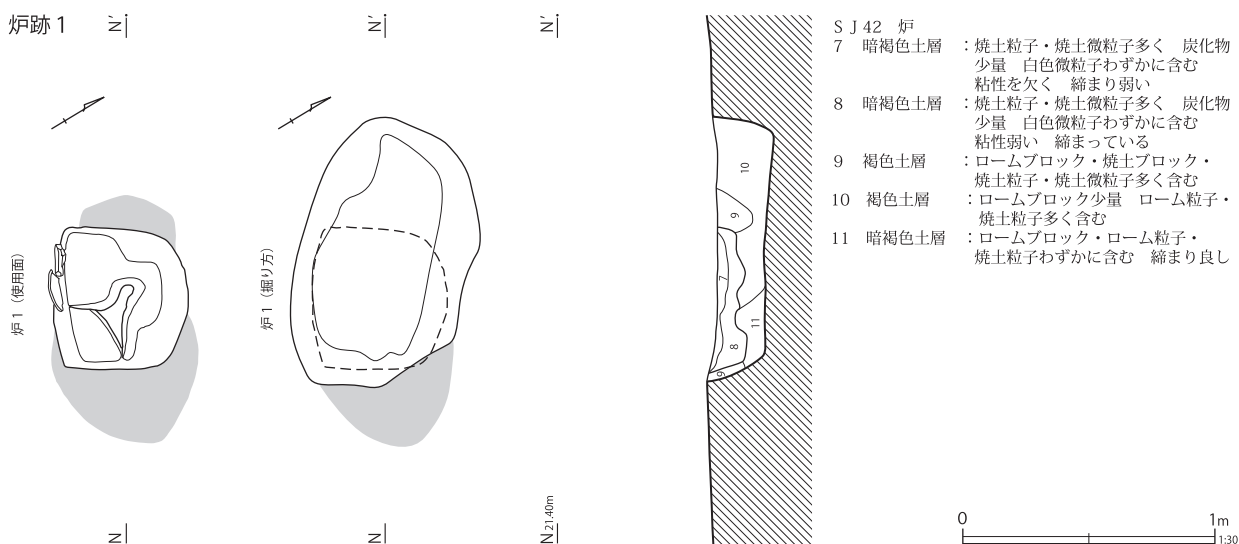
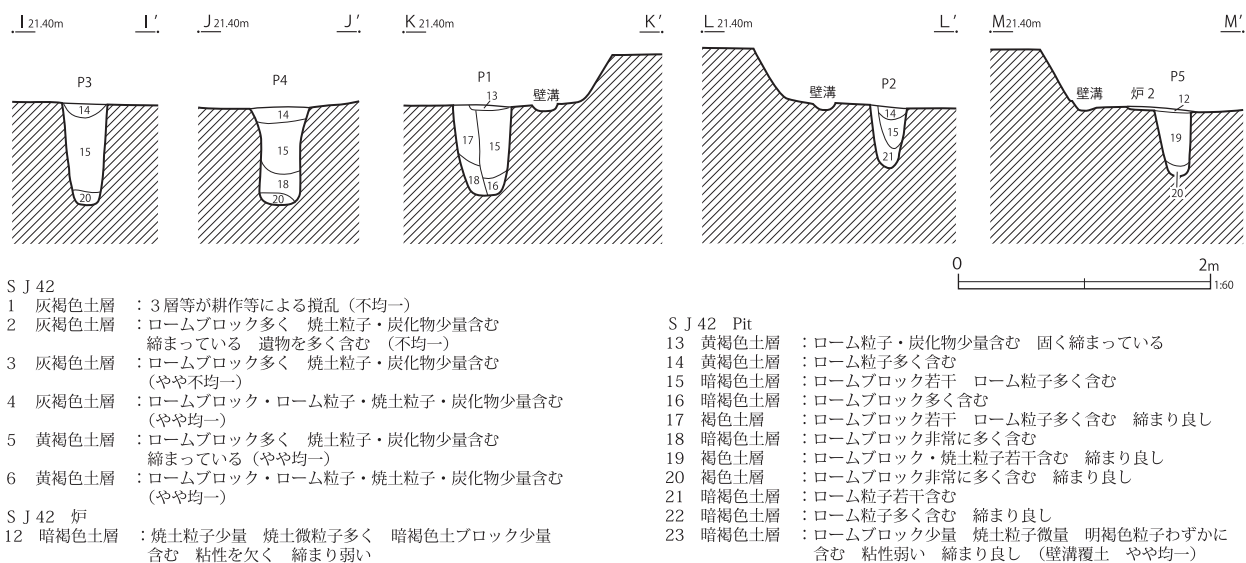
主軸線上やや奥壁寄りに炉跡1を検出した。隅丸方形の石囲い炉であったとみられ、南西縁のみ部分的に炉石が残存していた。長径53cm、短径52cm、深さ12cmで、主軸方向はN - 60° - Wを指す。炉の掘りかたは長径107cm、短径70cm、深さ24cmで、焼土混じりのロームブロックを充

第 33 表 第 42 号住居跡柱穴計測表

ビットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ビットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ビットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ビットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ビットNo.	長径(cm)	深さ(cm)
P 1	52.0	71.9	P 2	32.0	55.5	P 3	36.0	79.6	P 4	52.0	75.2	P 5	32.0	52.6
P 6	36.0	47.9	P 7	74.0	66.0									



第296图 第42号住居迹(1)



第 297 図 第 42 号住居跡 (2)

填しており、炉の造り替えが行われた可能性が考えられる。

また、北西壁近くにもごく浅い焼土だまりが存在し、これを炉跡 2 とした。

床面上から 7 本のピットが検出された。これらのうち P 1 ～ 6 が支柱穴と考えられ、6 本柱の上屋を構成するものと考えられる。主軸線上南東側の壁近くに P 7 が存在し、これが出入り口施設の痕跡と考えられる。覆土は上下 2 層からなり、土

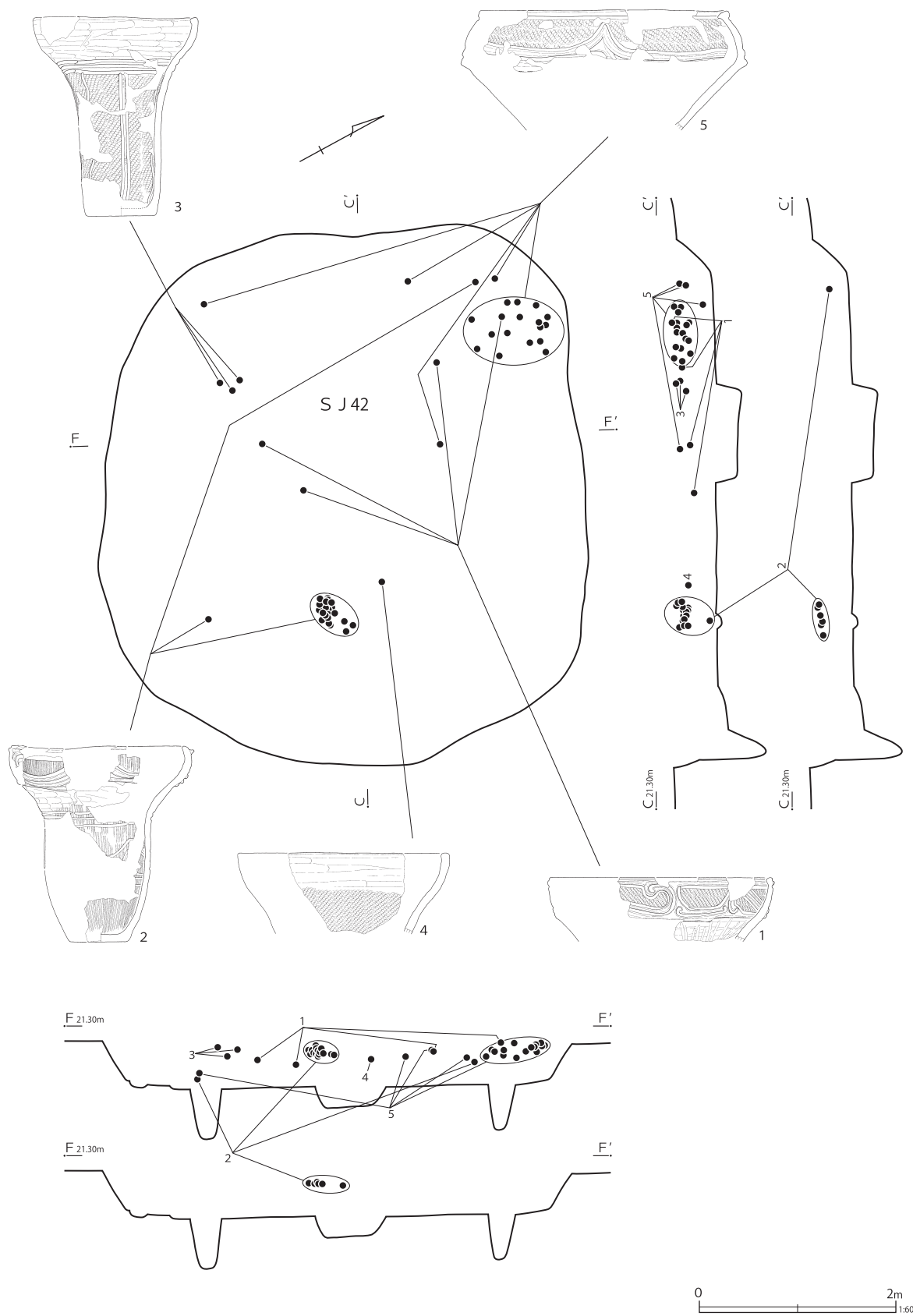
層図中 1 ～ 4 層が上層、5 層以下が下層に比定される。遺物は主に上層、とりわけ上下層の境界面付近から多く出土している。

所属時期は加曾利 E I 式期と考えられる。

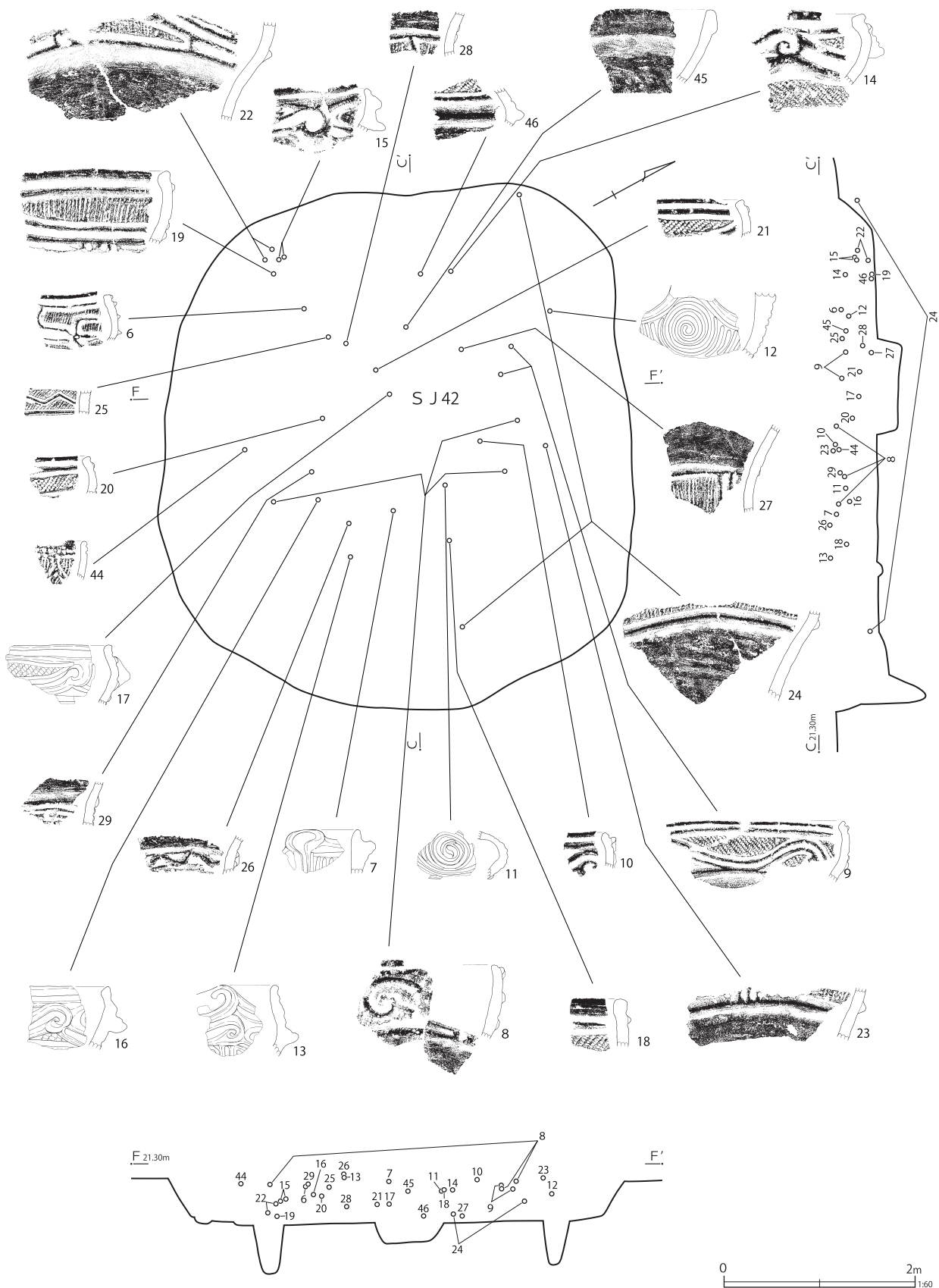
第 42 号住居跡

土器 (第 301 ～ 303 図)

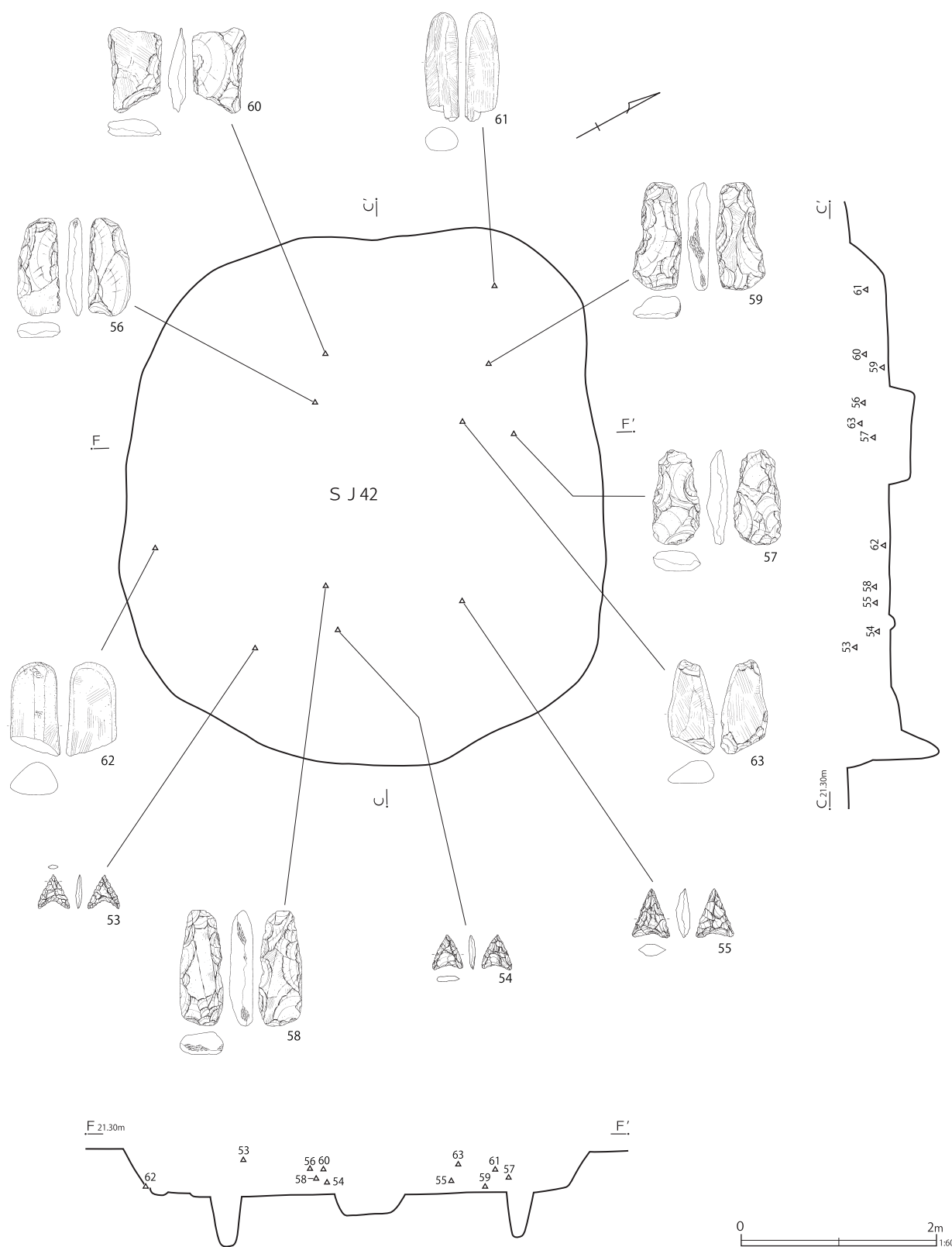
1・2 は加曾利 E I 式のキャリパー類深鉢である。1 は口縁部から頸部まで残存する。口縁部に大柄の渦巻文を描くが、主文様と文様帯下端の区



第 298 図 第 42 号住居跡遺物出土状況 (1)



第 299 図 第 42 号住居跡遺物出土状況 (2)



第 300 図 第 42 号住居跡遺物出土状況 (3)

画との癒着が生じている。また、2本隆帯の間がわらび手沈線化している。地文はRL単節横位回転の縄文で、頸部には無文帯を持つ。

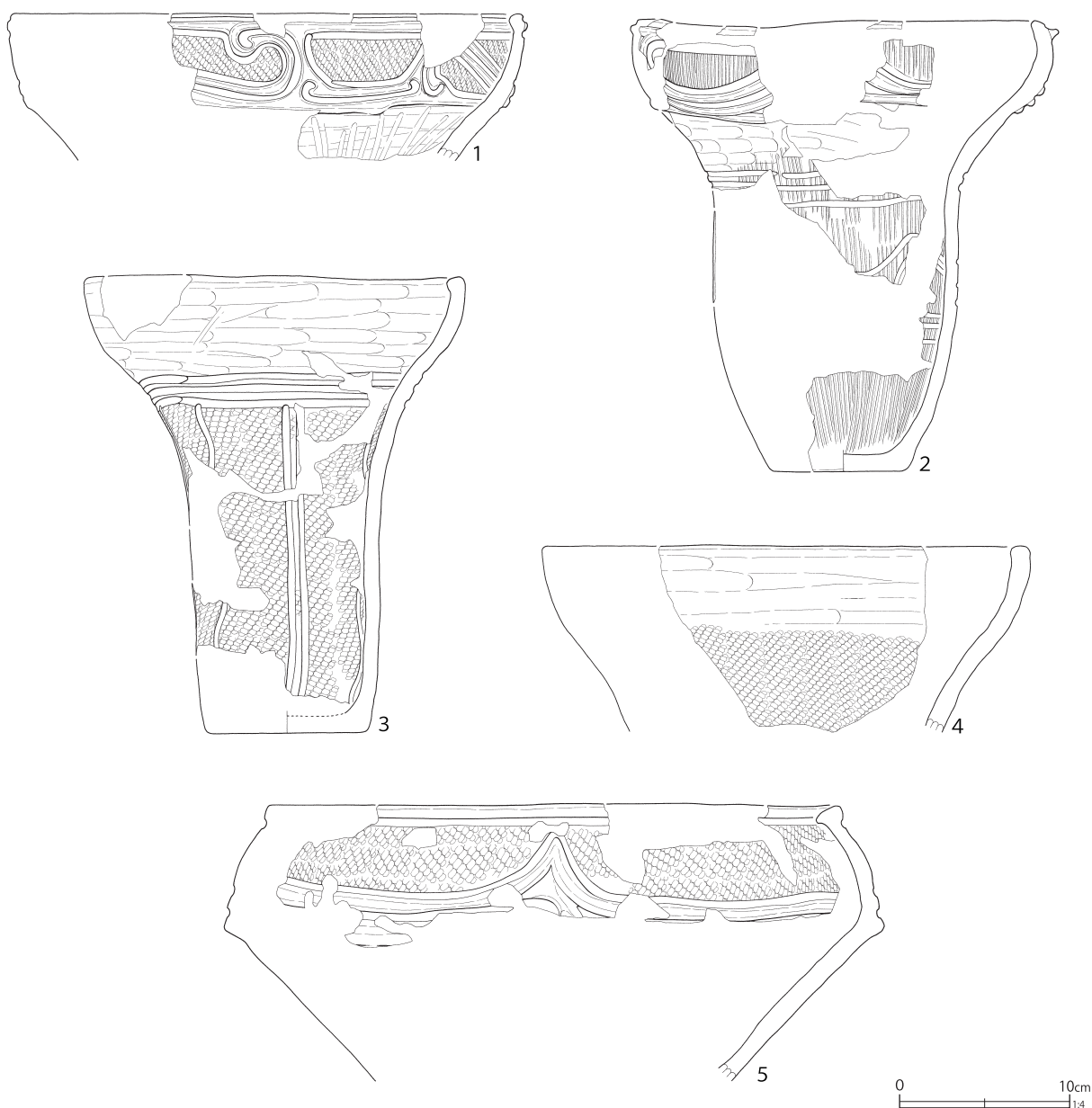
復元最大径は約30.5cm、現存高は約8.6cmである。胎土は若干の砂を含む。器面は暗黄褐色である。焼成は良い。

2は口縁部から底部まで復元残存する。初現的な繋ぎ弧モチーフで、文様帯下端を1条の隆帯で水平に区画する。地文は櫛歯状工具の条線だが、弧状の隆帯が形成する半円形の区画内部のみに施

文する。頸部には無文帯が存在し、胴部との境を3条の沈線で区画する。胴部中段には平行沈線による波状文を描いて、下方をふたたび3条の沈線で閉塞する。胴部には地文条線を施文するが、一部頸部無文帯にも侵入している。

復元最大径は約25cm、現存高は約21.5cmである。胎土は多量の砂と小礫を含む。器壁は外面が暗橙色～暗灰褐色、内面は暗灰褐色で、焼成は良い。

3は無文口縁の深鉢で、口縁から底部まで残存



第301図 第42号住居跡出土遺物(1)



第 302 图 第 42 号住居跡出土遺物 (2)

する。頸部に3条の平行沈線による区画が巡り、胴部には平行沈線による懸垂文と単沈線の蛇行懸垂文が交互に垂下する。地文はR L単節縦位回転の縄文である。

復元最大径は約22.3cm、現存高は約26.9cmである。胎土は多量の砂とシルトを含む。器壁は外面暗灰褐色、内面暗灰褐色～黒褐色である。焼成はやや不良である。

4も無文口縁の深鉢で、口縁から胴部中段まで残存する。地文はR L単節縦位回転の縄文であり、頸部との間に区画を設けない。

復元最大径は約28.6cm、現存高は約10.8cmである。胎土は砂質である。器面は暗褐色である。焼成はやや不良である。

5は浅鉢で、底部を欠失する。胴部中段が「く」の字に張り出して口縁内湾する。口縁下にキャリパー類深鉢に由来する文様帯を持つが、主文様と下端の区画は完全に癒着して直線化し、1か所に剣先モチーフを伴う小渦巻文を配する。

復元最大径は約38.4cm、現存高は約8.4cmである。胎土は砂質である。器壁は外面が暗橙色、内

面は暗褐色である。焼成は良い。

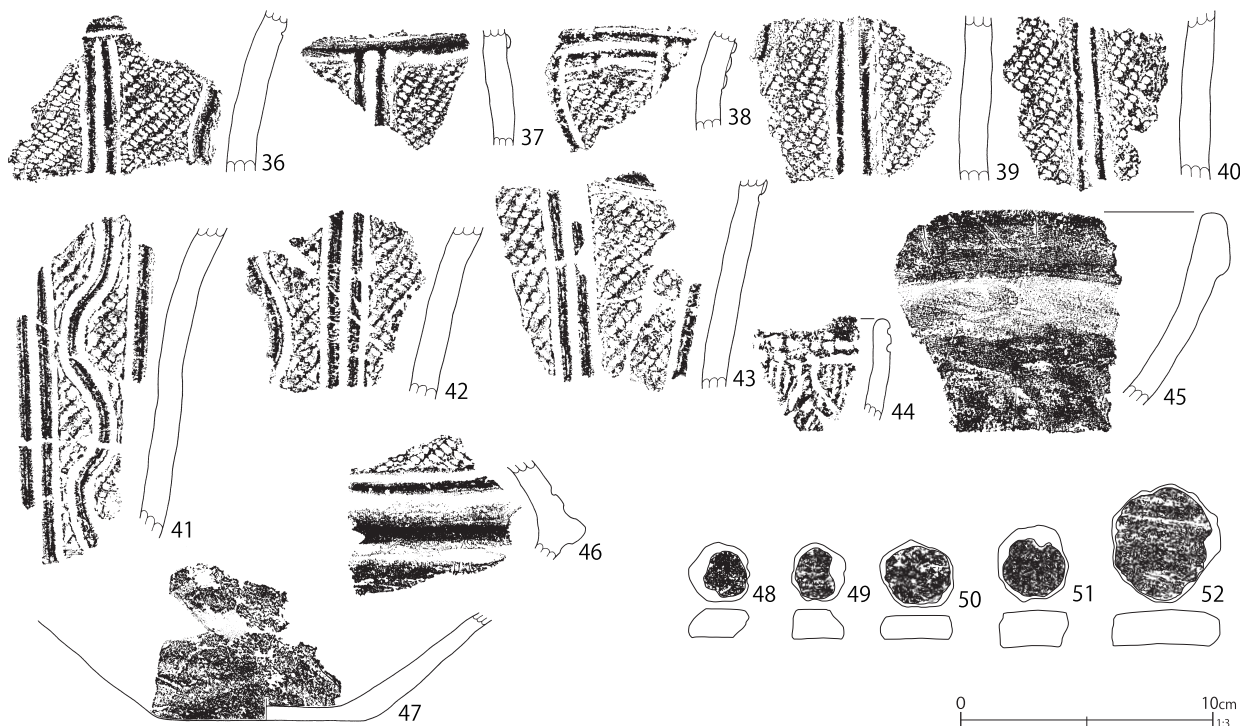
6～47は破片資料である。6～10・13～21は加曾利E I式のキャリパー類深鉢口縁部である。6は1本隆帯でやや変則の十字文＋クランク文を描き、交点に円形刺突を配する。7・13は口唇上に小渦巻文の突起を配する。8・9は大柄の渦巻文で、頸部には無文帯が存在する。

10・13～17は初現的な繋ぎ弧文である。16・17は文様帯下端を水平に区画するが、14は区画がみられず、頸部無文帯も存在しない。19～21は弧状モチーフの下端から数本の隆帯が垂下して、文様帯下端の区画と連結する。

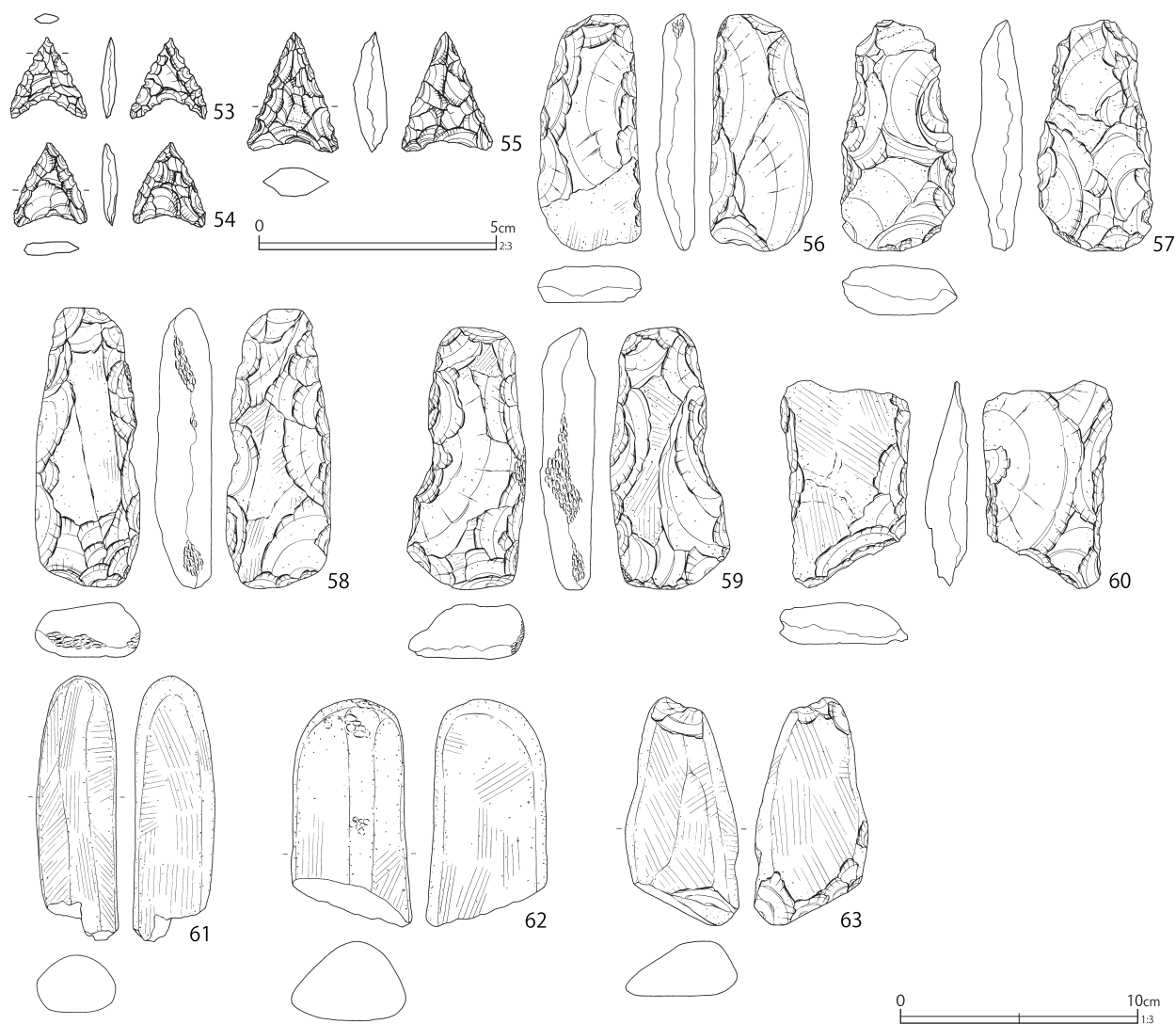
地文は、8・9・14～16はR L単節の縄文、17はL R単節の縄文、6・19はRの撚糸文である。7は縦位の集合沈線を地文とする。

22～24は文様帯下端を区画する水平の隆帯で、いずれも頸部無文帯を持つ。地文はすべてRの撚糸文である。

25・26は頸部ないし胴上半部の文様帯である。25は半裁竹管状工具の鋸歯文が巡り、R L単節縦位回転の縄文を施文する。26は浮線の小波状文で、



第303図 第42号住居跡出土遺物(3)



第 304 図 第 42 号住居跡出土遺物（4）

曾利系の土器の可能性もある。

27～29は頸部無文帯と胴部との境界部分である。27・28は2本隆帯の区画で、胴部には隆帯の懸垂文が垂下する。地文はRの撚糸文である。29は1本隆帯の区画に沿って半裁竹管状工具の平行沈線が巡る。

30～43はキャリパー類深鉢に伴うと思われる胴部および底部である。32は平行沈線による横位の区画である。33は半裁竹管状工具による幾何文の一部とみられる。

30・31・34・37・39・40は隆帯による懸垂文が垂下する。35～43は半裁竹管状工具の平行沈線による懸垂文である。35は幅狭の工具でラフな懸垂

文を描くが、36・38・41～43以降は幅広の施文具を用い、整然とした区画文や懸垂文を描く。

地文は、30～35はすべて撚糸文で、32がLである外は全てR縦位回転。36～43は縄文地文で、全てRL単節縦位回転である。

44は連弧文土器で、住居跡の時期より新しい。口縁直下に刺突列を伴う平行沈線が巡って、胴部には磨り消し連弧文を描く。地文はR縦位回転の撚糸文である。

45～47は浅鉢である。45は無文の折り返し口縁で、外面に段を形成する。46は「く」の字に張り出す胴部中段で、隆帯による区画を持ち、胴上半部に文様帯を持つ。復元個体の5に似るが、無文

の外反口縁を伴う可能性もある。地文はRL単節縦位回転の縄文である。47は無文の胴下半部～底部である。

48～52は土製円盤である。

石器（第304図）

53～55は凹基の石鏃で、いずれも完形品である。53は腹面に主要剥離面を残す。長さ1.7cm、幅1.6cm、厚さ0.3cm、重さ0.54gである。石材はチャートである。

54は長さ1.7cm、幅1.5cm、厚さ0.35cm、重さ0.73gである。石材はチャートである。55は背面に節理面を残し、長さ2.45cm、幅1.9cm、厚さ0.7cm、重さ2.44gである。石材はチャートである。

56～60は打製石斧で、いずれも短冊形である。自然面を残す例ではしばしば擦痕を伴っており、磨石からの再加工と考えられる。

56は背面刃部寄りに擦痕を伴う自然面を残す。長さ9.9cm、幅4.3cm、厚さ1.6cm、重さ89.01gである。石材は砂岩である。57は背面基部側と腹面中央付近に自然面を残す。長さ9.6cm、幅4.8cm、厚さ2.1cm、重さ96.69gである。石材はチャートである。

58・59は表裏に擦痕を伴う自然面を残す。58は長さ11.7cm、幅4.3cm、厚さ2.3cm、重さ164.74gである。石材は砂岩である。59は長さ11cm、幅4.9cm、厚さ2.3cm、重さ144.72gである。石材は砂岩である。

60は寸詰まりの石斧で、長軸に対し斜めの刃部を持つ。本来の刃部が折損した後に再加工したものと考えられる。長さ8.7cm、幅5.4cm、厚さ2.3cm、重さ84.76gである。石材は頁岩である。

61～63は磨石である。61は棒状の磨石で、長軸

一端が折損する。長さ11cm、幅3.4cm、厚さ2.5cm、重さ151.57gである。石材は砂岩である。

62も長軸一端が折損する。断面三角形で、三面使用される。長さ10.6cm、幅5.1cm、厚さ3.4cm、重さ227.91gである。石材は閃緑岩である。

63は不整形な板状礫を両面使用する。長軸両端に剥離がみられ、叩き石に転用されたものと考えられる。長さ9.5cm、幅4.7cm、厚さ2.3cm、重さ135.59gである。石材は砂岩である。

第43号住居跡（第305～311図）

L-18グリッドに位置する。長径4.86m、短径4.28mである。長方形プランの南壁が張り出す隅丸五角形の住居跡で、主軸方向はN-28°-Wを指す。

壁は比較的緩やかに立ち上がり、南東壁がテラス状に掘りこまれている。壁高は最も深い部分で0.35mである。壁溝は壁の直下を一巡するが、北東・南西のコーナー部分では若干距離を置いている。

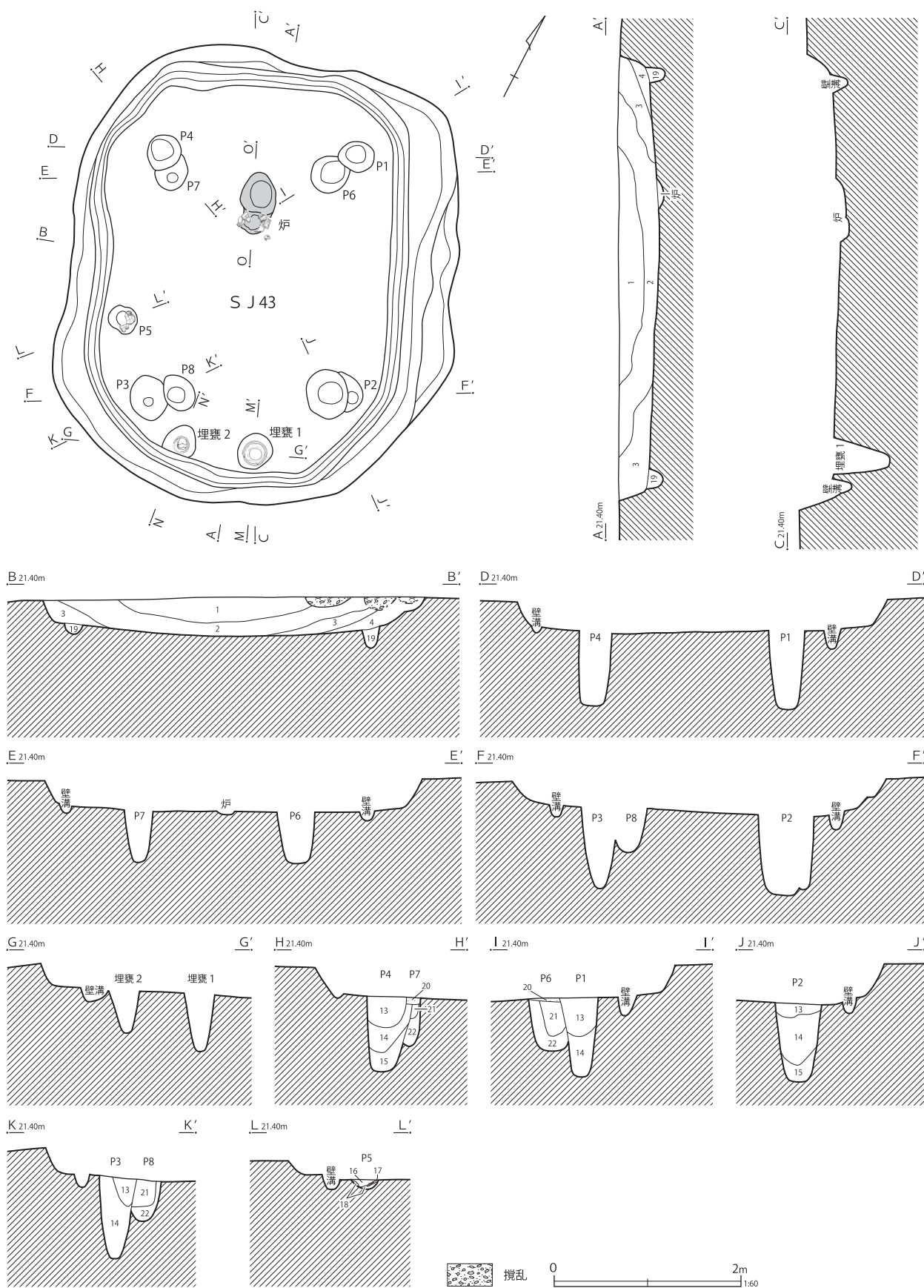
床面は平坦で、中央部分がやや下がっている。主軸線上奥壁寄りに炉跡を検出した。地床炉で、二つの掘り込みが住居跡主軸方向に連なっている。断面観察の結果、中央寄りのものがより新しいことが判明した。また、新段階の炉上面からは土器の大破片数点が出土しており、土器片囲い炉であった可能性がある。

床面上から8本のピットが検出された。これらのうちP1～4・6～8が主柱穴と考えられ、4本柱の上屋を構成していたものと考えられる。これらの柱穴は土層の状態からさらに新旧に分けられ、P(2)・6～8が古段階、P1～4が新段階に比定される。

覆土掘削中、主柱穴P3の上面13.2cmおよび

第34表 第43号住居跡柱穴計測表

ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)
P1	38.0	84.6	P2	60.0	84.6	P3	48.0	89.2	P4	40.0	79.6	P5	42.0	18.8
P6	42.0	57.2	P7	42.0	55.8	P8	43.0	47.4						

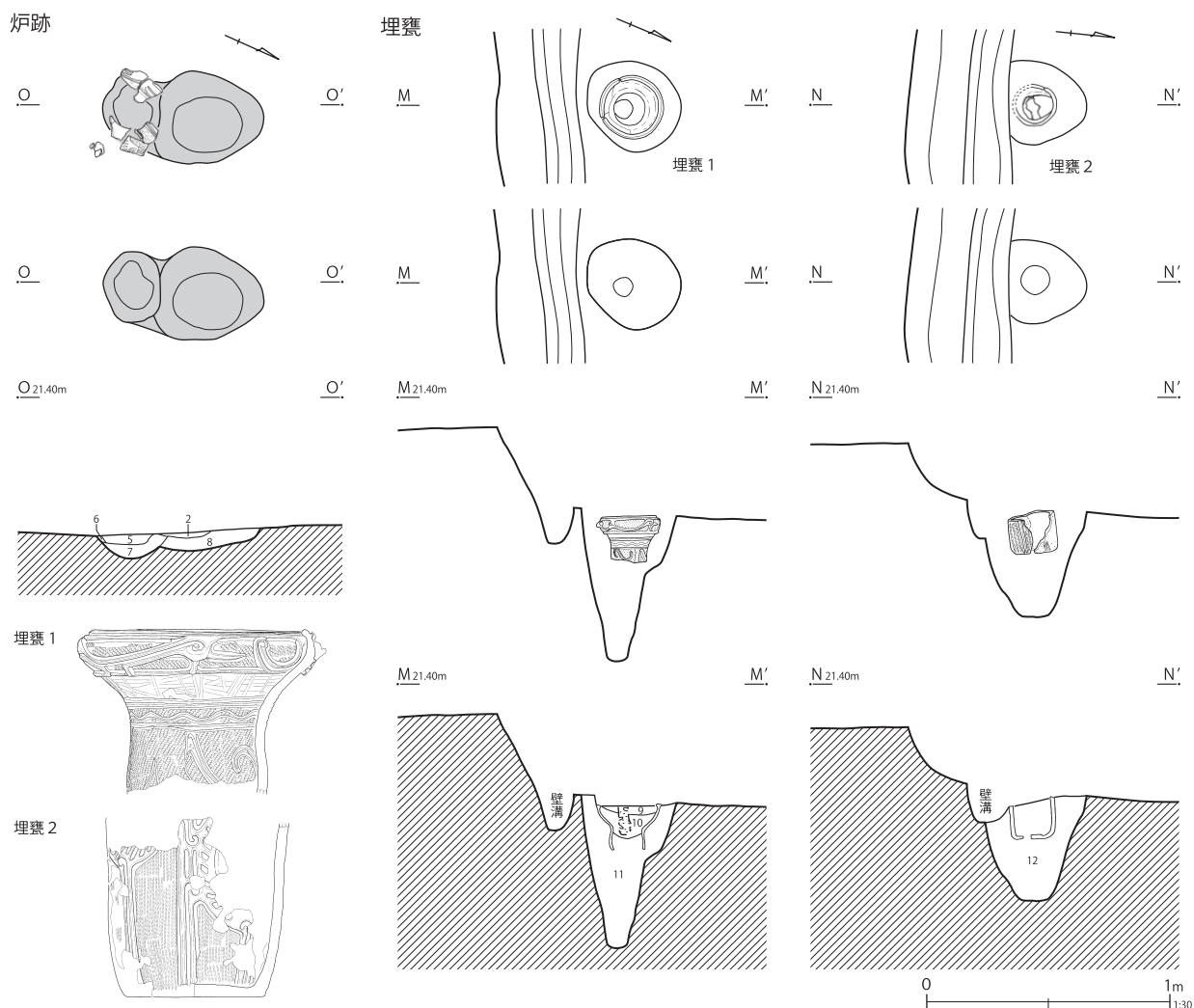


P 4 の上面10.4cmの高さで柱痕を検出した（第307図）。住居跡がある程度埋没した段階で柱材が抜去された可能性がある。

南壁付近から二つの埋甕が検出された。この部分は壁が緩やかな弧を描いて張り出しており、この付近に出入り口が存在したと考えられる。

埋甕1は、ほぼ主軸線上に位置している。直径40cm、深さ62cmのピットが穿たれ、ここに深鉢の口縁から胴上半部にかけての部分が正位に埋設されている。埋甕の口縁上端は住居跡床面とほぼ同じ高さにあった。

埋甕2は埋甕1の西約50cmに位置していた。



S J 43

- 1 黒褐色土層 : 炭化物・明褐色粒子・浅間A粒子わずかに含む 粘性に欠く 締まり弱い
- 2 暗褐色土層 : 炭化物少量 明褐色粒子多く 浅間A粒子少量含む (明褐色粒子が斑状に含まれる) 粘性を欠く 締まり良好
- 3 暗褐色土層 : 明褐色粒子多く 明褐色粒子少量 浅間A粒子わずかに含む 粘性を欠く 締まり良好
- 4 暗褐色土層 : 明黄褐色粒子多く 明褐色粒子・浅間A粒子わずかに含む 粘性・締まり弱い

S J 43 炉

- 5 暗褐色土層 : 焼土ブロックわずか 焼土粒子多く 明褐色粒子少量含む 粘性を欠く 締まり良好
- 6 暗褐色土層 : ローム粒子わずか 焼土粒子少量含む 粘性を欠く 締まり良好
- 7 暗褐色土層 : ロームブロック少量 ローム粒子若干 焼土ブロック・炭化物少量含む 締まり良好
- 8 暗褐色土層 : ロームブロック若干 ローム粒子・焼土ブロック少量 炭化物若干含む 締まり良好

S J 43 埋甕1

- 9 暗褐色土層 : 明褐色粒子・白色微粒子わずかに含む 粘性・締まり弱い 住居の床面と同じ土(土器に被っている)

- 10 暗褐色土層 : 焼土粒子少量含む 粘性・締まり弱い
- 11 黒褐色土層 : 焼土粒子微量含む 粘性・締まり弱い

S J 43 埋甕2

- 12 暗褐色土層 : 明褐色粒子・白色微粒子微量含む 粘性を欠く 締まり良好 被熱の痕跡なし

S J 43 Pit 1 ~ 8

- 13 暗褐色土層 : 焼土粒子・炭化物多く 白色微粒子少量含む 粘性弱い 締まり良好
- 14 黒褐色土層 : 焼土粒子わずかに含む 粘性に欠く 締まり弱い
- 15 暗黄褐色土層 : ロームブロック・ローム粒子多く含む
- 16 暗褐色土層 : 明褐色粒子多く 明褐色粒子少量 浅間A粒子わずかに含む 粘性を欠く 締まり良好
- 17 茶褐色土層 : ローム粒子微量 白色微粒子少量含む 粘性を欠く 締まり良好
- 18 暗褐色土層 : ロームブロック・ローム粒子・焼土粒子若干含む
- 19 暗褐色土層 : ロームブロック少量 焼土粒子微量 明褐色粒子わずかに含む 粘性弱い 締まり良好
- 20 暗褐色土層 : ロームブロック多く ローム粒子・炭化物若干含む 貼床
- 21 暗褐色土層 : ロームブロック若干 ローム粒子多く 炭化物少量含む
- 22 暗褐色土層 : ロームブロック少量 ローム粒子多く 炭化物少量含む

第306図 第43号住居跡(2)

掘りかたが壁溝と重複しているが、新旧関係は不明である。直径約40cm、深さ45cmのピットが穿たれ、ここに深鉢の胴下半部から底部にかけての部分が正位に埋設されていた。土器そのものは著しく風化していたが、ピットの覆土や壁に焼土等の被熱の痕跡はみられなかった。土器の上端は、住居跡の床面とほぼ同じ高さにあった。

このほか、南西壁付近のP5からも第314図14の土器の大破片が出土した。

覆土は上下2層からなり、土層図中1層が上層、2層以下が下層に比定される。遺物は主に上層、とりわけ上下層の境界付近から多く出土している。所属時期は加曾利E I式期と考えられる。

第43号住居跡出土遺物

土器（第312～315図）

1～4は加曾利E I式で、キャリパー類深鉢である。

1は口縁から頸部まで残存する。水平口縁上に1単位の大型中空突起を持つ。口縁部文様帯は2

本隆帯の渦巻文を描くが、モチーフ末端は隆帯間の沈線部分がわらび手状に巻いて小渦巻文化する。地文はRの撚糸文で、頸部には無文帯を持つ。

突起部分を除く復元最大径は約22cm、現存高は約17.8cmである。胎土はシルト質で、器面は灰黄褐色である。焼成はやや不良である。

2は口縁から頸部まで残存する。水平口縁上に山形の小突起を配する。突起の直下に2本隆帯が垂下して、口縁部文様帯下端の区画に連結し、長方形の区画文を構成する。地文はRL単節の縄文を横位回転で施文する。

頸部には無文帯を持つが、胴部の地文であるRL縦位回転の縄文が一部に侵入しており、胴部との境が隆帯などで明瞭に区画されていないことを示している。

復元最大径は約19.8cm、現存高は約8.5cmである。胎土はややシルト質である。器壁は外面灰黄褐色、内面暗灰褐色である。焼成はやや不良である。

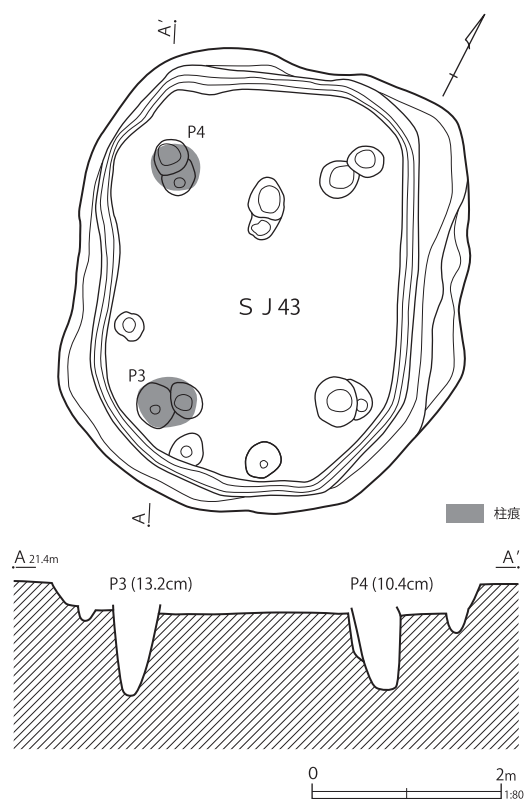
3は埋甕1である。水平口縁の深鉢で、口縁から胴部中段まで残存する。

末端に小渦巻の突起を持つ弧状文が展開するが、大小一対の弧状文の組み合わせが単位文となっており、完全な繋ぎ弧文とはならない。また、一部に2の個体にみられる縦位の隆帯区画が用いられている。

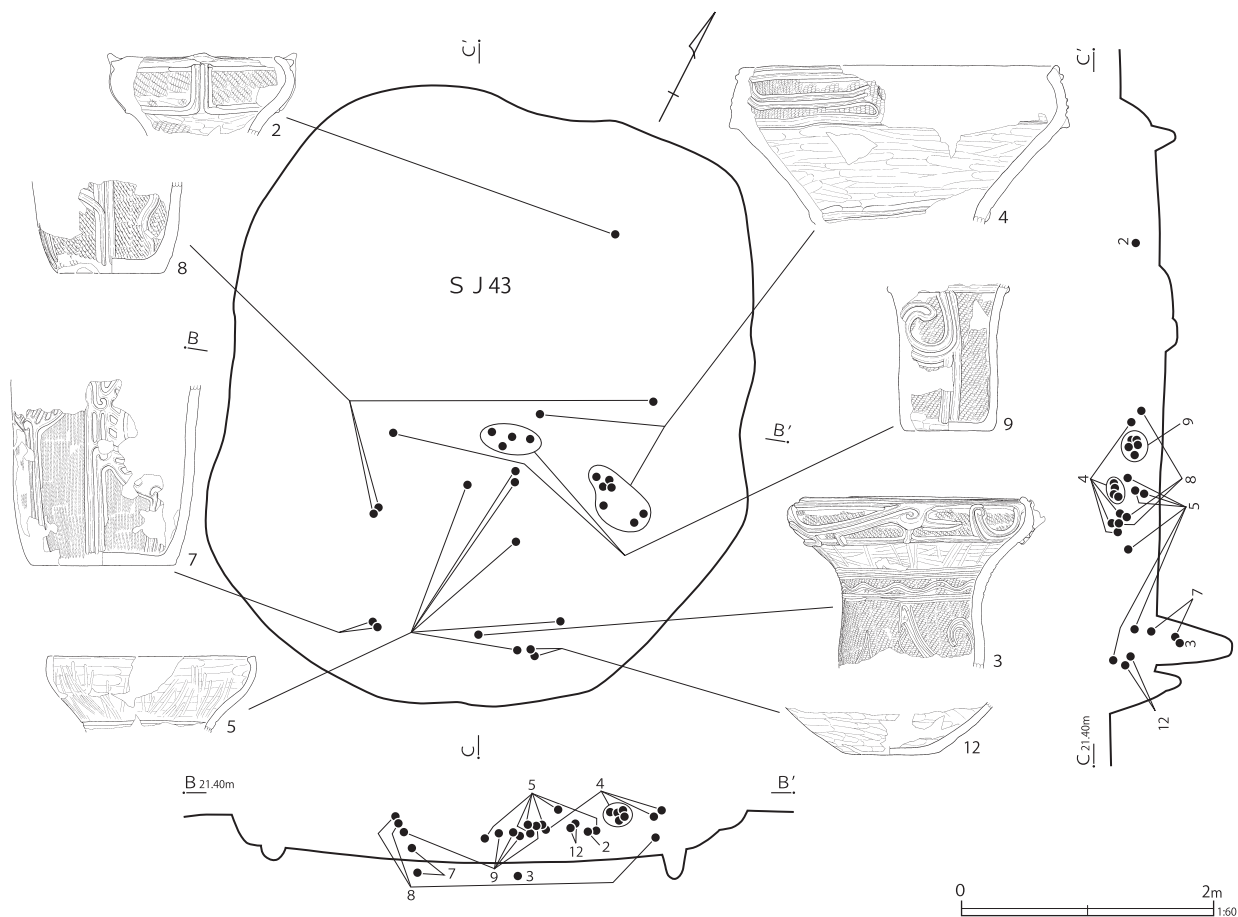
頸部には無文帯が存在し、胴上半部に幅狭の無文帯を持って、上下を平行沈線で区画した中に小波状文が巡る。

胴部には平行沈線による曲線文が展開して一部に剣先状のモチーフを用いており、短沈線の蛇行懸垂文が垂下する。地文はRL単節の縄文で、口縁部には横位回転、胴部には縦位回転で施文している。

復元最大径は約27.1cm、現存高は約17.9cmである。胎土はシルト質で、器壁は外面灰褐色、内面灰橙色である。焼成は良い。



第 307 図 第 43 号住居跡柱痕



第 308 図 第 43 号住居跡遺物出土状況（1）

4は口縁から頸部まで残存する。水平口縁で、口縁部には初現的な繋ぎ弧文を描くが、隆帯末端の小突起は剥落しており、貼付け前に施文した地文縄文が露出している。

頸部には無文帯が存在し、胴部との境は隆帯で区画する。地文はR L単節の縄文を右下がりに施文して、条の方向を縦に揃えている。

復元最大径は約35.6cm、現存高は約16.5cmである。胎土はシルト質で、若干の砂と小礫を含む。器面は灰黄褐色で、焼成はやや不良である。

5・6は無文口縁を持つ曽利系の深鉢である。5は口縁から頸部まで残存する。内湾口縁で、口唇断面は若干肥厚して内面に突出し、口端上が平坦に整形される。胴部との境には沈線の区画が存在する。

復元最大径は約25cm、現存高は約15.7cmである。胎土はシルト質である。器面は暗灰黄褐色で

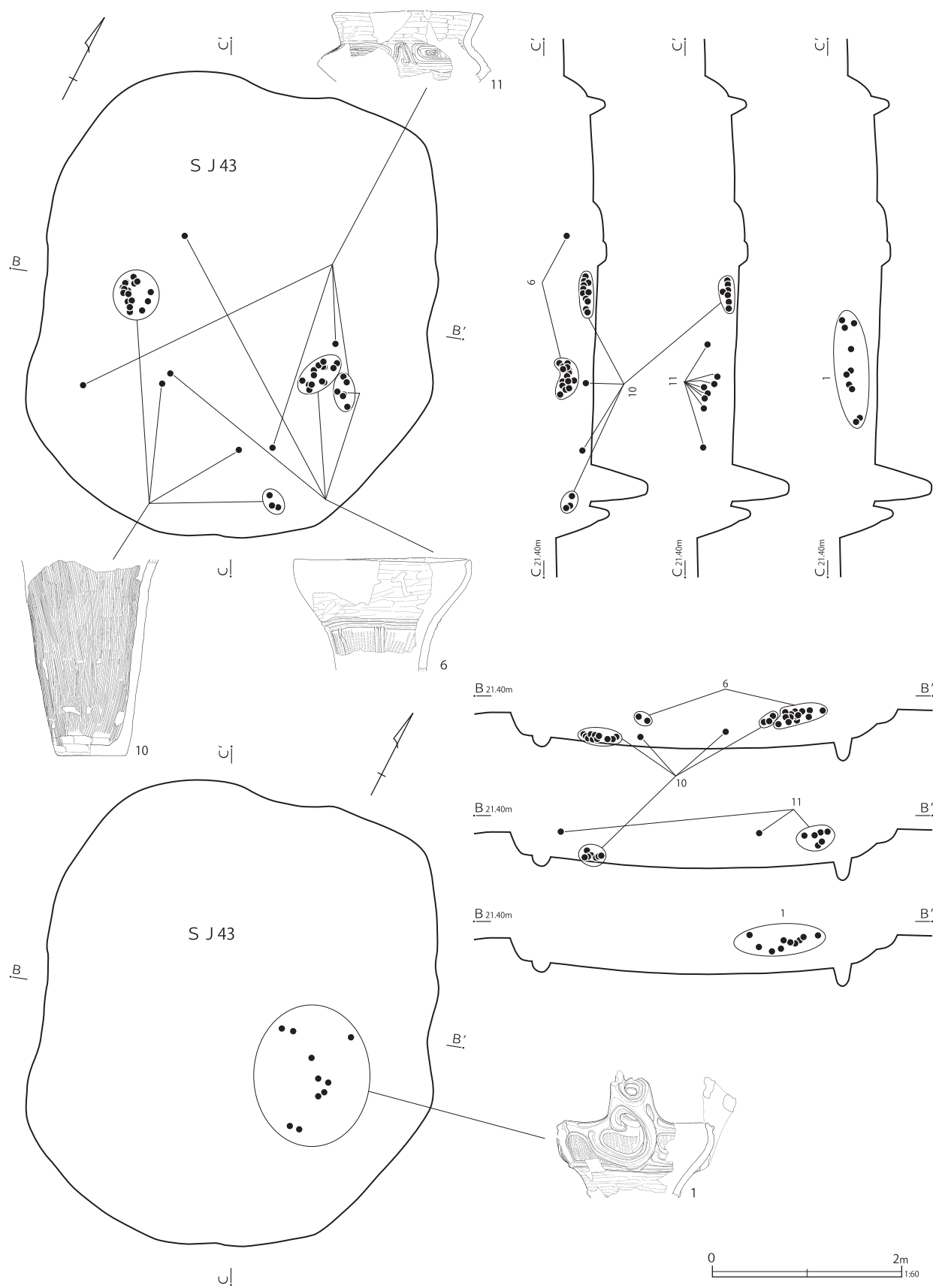
ある。焼成は良い。

6は口縁から胴部中段まで残存する。無文の口縁と胴部の文様帯との境は2条の隆帯で区画し、胴部には2本隆帯の懸垂文と1本隆帯の蛇行懸垂文が交互に垂下する。地文はR縦位回転の燃糸文である。

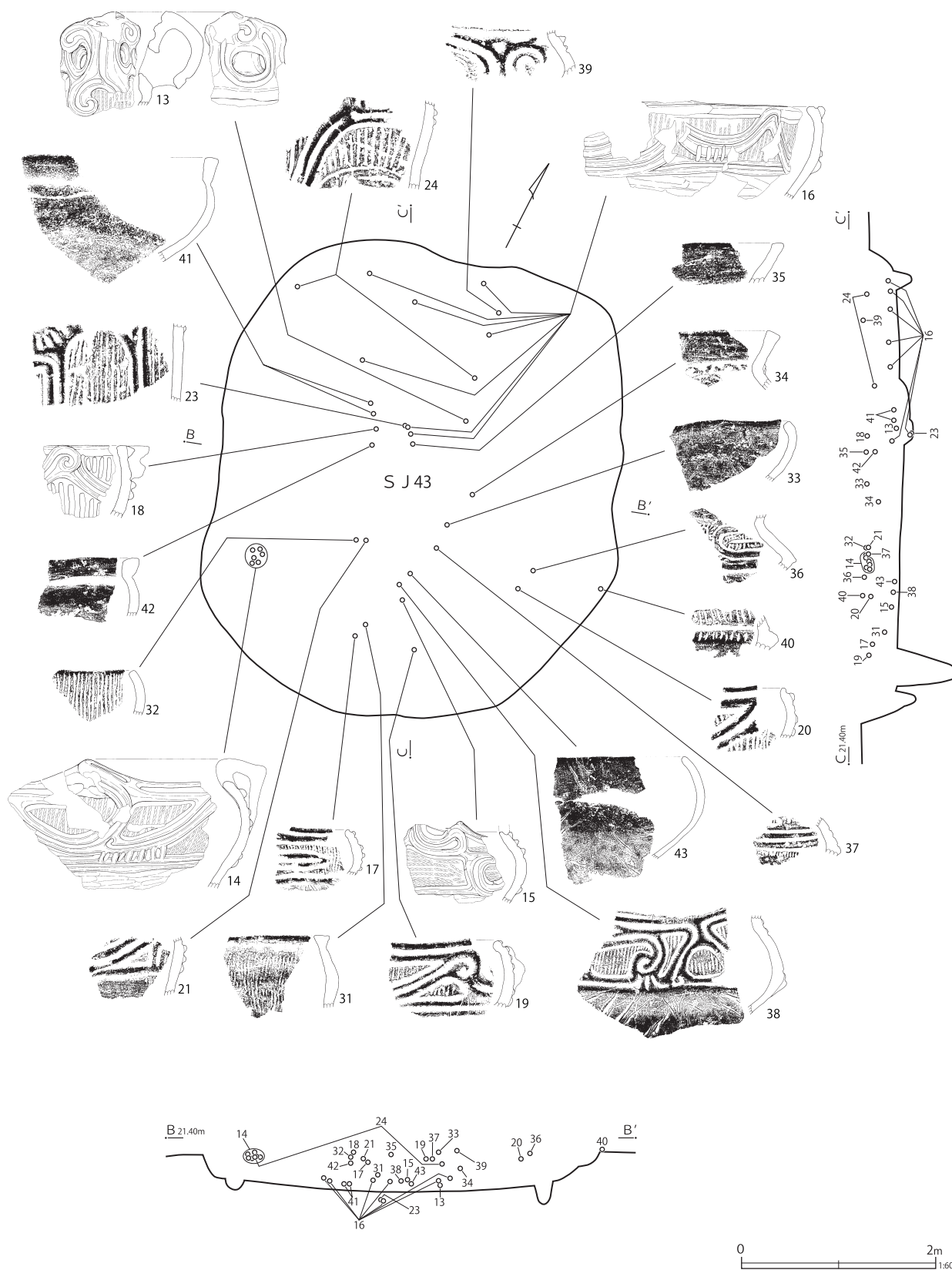
復元最大径は約22.2cm、現存高は約8.9cmである。胎土は多量の砂とシルトを含む。器壁は外面暗橙色～灰褐色、内面黒褐色である。焼成は比較的良い。

7は埋甕2である。キャリパー類深鉢の胴部中段から底部まで残存する。2本隆帯の懸垂文が垂下し、隆帯間の沈線の末端がわらび手状に巻いて小渦巻文を形成する。

2本隆帯の曲線文が展開するが、隆帯間が短い隆帯で多段に連結される階梯状のモチーフを用いている。地文はR縦位回転の燃糸文である。



第 309 图 第 43 号住居跡遺物出土状況 (2)



第 310 图 第 43 号住居跡遺物出土状況 (3)

復元最大径は約19.8cm、現存高は約19.4cmである。胎土はシルト質で、器面は黒褐色～暗灰褐色である。焼成は不良である。

8は胴部中段から底部まで残存する。2本隆帯の懸垂文と1本隆帯の蛇行懸垂文が垂下し、一部の懸垂文から派生して曲線状のモチーフを描いている。地文はL無節縦位回転の縄文である。

復元最大径は約15.5cm、現存高は約9.7cmである。胎土は砂質である。器壁は外面暗橙色、内面黒色で、焼成は比較的良い。

9は胴上半部から底部まで残存する。頸部との境は隆帯を区画し、2本隆帯の渦巻文を描いて、やはり2本隆帯の懸垂文が垂下する。地文はRL単節縦位回転の縄文である。

復元最大径は約12.8cm、現存高は約15.5cmである。胎土は若干の砂と小礫を含み、とりわけ石

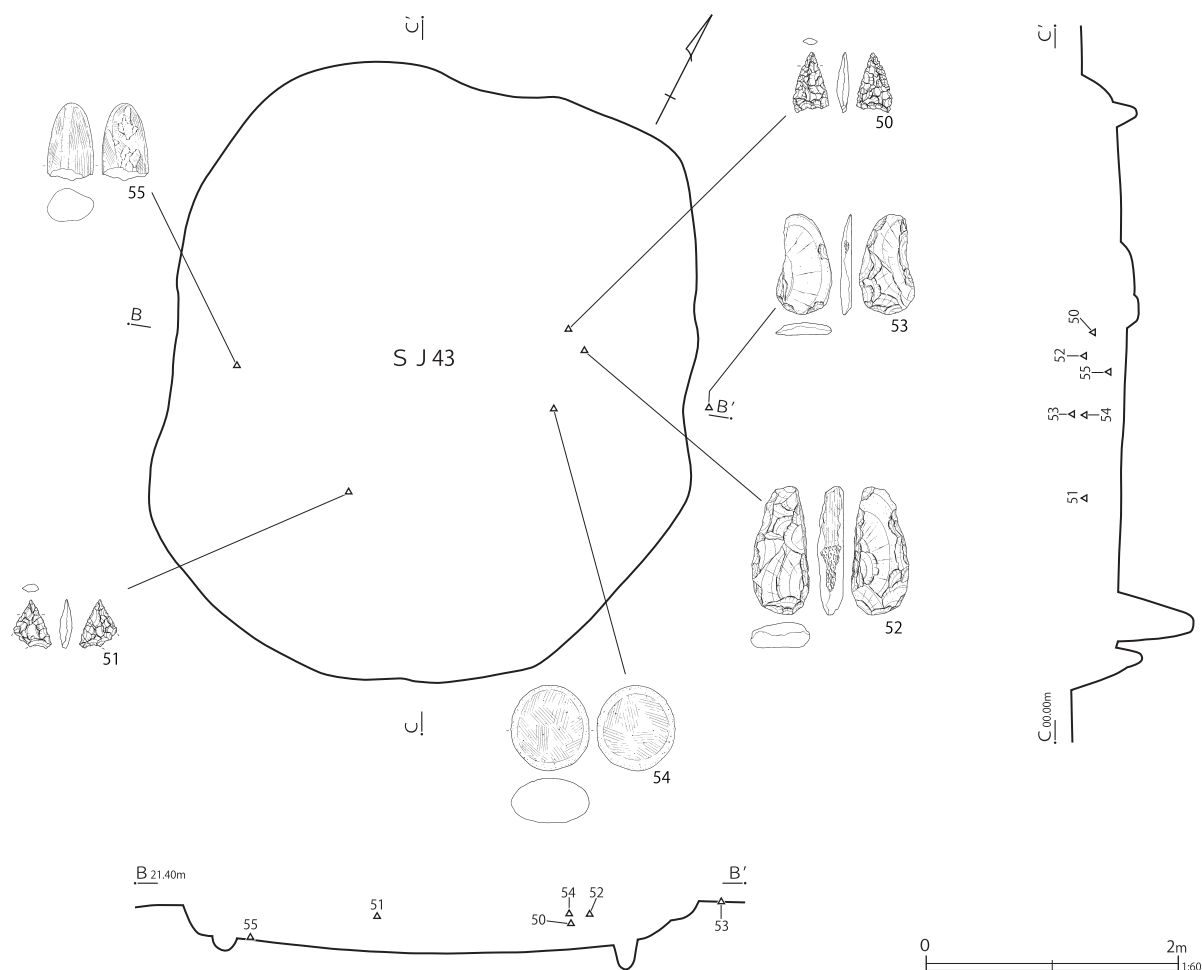
英等の垂角礫が目立つ。器壁は外面灰橙色、内面灰黄褐色～黒褐色である。焼成は良い。

10は胴上半部から底部まで残存する。直線的に開く深鉢で、櫛歯状工具による縦位の条線を地文とし、底部の直上に若干の無文部を持つ。

復元最大径は約19cm、現存高は約27.5cmである。胎土は砂質である。器壁は外面黄橙色～黒灰褐色、内面黒灰褐色で、焼成は比較的良い。

11は浅鉢で、口縁から胴部中段まで残存する。ソロバン玉状に張り出す胴部で、頸部屈曲し、口縁はやや外傾しつつ直線的に立ち上がる。口端は肥厚して、上面を平坦に整形している。

胴上半部に文様帯を持ち、末端わらび手状の平行沈線による逆V字モチーフを挟んで長方形の区画文を描き、内部にわらび手沈線を描いて、余白に刺突列を充填する。胴下半部と口縁部は無文で



第311図 第43号住居跡遺物出土状況(4)

ある。

復元最大径は約24.3cm、現存高は約9.9cmである。胎土はシルト質である。器面は灰黄褐色で、焼成はやや不良である。

12は浅鉢で、無文の胴下半部から底部まで残存する。復元最大径は約21.8cm、現存高は約5.4cmである。胎土は砂質で、石英・チャート・片岩等の垂角礫を含む。器壁は外面灰橙色、内面黒褐色である。焼成は比較的良い。

13～43は破片資料である。

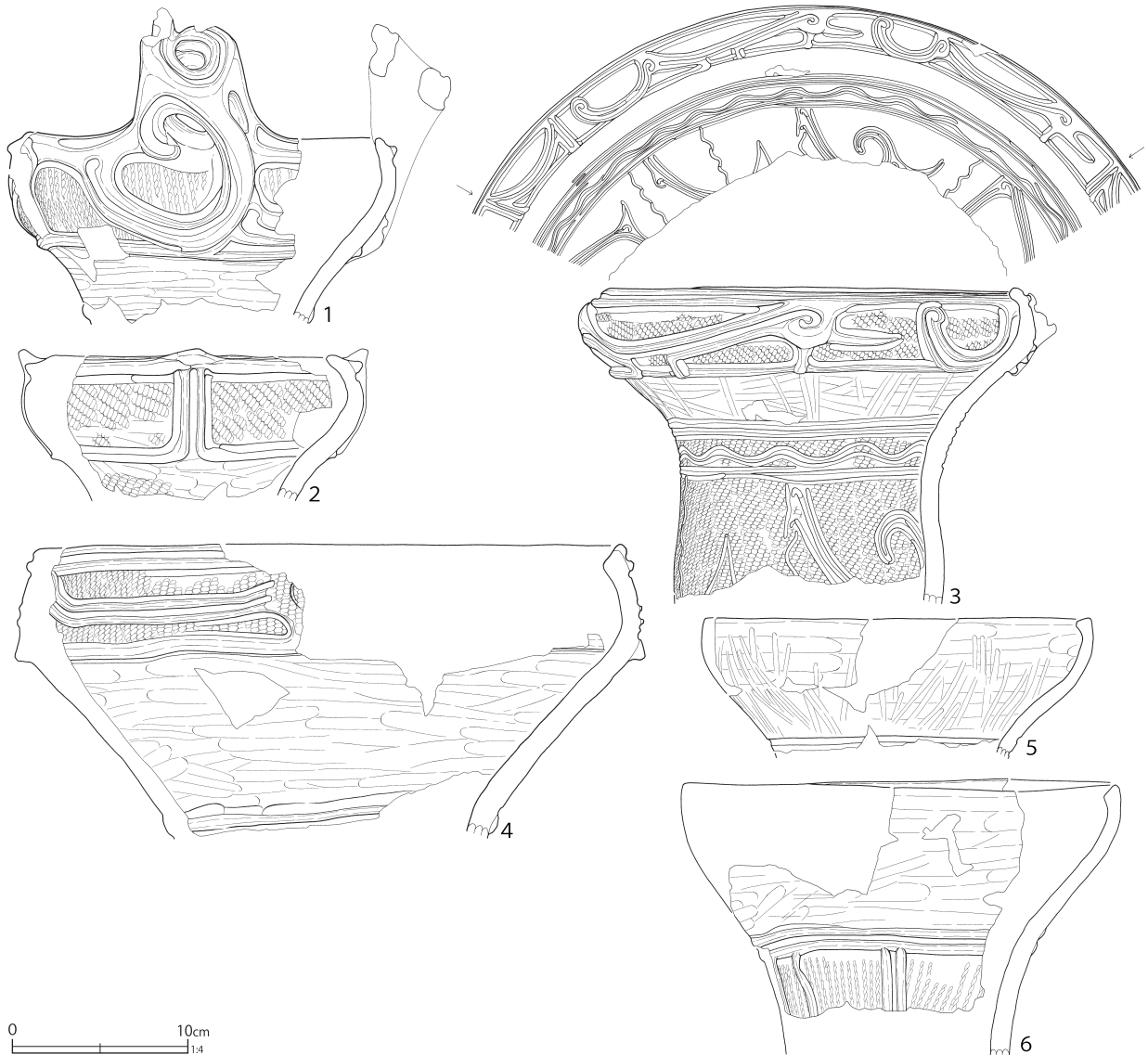
13～20はキャリパー類深鉢の口縁部である。13は中空突起で、左右および前後に貫通孔を持つ。14・15も中空突起で、口縁部の渦巻文の一部が立

体化することで形成されている。

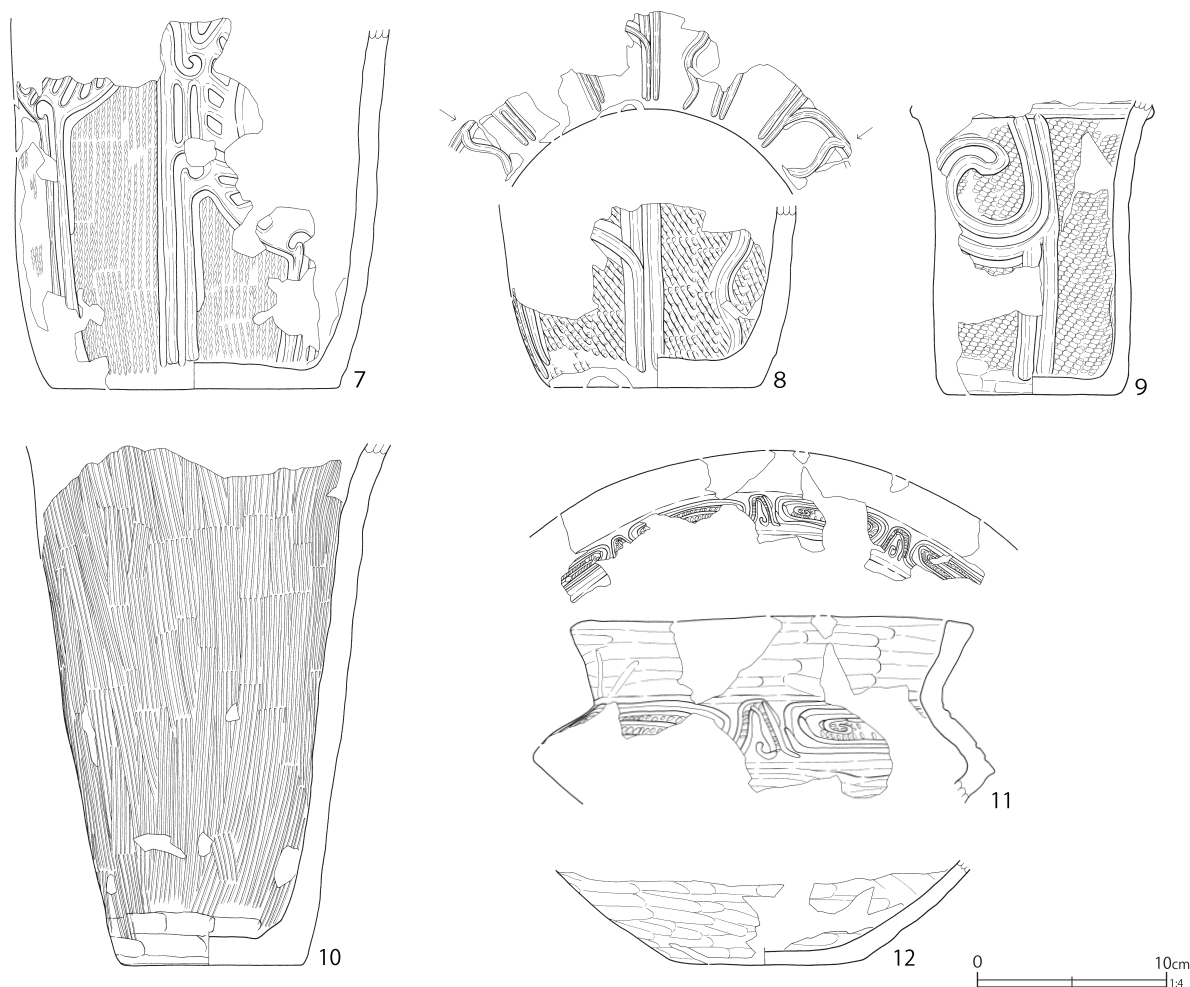
16も中空突起の口縁部だが、突起そのものは剥落している。2本隆帯の弧状文が連続し、下端の区画文との接点を多条の短沈線で連結する。17は横位の2本隆帯で、末端閉塞する。18～20は初現的な繋ぎ弧文である。

21は口縁部文様帯を含む破片で、頸部には無文帯が存在する。22～26は隆帯により懸垂文、その他の文様を描く胴部である。23・24は曲線文が展開し、23は階梯状のモチーフを用いている。25は隆帯上に単沈線を加えた連鎖状の懸垂文である。

27～30は底部である。27・28は2本隆帯の懸垂文が垂下し、28は隆帯末端が閉塞している。29は



第312図 第43号住居跡出土遺物（1）



第313図 第43号住居跡出土遺物（2）

沈線の蛇行懸垂文である。30は縦位の集合沈線を地文とする。

31～33は曾利系の深鉢口縁部である。31は緩やかな内湾口縁で、口唇断面肥厚して外に張り出し、口端上面に平坦面を持つ。口縁直下に凹線が巡り、R L単節の縄文を右下がりで施文して条を縦方向に揃えている。

32・33は内湾口縁で、32はR縦位回転の撚糸文を地文とし、33は無文である。

34～43は浅鉢である。34は胴張りで頸部屈曲し口縁外反する浅鉢で、口縁から頸部まで残存する。口縁は無文で、頸部には交互刺突を伴う隆帯が巡る。35も類似の器形と考えられる。

36・37・40は「く」の字に張る胴部中段で、胴上半部に文様帯を持つ。36は半裁竹管状工具によ

る楕円形区画文で、内部に篋状工具の刺突文が巡る。

38・39はキャリパー類深鉢に由来する文様帯を胴上半部に配する。38は胴部中段が丸く張って、ここに文様帯下端を区画する隆帯が巡る。

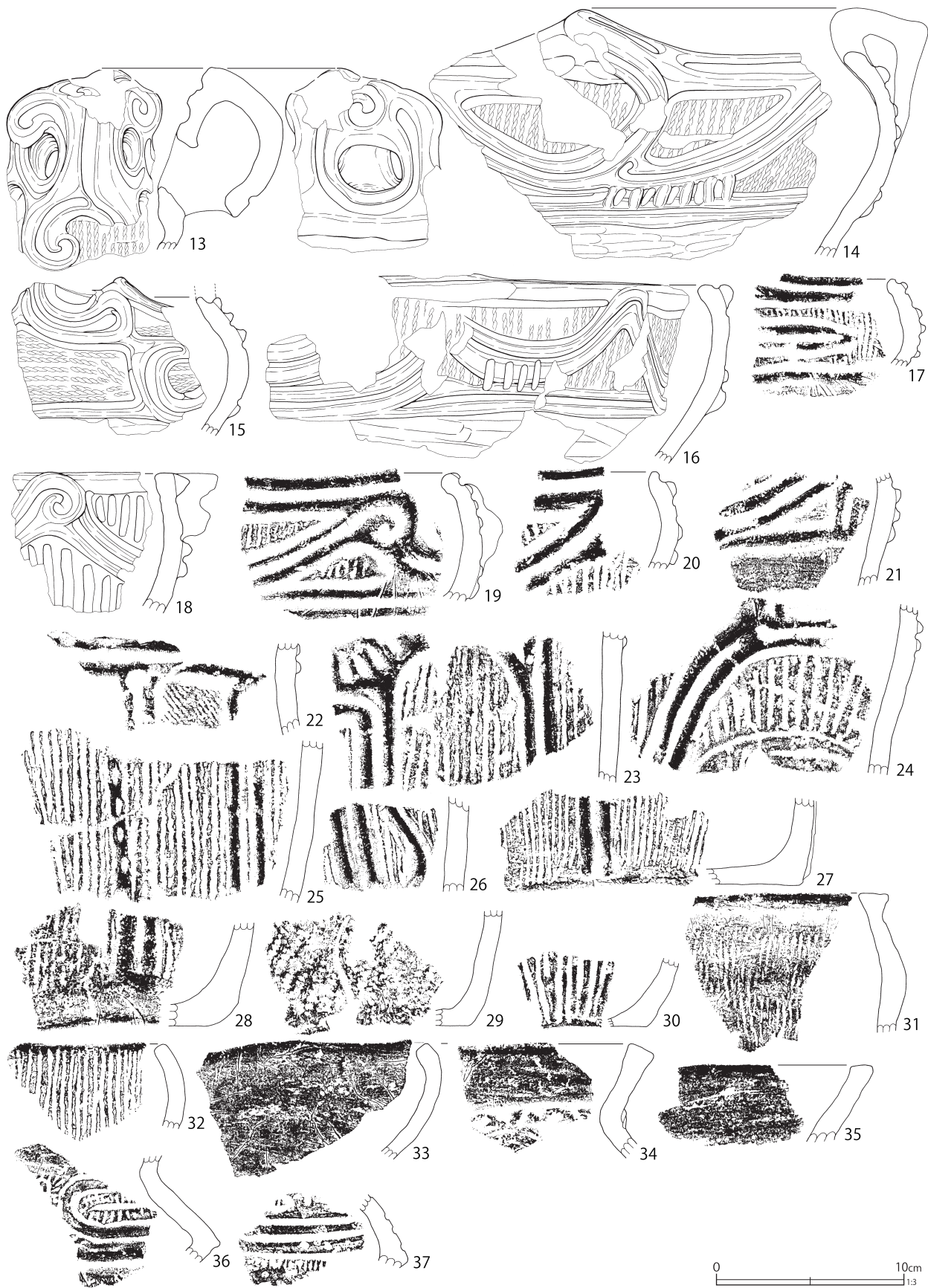
41・42は胴上半部が丸く張り、頸部屈曲して口縁直立する。折り返し口縁で外面に段を持ち、口端上を平坦に整形している。43は単調な内湾口縁で、胴上半部に最大径を持つ。

44～49は土製円盤である。

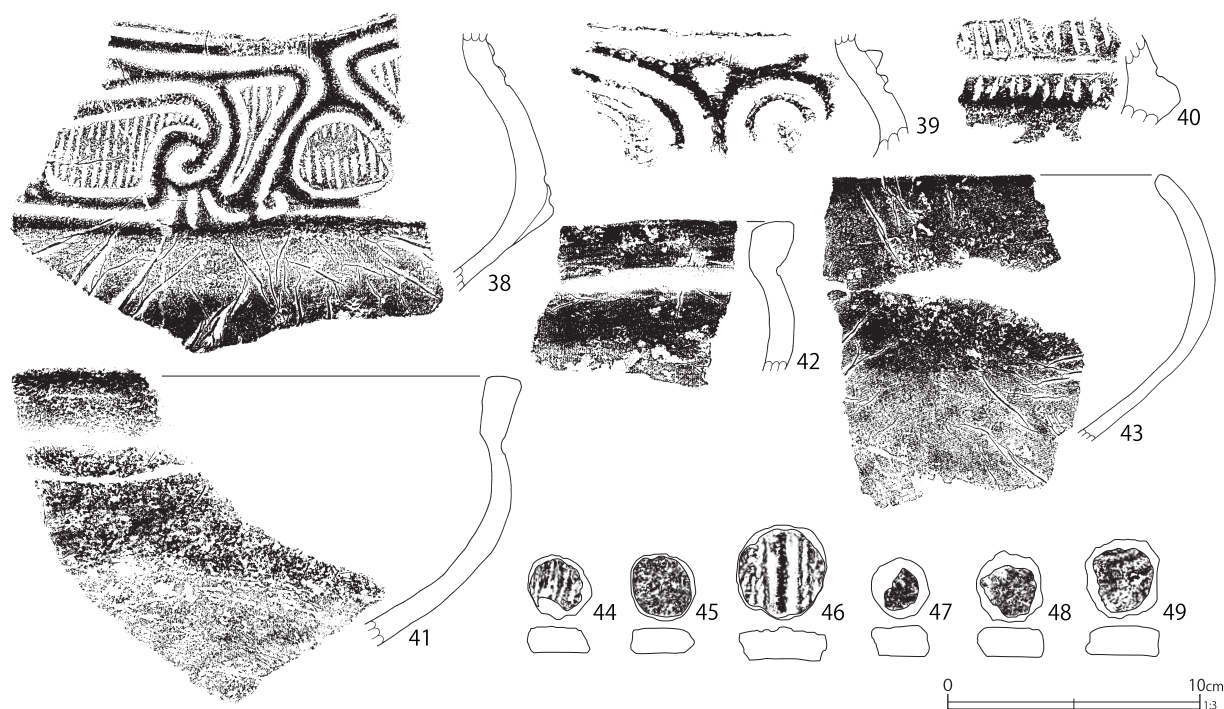
石器（第316図）

50・51は石鏃である。

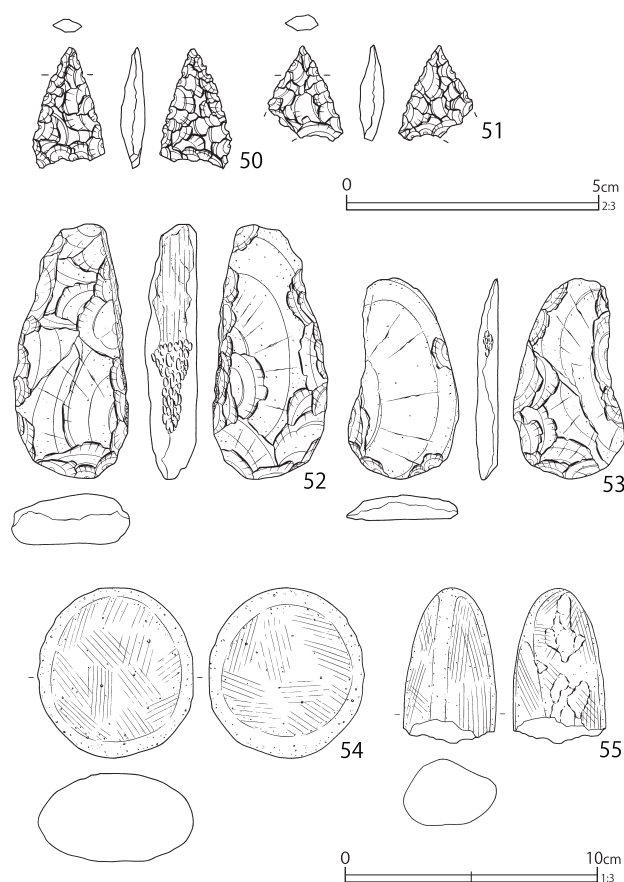
50はごく浅い凹基である。長さ2.4cm、幅1.4cm、厚さ0.5cm、重さ1.24 gである。石材はチャートである。51は凹基で、左脚を折損する。



第 314 图 第 43 号住居跡出土遺物 (3)



第 315 図 第 43 号住居跡出土遺物（４）



第 316 図 第 43 号住居跡出土遺物（５）

長さ1.9cm、幅1.5cm、厚さ0.45cm、重さ0.97 g
である。石材は黒曜石である。

52・53は打製石斧である。

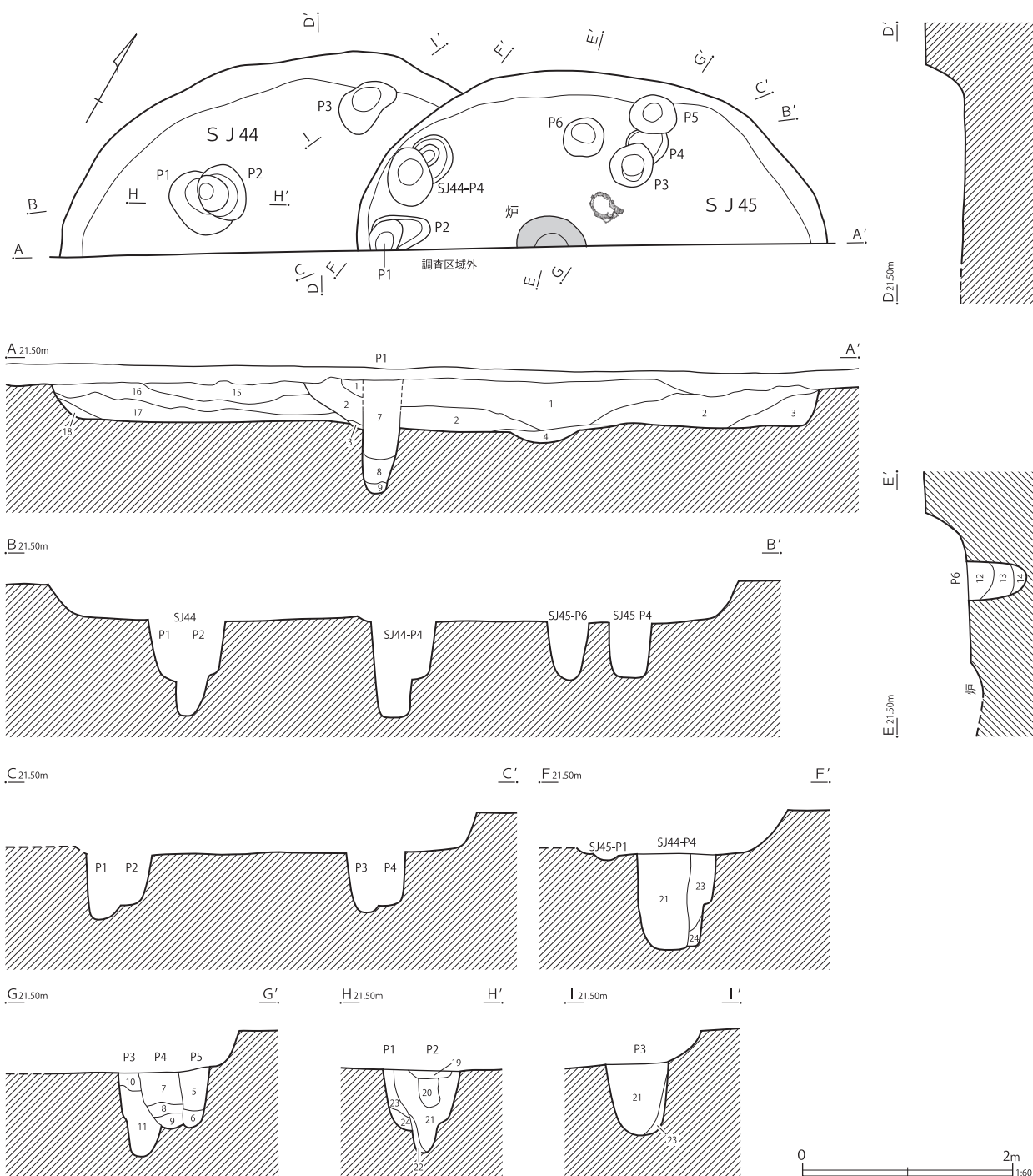
52は短冊形である。右側縁に節理面を残し、腹面に打割面を残している。長さ10.1cm、幅4.5cm、厚さ2cm、重さ123.89 gである。石材はホルンフェルスである。

53は短冊形だが、全体が左に湾曲している。背面に打割面を残し、調整剥離は腹面、とりわけ右側縁に集中している。長さ7.9cm、幅4.3cm、厚さ0.9 cm、重さ43.56 gである。石材はホルンフェルスである。

54・55は磨石である。

54は円形で、両面使用する。長さ6.7cm、幅6.1cm、厚さ3.5cm、重さ177.37 gである。石材は安山岩である。

55は棒状の磨石で、短軸方向に折損する。長さ6.2cm、幅3.7cm、厚さ2.6cm、重さ81.78 gである。石材は緑泥片岩である。



- S J 45
- 1 暗褐色土層 : ローム粒子多く 焼土粒子少量 炭化物多く含む
 - 2 暗黄褐色土層 : ロームブロック少量 ローム粒子多く 炭化物少量含む
 - 3 暗黄褐色土層 : ロームブロック・炭化物多く含む
 - 4 暗黄褐色土層 : ロームブロック少量 ローム粒子多く 焼土粒子少量含む
- S J 45 Pit
- 5 暗褐色土層 : ロームブロック・ローム粒子少量含む
 - 6 暗黄褐色土層 : ローム粒子少量 炭化物含む
 - 7 暗褐色土層 : ローム粒子多く含む
 - 8 暗褐色土層 : ローム粒子多く 炭化物少量含む
 - 9 黄褐色土層 : ロームブロック多く含む
 - 10 暗黄褐色土層 : ローム粒子少量含む
 - 11 暗黄褐色土層 : ロームブロック多く含む
 - 12 暗黄褐色土層 : ローム粒子少量 焼土粒子微量含む
- S J 44
- 13 暗褐色土層 : ローム粒子少量含む
 - 14 黄褐色土層 : ロームブロック多く含む
- S J 44
- 15 暗褐色土層 : ローム粒子少量含む
 - 16 暗黄褐色土層 : ローム粒子多く 焼土粒子微量 炭化物少量含む
 - 17 暗黄褐色土層 : ロームブロック・ローム粒子少量 炭化物微量含む
 - 18 暗黄褐色土層 : ロームブロック多く 焼土粒子少量含む
- S J 44 Pit
- 19 暗褐色土層 : ロームブロック少量 ローム粒子若干含む
 - 20 暗褐色土層 : ロームブロック多く ローム粒子若干含む
 - 21 暗褐色土層 : ロームブロック・ローム粒子若干含む
 - 22 暗黄褐色土層 : ロームブロック・ローム粒子多く含む
 - 23 暗褐色土層 : ローム粒子少量含む
 - 24 暗黄褐色土層 : ロームブロック・ローム粒子多く含む

第 317 図 第 44・45 号住居跡

第35表 第44・45号住居跡柱穴計測表

ビットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ビットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ビットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ビットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ビットNo.	長径(cm)	深さ(cm)
P 1	66.0	56.6	P 2	56.0	89.5	P 3	58.0	68.0	P 4	74.0	90.4	P 5		
P 1	(28.0)	58.6	P 2	(28.0)	49.0	P 3	44.0	79.4	P 4	38.0	50.7	P 5	44.0	83.6
P 6	38.0	57.4												

第44号住居跡（第317～319図）

M - 18・19グリッドに位置する。第45号住居跡に壊されている。全体の約三分の一、北西壁部分を発掘調査したが、覆土の大半が調査区域外に存在する。

長径は計測不能、短径約4 m。柱穴配置等から主軸方向はN - 30° - W付近を指すものとみられる。壁は緩やかに立ち上がり、壁高は最も深い部分で0.35mである。壁溝は検出されなかった。

床面は平坦である。炉跡は検出されず、調査区域外に存在するものとみられる。

床面上からP 1～3が検出され、さらに隣接する第45号住居跡の床面からP 4が検出された。これらのうち、P 1・2・4が主柱穴と考えられる。主軸線を中心に対象に配置され、4本柱を構成する奥壁寄りの2本に該当するものと考えた。

これらのうちP 1・2は切り合い関係にあり、P 4も断面観察の結果新旧が存在することから、少なくとも1回の建て替えが行われた可能性がある。また、P 3も建て替えに伴う別時期の主柱穴の可能性がある。

覆土は大きく上下2層からなり、土層図中14層の暗褐色土が上層、15層以下の暗黄褐色土が下層に該当する。遺物は上下層の境界付近を中心に少量出土している。所属時期は勝坂Ⅱ～Ⅲ式期と考えられる。

第45号住居跡（第317～319図）

M - 18・19グリッドに位置する。第44号住居跡を壊している。全体の約三分の一、北西壁～北壁

部分を発掘調査したが、覆土の大半が調査区域外に存在する。

長径は計測不能、短径約4.5mの楕円形ないし隅丸方形の住居跡であると考えられ、柱穴配置等から主軸方向はN - 25° - W付近を指すものと考えられる。壁は比較的緩やかに立ち上がり、壁高は最も深い部分で0.42mである。壁溝は検出されなかった。

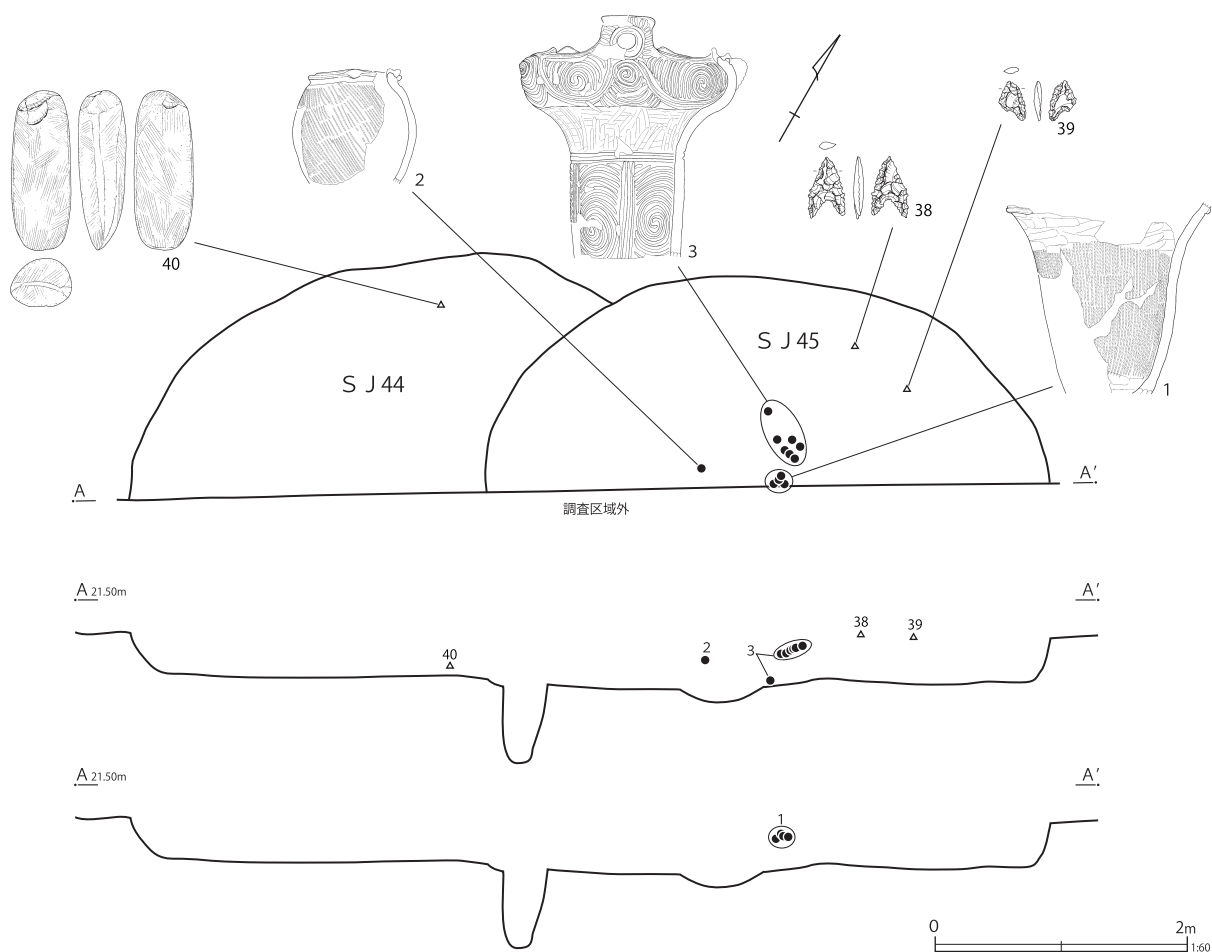
床面は平坦で、中央がやや低くなっており、この付近で炉跡を検出した。円形の地床炉と考えられ、南側二分の一近くが調査区域外に存在する。焼土の堆積は比較的少量であった。

床面上から6本のビットが検出された。いずれも異なった時期の主柱穴であり、主軸線を挟んだ奥壁寄りの一対を構成するものとみられる。これらのうちP 3～5は切り合い関係にあり、P 6もこれに近い位置にあることから、最大3回の建て替えが想定し得る。これらのうちP 4が最も新しいものと考えた。

P 1・2は主軸をはさんでこれらと対峙するものとみられる。覆土観察の結果、P 1がP 4に対応することが判明した。

また、P 1の掘り込みが住居跡の覆土下層を切っており、住居跡がある程度埋没した段階で柱材が抜去された可能性がある。

覆土は上下2層からなり、1層の暗褐色土が上層、2層の暗黄褐色土以下が下層に相当する。遺物は主に上層から出土している。所属時期は加曾利EⅠ式期と考えられる。



第 318 図 第 44・45 号住居跡遺物出土状況（1）

第44・45号住居跡出土遺物

両住居跡の境界付近のものについては分離しきれないため、一括して掲載する。個別の出土地点については挿図を参照されたい。

土器（第320・321図）

1～3はいずれも第45号住居跡から出土した。

1は加曾利E I 式キャリパー類深鉢である。胴下半部が張らず、胴部中段にも強くくびれを持たない、比較的寸胴の深鉢である。頸部から胴下半部まで残存する。口縁部文様帯下端を区画する隆帯がみられ、頸部には無文帯が存在する。胴部にはR縦位回転の燃糸文を施文する。頸部との境には区画を設けない。

復元最大径は約21.5cm、現存高は約19.9cmである。胎土は砂質である。器壁は外面暗黄橙色、内面暗灰褐色である。焼成はやや不良である。

2は広口壺形の土器で、底部を欠失する。緩やかな2単位の波状口縁で、口縁直下に隆帯と凹線が巡り、波頂部に瘤状の小突起を配する。胴部にはL縦位回転の燃糸文を施文する。

復元最大径は約12.8cm、現存高は約12cmである。胎土はややシルト質である。器壁は外面灰黄褐色で黒斑がみられ、内面は黄橙色である。焼成は良好である。

3は底部を欠失する。5単位の小波状口縁で、うち1か所には中央に貫通孔を持つ扇状突起を配する。口縁部文様帯は平行沈線で波状に区画され、この区画を挟んで密な集合沈線による渦巻文を対置する。また、波状口縁の波頂部直下では、この渦巻文は円錐形の突起となっており、渦巻文自体も浮線+沈線によって立体的に描いている。

頸部には無文帯を持つ。口縁部文様帯との境は

稜を形成するが、それ以外に区画は設けていない。胴部との境は平行沈線によって区画する。

胴部の文様帯は縦位の3本沈線で分割し、内部には集合沈線による渦巻文を配する。

復元最大径は約24.1cm、現存高は約25.5cmである。胎土は若干の砂と小礫を含み、黒雲母粒子が混じる。器壁は外面暗褐色～黄橙色、内面暗茶褐色である。焼成は良い。

4～34は破片資料である。

4～8は勝坂式である。5は口縁下に隆帯による三角形の区画を持ち、これに沿って複列の角押し文が巡る。

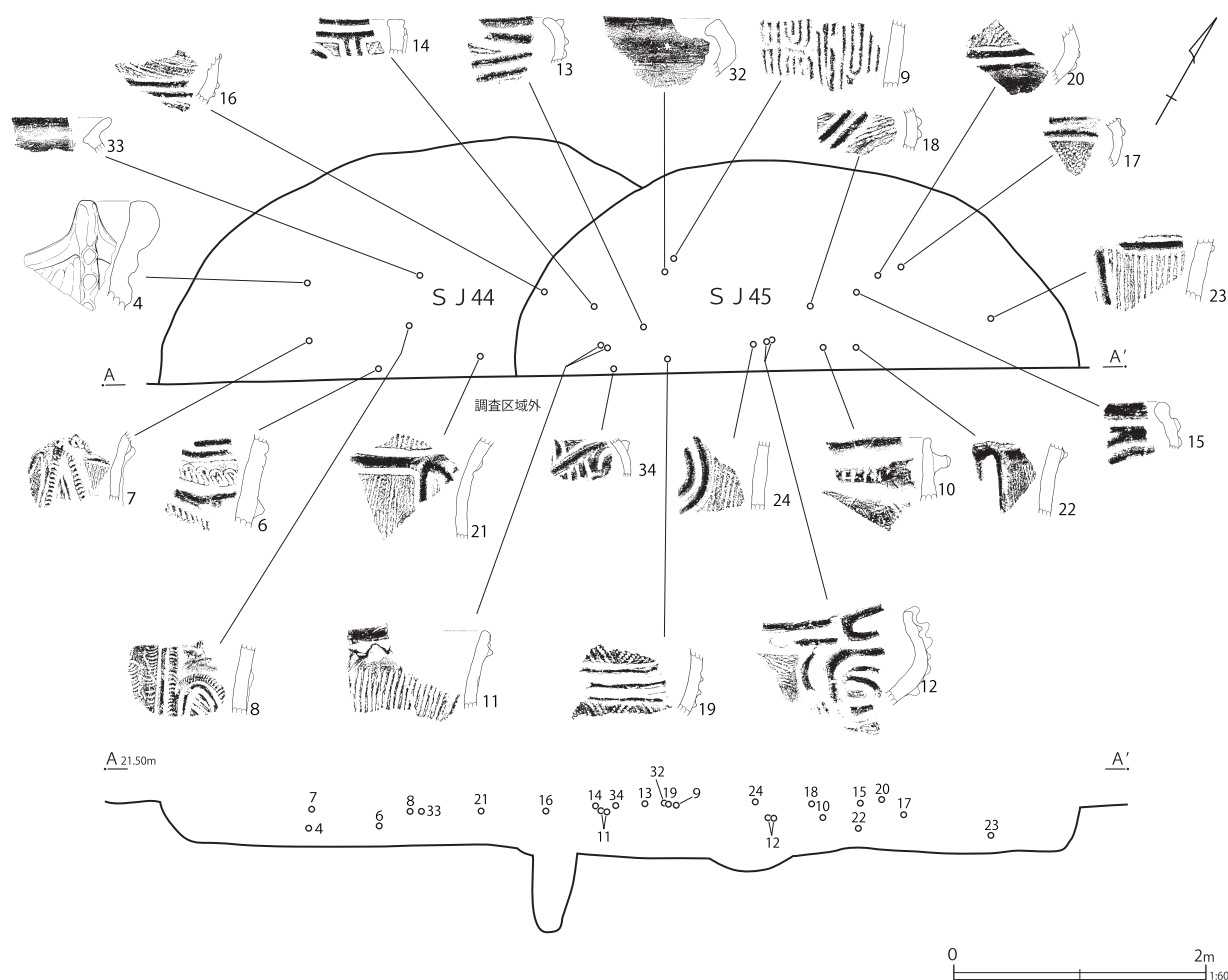
6・8は隆帯に沿ってキャタピラ文と弧状の刺突文が巡る。7は上面に爪型文を伴う隆帯で器面をパネル状に分割する。

9は半裁竹管状工具の集合沈線で褶曲文を描く

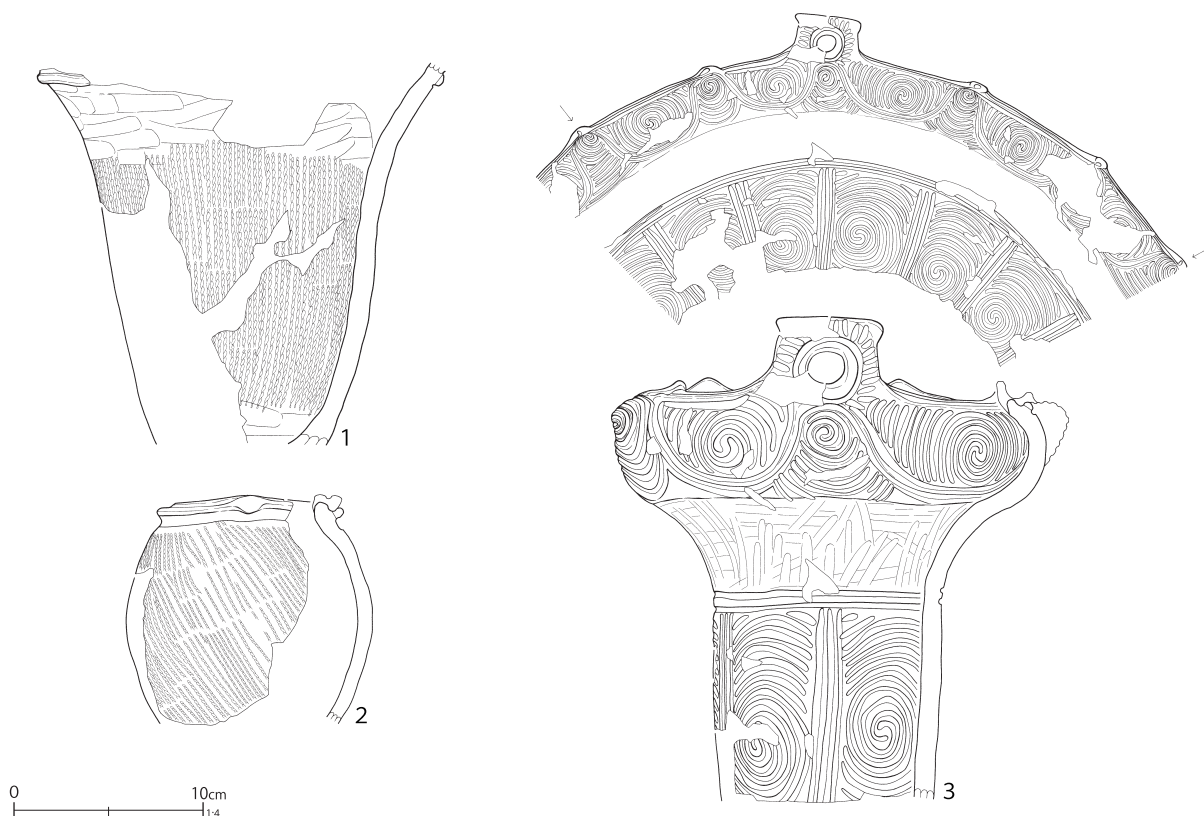
胴下半部で、馬高式に類似する。10・11は中峠系の土器である。10は小波状口縁で、口縁下に刻みを伴う隆帯が巡り、波頂部では中割れの突起となる。頸部には無文帯が存在する。11は水平口縁で、上下交互の押圧を伴う隆帯が巡る。胴部にはR縦位回転の撚糸文を施文する。

12～15はキャリパー類深鉢の口縁部である。12は波状口縁波頂部に小突起を持ち、2本隆帯の渦巻文を描く。16は文様帯の上下を区画する2本隆帯である。18は斜行する2本隆帯で、主文様である渦巻文の一部とみられる。19は間に凹線を伴う3本隆帯で文様を描く。

20は文様帯下端の区画で、頸部には無文帯が存在する。21～23は頸部と胴部の境の隆帯区画および胴部の懸垂文である。24は胴部の文様帯で、2本隆帯による曲線的な文様が展開する。



第 319 図 第 44・45 号住居跡遺物出土状況 (2)



第 320 図 第 44・45 号住居跡出土遺物（1）

25は地文のみの胴部で、R L単節の微細な縄文を施文する。26～30は深鉢底部である。26・27はR縦位回転の撚糸文を施文する。28の地文はR L単節縦位回転の縄文である。29は半裁竹管状工具の平行沈線が垂下する。

30はR縦位回転の撚糸文を施文し、1本隆帯の蛇行懸垂文が垂下する。31は無文の底部である。

32～34は浅鉢である。32は「く」の字に内屈する口縁で、口唇断面肥厚して内面に段を持つ。口端上面は平坦に整形されている。33は「く」の字に外屈する口縁で、内面に稜を持つ。34は浅鉢胴上半部と考えられる。斜行する隆帯により器面を分割し、内部に集合沈線文を施文する。

35～37は土製円盤である。

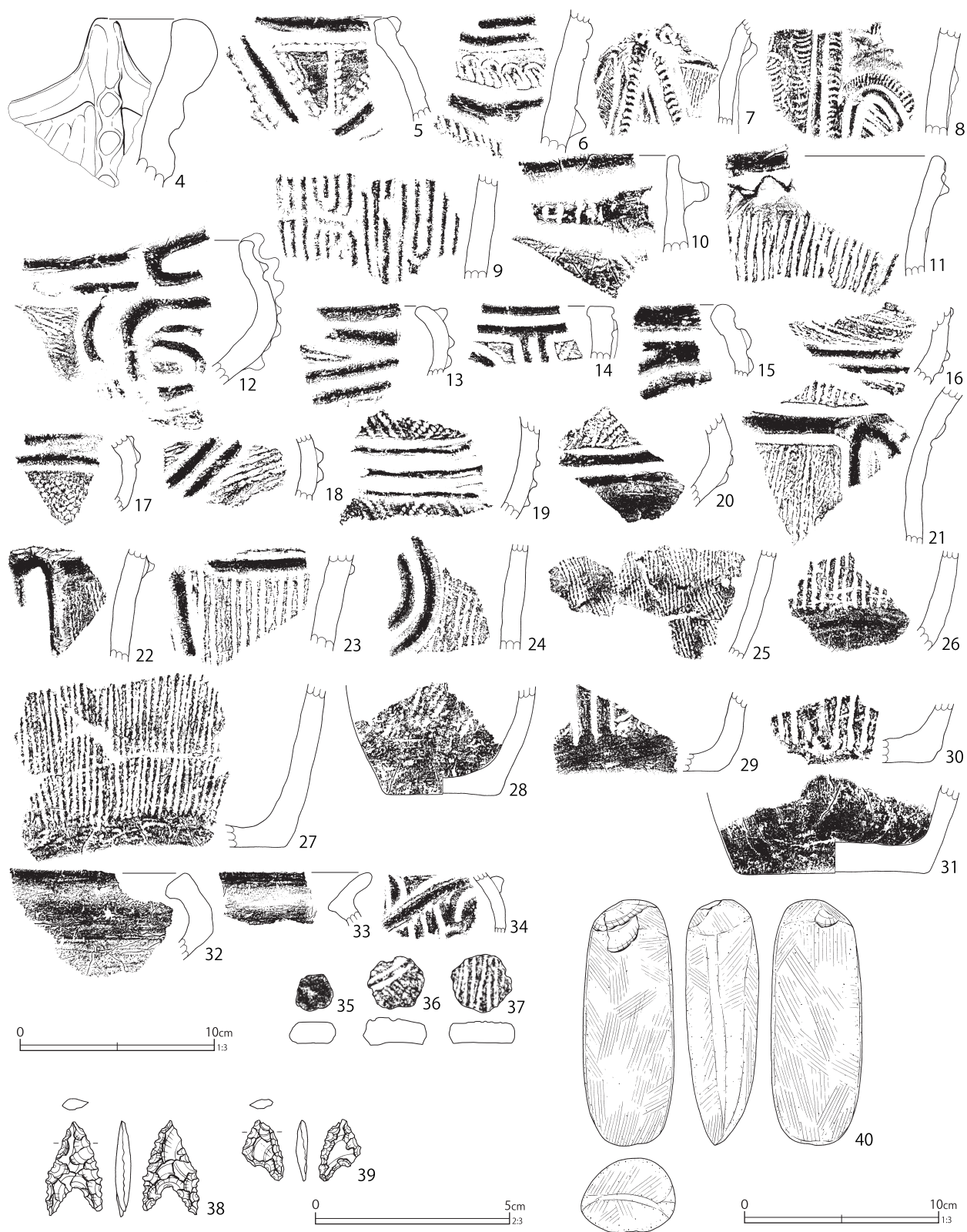
石器（第321図）

38・39は石鏃である。

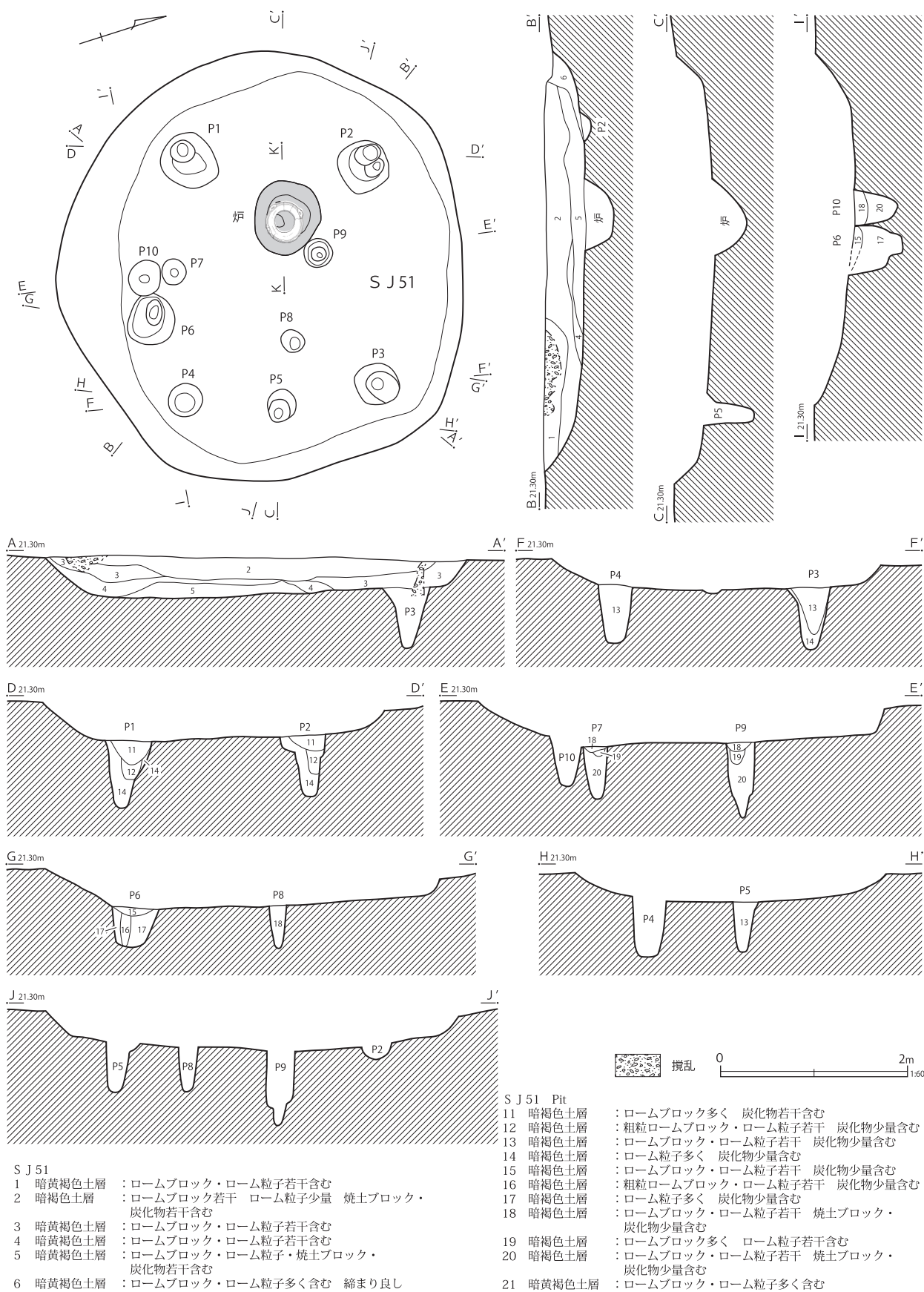
38はV字に深く切れ込む凹基である。長さ2.4cm、幅1.4cm、厚さ0.4cm、重さ1.04 gである。石材はチャートである。

39は凹基で、左脚折損する。長さ1.6cm、幅1.1cm、厚さ3cm、重さ0.36 gである。石材はチャートである。

40は磨製石斧である。断面丸棒状で基部が先細りにならず、打撃と研磨を繰り返した痕跡があること等から、基部側を破損した後も形を整えて使い続けたものと考えられる。長さ12.7cm、幅4.7cm、厚さ3.8cm、重さ379.94 gである。石材は砂岩である。



第321图 第44·45号住居跡出土遺物(2)



第 322 図 第 51 号住居跡（1）

第 36 表 第 51 号住居跡柱穴計測表

ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)
P 1	64.0	70.6	P 2	52.0	64.8	P 3	50.0	65.8	P 4	38.0	62.6	P 5	36.0	52.5
P 6	56.0	59.9	P 7	28.0	58.0	P 8	26.0	48.9	P 9	30.0	80.0	P 10	38.0	48.8

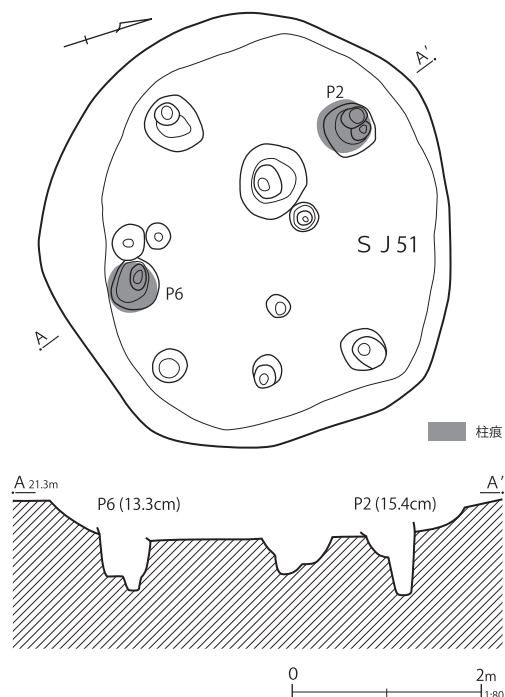
第51号住居跡（第322～325図）

L - 17グリッドに位置する。長径4.54m、短径4.34mの不整円形の住居跡で、主軸方向はN - 72° - Wを指す。壁は比較的緩やかに立ち上がり、壁高は最も深い部分で0.38mである。壁溝は検出できなかった。

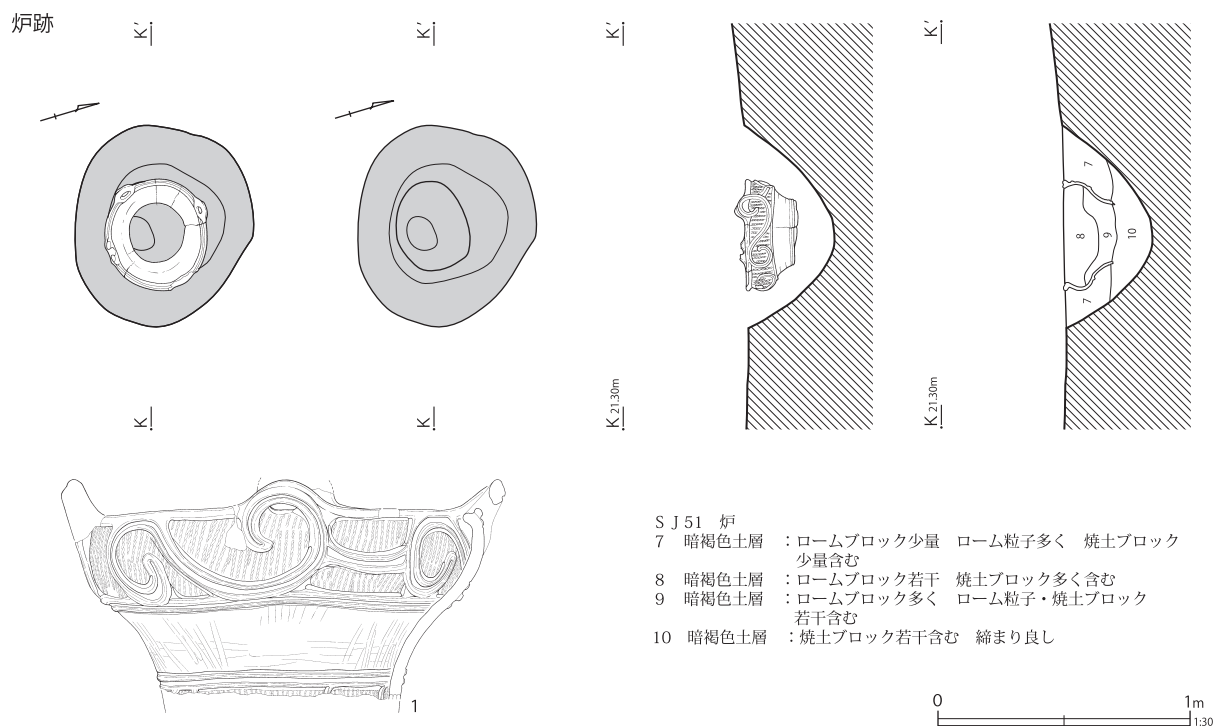
床面は平坦で、中央部分がやや下がっている。主軸線上奥壁寄りに炉跡を検出した。埋甕炉で、深鉢土器の口縁から頸部にかけての部分に正位に埋設している。土器の周囲には不整楕円形の掘りかたが存在した。長径80cm、短径72cm、深さ35cmで、主軸方向はN - 49° - Wを指す。

床面上から10本のピットが検出された。これらのうちP 1～4が主柱穴で、4本柱の上屋を構成するものと考えられる。

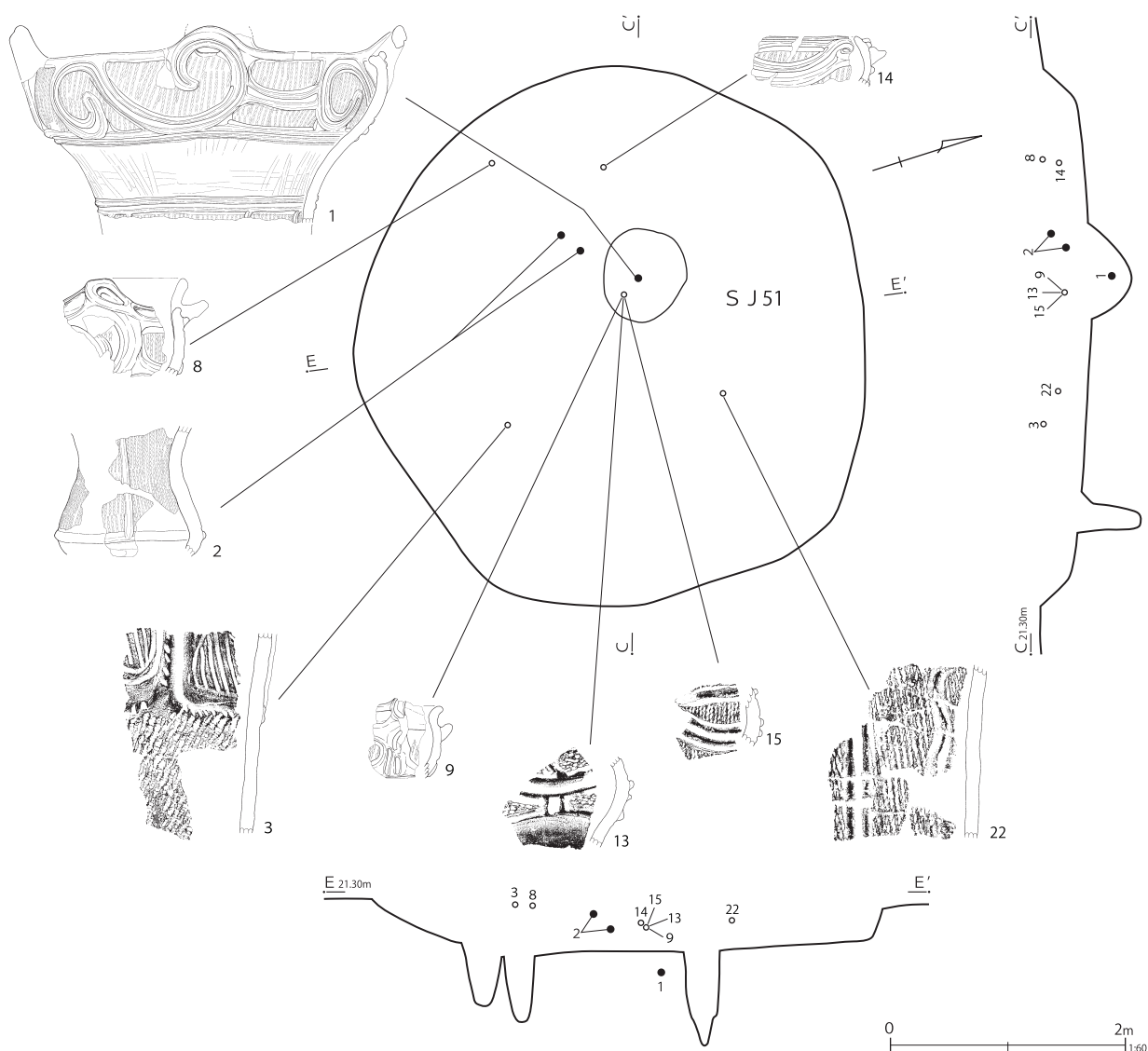
南壁中央付近にはP 6・7・10が集中している。この部分の壁は三角形に張り出しており、立ち上がりも周囲より緩やかであることから、この部分



第 323 図 第 51 号住居跡柱痕



第 324 図 第 51 号住居跡（2）



第 325 図 第 51 号住居跡遺物出土状況

に出入り口を持つ「平入り」の住居であった可能性がある。主軸線上南東側に P 5・8 が並んでおり、棟持ち柱と考えられる。

覆土掘削の過程で、P 6 の上面 13.3cm および P 2 の上面 15.4cm の高さで柱痕を検出した。住居跡がある程度埋没した段階で柱材が抜去された可能性がある。

覆土は大きく上下 2 層からなる。土層図中の暗褐色土である 2 層と、その中に投棄されたローム質土である 1 層が上層であり、3 層の暗黄褐色土から下が下層に比定される。遺物は主に上層から出土している。

所属時期は加曾利 E I 式期と考えられる。

第 51 号住居跡出土遺物

土器 (第 326・328 図)

1 は炉体土器である。口縁から胴部中段まで残存する。水平口縁で、4 単位の中空突起を配する。口縁部文様帯は 2 本隆帯による S 字文を 4 単位配し、その末端部分が立体化して中空突起を形成している。頸部には無文帯を持ち、胴部との境は 2 本隆帯で区画して、胴部には隆帯による懸垂文が垂下する。地文は R 縦位回転の撚糸文である。

復元最大径は約 46.6cm、現存高は約 24.6cm である。胎土は砂質である。器面は灰黄褐色で、焼

成は良い。

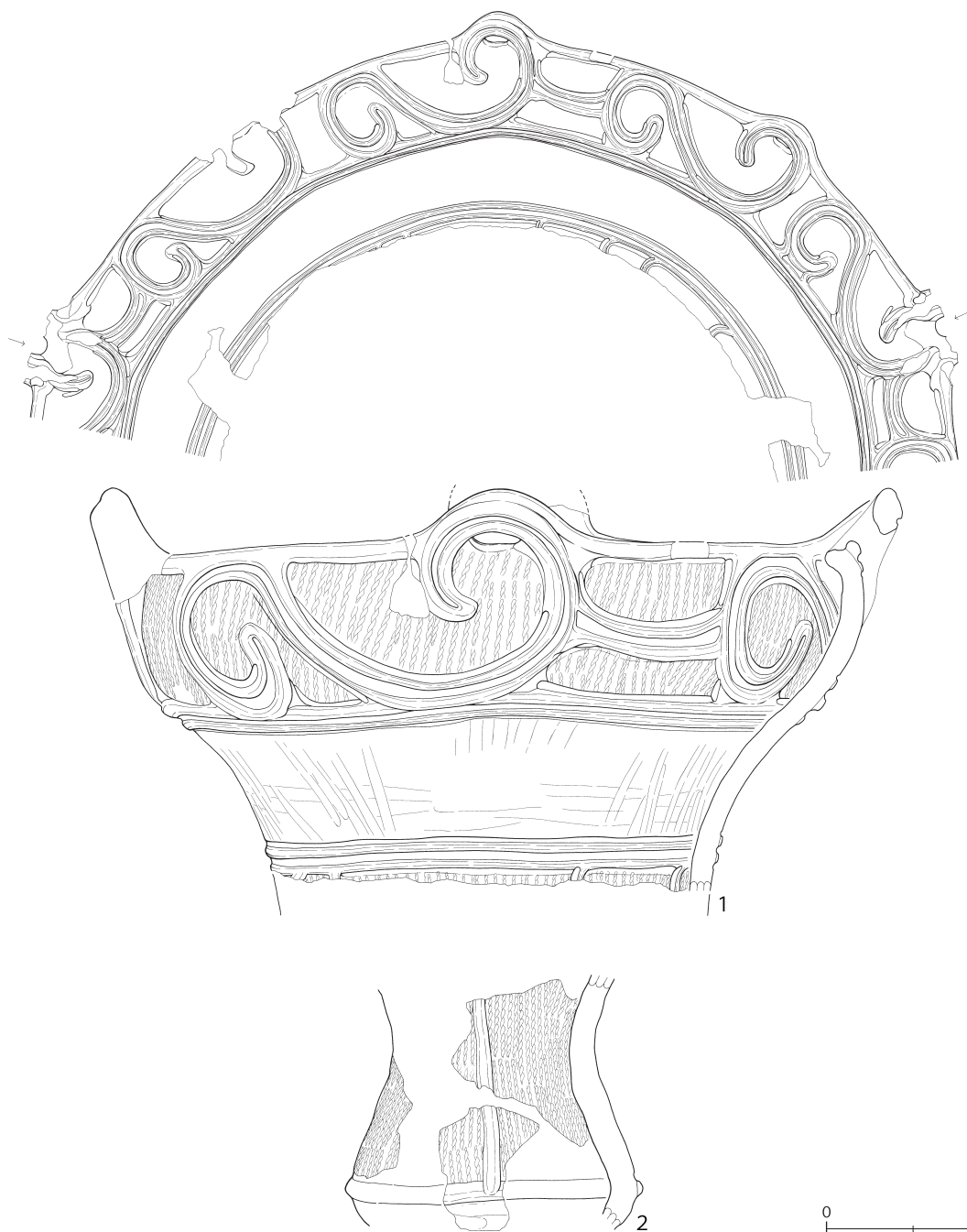
2は小型の深鉢胴部である。胴部中段にはR縦位回転の撚糸文を施文して1本隆帯の懸垂文が垂下し、胴下半部が「く」の字に張り出して、この位置に1条の隆帯が巡って文様帯下端を閉塞する。区画から下は無文となる。

復元最大径は約15cm、現存高は約14.5cmである。胎土はややシルト質である。器壁は外面灰橙

色、内面灰褐色である。焼成は良い。

3～32は破片資料である。3～7は勝坂Ⅲ式で、刻み隆帯による区画内に集合沈線文を描く。

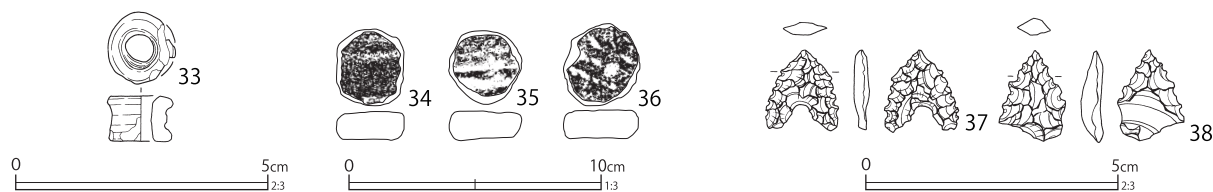
3は胴部中段から下半にかけての破片である。胴部文様帯は刻み隆帯の長方形区画文を描き、内部に平行沈線が巡って、縦位の集合沈線文を充填する。胴下半部にはRL縦位回転（0段多条）の縄文を施文する。



第 326 図 第 51 号住居跡出土遺物（1）



第 327 图 第 51 号住居跡出土遺物 (2)



第328図 第51号住居跡出土遺物（3）

4・5・7は円文の周囲に刻みを持つ車輪状モチーフである。4は円文から斜行する隆帯が派生して三角形の区画を構成する。区画内部には平行沈線文が巡り、中央の余白に三叉文を描く。円文の内部にも平行沈線が巡り、中央余白には縦位の集合沈線を充填する。

8～15は加曾利E I式のキャリパー類深鉢で、口縁部文様帯である。8～12は2本隆帯の渦巻文を描く。8・9は波状口縁で波頂部に突起を持つ。9は渦巻文の末端が立体化した中空突起である。10・11は水平口縁で、渦巻文の末端が口唇上に乗っている。

13・14・15は2本隆帯の弧状文が連続する繋ぎ弧文である。14は弧状文の接点に小渦巻の突起を配する。13は弧状文の下底部から文様帯下端の区画に2本の隆帯が伸びて連結する。

12・13は頸部に無文帯を持ち、文様帯との境を1条の隆帯で区画する。地文は、8・14・15がRの撚糸文、9がLの撚糸文で、いずれも縦位回転で施文される。11～13はRL単節の縄文で、12のみ横位回転、他は縦位回転で施文される。

17～20は胴部の破片で、頸部との境を区画する隆帯が残る。胴部には隆帯による懸垂文や蛇行懸垂文が垂下する。地文は17・18がRの撚糸文、19・20はRL単節の縄文である。

21・22は懸垂文の胴部である。21は1本隆帯の懸垂文で、地文はRL単節縦位回転の縄文で、0段多条の可能性がある。22は2本隆帯の懸垂文と1本隆帯の蛇行懸垂文を描く。地文はR縦位回転の撚糸文である。

23～25は懸垂文の胴部である。23・24は1本隆帯の懸垂文で、いずれも地文はR縦位回転の撚糸

文である。25は3本隆帯の懸垂文で、地文はRL単節の縄文である。

26は半裁竹管状工具による平行沈線文を描く土器である。3本1単位の懸垂文を等間隔に配し、間隙に矢羽根状の集合沈線を描く。

27～32は浅鉢である。27は胴部中段が「く」の字に張り、頸部屈曲して口縁部が軽微に外反する。折り返し口縁で外面に段を持ち、口端上を平坦に整形する。

胴上半部に文様帯を持ち、縦位の平行沈線文を挟んで長方形の区画文を描き、内部は横位の沈線文に沿って刺突列が巡る。また、頸部にも1条の沈線と刺突列が巡る。

28・29は無文の口縁部である。やはり胴張の器形から頸部の屈曲を経て直立するものとみられる。28は口端が内屈し、29は軽微に外反する。口端上面はいずれも平坦に整形している。

30は「く」の字に屈曲する頸部である。口縁・胴部とも無文で、屈曲部分のみ3本の沈線が巡る。口縁は強く外反する。31・32は無文の胴下半部である。

33は滑車形の耳飾り、34～36は土製円盤である。

石器（第328図）

37・38は石鏃である。

37は凹基で、体部が短いブーメラン形である。長さ1.6cm、幅1.5cm、厚さ0.3cm、重さ0.52gである。石材はチャートである。

38は基部がいびつに突出する。背面基部側に主要剥離面を残しており、未成品か破損品の可能性がある。長さ1.8cm、幅1.3cm、厚さ0.4cm、重さ0.74gである。石材は黒曜石である。

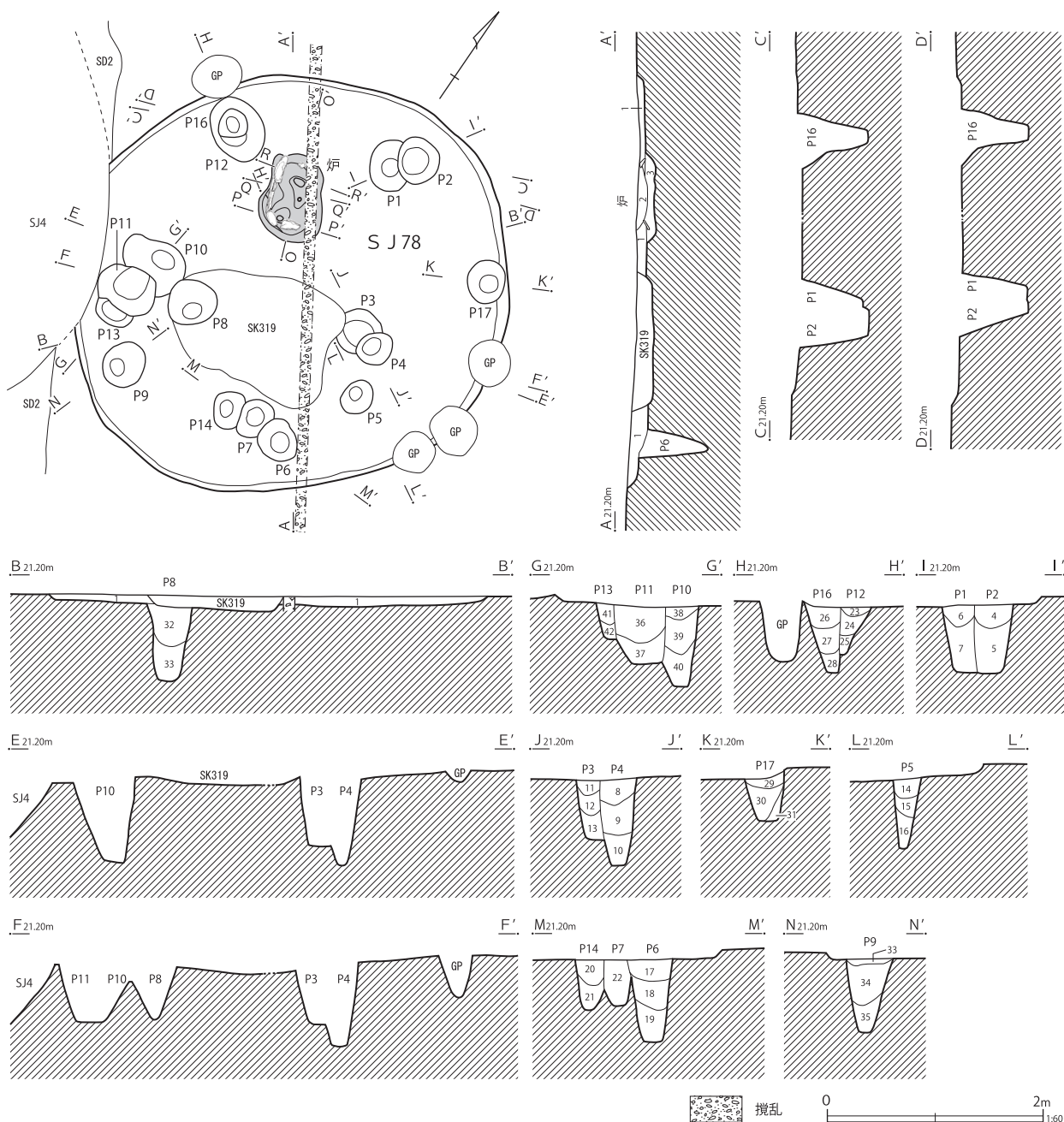
第78号住居跡（第329～331図）

K・L - 15・16グリッドに位置する。第4号住居跡・第319号土壌に壊されている。また、プラン中央を横断する地下埋設物（水道管）により床面を破壊されている。

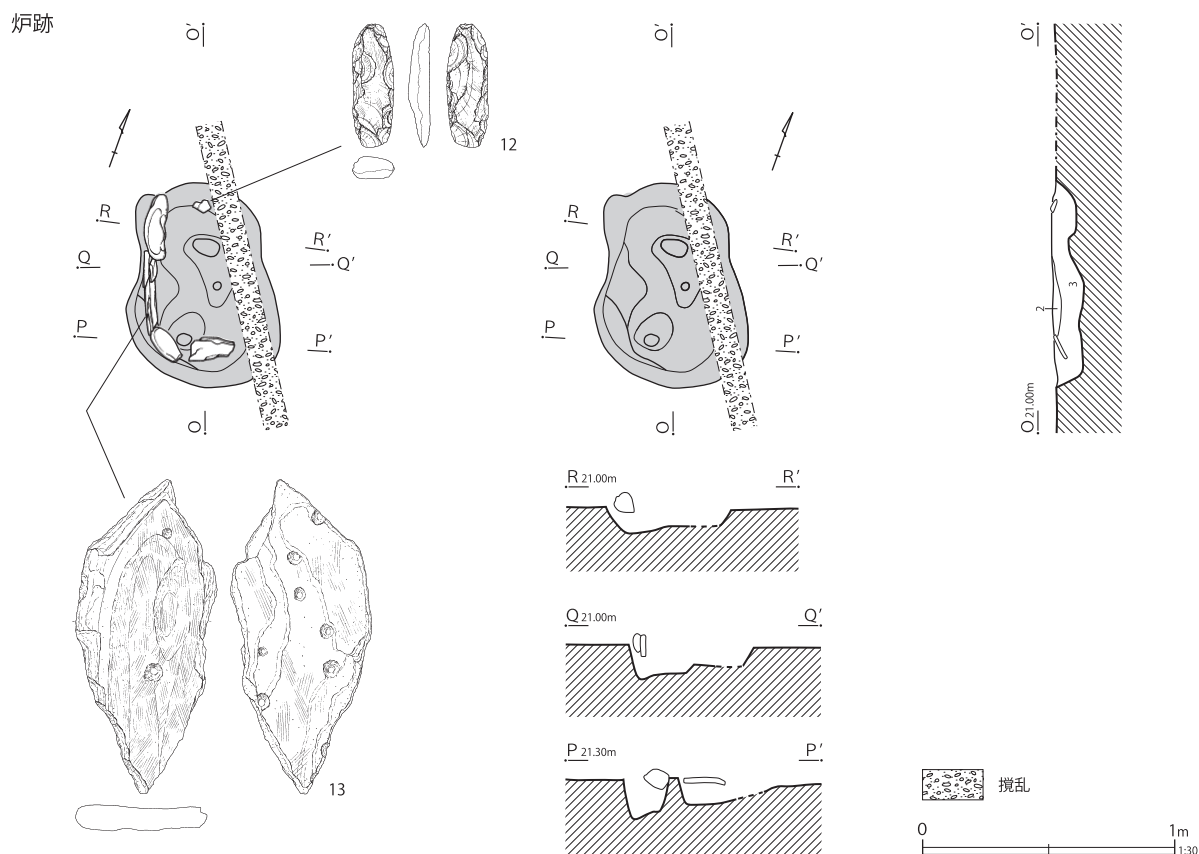
直径約4 mの円形の住居跡で、柱穴配置から主軸方向はN - 23° - Wを指すものとみられる。床面は平坦で、中央がやや下がっている。壁は緩やかに立ち上がり、壁高は最も深い部分で0.07 mである。壁溝は検出されなかった。

第 37 表 第 78 号住居跡柱穴計測表

ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)
P 1	48.0	62.8	P 2	44.0	64.1	P 3	42.0	57.0	P 4	36.0	79.3	P 5	34.0	68.3
P 6	38.0	78.3	P 7	40.0	41.6	P 8	46.0	70.4	P 9	42.0	69.7	P 10	62.0	80.4
P 11	46.0	62.0	P 12	46.0	44.5	P 13	36.0	33.9	P 14	34.0	46.8	P 15		
P 16	48.0	66.5	P 17	39.0	41.7									

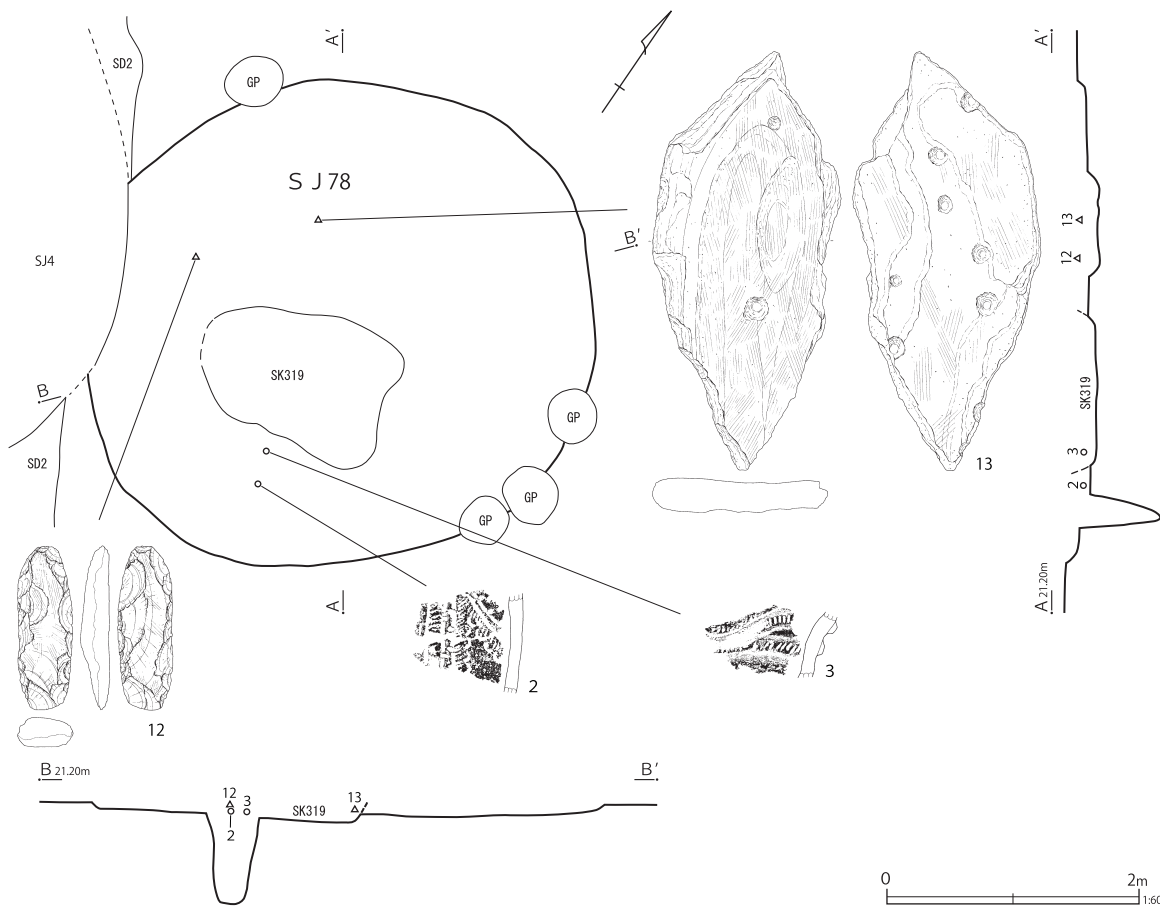


第 329 図 第 78 号住居跡（1）



- S J 78
 1 暗褐色土層 : ロームブロック多く 焼土ブロック・炭化物若干含む
 S J 78 石囲炉
 2 暗褐色土層 : ローム粒子・焼土粒子・炭化物微量含む 貼床直上の堆積層のため風化したロームブロックを少量含む
 3 暗褐色土層 : ロームブロック多く ローム粒子若干 焼土ブロック多く 炭化物若干含む
 S J 78 Pit 2
 4 黒褐色土層 : 焼土粒子少量 炭化物わずかに含む
 5 黒褐色土層 : 焼土粒子・炭化物微量含む
 Pit 1
 6 黒褐色土層 : ロームブロック少量 焼土粒子多く 炭化物わずかに含む
 7 黒褐色土層 : 焼土粒子・炭化物わずかに含む
 Pit 4
 8 黒褐色土層 : 焼土粒子少量 炭化物わずかに含む
 9 黒褐色土層 : 焼土粒子・炭化物微量含む
 10 黒褐色土層 : ロームブロック・ローム粒子・焼土粒子多く含む (柱痕により硬化したと考えられる。土自体は再入流土)
 Pit 3
 11 黒褐色土層 : ロームブロック少量 焼土粒子多く 炭化物わずかに含む
 12 黒褐色土層 : ロームブロックわずか 焼土粒子多く 炭化物わずかに含む
 13 黒褐色土層 : 焼土粒子・炭化物わずかに含む
 Pit 5
 14 黒褐色土層 : ロームブロックわずか 焼土粒子少量 炭化物わずかに含む
 15 黒褐色土層 : 焼土粒子・炭化物わずかに含む
 16 黒褐色土層 : ローム粒子 (10層のものか) 多く 焼土粒子わずかに含む
 Pit 6
 17 暗褐色土層 : ロームブロック少量 ローム粒子多く 焼土粒子わずかに含む
 18 黒褐色土層 : 焼土粒子少量 炭化物わずかに含む
 19 黒褐色土層 : 焼土粒子・炭化物わずかに含む
 Pit 14
 20 黒褐色土層 : 焼土粒子少量 炭化物わずかに含む
 21 黒褐色土層 : 焼土粒子わずか 炭化物微量含む
 Pit 7
 22 黒褐色土層 : 焼土粒子・炭化物わずか 白色微粒子微量含む
 Pit 12
 23 黒褐色土層 : 焼土ブロック少量 焼土粒子多く 炭化物わずかに含む
 24 黒褐色土層 : 焼土粒子少量 炭化物わずかに含む
 25 黒褐色土層 : 焼土粒子・炭化物わずかに含む
 Pit 16
 26 暗褐色土層 : 焼土粒子多く 炭化物わずかに含む
 27 黒褐色土層 : 焼土粒子少量 炭化物わずかに含む
 28 黒褐色土層 : 焼土粒子多く 炭化物わずかに含む
 Pit 17
 29 黒褐色土層 : 焼土粒子・炭化物わずかに含む
 30 暗褐色土層 : ローム粒子・焼土粒子・炭化物わずかに含む
 31 明褐色土層 : ローム粒子多く 焼土粒子・炭化物少量含む
 Pit 8
 32 暗褐色土層 : 焼土ブロックわずか (層の上部に層状に堆積) 焼土粒子多く含む
 33 黒褐色土層 : 焼土粒子・炭化物わずかに含む
 Pit 9
 34 黒褐色土層 : ローム粒子少量 焼土粒子・炭化物わずかに含む
 35 暗褐色土層 : ロームブロック少量 (風化激しい) ローム粒子多く 焼土粒子・炭化物わずかに含む
 36 明褐色土層 : ロームブロック・ローム粒子多く 焼土粒子・炭化物わずかに含む
 Pit 11
 37 黒褐色土層 : ロームブロック少量 焼土粒子多く 炭化物わずかに含む
 38 黒褐色土層 : 焼土粒子・炭化物わずかに含む
 Pit 10
 39 黒褐色土層 : ロームブロック少量 焼土粒子多く 炭化物わずかに含む
 40 黒褐色土層 : ロームブロックわずか 焼土粒子多く 炭化物わずかに含む
 41 黒褐色土層 : ローム粒子・焼土粒子多く含む 柱穴掘削時 (当時) の再流入土か?
 Pit 13
 42 黒色土層 : ローム粒子多く 焼土粒子わずかに含む
 43 明褐色土層 : ローム粒子多く 焼土粒子わずかに含む

第 330 図 第 78 号住居跡 (2)



第 331 図 第 78 号住居跡遺物出土状況

主軸線上奥壁寄りに炉跡を検出した。長方形の石囲い炉であったとみられ、西縁から南縁にかけて炉石が残存していた。主軸は住居跡と共通で、長径70cm、短径は計測不能、深さは12cmである。周囲から不整楕円形の掘りかたを検出した。

床面上から16本のピットが検出された。これらのうちP 1～5・8～13・16等が支柱穴と考えられ、プラン奥壁に寄った4本柱穴を構成し、あるいはP 5・9がこれに前置され6本柱穴となる可能性もある。

4か所に集中した柱穴はいずれも2～4本が切り合っており、数度の建て替えが行われたものと考えられる。

主軸線上南東側の壁近くにP 6・7・14が集中しており、これらが入り口施設の痕跡と考えられる。

覆土はほぼ単層で、遺物は床面中央付近から出土している。所属時期は勝坂式期と考えられる。

第78号住居跡出土遺物

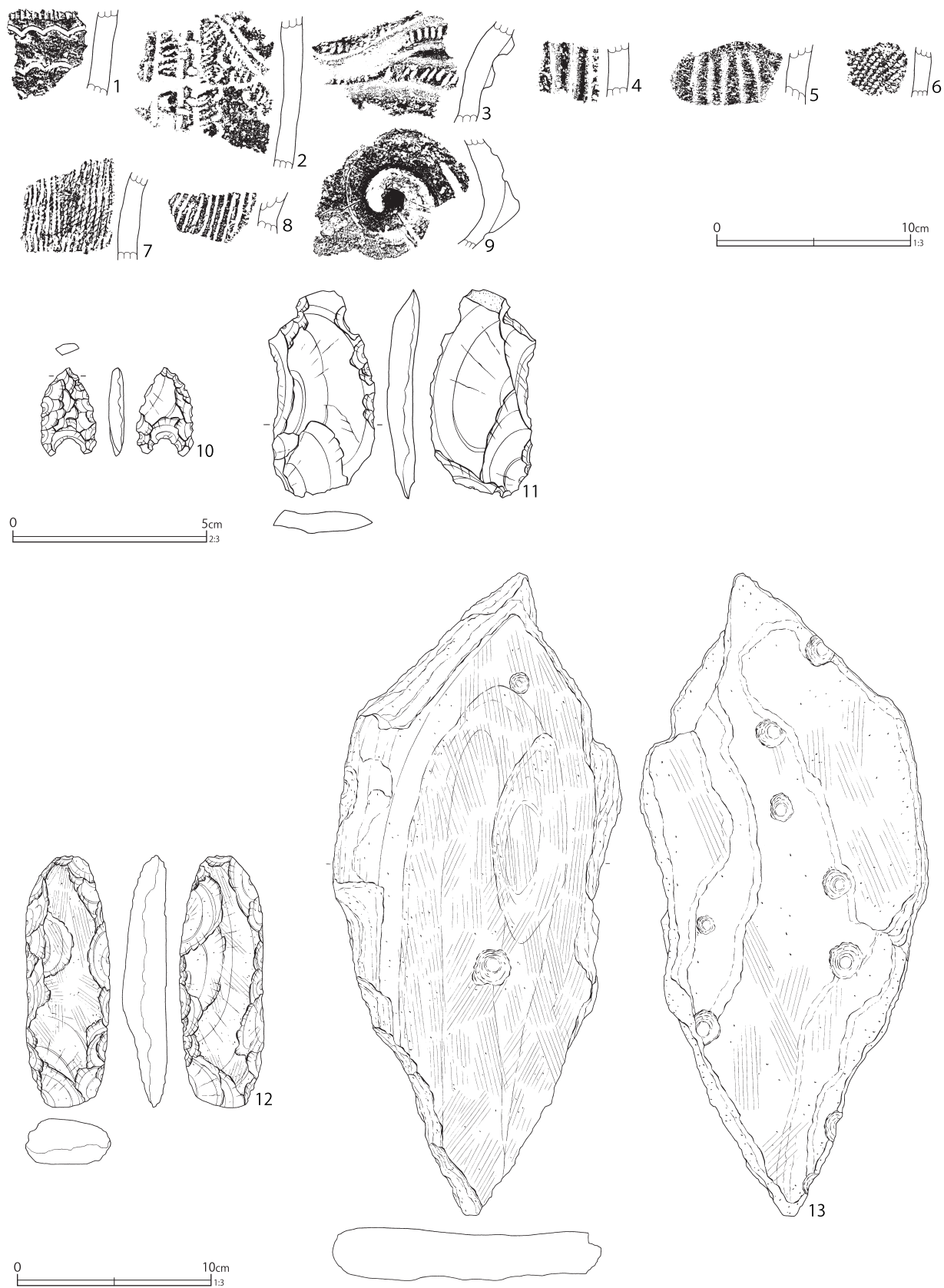
土器 (第332図)

すべて破片資料である。

1は角押し文と小波状沈線が並行する胴部で、勝坂Ⅰ式である。2以下は勝坂Ⅱ～Ⅲ式である。2は刻み隆帯の区画に沿って爪型文と弧状の刺突文が巡る。3は胴上半部に文様帯を持ち、刻み隆帯の区画内部に角押し文列を充填する。胴部中段に無文帯を持つ。

4は2本隆帯の懸垂文で、上面に半裁竹管状工具のなぞりを伴う。5は縦位の集合沈線文で、地文的なものか、区画文内部に充填されたものと考えられる。

6～8は地文のみの胴部破片である。6はRL



第 332 図 第 78 号住居跡遺物出土遺物

単節縦位回転の縄文である。7・8はR縦位回転の撚糸文である。

石器（第332図）

10はP7から出土した石鏃である。紡錘形のプロポーションに、V字に切れ込む凹基を持つ。背面に主要剥離面を残している。長さ2.3cm、幅1.4cm、厚さ0.4cm、重さ1.28gである。石材はチャートである。

11は石匙である。横長の剥片を使用し、表面に主要剥離面、つまみ部裏面に自然面を残す。長軸一端に両側縁からの剥離によってつまみを作り出す。刃部の調整剥離は比較的簡素である。長さ5.4cm、幅2.7cm、厚さ0.9cm、重さ11.54gである。石材は頁岩である。

12は短冊形の打製石斧である。長軸両端が先細りとなる長楕円形のプロポーションで、刃部は断面比較的鋭角である。

磨石からの再加工作品とみられ、背面に使用面を残す。また、剥離面の上にも擦痕が観察される一方、磨石としての使用面にも半ば磨り消された剥離面がみられる等、その転用・再使用のありかたは一様ではない。

長さ12.9cm、幅4.3cm、厚さ2.3cm、重さ161.13gである。石材は安山岩である。

13は石皿である。左側縁から上縁にかけて自然面と節理面を残す。左下の側縁を数回の打撃によって整形して、紡錘形のプロポーションを作り出している。

表面に槌状の使用面を持ち、また、表裏に凹石としての使用に伴う複数の凹孔を残す。長さ33.1cm、幅15cm、厚さ2.7cm、重さ1720.1gである。石材は緑泥片岩である。

第80号住居跡（第333～337図）

N-16・17グリッドに位置する。覆土中央を地下埋設物（水道管）により破壊されている。また、南東壁部分全体の三分の一近くが調査区域外に存在する。

覆土掘削中に炉跡とピットを検出、上下二面の床面の存在が判明した。このため、上位のものを第80号（新）、下位のものを第80号（古）住居跡と命名した。

第80号（新）住居跡

長径5.37m、短径は計測不能だが、円形ないし楕円形の住居跡と考えられる。主軸方向は不明である。壁はやや緩やかに立ち上がり、壁溝は検出できなかった。壁高は最も深い部分で0.17mである。

床面は大半が第80号（古）住居跡の覆土中にくらわれている。顕著な硬化面は存在しないが、平坦で、中央がやや下がっている。

西壁から約60cm内側で炉跡を検出した。大型の地床炉で長径は約130cm、短径は115cm、深さ20cmで、主軸はほぼ東西を指す。覆土の東端に炉体土器を検出した。完形の浅鉢土器が正位に埋設されており、口縁の上端は床面とほぼ同じ高さである。

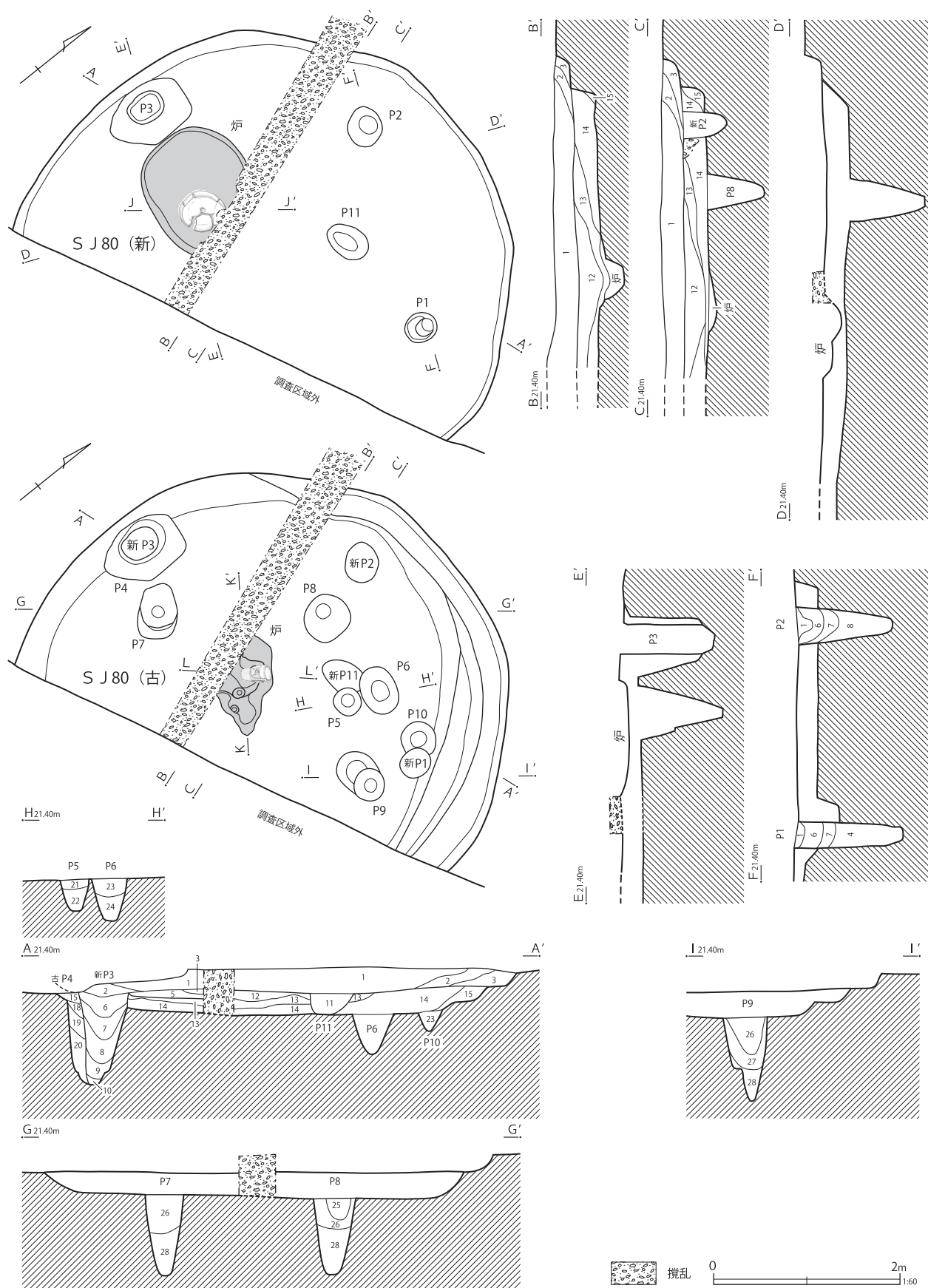
床面上から4本のピットを検出した。これらのうちP1～3が主柱穴と考えられる。柱穴配置は不明である。

出入り口施設と思われるものは検出されず、調査区域外に存在する可能性がある。

覆土は壁際の三角堆積土を別にすればほぼ単層で、遺物は床面中央付近に集中している。所属時期は勝坂式末～加曾利EⅠ式期と考えられる。

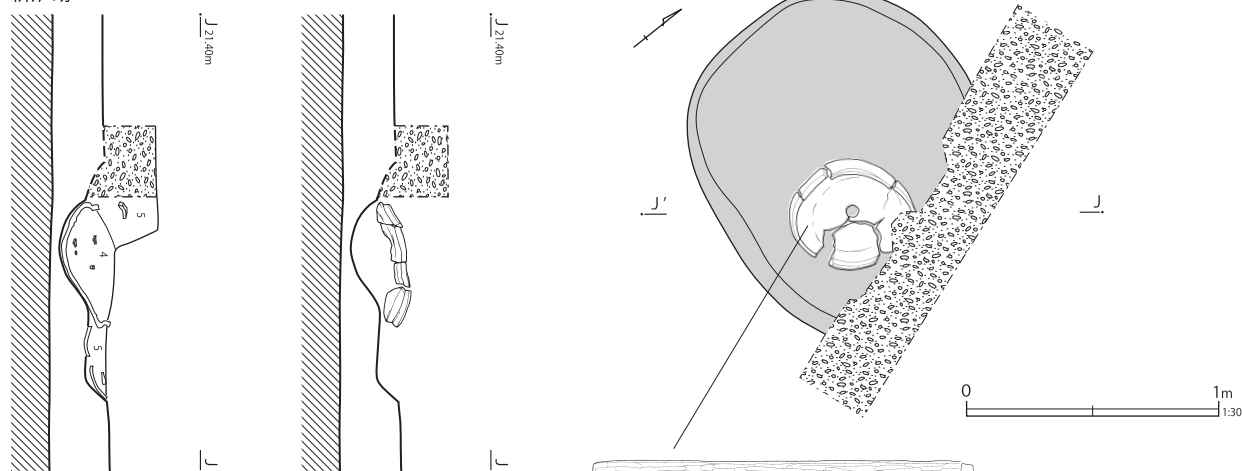
第38表 第80号住居跡柱穴計測表

ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)
P1	36.0	115.0	P2	42.0	102.0	P3	52.0	86.5	P4	88.0	86.5	P5	30.0	34.6
P6	52.0	44.7	P7	60.0	88.1	P8	50.0	79.7	P9	58.0	94.5	P10	38.0	25.7
P11	46.0	22.0												

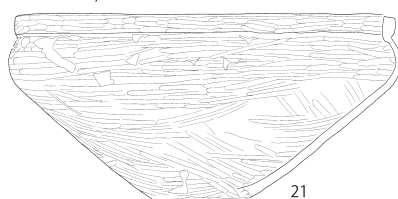


第333图 第80号住居跡(1)

新炉跡

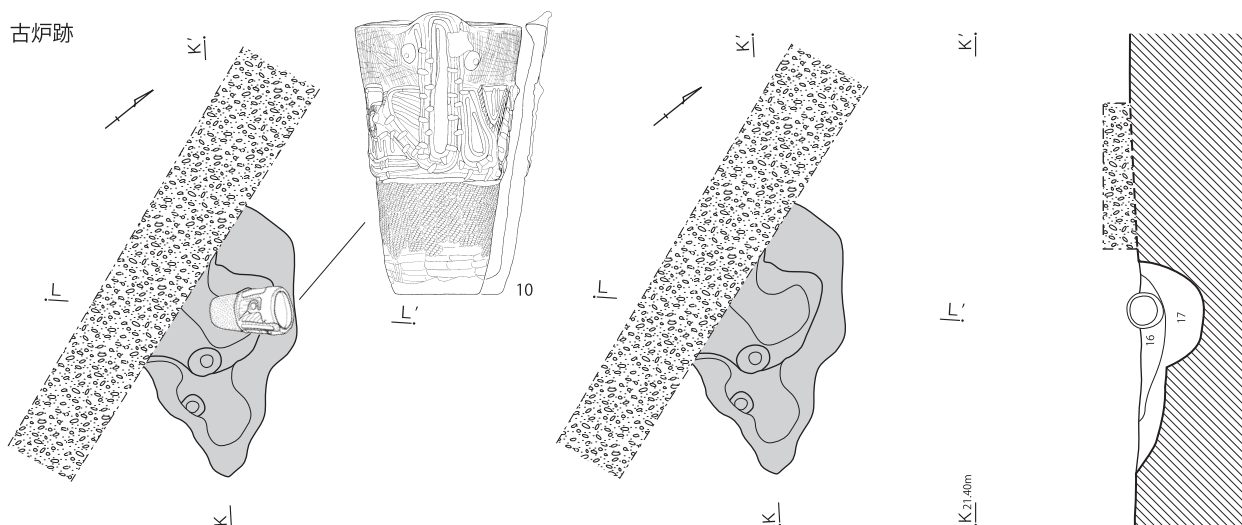


- S J 80 (新)
- 1 極黒色土層 : 焼土粒子多く 炭化物・白色粒子わずかに含む
 - 2 暗黒色土層 : 焼土粒子少量 白色微粒子わずかに含む (1層と3層の漸移層)
 - 3 暗褐色土層 : ローム粒子多く 焼土粒子・白色粒子わずかに含む
- S J 80 (新炉)
- 4 黒褐色土層 : 焼土粒子多く 炭化物・明褐色粒子少量含む
 - 5 極黒褐色土層 : ローム粒子少量 焼土粒子・炭化物わずかに含む
- S J 80 (新) Pit 1 ~ 3・11
- 6 暗褐色土層 : 焼土粒子多く 炭化物少量含む
 - 7 暗茶褐色土層 : 焼土粒子少量 炭化物微量 明褐色粒子多く含む
 - 8 暗褐色土層 : 焼土粒子・炭化物わずか 明褐色粒子多く含む

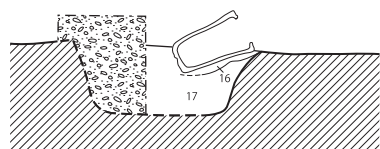


- 9 暗茶褐色土層 : ローム粒子多く 焼土粒子少量含む
- 10 暗褐色土層 : ローム粒子・焼土粒子・黒色土粒子少量含む (柱穴掘削時の再流入土)
- 11 黒褐色土層 : 焼土ブロック・炭化物わずか 暗褐色粒子多く含む

古炉跡



21.40m



0 1m 1:30

- S J 80 (古)
- 12 黒褐色土層 : 焼土粒子少量 炭化物・明褐色粒子わずかに含む
 - 13 暗褐色土層 : 焼土粒子少量 炭化物わずかに含む (12層と14層の漸移層 黒褐色土 40%、茶褐色土 60%)
 - 14 暗茶褐色土層 : 焼土粒子・炭化物微量含む
 - 15 明茶褐色土層 : 焼土粒子・炭化物微量含む
- S J 80 (古炉)
- 16 暗褐色土層 : 焼土粒子少量 炭化物わずかに含む (12層と14層の漸移層 黒褐色土 40%、茶褐色土 60%)
 - 17 暗茶褐色土層 : 焼土ブロック・焼土粒子多く 炭化物微量含む
- S J 80 (古) Pit 4 ~ 9
- 18 暗褐色土層 : 焼土ブロック少量 焼土粒子多く 炭化物わずかに含む
 - 19 暗褐色土層 : 焼土粒子・炭化物わずか 黒色土粒子少量含む
 - 20 黒褐色土層 : ローム粒子少量 焼土粒子多く 炭化物わずかに含む
 - 21 暗黄褐色土層 : ローム粒子多く 焼土粒子わずかに含む
 - 22 暗褐色土層 : 焼土粒子わずか 黒色土粒子少量含む
 - 23 暗褐色土層 : ローム粒子わずか 焼土粒子少量含む
 - 24 黒褐色土層 : 焼土粒子・暗褐色土粒子わずかに含む
 - 25 暗黄褐色土層 : ロームブロック多く ローム粒子若干 炭化物少量含む
 - 26 暗褐色土層 : 焼土粒子わずか 黒色土粒子少量含む
 - 27 暗褐色土層 : ローム粒子わずか 焼土粒子少量含む
 - 28 暗黄褐色土層 : ロームブロック・ローム粒子若干 炭化物少量含む

第 334 図 第 80 号住居跡 (2)

第80号（古）住居跡

長径は計測不能、短径約5mの楕円形の住居跡と考えられる。長軸はN-25°-W付近に存在するが、柱穴配置等から本住居跡の主軸方向はN-51°-Wを指すものと考えられる。壁は北壁では垂直に立ち上がるが、西壁付近では緩やかに立ち上がっている。壁高は最も深い部分で0.47mである。壁溝は検出できなかった。

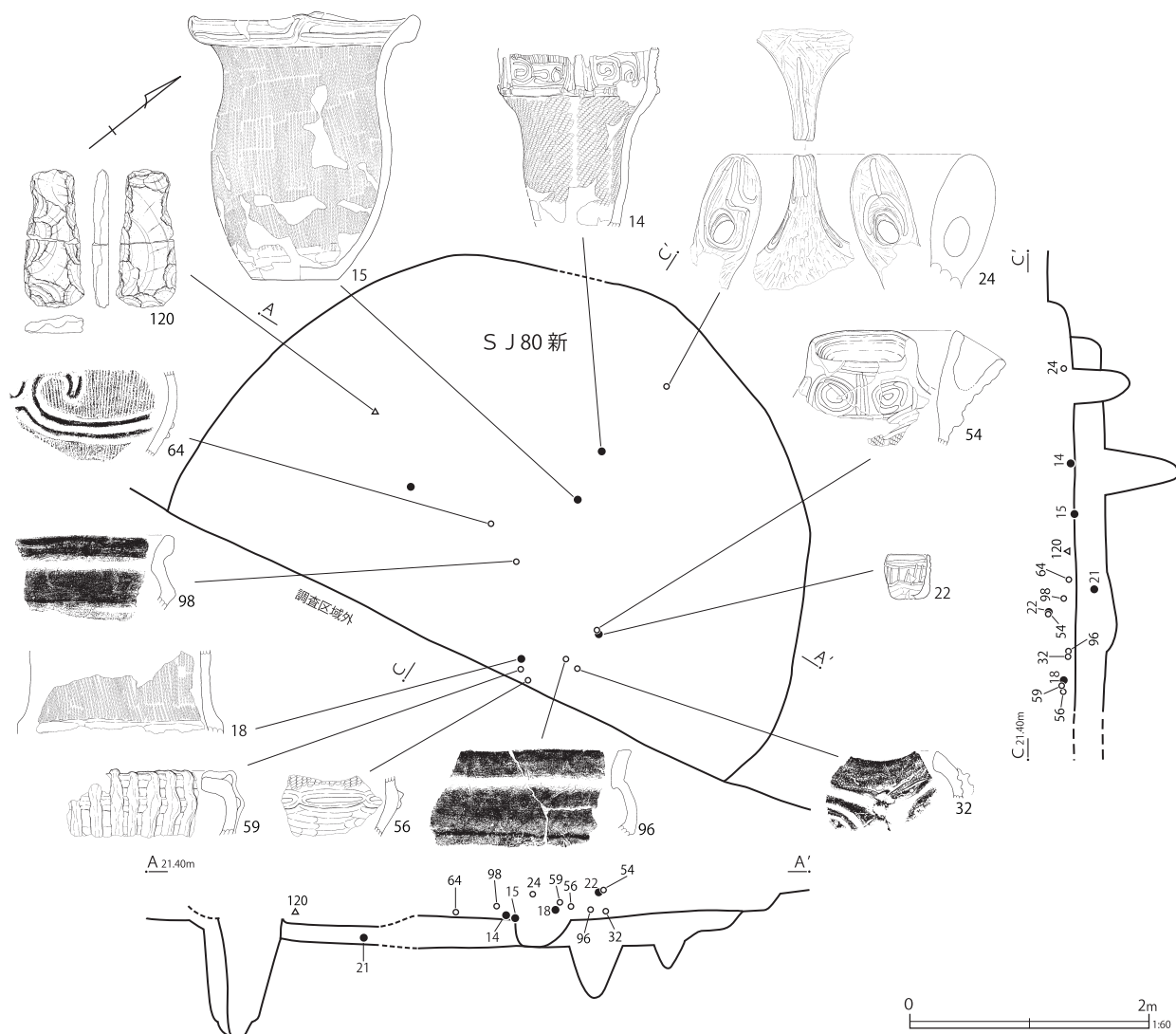
床面は平坦で、中央がやや低くなっている。主軸線上やや奥壁寄りで炉跡を検出した。西壁を埋設管により破壊されているが、長径約110cm、短径約70cmの不整楕円形の地床炉である。壁は比較的急に立ち上がるが、住居跡中央に面した南東

壁が三角形に張り出しており、この部分のみ立ち上がりが緩やかになっている。深さは26cmである。

床面上から7本のピットが検出された。これらのうちP7～9が主柱穴と考えられ、調査区域外に想定される1本を加えて、4本柱の上屋を構成していたものと考えられる。

出入口施設とみられるものは検出されなかったが、調査区域外に存在する可能性がある。

覆土は上下2層からなり、土層図中12層の黒褐色土が上層、14層の暗茶褐色土以下が下層に比定され、13層は両者の漸移層である。遺物は主に上層から出土している。所属時期は勝坂式末～加曾利EⅠ式期と考えられる。



第335図 第80号（新）住居跡遺物出土状況



第 336 図 第 80 号 (古) 住居跡遺物出土状況 (1)

第80号住居跡出土遺物

土器（第338～344図）

炉体土器と復元個体14を除き、図化し得たものは大半が第80号（古）からの出土であった。個別の遺物の帰属と出土状況については出土状況図を参照されたい。

以下、80新＝（第80号（新）住居跡）・80古＝（第80号（古）住居跡）と略称する。

1～11は勝坂系の土器である。

1はキャリパー形の深鉢で、口縁部から胴部中段まで残存する。水平口縁上に大型の突起を持つが、剥落している。口唇部は内屈して外面に隆帯が巡る。

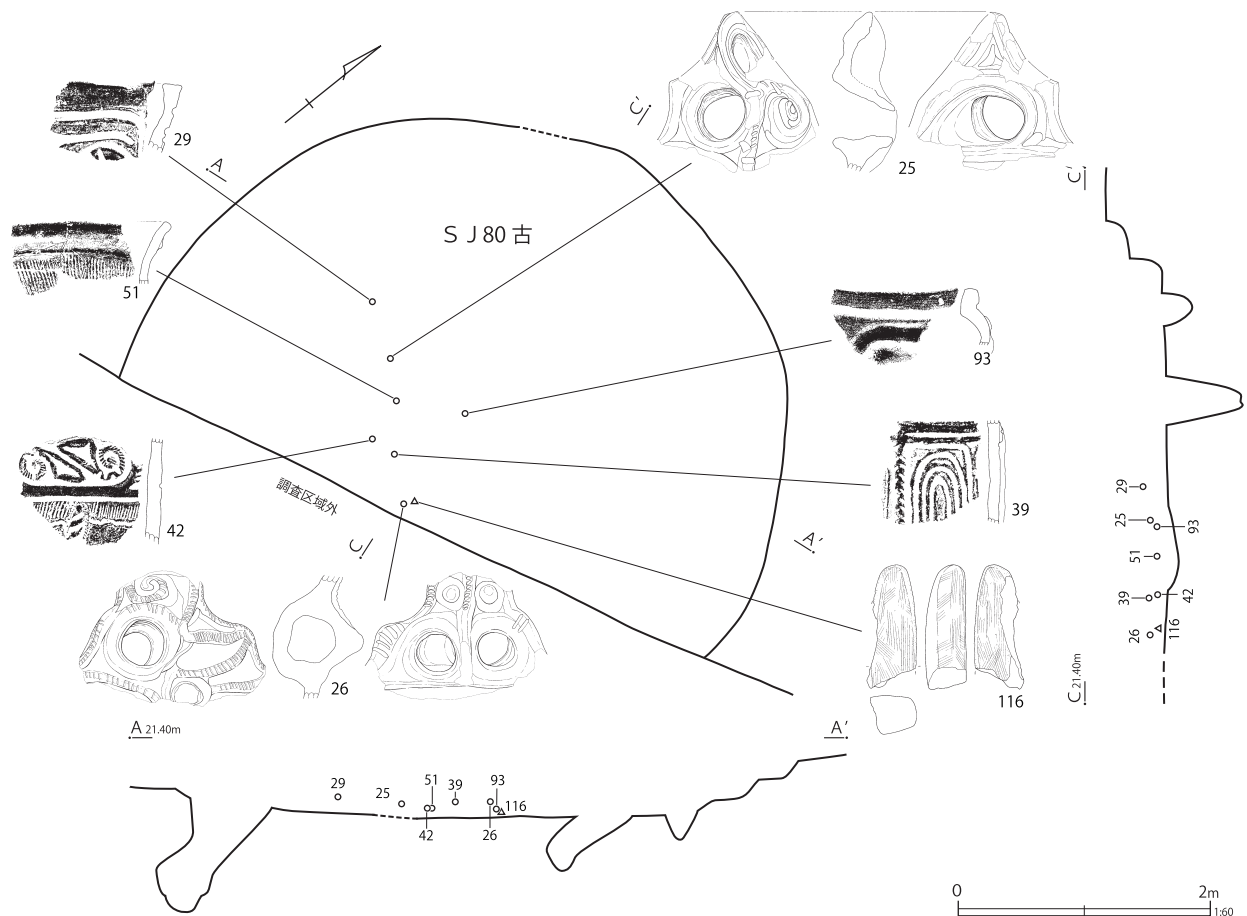
口縁部に文様帯を持ち、刻みを伴う隆帯による曲線文が内部を分割して、上下に集合沈線文や三叉文を配置する。頸部に交互刻みの隆帯が巡って文様帯下端を区画し、胴部にはRL単節横位回転

の縄文を施文する。この縄文は0段多条の原体を使用している。

復元最大径は約26.5cm、現存高は約14.5cmである。胎土は多量の砂・小礫・シルトを含む。器壁は外面暗灰橙色、内面暗灰黄褐色である。焼成はやや不良である。

2もキャリパー形の深鉢で、口縁部から胴部中段まで残存する。口縁は断面三角形の折り返し口縁で、外面に段を持つ。2単位の波状口縁であり、それぞれが山形の突起を持って、刻み隆帯が垂下する。

胴上半部に文様帯を持ち、交互刻みの隆帯が斜行して三角形・台形の区画を作り出している。区画内部には環状の隆帯に刻みを施す車輪状モチーフを配する。文様帯下端は矢羽根状の刻みを持つ隆帯で水平に区画している。胴部中段以下は無文となる。



第 337 図 第 80 号（古）住居跡遺物出土状況（2）



第 338 图 第 80 号住居跡出土遺物 (1)

復元最大径は約28.8cm、現存高は約21.5cmである。胎土はシルト質である。器面は灰褐色～暗灰褐色で、焼成は比較的良好い。

3は円筒形深鉢である。口縁から胴下半部にかけて残存する。

水平口縁で、1か所に突起を持つとみられる。折り返し口縁で外面に段を持つ。口唇断面は著しく肥厚して内屈し、口端上面に広い平坦面を作り出す。

胴上半部から中段にかけて文様帯を持つ。内部は隆帯によって縦横に区画し、2か所に車輪状のモチーフを配する。区画内部には渦文・三叉文・集合沈線文等を描く。

文様帯下端は扁平な隆帯で区画する。胴下半部にはR L単節（0段多条）の縄文を右下がりに施文して、条の方向を縦に揃えている。この縄文は前述の隆帯区画上にも乗り上げている。

復元最大径は約18.6cm、現存高は約20.2cmである。胎土は多量の砂とシルトを含む。器面は暗灰褐色で、焼成は不良である。

4も円筒形深鉢である。口縁から胴下半部にかけて残存する。水平口縁で、2単位の小突起を持ち、矢羽根状の沈線を伴う隆帯が垂下する。

折り返し口縁で外面に段を持ち、また内面にも幅広の隆帯を貼り付けて段を形成する。口端上面は平坦に整形している。

胴上半部から中段にかけて文様帯を持ち、車輪状のモチーフや、形骸化した櫛歯文とみられる半円形のモチーフを配する。

文様帯下端は扁平な隆帯で区画する。胴下半部にはR L単節（0段多条）の縄文を右下がりに施文して、条の方向を縦に揃えている。この縄文は隆帯区画上にも乗り上げている。

復元最大径は約19.9cm、現存高は約20.8cmである。胎土は多量の砂とシルトを含む。器壁は外面暗褐色、内面暗灰黄褐色である。焼成はやや不良である。

5は円筒形深鉢で、胴上半部から底部まで残存する。胴上半部から中段にかけて文様帯を持ち、車輪状モチーフや半円形モチーフを配する点は4の個体に共通している。

文様帯内部は刻み隆帯によってさらに小区画へと分割し、内部には三叉文等の沈線文様や角押し文列を充填する。文様帯下端は扁平な隆帯で区画し、胴下半部にはR L単節の縄文を右下がりに施文する。

復元最大径は約16.3cm、現存高は約29.2cmである。胎土は多量の砂・小礫・シルトを含む。器面は暗灰褐色である。焼成はやや不良である。

6は小型の円筒形深鉢で、口縁から胴下半部まで残存する。水平口縁で、口唇断面肥厚して内面に突出し、口端上面は平坦に整形している。

口縁下に無文帯を持ち、刺突を伴う平行沈線を挟んで胴上半部に文様帯を持つ。内部は刻み隆帯で曲線的に分割し、三叉文や集合沈線文、爪型文を描く。文様帯下端は平行沈線で区画する。

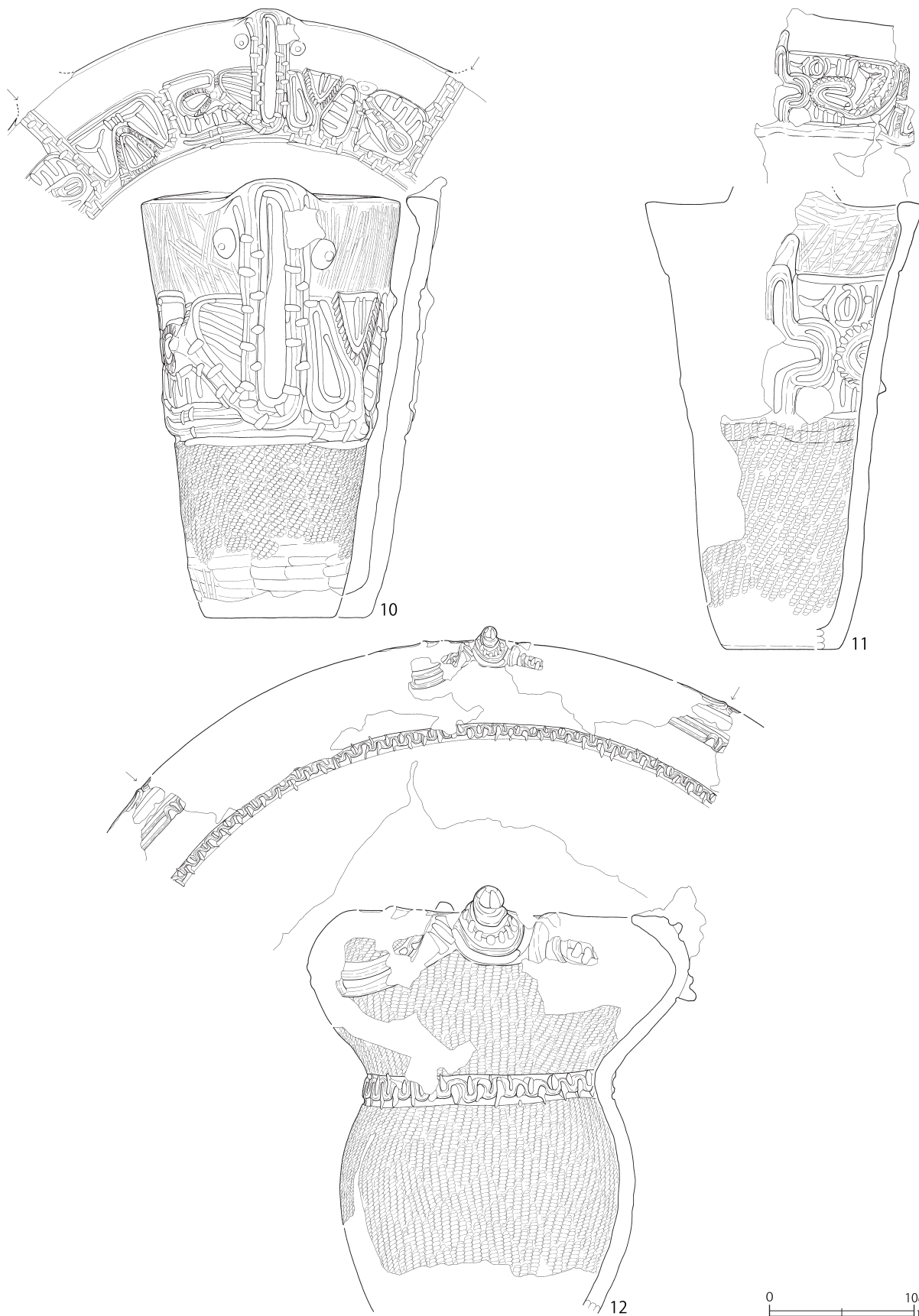
復元最大径は約13.2cm、現存高は約11.7cmである。胎土はやや砂質で、黒雲母粒子を含む。器壁は外面暗黄橙色、内面暗灰黄褐色である。焼成は良い。

7は円筒形深鉢で、胴上半部の文様帯部分である。交互刻みを持つ隆帯で器面を鋸歯状に分割し、三叉文や交互刻み等の沈線文を描く。鋸歯文の頂部には円錐状の突起を付し、小渦巻文を描く。

復元最大径は約21.8cm、現存高は約10.7cmである。胎土はやや砂質で、黒雲母粒子を含む。器壁は外面暗灰褐色、内面灰黄褐色で、黒斑がみられる。焼成は良い。

8は円筒形深鉢の胴部中段から底部である。上面に沈線を伴う背割れ隆帯が曲線文を描いて器面を分割し、内部に沈線文を描く。

文様帯下端は曲線文から連続した横位の背割れ隆帯で閉塞する。胴下半部にはR L単節縦位回転の縄文を施文する。



第 339 图 第 80 号住居跡出土遺物 (2)

復元最大径は約13.3cm、現存高は約15.5cmである。胎土はややシルト質、少量の砂を含む。器壁は外面暗黄褐色、内面暗灰褐色～黒褐色である。焼成は良い。

9は円筒形深鉢の胴下半部である。胴部文様帯の下端を背割れ隆帯で区画し、RL単節縦位回転の縄文を施文する。

復元最大径は約15.2cm、現存高は約9.8cmである。胎土は多量の砂とシルト、チャート等の小礫を含む。器壁は外面黄橙色、内面灰褐色で、黒斑がみられる。焼成は比較的良好。

10はほぼ完形の円筒形深鉢である。

口縁下に無文帯を持ち、口端は断面肥厚して内側に三角形に張り出し、口端上面に平坦面を作り出している。

水平口縁上に形態の異なる一対の突起を持つが、片方を欠失している。残存する突起は半円形の小突起である。この突起から胴部中段まで、交互刻みの隆帯による縦楕円形の区画文を描き、両側に一対の貼り瘤を配する。

胴部中段に文様帯を持つ。文様帯の上端は不連続な沈線、下端は各種の隆帯で区画され、内部を刻み隆帯で分割してパネル文を形成する。パネルの内部には沈線が巡り、集合沈線文や交互沈線文、三叉文等を描く。

胴下半部にはRL単節縦位回転の縄文を施文し、底部の直上は無文化する。

復元最大径は約17.5cm、現存高は約29.7cmである。胎土は砂質で、チャート等の角礫を含む。器面は暗橙色である。焼成は良い。

11も円筒形深鉢で、口縁から底部まで残存する。他の個体に比べ細身で、胴部中段から口縁にかけて軽微に外反しつつ立ち上がる。

水平口縁上に突起を持つが剥落している。無文の折り返し口縁で外面に段を持つほか、口端部内面に隆帯を巡らせて段を形成し、口端上に平坦面を作り出す。胴上半部から中段にかけて文様帯を

持ち、隆帯による曲線文によって器面を分割した中に円文・三叉文・平行沈線文等を描く。

文様帯下端は扁平な隆帯で区画する。胴下半部にはRL単節縦位回転の縄文を施文するが、この縄文は上述の隆帯区画の上にも乗り上げている。

復元最大径は約19cm、現存高は約30.8cmである。胎土はシルト質で、黒雲母粒子を含む。器壁は外面暗灰褐色～灰黄褐色、内面暗灰褐色である。焼成は良い。

12～15は中峠系の土器である。

12はキャリパー形の深鉢で、口縁部から胴下半部まで残存する。水平口縁上に渦巻文+刺突文を伴う円錐状突起を配する。この突起を起点として左右に2本隆帯の弧線文を描き、口縁下に楕円形の区画を形成する。胴部中段のくびれ部分には交互刺突を伴う隆帯が巡る。地文は口縁部の区画内から胴下半部にかけて施文する。RL単節の縄文であり、右下がりに施文することで条の方向を縦に揃えている。

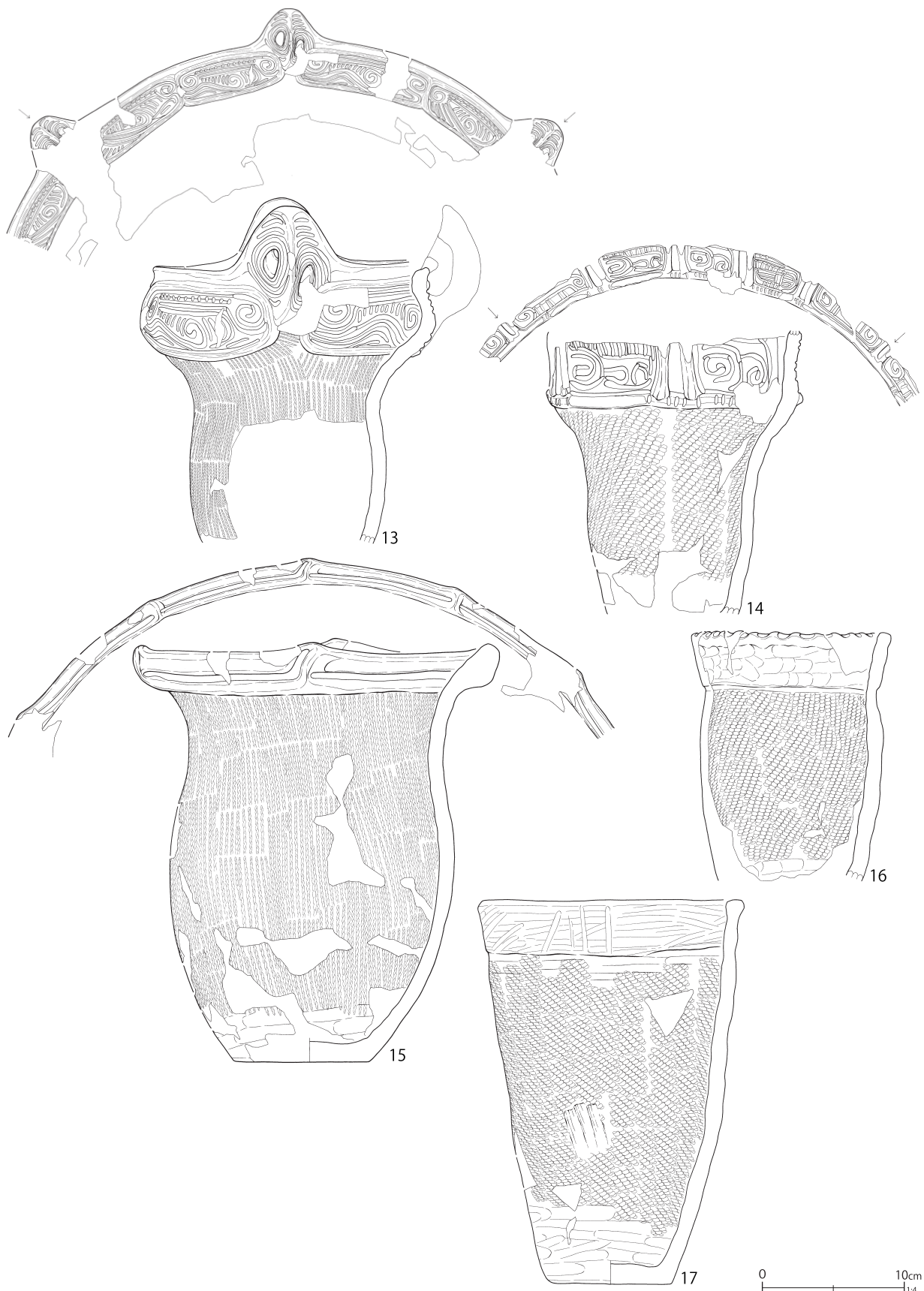
復元最大径は約27.3cm、現存高は約29.5cmである。胎土は多量の砂と小礫を含む。器面は暗茶褐色である。焼成は比較的良好。

13はキャリパー形の深鉢で、口縁から胴下半部まで残存する。水平口縁上に一対の突起を持ち、口縁下に文様帯を持つ。

突起は中空の眼鏡状突起で、左右および内面に貫通孔を持ち、これを中心に同心円文を描く。突起を挟んで左右に隆帯による楕円形区画文を描き、内部には密な集合沈線により渦巻文等を描く。頸部以下にはL縦位回転の撚糸文を施文する。

復元最大径（突起部分を除く）は約20.7cm、現存高は約25.4cmである。胎土は少量の砂を含む。器面は暗褐色で、焼成は良い。

14もキャリパー形の深鉢で、口縁直下から胴下半部まで残存する。下端を刻み隆帯で水平に区画した口縁部文様帯を持つ。内部は縦位の2本隆帯により5単位に分割して長方形区画を形成し、渦



第 340 图 第 80 号住居跡出土遺物（3）

卷文や集合沈線文を描く。頸部以下にはR L単節縦位回転の縄文を施文する。

復元最大径は約17.9cm、現存高は約20.1cmである。胎土は砂質で、黒雲母粒子を含む。器面は暗褐色である。焼成はやや不良である。

15はほぼ完形の深鉢である。胴部中段が張って頸部にくびれを持ち、口縁直下で急速に外反する。

水平口縁直下に幅狭の文様帯を持ち、4単位の小突起を起点として逆L字状の凹線が巡る。頸部以下にはR縦位回転の撚糸文を施文する。

復元最大径は約25.7cm、現存高は約29.7cmである。胎土はシルト質で、白色粒子を含む。器面は暗褐色で、黒斑がみられる。焼成は良い。

16・17は口縁下に幅広の無文帯を持つ深鉢である。16は口端上に押圧を伴う小波状口縁である。胴上半部がやや張り、頸部屈曲して口縁が軽微に外反する。頸部に段を持ち、以下にR L単節縦位回転の縄文を施文する。

復元最大径は約13.9cm、現存高は約17.5cmである。胎土はシルト質である。器壁は外面灰橙色、内面暗灰褐色で、焼成は良い。

17は水平口縁で、ほぼ完形品である。胴部中段が軽微に張るほかはほぼ直線的に開く。無文帯の下端に凹線が巡って段をなし、ここから胴下半部にかけてL R単節縦位回転の縄文を施文する。胴部中段には施文時についたとみられる指頭の「擦れ」が観察される。底部の直上は無文化する。

復元最大径は約18.6cm、現存高は約27cmである。胎土はシルト質である。器面は灰黄褐色で、焼成はやや不良である。内面の器壁は風化がはなはだしく、広範囲に剥落が生じている。

18・19は共通の器形で、いずれも胴下半部から中段にかけての部分である。胴下半部が「く」の字に張り出して稜をなし、ここから上にはR縦位回転の撚糸文を施文し、底部側は無文となる。

18は復元最大径約22.8cm、現存高は約9.2cmである。胎土は砂質で、多量の黒雲母粒子を含む。

器壁は外面暗褐色、内面暗茶褐色である。焼成は比較的良い。

19は復元最大径約19.8cm、現存高は約13.2cmである。胎土はシルト質である。器壁は外面暗橙色、内面暗灰褐色で、焼成は良い。

20は小型の深鉢で、胴下半部から底部まで残存する。R L単節の縄文を施文するが、回転方向を変えたことによる羽状縄文である。

復元最大径は約10.4cm、現存高は約7.7cmである。胎土は砂質である。器壁は外面暗橙色、内面黒褐色で、焼成はやや不良である。

21は80古の炉体土器である。比較的大型の浅鉢で、底面のみ欠失する。胴上半部に最大径を持って丸く張り出し、頸部屈曲して口縁は直立する。折り返し口縁で外面に段を持ち、口端上は平坦に整形する。段の直下に凹線が巡るほかは無文である。

復元最大径は約41.2cm、現存高は約19.5cmである。胎土は雲母粒子を含む砂と、チャート等の垂角礫を含む。器壁は外面暗黄褐色～黒褐色、内面暗褐色～黒褐色である。焼成は良い。

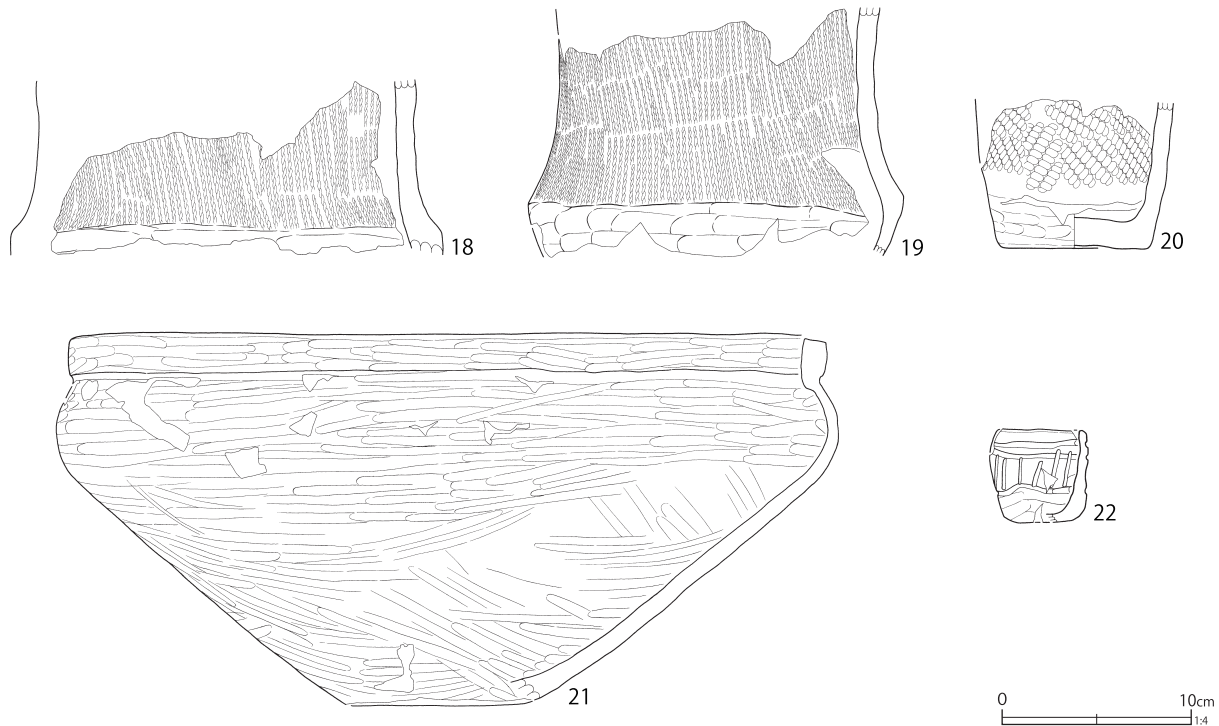
22はミニチュア土器である。水平口縁で、寸詰まりの円筒形である。胴上半部には上端を単沈線、下端を平行沈線で区画した文様帯を持ち、内部には縦位の集合沈線文を描く。

復元最大径は約5cm、現存高は約4.8cmである。胎土はややシルト質である。器壁は外面灰橙色～灰褐色、内面暗灰褐色である。焼成は良い。

23～104は破片資料である。内23～42は勝坂系の土器で、ほとんどが勝坂Ⅲ式である。

23～26は突起である。23は中央に貫通孔を持つ橋梁状の突起である、上面にはさらに側面観楕円形の板状突起が付されており、横位の貫通孔を穿つ。貫通孔の周囲には刻みを施す。

24は大波状口縁の波頂部に付された突起で、やはり側面観楕円形の板状であり、横位の貫通孔を穿って、周囲に沈線文を描く。



第 341 図 第 80 号住居跡出土遺物（4）

25は斜め方向の貫通孔を持つ中空突起で、水平口縁上に付されたものと考えられる。外面中央に刻み隆帯が垂下して、左に貫通孔、右に扁平な隆帯の渦巻文を配する。上面にはスプーン状の凹孔をもつ突起を重ね、背面には三叉文を描く。

26も水平口縁上の中空突起である。外面に1か所、内面に2か所の貫通孔を持ち、刻み隆帯の鋸歯文や渦巻文を描く。内面は貫通孔の眼鏡状表現の上に一对の瘤状突起を配しており、一種の顔面表現とみられる。

27～30は円筒形深鉢口縁部である。いずれも水平口縁で、口縁下に無文帯を持つ。27は口唇断面肥厚して口端外面が三角形に突出し、内面にも段を持って、口端上面を平坦に整形している。口端上に円錐状の小突起を持って渦巻文を描き、ここから口縁下の無文帯にかけて縦位の刻み隆帯が垂下する。

28は復元個体10に類似の半円形突起である。外面に隆帯による縦位の楕円形区画文を配する。

29は軽微に内湾しつつ立ち上がる口縁で、口縁

直下に平行沈線が巡る。30も軽微に内湾する口縁で、無文帯と胴部の文様帯の境を平行沈線で区画し、刻み隆帯の文様を描く。

32は波状口縁で、キャリパー形の深鉢と考えられる。折り返し口縁で表裏に段をなす。口縁下には無文帯を持ち、刻みを持つ隆帯が垂下して胴部に区画文を描く。

33～42は胴部破片である。36・39はキャタピラ文+小波状文の勝坂Ⅱ式で、42は周囲に角押しが巡る棒状貼付文（草履虫文）を付す。他は勝坂Ⅲ式で、刻み隆帯の曲線文で器面を分割し、沈線文や爪型文を描く。

33・38は中央に突起を持つ渦巻文、34は復元個体2～5に共通の車輪状モチーフである。39は矢羽根隆帯による長方形区画文で、内部に縦長の同心円文を描く。40は文様帯下端の区画で、矢羽根刻みの隆帯が用いられる。区画から下は無文帯となる。

43～56は中峠系の土器である。43～53は口縁直下に圧縮された文様帯が巡る一群である。43は中

中央に貫通孔を持つ半円形の突起である。胴部の地文はR L単節縦位回転の縄文である。

44は口縁直下に平行沈線と1条の隆帯が巡る。波状口縁の波頂部で隆帯が交差して、一部が口端上に巻き上がって半円形の突起を形成する。突起周囲には刻みを施し、中央に凹孔を配する。胴部の地文はR L単節縦位回転の縄文である。

45・46は中央に凹孔を持つ円盤状の突起で、いずれも波状口縁の波頂部に付される。45は口縁直下に刻み隆帯が巡って、一部に交互刺突文を配する。突起から下に平行沈線が垂下して、3個1単位の交互刻みを配する。胴部には沈線による曲線文を描く。地文は45・46ともR縦位回転の捺糸文である。

47～52はいずれも外反する水平口縁である。口縁下に凹線と1条の隆帯が巡る。47・49は隆帯に交互刺突を伴い、50は刻み隆帯である。51は幅広の凹線になでつけられた扁平な隆帯が巡る。48・52は頸部に平行沈線が巡る。48は口縁部文様帯との間に小波状の沈線文が巡っている。

53は頸部がくびれ、口縁直下で内屈することで形成した段上に文様帯を配する。口唇上に刻みを施し、3本の平行沈線が巡って、交互刺突を施す。頸部は無文である。

54は上に開口する扁平な筒状の突起である。前面に沈線の区画を描いて、内部を縦位の平行沈線で二分し、それぞれに同心円文を描く。胴部にはR L単節横位回転の縄文を施文する。

55は水平口縁下の側面に凹孔を持つ縦位の円盤状突起を配し、これを起点に刻み隆帯が巡って口縁下に区画文を形成する。頸部との境には段を持ち、R縦位回転の捺糸文を施文する。

56は胴上半部が「く」の字に張り出す三原田式類似の器形で、背割れの隆帯を区切った楕円文が巡り、上方にはR L単節横位回転の縄文を施文し、下方は無文帯となる。

57・58は内屈する水平口縁で、曾利系の土器で

ある。57は縦位の集合沈線、58はR縦位回転の捺糸文を施文する。

59～61は側面になぞりを加えた縦位の隆帯が器面を覆う蛇腹状のモチーフである。いずれも内屈する口縁部で、59・60は縦横の隆帯が交差する。

62～65は加曾利E I系の土器で、2本隆帯による渦巻文やクランク文を描く。62は口縁直下に小波状の浮線文が巡る。地文は63がL R単節横位回転の縄文、他はL縦位回転の捺糸文である。

68～70は「く」の字にくびれる頸部で、いずれも隆帯による区画が存在する。68はR L単節縦位回転の縄文、70はR縦位回転の捺糸文を施文する。

71～80は胴部に沈線文を描く一群である。71は上下対向する弧線文、72～75は平行沈線により多段の長方形区画文を描く。76は平行沈線の横楕円文から縦位の懸垂文が派生するが、沈線間の地文を磨り消している。72・73・80は半裁竹管状工具の平行沈線文である。

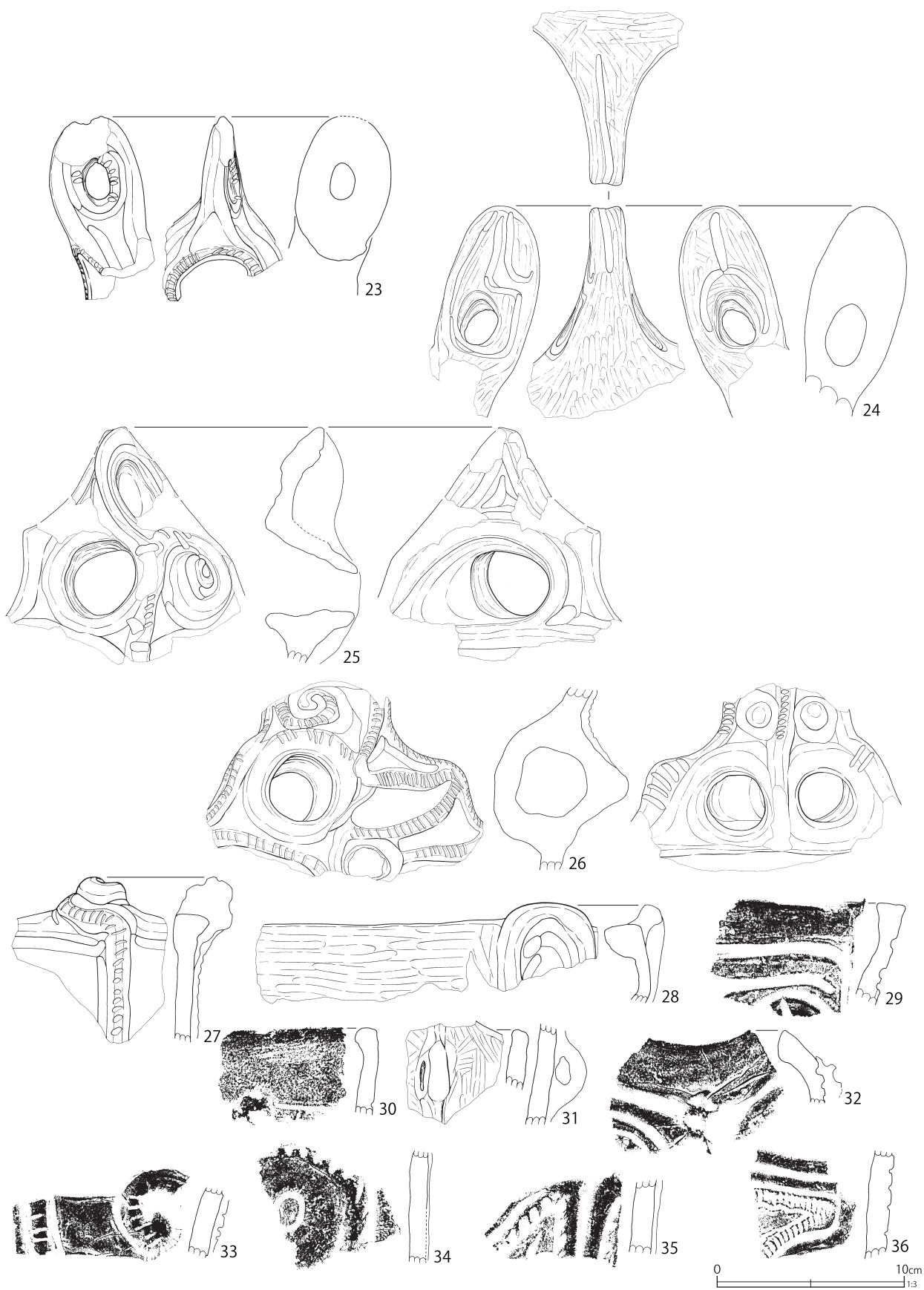
地文は71・72・78がR L単節の縄文で78のみ横位回転、75はL R単節縦位回転で0段多条、他は全てR縦位回転の捺糸文である。

81は櫛歯状工具の条線を地文とする。82～86は捺糸文地文の胴部および底部である。地文は83～85はR、86はLの捺糸文である。82は無節の捺糸文である。

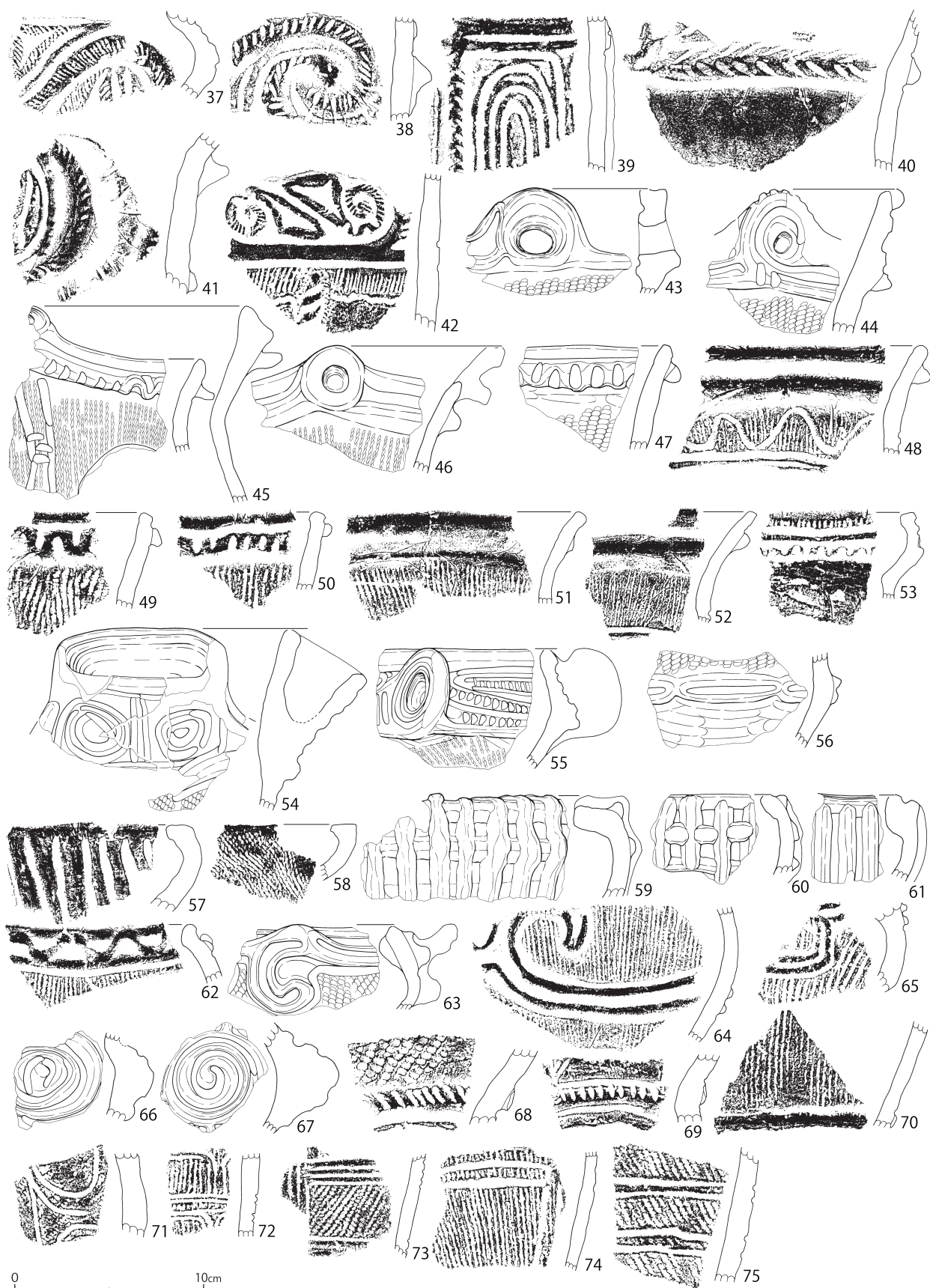
87～91は縄文地文の胴部と底部である。地文はすべてR L単節の縄文で、87は横位回転、90・91は縦位回転である。88・89は復元個体20に共通の、回転方向の違いによる羽状縄文である。

92～104は浅鉢で、器形や文様の有無等、いくつかのバリエーションが存在する。92は内屈する口縁で表裏に段を持ち、扁平な隆帯による区画文を描く。93は胴張りで頸部屈曲し、折り返し口縁で外面に段を持つ。口端上面は平坦である。胴上半部に扁平な隆帯による曲線文を描く。

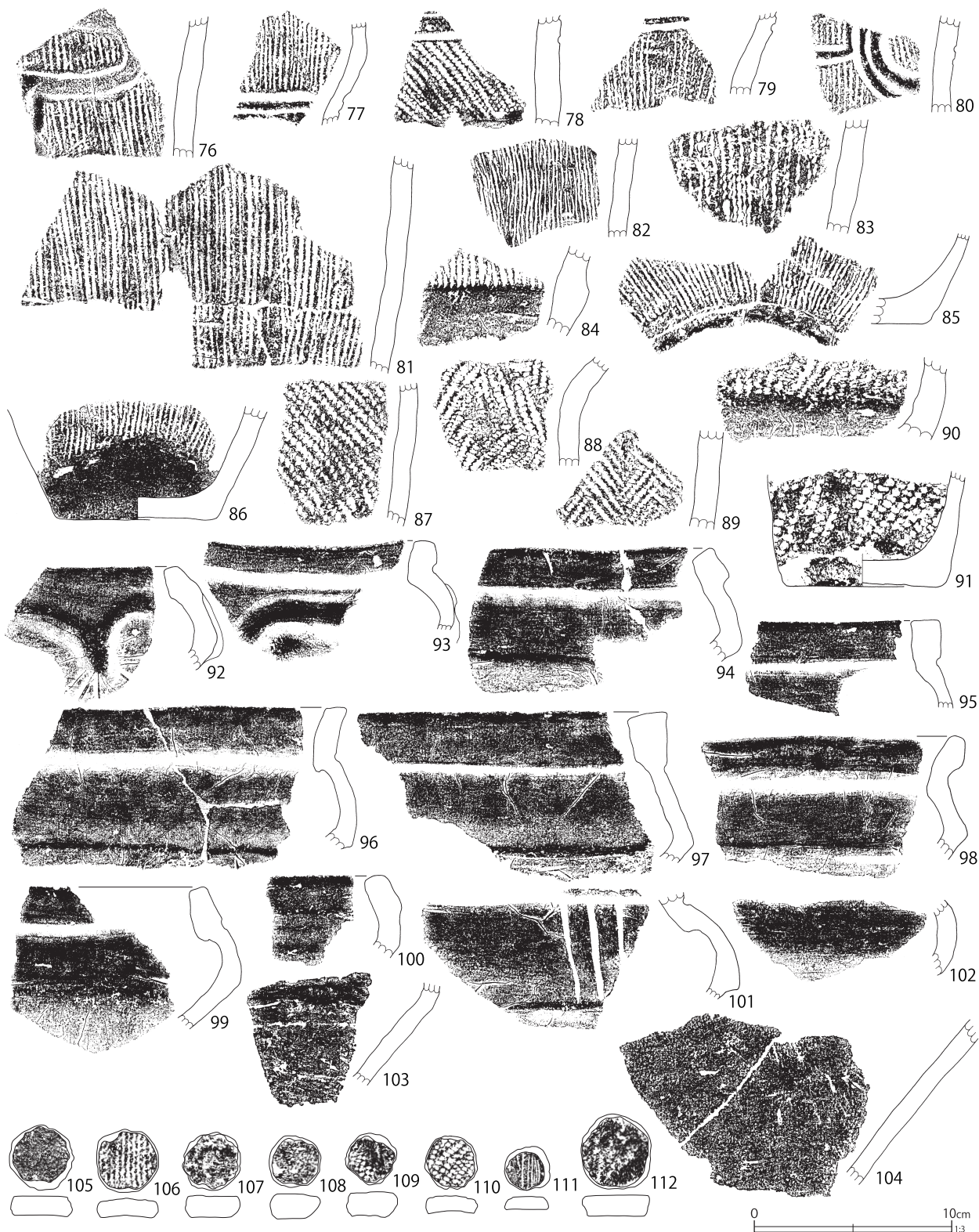
94～99は概ね93に類似する器形で、無文のものである。頸部の屈曲の度合いや胴張の形状（丸み



第 342 图 第 80 号住居跡出土遺物 (5)



第343图 第80号住居跡出土遺物(6)



第 344 图 第 80 号住居跡出土遺物 (7)

を持つもの、ソロバン玉状のもの)等に違いがあるが、折り返し口縁で外面に段や凹線を持つ点は共通している。96・97は外面に赤色・黒色の顔料が付着している。

100は92に類似の内湾口縁である。101・102は胴上半部で、101は縦位の平行沈線文を描く。103・104は無文の胴下半部である。

105～112は土製円盤である。

石器 (第345図)

113・114は凹基の石鏃である。

113は80新から出土した。ほぼ正三角形で、先端部が左に湾曲する。長さ1.6cm、幅1.65cm、厚さ0.45cm、重さ0.8gである。石材は黒曜石である。114は80新の柱穴P 2から出土した。端正な二等辺三角形で基部がV字に切れ込む。長さ2.8cm、幅1.8cm、厚さ0.45cm、重さ1.46gである。石材はチャートである。

115～118は胴部断面定角型であるため磨製石斧と考えたが、いずれも刃部を折損しており、一部に棒状の磨石が含まれる可能性がある。115は80新の柱穴P 3から出土した。刃部を折損し、腹面の左側縁が広範囲にわたって剥落する。長さ10.9cm、幅4.4cm、厚さ3.2cm、重さ239.57gである。石材は安山岩である。

116は80古から出土した。刃部を折損し、左側縁部も広く剥落している。長さ9.8cm、幅3.9cm、厚さ3.2cm、重さ180.01gである。石材は砂岩である。117は80新から出土した。胴部中段から短軸方向に折損し、腹面中央部から右側縁部にかけて広く剥落している。長さ5.4cm、幅4.8cm、厚さ2.9cm、重さ81.95gである。石材は安山岩である。

118は80新の下層から出土した。左側縁部中段から右側縁の刃部付近にかけて斜めに折損している。長さ8.6cm、幅4.1cm、厚さ3.1cm、重さ127.41gである。石材は砂岩である。

119～122は打製石斧である。

119は80新の上層から出土した。長軸両端のうち、断面鋭角な方を刃部と考えたが、基部が大きく刃部先細りとなる倒卵形のプロポーションである。背面基部側に自然面が残る。

左側縁に抉りが作られ、また右側縁中断から刃部にかけて細かな調整剥離が連続する。このことから、本来分銅形の石斧が折損した後に刃部再生して使い続けたものと考えられる。

長さ9.3cm、幅6.2cm、厚さ2.6cm、重さ151.08gである。石材は頁岩である。

120は80古から出土した。短冊形の打製石斧で、腹面に打割面が残る。長さ11.5cm、幅5cm、厚さ1.4cm、重さ100.54gである。石材はホルンフェルスである。

121は80古から出土した。短冊形で、刃部を折損する。長さ7.7cm、幅4.3cm、厚さ1.3cm、重さ56.9gである。石材は緑泥片岩である。

122は80新から出土した。胴部中段から折損するが、胴部のくびれた短冊形の石斧であったと考えられる。基部の両端が鋭角に張り、破断面に対し数度の打撃が加えられていることから、破損を契機として再加工され、基部側が刃部として使われている可能性がある。

長さ7.5cm、幅5.1cm、厚さ1.3cm、重さ81.05gである。石材は砂岩である。

123～126は磨石である。

123はP 3・4から出土した。棒状の磨石で、長軸側一端が折損する。長さ11.8cm、幅2.8cm、厚さ2.3cm、重さ125.86gである。石材は緑泥片岩である。124は80新上層から出土した。楕円形の磨石で、中央から折損している。断面定角形で、表裏に使用面を持つ。凹石に転用されており、表面中央に円孔が残る。長さ7.6cm、幅6.4cm、厚さ3.1cm、重さ262.51gである。石材は閃緑岩である。

125は80新上層から出土した。棒状の自然石を使用しており、短軸方向に折損している。表面左



第 345 図 第 80 号住居跡出土遺物（8）

側縁と裏面右側縁に数か所の剥離がみられ、叩き石としても使用されたものと考えられる。長さ7.1cm、幅4cm、厚さ2.2cm、重さ112.32gである。石材は砂岩である。

126は80古から出土した。円形の磨石とみられ

るが、中央から短軸方向に折損する。

断面定角形で、表裏に使用面を持つ。凹石に転用されており、裏面中央に凹孔を持つ。長さ5.8cm、幅6.7cm、厚さ4cm、重さ261.44gである。石材は多孔質安山岩である。

報告書抄録

ふりがな	すわのいせき							
書名	諏訪野遺跡Ⅰ							
副書名	一般国道468号首都圏中央連絡自動車道新設工事に伴う桶川地区埋蔵文化財発掘調査報告							
巻次	第1分冊							
シリーズ名	埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書							
シリーズ番号	第410集							
編著者名	渡辺清志							
編集機関	公益財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団							
所在地	〒369-0108 埼玉県熊谷市船木台4丁目4番地1 TEL 0493-39-3955							
発行年月日	西暦2014（平成26）年3月20日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号		北緯	東経	調査期間	調査面積 （㎡）	調査原因
すわのいせき 諏訪野遺跡	さいたまけんおけがわし 埼玉県桶川市 おおあざかわたやあざほんざわ 大字川田谷字本沢 6178-2番地他 ばんち	11231	003	36° 00' 38"	139° 16' 20"	20070501～ 20080324 20080501～ 20080930	22,410	道路建設
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
諏訪野遺跡	集落跡	縄文時代	住居跡 44軒 土壇 113基 集石遺構 2基	土器 石器 土製品 石製品		縄文時代中期の住居跡は外径180mの環状集落を構成するものとみられる。 住居跡の軒数が多く、密度も高い。また、個々の住居跡の遺存状況はきわめて良好である。		
		近世	掘立柱建物跡 9棟 井戸跡 2基 土壇 157基 溝跡 12条					
要約								
<p>諏訪野遺跡は桶川市西部の大宮台地内陸部に所在し、荒川支流である江川谷奥の低湿地をのぞむ台地縁辺に位置している。</p> <p>遺跡は台地部と低地部からなり、台地部からは縄文時代と近世の集落跡、低地部からは縄文時代の遺物包含層が発見された。縄文時代の集落跡からは前期から後期までの遺構・遺物が出土したが、中期のものが特に多く、その配置は直径約180mの環状集落となっていた。</p> <p>中期の竪穴住居跡は同時期の他の遺跡と比較しても残存状態が良好であり、深さが1 m近いものもあった。平面形は円形や隅丸長方形で、床面中央のやや奥壁寄りに炉跡を持ち、前面に出入り口施設を持っていた。また、柱穴の配置は主軸線を挟んで左右に2本づつが対置された4本柱のものが多くみられた。住居跡の時期は中期中葉から後葉への移行期に集中しており、極めて短期間に栄えた集落であることがわかった。</p> <p>縄文時代の土壇は多くが墓壇であったと考えられ、住居跡群の間隙に散漫に分布していた。集石土壇は2基発見されたが、うち1基は住居跡の炉跡を再利用してつくられていた。ピットは環状集落の中央広場縁辺に集中していた。</p> <p>近世の遺構群は台地奥部に集中しており、ヤドロと呼ばれる河成堆積物が荒川の河川敷から持ち込まれた近世の農地開発に前後して残されたものと考えられる。</p>								

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第410集

諏訪野遺跡Ⅰ

一般国道468号首都圏中央連絡自動車道新設工事に伴う
桶川地区埋蔵文化財発掘調査報告
(第1分冊)

平成26年3月12日 印刷

平成26年3月20日 刊行

発行／公益財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
〒369-0108 埼玉県熊谷市船木台4丁目4番地1
電話0493(39)3955

<http://www.saimaibun.or.jp>

印刷／株式会社 文化新聞社